

それ以下は女房といはぬ。

又貴族の家でも、その侍女を家の女房といふ。

枕草子卷一に「老いてかしら白きなどが……女房のつぼねによりて。」

「装束」はまたサウゾクともよむ。盛装すること。衣冠をつけること。みじたく。いでたち。

【いでたゝせたまひて】 身仕度をなされて。

【いでたつ】とは、よそほふこと。身仕度すること。

狂言の菊花に、「都女郎と見えて花やかにいでたちて。」

【落ちさせたまふべうもや候らん】 おにげになるべきでございませう。

「べう」は「べく」の音便。「や」は疑問の助詞で係。「らん」はそれに應ずる結で推量助動詞「らん」の連體形。

【この儀尤も然るべし】 このことは、いかにもさうあるべきことである。

【御髪を亂り】 御髪をふりみだし。

こゝの「亂り」は他動詞で、「みだす」の意。

萬葉集卷八に「もだあらずいほしろを田を刈りみだり

たぶせに居れば都しおもほゆ。」

【重ねたる御衣】 カサねたるオンゾ。かさね着の御衣裳。

「御衣」(オンゾ)は「衣」(キヌ)の敬稱。

宇津保物語の藤原君の巻に、「うかれ女二十人ばかり、琴ひき歌うたひて、おんぞ賜はれり。」

【市女笠】 イチメガサ。古の婦人用の笠。頂の處が高く、且深い。これは顔をおほふためである。當時の婦人は、他行のときは被衣(カヅキ)若しくはこの笠をかぶつた。

【童】 ワラハ。召使の童男又は童女。こゝは童男。

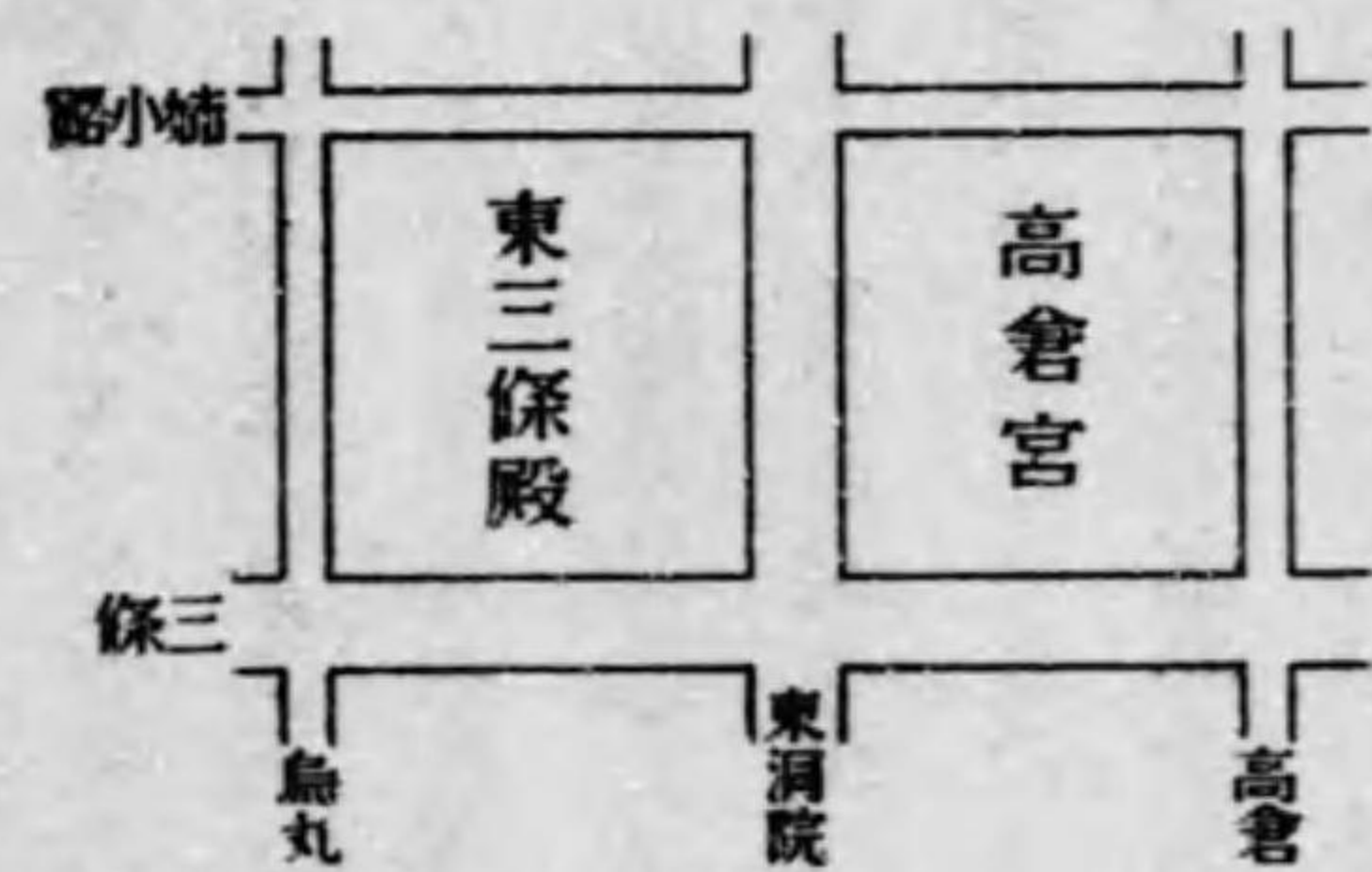
【青侍】 セイシ。年の若いさむらひ。

南嶺遺稿に「官位せざる未熟の侍。」とある。

【高倉】 タカクラ。京都の

京極と東洞院との中間にある通。こゝは三條高倉なる高倉宮の所在地。教科書の挿圖参照。

【物輕う】 モノガロウ。「物



輕く」のウ音便。かるくと。かるやかに。

【はしたなの女房の云々】「さてもぶしつけの女房の溝の越えやうかな。」といふほどの意。

「はしたな」は「はしたなし」の略。「はした」は中間・不揃等の意、「なし」は甚だしい意。こゝは女房らしいたしなみがない、行儀がわるい、ぶしつけな、などの意と見てよからう。

【怪しげに】 アヤしげに。ふしぎさうに。いぶかしさうに。

【足早】 アシバヤ。早くあるくこと。はやあし。

源平盛衰記卷五、行綱反忠の條に、「とり袴してあしばやにこそ歸りにけれ。」

【御留守】 オンルス。おんるする。

「留守」とは、(一)貴人又は主將などが外出のとき、留まつて、宮又は城などを守ること。又その人。(二)主人他行のとき、家を守ること。又、その人。(三)他行して不在なること。こゝは(一)の意。

【立忍ばせて】 かくれさせて。

「立忍ぶ」は、(一)しのぶこと。(二)かくれること。

こゝは(二)の意。

今鏡卷五に、「破られて立忍ぶべき方ぞなき、君をぞ頼むかくれ養かせ」

【取りしたゝめんとて】 とりかたづけようとして。

「取りしたゝむ」はとりかたづけること。始末すること。處理すること。

落窪物語卷一に「打ち散らしたまへるものども取りしたゝむ。」

【さしも】 (一)その如くも。さうも。(二)さほど。これほど。

こゝは(二)の意。

平治物語、義朝六波羅に寄せらるゝ事の條に、「さしもの兵を、敵に首をとらすな。」

【秘藏】 ヒザウ。ヒサウ。秘して所藏すること。ひめかくすこと。大切にしまひおくこと。容易に他に示さぬこと。

保元物語、鶴丸に、「鶴の丸と名づけられて御秘藏ありけり。」

【小枝】 サエダ。源平盛衰記卷十三には、「小枝と聞えし漢



竹の御笛」とある。

【立歸つても取らまほしうや思し召されけん】あとがへりして取つて來たいものだと思し召されたことであらう。「まほし」は「まくほし」の約。希望の助動詞。

この一句については、宮の御心及び當時の風習をよく味ははせたいものである。

【斜ならず】ナ、メならず。ナノメならず。一通りならず。大方ならず。一方ならず。たいそう。

平治物語の悪源太誅せらるゝ條に、「勢のつくことなゝめならず。」

【御棺】ミヒツギ。ひつぎを敬つていふ。

棺（ヒツギ）はひととき（人城）の轉。人の屍を納れる函。くわん。

榮華物語の楚王の夢に、「ひつぎに入れ奉りて。」

【やがて】「躑て」頓ての字をあてる。

こゝは、すぐに。早速。たゞちに。

【むげに】「無下に」又は「無礙に」の字をあてる。

一向に。一概に。いちづに。まつたく。たいそう。

「これより下はない」又は「さまたげるものもなく」といふ意から、前の意に用ひられるに至つたのである。

こゝは、まつたく、たいそうなどの意を見るべきである。

源氏物語の尋木に、「むげに思ひしをれて心細かりければ。」

【上下皆知つたる事でこそ候へ】平家物語の獨特なる語法であることを注意させたい。

【今夜候はざらんは】若し今夜私がこゝにいませんでしたならば。

【それもその夜は逃げたり】その男即ち信連もその夜は逃げうせた。

【弓箭執る身】弓箭を執つて主君に仕へ奉る武士の身。

【かりにも】かりそめにも。いやしくも。

伊勢物語に、「むぐら生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり」

【暫くあひしらひ】しばらくの間相手をいたしまして。

「あひしらひ」は、「あへしらふ」ともいふ。(一)挨拶すること。應答すること。(二)程よくとりあつかふこと。もて

なすこと。

こゝは、相手となつて、たゞかふことにいふ。

【薄青の狩衣】ウシアアのカリギヌ。表が黄青色で、裏が青い狩衣。

「狩衣」とは、もと狩獵のとき着用した衣。後世、太上天皇以下六位以上の官人の常服となつた。

江戸時代、武家では四位の諸大夫の正服に用ひた。單（ヒトヘ）の絹で作る。五位以上は文（アヤ）のある絹、六位以下は無文の絹（これを布衣といふ）で作る。

領（エリ）はまるく、袖ぐりがある。帯で腰をしめ、さしぬきの袴をはく。裾をば袴の前に出すのが常である。冠りものは烏帽子。

【萌黄色】モエギニホヒ。萌黄色の匂緘（ニホヒヲドシ）。

「萌黄色」は、緑色。萌黄は萌えた葱（キ）の色といふ義。

「匂緘」は、鍔の染方の名。何色に限らず、袖や草摺の方が色が濃く、次に中色、次に薄色、次に白色と、一段づつ次第に薄くしたものをいふ。薰物（タキモノ）などの

香気が時を経るにつれて次第にうすくなるのにたぐへたものだといはれてゐる。

【腹巻】ハラマキ。簡略な鍔で、袖もなく、脇立（ワイダ

テ）もなく、背後でひきあはせるもの。

後世は腹巻の合せ目をふさぐために背板をあてたといふが、當時のものは背板の無い方であつたらう。

【衛府の太刀】エフのタチ。六衛府（左右の近衛・衛門・兵衛）の官人の

佩くべき一種の太刀。野太刀、平鞘の太刀、毛抜形の太刀、革緒の太刀などともいふ。

元來この太刀は、儀仗のためのものでなくて、兵仗の太刀であつたが、後世に至り、衛府の官人に武勇の人を任ずることなく、貴族を任じたから、太刀も随つて儀仗の形のものとなつたのである。信連は左兵衛尉であるから、その官相應の太刀を帯したのである。

【三條表、高倉表】共に本教科書の挿圖参照。

【總門】ソウモン。總構の大門。外構の正門。家屋雜考に「總門は總構の大門なり。故に大門ともいふ。」

【案の如く】かねて思つて居たやうに。推量の通り。あんのぢやう。はたして。

前文の「官人どもが別當宣を承つて御迎に参り候ふ。」を



参照せよ。

宇治拾遺物語卷十に、「待ちけるが、案の如く入り来る人あり。」

【源大夫判官兼綱】 兼綱は頼行の子で頼政の甥。頼政は養つて子とした。従五位下左衛門尉を歴て檢非違使となつた。故に大夫判官(タイフノジョウ)といふ。宇治の戦に頼政は敗走したが、兼綱は獨り留まつて拒ぎ戦ひ、矢に虚發がなかつた。藤原忠綱を視てこれを搏たうと思つたが、却つて忠綱のために射られ、頸を貫かれて死んだ。

【出羽判官光長】 源光長。傳はよくわからぬ。

【都合】 ツガフ。あはせて。すべて。ひつくるめて。總計。

保元物語の新院御所各門々固の條に、「父子五人並に多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。」

【子の刻】 ネのコク。時の名。夜の十二時。

【存する旨ありと覺えて】 別に考へる所がある様子で。頼政の養子である故に。

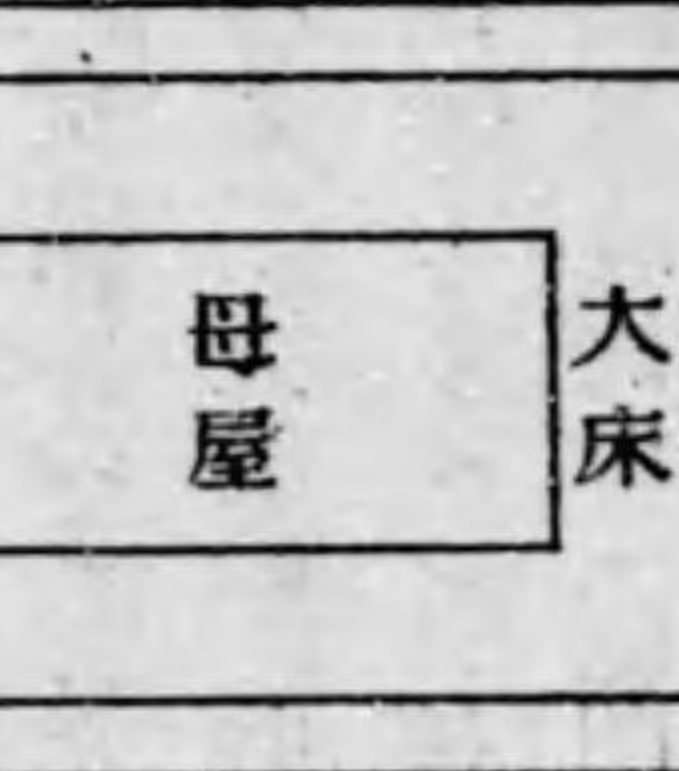
【大音聲】 ダイオンジャウ。大きなこゑ。おほこゑ。

平家物語卷四、宮御最期の條に、「燈ふんばり立ちあが

り大音聲をあけて。」

【疾うく】 トウく。疾くく」の音便。はやくく。

【大床】 オホユカ。廣廂の別稱。武家では廣廂と稱せず。に、大床といふ。



廣廂とは、古昔の寢殿造りで、母屋の外、簀の子縁の内にあつた細長い室。後世「いりがは」と稱するもの。廣縁。

【當時は御所でも候はず】 宮様は、この頃は御所において遊ば

さぬ。

【御物語で候ぞ】 御物語中でございますぞ。

【物語】 (モノマウデ) は神社・佛閣に參詣すること。

枕草子卷二に、「物まうでする供にも、われもくと参りつかうまつり。」

【事の子細】 事のくはしいわけ。委細の事情。

北史の源思禮傳に、「爲政當舉大綱、何必太子細也。」

保元物語の新院御謀叛思召立の條に、「武士二人召し捕

つて、子細を問はる。」

【なんでふ】 「何と言ふ」の約つた「なでふ」の發音便。一轉して「何として」「いかで」の意に用ひる。

こゝはその例。

宇津保物語の樓上の巻の下に、「なんでふ事も侍らす。」

【何處へ渡らせ給ふべかなるぞ】 どこへおいでになりませうぞ。「べかなるぞ」は「べくあるなるぞ」の約つた「べかなるぞ」の發音便。

【その儀ならば】 さういふわけなら。宮が御不在であるといつはりを言ふならば。

【下部】 シモベ。こゝは檢非違使廳の下役。盜賊を捕へ、獄囚を檢べ、罪人を配所に押送すること等をつかさどるものをいふ。

【物も覺えぬ官人】 ことのわけをわきまへない役人。ものの道理を知らぬ役人。

【奇怪】 キクワイ。キククワイ。

(一)あやしむべきこと。ふしぎなること。(二)怪しくとがむべきこと。けしからぬこと。

こゝは(一)の意。

【剩へ】 アマッサへ。「あまりさへ」の促音便。あるが上に添ひ加はること。かてて加へて。その上。

【長兵衛尉長谷部信連が候ぞ】 信連の自ら任ずる雄心の溢れてゐる所を十分に味ははせたい。

【廳】 チャウ。檢非違使(ケビキシ)の廳。古くは左右衛門府の内にあつたが、寛平七年左右檢非違使廳を定め、天曆元年から右廳を廢して左廳ばかりとなつた。別當・佐・尉・志・火長・看督長・案主長・放免等の職員を置く。

【檢非違使】 は古昔京中の非違の檢察を掌つた職。祭祀・法會などの場に臨み、或は道路・橋梁を巡視し、又糾弾・追捕・斷罪・聽訟等の事をも掌つた。

【金武】 カネタケ。源平盛衰記卷十三に、「兼成が下部に兼武といふあり。」と見え、一本には「手束八郎金武と書いてある。手束八郎は信濃の人。

【大力の剛の者】 ダイチカラのガウのモノ。剛勇にして、力の非常につよいもの。

【剛の者】は、つよくたけきもの。勇猛なる武士。



保元物語の白河殿夜討の條に、「またなき剛の者。」

【打物】 ウチモノ。鍛へ打つた太刀・槍の類の總稱。

保元物語の白河殿夜討の條に、「恐らくは、弓矢とつても、打物とつても、われこそあらめ。」

【鞘】 サヤ。刀劍の刃を納めおく室。丸鞘・平鞘などの別があり、又、木鞘・鮫鞘・朱鞘・黒鞘等の種類がある。

【同隸】 ドウレイ。同じ下部。金武と同じ仲間のものといふ義であらう。

【捨つるまゝに】 捨てるそのまゝに。捨てるや否や、すぐ

【衛府の太刀なれども云々】 「衛府の太刀」のことは前に説明した。

「身」は刀身。衛府の太刀としいへば物の用に立たぬ儀仗の太刀と思ふかも知れぬから、さうでないことわつたのである。信連の帯してゐたのは尋常の衛府の太刀ではなくて、刀身に注意して、物の用に立つべく造つたのである。

【散々にこそ振舞うたれ】 あくまで奮闘したことをいふ。

「散々」は残るところなきさま。又物の極度に及ぶさま。むやみやたら。あくまで。したゝか。

保元物語の官軍方々手分の條に、「弓取りなほして散々に射るに。」

【大太刀】 オホタチ。大きな太刀。近古では、長さ六七尺ばかりの太刀の稱。背に負ひ又は肩に擔いで軍陣にたづさへ行つた。

【太刀】(ハタチ)は斷ち切る義より出た語。中古以來、儀仗又は軍陣に用ひる刀の大きいなるもの稱。

【大長刀】 オホナギナタ。大形の長刀。「なきなた」は薙ぎ刀の義。刀の幅の廣く長く反つたものに長い柄をつけた武器。薙刀・眉尖刀なども書く。

これが武器として歴史に見えたのは奥州後三年役を初とする。降つて源平時代には盛に用ひられた。後世槍の發明があつてからは、その用が大いに減じた。

江戸時代になつてからは、殆ど婦人用の武器となつた。

【さつと】 「さつ」との促音便。事の早くして急な有様を形容していふ。

【無案内】 ムアンナイ。勝手を知らぬこと。その道にくら

いこと。様子を知らぬこと。不案内。

【案内者】 アンナイシヤ。案内をよく知つたもの。勝手をよく知つたもの。前の「無案内」の對。

【面廊】 メンラウ。長廊下、一説には廣い板敷だともいふ。家屋雜考に、「面廊の名、京都將軍家御館の繪圖中に見えたり。常さまの廊下なり。便廊の轉にや。」

【はたと】 物の相あつて發する音、又は、にはかに發する聲などにいふ語。

【つまり】 行きつまつた處。ゆきづまり。隅。

【ちようと】 物を打ち切る音の形容。

【宣旨の御使】 センジのオンツカヒ。宣旨を傳へる御使、「宣旨」とは、勅旨を宣へ傳へること。又、その公文書。拾遺集の雜賀に「延喜十七年八月、宣旨によりてよみ侍りける。」

【矢庭に】 その場に。即座に。立ちどころに。

元來「矢庭」は「矢場」の意で、矢を射たその場所をいふ。それより轉じて、猶豫なき意に用ひることになつた。

【よき者】 身分のよいもの。うはやくの者どもをいふ。

【鋒】 キツサキ。「切先」の義。刃物の最上端。刀のほさき。

【捨ててげり】 「げり」と濁るのも、亦この物語の特殊のよみ方である。

【鞘卷】 鐔のない短刀の稱。抜くときに鞘と共に脱けるのを防ぐため、下緒を鞘に巻いて、腰に結びつけておくからかやうにいふ。

【力及ばず】 萬策つきて、手の施しやうのないことにいふ。

【大手】 オホデ。手を振つて勢を示す状、又は両手をひろげる状にいふ語。

保元物語の白河殿攻落の條に「大手をひろげて、どこまでも〜と追はれるが。」

【股を縫ひさまに貫かれ】 長刀で股を貫かれたさまを、針で縫ふ様に貫かれたといつたのである。

【取籠められて】 とりかこまれて。とりまかれて。

【生捕】 イケドリ。いけながらとらへること。生擒。生虜。

【搦めて】 カラめて。捕へ縛つて。めしとつて。

【搦は捉「トラ」へる意。



をを防ぐため、下緒を鞘に巻いて、腰に結びつけておく



【率(キ)てまゐる】 つれて来た。

「率て」は「率(キ)て」と同意の語。

【右大将】 ウダイシヤウ。右近衛大将の略。右近衛府の長官。

右近衛府は六衛府(左右近衛・左右衛門・左右兵衛)の一。左近衛府と共に、近衛の官人を統べる役所。大将・中將・少將・將監・將曹等の職員がある。

「近衛の官人」とは、古皇居に近く伺候して守護の職に任じた武人をいふ。

【宗盛卿】 平清盛の第二子。果進して正二位權大納言に至り、尋いで内大臣に拜し、從一位に敘せられた。當時源頼朝の兵勢が盛であつたが、宗盛は軍事を以て意とせず、華奢自ら誇つた。已にして諸國の源氏が京都に入らうとする形勢が見えたので、知盛の議を抑へて安徳天皇を奉じ、一族と共に西海に奔つた。やがて一の谷・屋島に敗れ、尋いで壇の浦に大敗し、天皇は海に入つて崩じたまひ、一族は多く戦死或は自殺した。然るに宗盛は子清宗と共に決する能はず、遂に東兵に捕へられた。尋いで鎌倉に送られ、頼朝に自裁を諷されたけれども、自ら覺ら

ず、偏に死を宥されんことを請うた。やがて京都に送還せられ、途すがら近江の篠原で斬られた。年三十九。「卿」は大員・大中納言・參議及び散一位並に三位以上の朝臣の敬稱。

【大庭】 オホニハ。家の前の廣い庭。多く禁中又は貴族の邸のそれにいふ。

推古紀に、「大唐之國信物、置<sub>カ</sub>於庭中<sub>ニ</sub>。」

【わ男】 きさま。汝。

「わ」は吾。「わ主」、「わ殿」などの「わ」に同じ。宇治拾遺物語卷七に、「妬き事かな、わ男かしこにありし時はいはず。」

【刃傷・殺害したんなれば】 手を負はせたり、殺したりしたのだから。

【刃傷】 (ニンジャウ) は刃物で人をきずつけること。

源平盛衰記の文覺高雄勸進の條に、「打擲刃傷に及ぶ條、希代の不思議なり。」

【殺害】 (セツガイ) は人を殺すこと。「さつがい」とも、「せちがい」ともよむ。

運歩色葉に、「殺害(セツガイ)。」

十訓抄卷中に、「安康天皇は御まゝ子肩輪王のためにせつがいせられ給ひにけり。」

「したんなれば」は「したるなれば」の音便。平家物語獨特の語法。

【糺問】 キウモン。罪狀を糺(タゞ)し問ふこと。吟味。糺明。

【河原】 カハラ。賀茂川の河原。賀茂川は鴨川とも書く。京都市内の東部を南北に貫流する川。平時は水が少くて河原(積)が多い。河畔一帯は納涼地として古來名高い。

【大剛の者】 ダイガウのモノ。すぐれてつよいもの。平治物語の光頼卿參内の條に、「あはれこの殿は大剛の人かな。」

【居直り】 キナホリ。すわりなほして。ぬすまひを正して。枕草子卷九「居直りなどして久しう待ちつるも。」源氏物語の若菜上に、「宮もぬほりたまひて、御物語したまふ。」

【あざ笑ひて】 あざけり笑つて。「嘲笑」の字をあてる。

大鏡卷下に「翁二人見かはしてあざ笑ふ。」

【夜な〜】 毎夜。夜ごと。よる〜。

仁徳紀に「毎夜(ヨナ〜)自<sub>レ</sub>兔餓野有<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>鹿鳴。」ものゝ親ひ候を。何ものか様子をうかゞつて、押し入らうとするのを。

【なんでふ事のあるべきと云々】 何事があらうぞとたかをくゞつて、ばかにしてゐましたのに。

【なんでふ】 の事は前に出てゐる。

【夜半】 こゝは「よなか」とよむ。「やはん」又は「よは」と讀まぬやう。

【鎧うたる者】 鎧を着けたもの。甲冑を身につけたもの。鎧(ヨロヒ)を動詞に用ひた例として注意させたい。

【竊盜】 セツタウ。他人の財物をぬすみとること。又そのもの。ぬすびと。どろぼう。

但し、こゝは次の強盜に對して、こそ〜と人の財物をぬすむもの、即ち「こそ〜どろぼう」の意。

【強盜】 ガウタウ。暴行又は強迫の手段によつて人の財物をうばひ取るもの。おしこみ。おしいり。「竊盜」の對。



【山賊】 サンゾク。山中にこもつてゐて、おひはぎなどを  
する強盗。やまだち。

【海賊】 カイゾク。海上で往來の船をおびやかし、若しく  
は沿岸に上陸して貨財を奪ふぬすびと。

【奴ばら】 ヤツばら。二人以上の人を卑しめていふ語。  
やつども。やつこたち。やつら。

竹取物語に「おくろゝやつばらを待たじ。」

【公達】 キンダチ。貴族の子息又は女子の稱。

竹取物語に「あたりを離れぬ公達、夜を明かし日を暮  
らす人多かり。」

【かねく】 前以て。あらかじめ。かねて。前かたより。  
大藏流狂言、若市に「かねくいつぞは打擲いたいて  
やらうと存するところに。」

【斬つたる候】 「斬つたるにて候」の略。これも平家獨物語  
特の語。

【物の具をも思ふやうに仕り】 「思ふ存分の物の具を身につ  
けてゐまして。」といふほどの意。

【物の具】 とは甲冑をいふ。

信連が狩衣の下に腹巻をきてゐたことは、本文に詳か  
ある。

【鐵善き太刀を持つて候はんには】 もし金の性のよい、折  
れぬ太刀を持つてゐましたら。信連のはいてゐる衛府の  
太刀は、尋常の太刀でなくて、注意して作らせた刀身で  
あることは前にいつた。然るにこゝに至つて、その太刀  
がよからぬ様にいふのは、折れたためである。

【よも一人も安穩にては還し候はじ】 よもや、一人でも、  
そのまゝ無事に還しはいたしませんまい。

「よも」は、まさかに。やはか。

枕草子卷四に「更によもかたらひとらじ。」

【安穩】 (アンヨン) は普通「アンソン」と發音する。や  
すくおだやかなこと。無事なること。

晉書の顧愷之傳に「行人安穩、布帆無恙。」

古今著聞集卷十一に「我その用途をとらんと思はば、  
汝一人安穩にあらせてんや。」

【御在所】 ゴザイショ。おはしますところ。御ありか。

【何處に渡らせ給ひ候やらん知り參らせぬ候】 どこへおい

で遊ばしてゐますやら、一向に存じませぬ。

「知りまゐらせぬ候ふ」も亦平家物語獨特の語。

【候】 は「サブラフ」と濁つてよむのだといふ。

【思ひ切りてんことを】 これも平家獨特の語。思ひ切つて  
あらんことを。決心したことを。

【幾らも並みゐたりける平家の侍ども】 幾人となく、すら  
りとそのあたりにならんでゐた平家の武士ども。

【あつばれ剛の者や】 さてくゝえらいをとこぢやはい。

【あつばれ】 は歎美の感動詞。「あはれ」の促音。適・天晴  
などの漢字をあてる。

承久軍物語に「あつばれ自害や、かまへて仕損すな。」

【一人當千の兵】 イチニンタウセンのツハモノ。一人で敵  
の千人にもあたるほどの剛勇な兵士。

涅槃經に「一王有大力士、其力當千。故此人稱一人當千。」

北齊書の唐邑傳に「強幹一人當千。」

宇治拾遺物語卷十一に「一人當千の馬の立てやうな  
り。たゞにあらぬぞ。」

【高名】 カウミヤウ。(一) 評判の高いこと。(二) 武功の高いこ  
と。こゝはこの意。

平家物語卷九に「保元・平治二箇度の軍に先懸けて高  
名したる武藏國の住人平山武者所季重と名乗つて。」

【所】 トコロ。院の御所。信連は嘗て院の御所の大番衆で  
あつた。

如白本に「信連十六の年、院の御所、五畿内一の強盜六  
人を云々」とある。

一説に、所は藏人所をいふとあるが、こゝは前の如白本  
の記事より見ても、院の御所と見るが妥當であらう。

【大番衆】 オホバンシュウ。諸國より交番上京して禁闕を  
護衛し、洛中を巡警する武士。交代年限ははじめは三年  
であつたが、頼朝の時に至つて六箇月となり、更に三箇  
月となつた。

沙石集卷二上に「五條の橋に、大番衆とおぼしき武士  
勢々として行きあひぬ。」

【二條堀川】 二條通を流れてゐる堀川。又、この區域の地。  
本教科書の挿圖参照。



「堀川」は京都市上京区尺八池より發する小河。上流を若狭川又有栖川といひ、一條通から以下を堀川といふ。中京区・下京区の堀川通を流れ、上鳥羽に至つて賀茂川の支流なる天神川に合する。

【左兵衛府】 サヒヤウエノジョウ。左兵衛府の第三等官。

【右兵衛府】 右兵衛府と共に兵衛府の一。

【兵衛府】は、古昔皇城の閤門を禁衛し、宮闈に宿衛し、朝儀の際儀仗を備へ、行幸に供奉して前後を分衛し、左右京内を巡警する武官の府。各、督・佐・大少尉・志・醫師・番長・兵衛・使節・直丁等の職員を置く。

【あつたら男】 「あたら男」の促音便。惜しい男。

「あつたら」は惜しむべきこと。惜しいこと。

狂言、朝比奈に、「あつたら骨折つた。責めまいものを。」

【斬られんすることの無慚さよ】 斬られようとするこのふびんさよ。

「斬られんする」は「斬られんとする」の約。

【無慚】(ムザン)は情(ナサケ)なきこと。もと佛教語で、字の通り慚(ハ)づべきを慚まないことに用ひられ

たが、後轉じて、慈悲の道に慚まないこと、いたはしくふびんなことなどにも用ひるに至つた。

保元物語、謀叛人各、召捕の條に「かゝる罪に行はるこそ無慚なれ。」

【入道相國】 ニフダウシャウコク。太政大臣平清盛入道。

「入道」は三位以上の人で佛門に入つたものを稱する語。

【相國】は太政大臣・左右大臣の唐名。

清盛は當時太政大臣に任ぜられ、入道して淨海といつた。よつてかやうにいつたのである。

【さらばな斬つそ】 さういふやうな人物ならば、斬るな、助けてつかはせ。

「な斬つそ」は「な斬りそ」を促(ツ)めていつた語。促音になつただけ、引きしまつて感ぜられる。

【伯耆の日野】 ハウキのヒノ。今の伯耆國日野郷。今の鳥取縣日野郡黒坂村大字日野。

【東國】 トウゴク。關東地方諸國の總稱。

【梶原平三景時】 カヂハラヘイザウカゲトキ。源頼朝の臣。五郎景清の子。はじめ、源頼朝の兵を起すにあたり、景

時は族人大庭景親に従つてこれを攻めた。頼朝は敗れて土肥實平と山中に匿れた。景時は頼朝の所在を知つてゐたが、これを言はずに、景親を給いて「この處人跡なし。」といつて去つた。頼朝は因つて脱することを得た。

景時は遂に頼朝に降り、日に親任せらるゝに至つた。

壽永三年義經に従つて源義仲を討ち、又平氏を攻めた。

景時は寵を恃んで將士を輕視した。爲に義經に忌まれ、

景時はつひに範頼に屬した。その後景時は、義經を頼朝

に讒して、兩人の中を裂いてしまった。

正治元年頼朝が薨じて頼家が嗣いだ。景時は結城朝光を

頼家に讒した。朝光はこれを三浦義村に圖つた。義村は

和田義盛等六十六人と連署して、景時の誣告を訴へた。

景時はつひに罪を得て奔り、駿河で蘆名小二郎に撃たれ

て死んだ。

【鎌倉殿】 カマクラドノ。源頼朝。頼朝は征夷大將軍に任ぜられ、頼府を相模の鎌倉に開いた。よつて時人は頼朝を鎌倉殿といふに至つた。一

【神妙】 シンメウ。(一)靈妙不可思議なること。人力以上の

はたらきのあること。(二)けなげ。殊勝。奇特。しんべう。こゝは(二)の意。  
保元物語の白河殿攻落の條に、「遠慮のほどこそ神妙なれ。」

【能登の國に御恩蒙りけりとぞ聞こえし】 能登の國大屋の莊を賜はつたことをいふ。

はじめ清盛は信連の勇烈を壯とし、死を赦して伯耆の國日野に流した。平氏が亡びてのち、信連は鎌倉に赴いた。

頼朝はその奮功を録して家士となし、安藝の檢非違使に補し、能登國大屋の莊を與へた。

### 8 挿圖

市女笠

腹巻

狩衣衛府の太刀

いづれも釋義欄のその項に説明してある。これらは皆説明の理解に便ならしめるために圖示したものである。

長谷部信連の畫圖

源平盛衰記圖會中より採つた。信連の雄々しい姿に十分目を



止めさせたい。

平安京六波羅附近

本文中に出てくる地名の位置を明らかにせしめるため、特にこれを挿入した

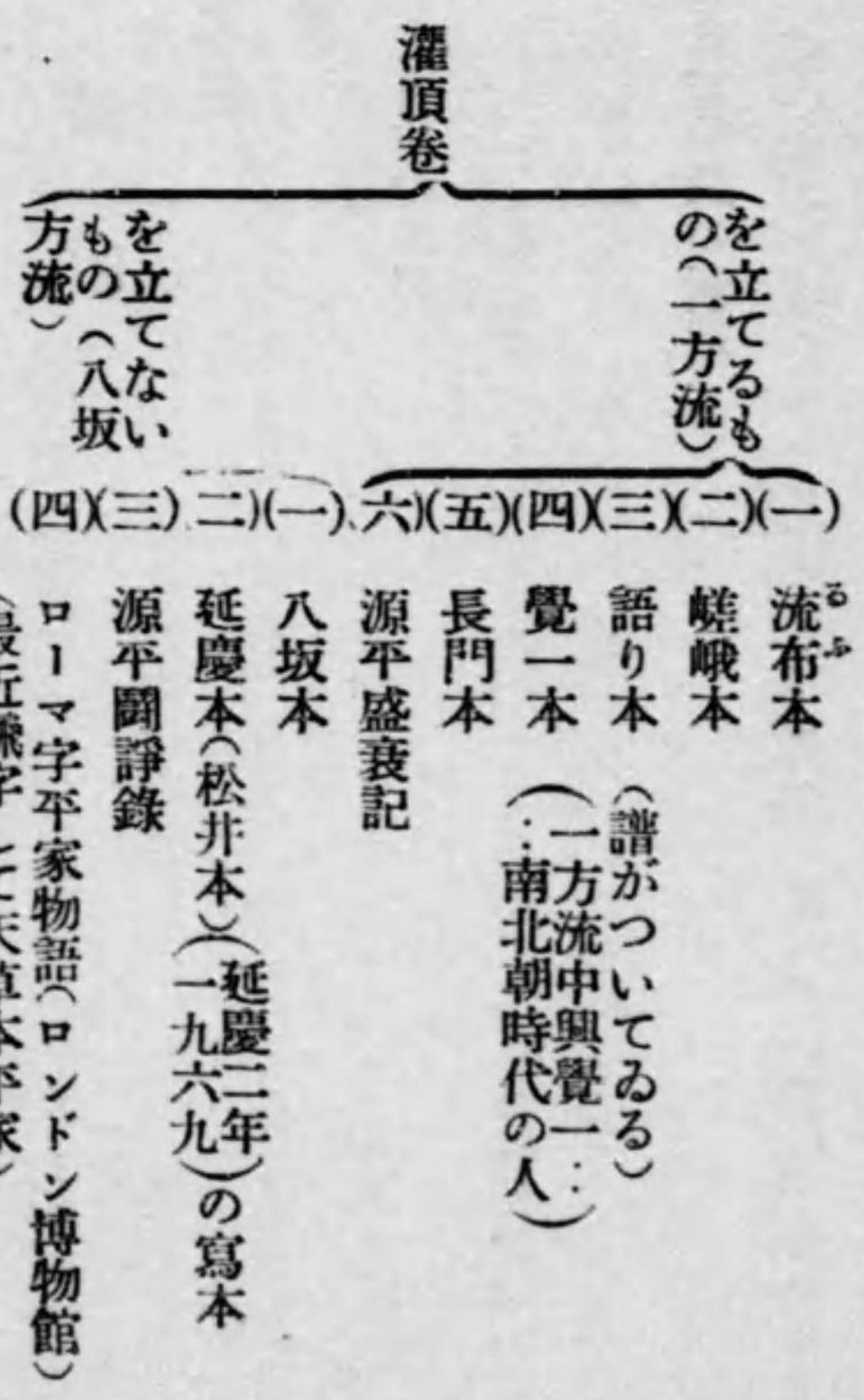
9 参考

1 平家物語について

一 題材 事件としては源平の盛衰であるが、作者のねらひどころは平家一門の悲壯な滅亡を人生の運命と眺めることにある。

二 作者 在來の研究では特定の一人を擬してゐるが(信濃前司行長・時長・資經・光行・爲長など)これは平家物語そのものの成立から考へて不可能なことである。即ち平家物語は最初から一定の組織を以て全篇ができあがつたものではなく、平家琵琶の曲目として一章毎に成立したものであり、各章についても後人の増補書き入れが加つたものである。それ故今日傳はる多くの異本はその發達の途中を示したものであり、今まで作者と擬せられてゐる人々はすべて作者であり得るといふ結論にもなり得るのである。

三 諸本



灌頂卷(灌頂とは、眞言で受戒のとき、香水を頂「カシラ」に灌ぐこと)は文學として見て、佛敎的な意味があるのだといひ、或は又琵琶の傳授に於て、祕曲として傳へる意のみといふ二つの説があるが、兩者とも眞であらう。

四 時代 作者を決めることのできないが如く、成立の時代も特定することはできないのである。然し原作ができ上つた凡その時代は實朝歿後といふことになつてゐる。

五 他の軍記物との關係 保元・平治物語は平家物語より前であるといふ説が今日では優勢である。

源平盛衰記は平家物語より前であるとされてゐる。藤岡作太郎はその爲めに精密な論説をあげ、讀む文學としての源平盛衰記の繁から、語り物としての平家物語の簡が生れたのであると考へ、野村八良もこの説をとつてゐる。

六 参考書

- 平家物語抄 國文註釋全書
  - ……考證
  - ……評釋 (内海弘藏)
  - ……考 (山田孝雄)
  - 鎌倉室町時代文學史(藤岡作太郎)
  - 鎌倉時代文學新論 (野村八良)
- 以上二書は共に書史的研究として上乘の書である。



### 一三 五月雨の頃

萩原井泉水

#### 1 解説

萩原井泉水著「旅の話句の話」の中の「五月雨の頃」と題する一篇の節録である。

「旅の話句の話」は、旅や句に關した作者の趣味の隨筆を集めたもので、新しい感覺と深みのある俳味との感られてゐる良書である。そのはしがきに作者のものした文は拘すべき情趣があふれてゐるし、同時にこの書の風韻を示すものでもある。

旅へ、旅へ、私は自分をさがしに行く。旅にあつて、そこに一人の、ほんたうの私が歩いてゐるのを見る。私の上に太陽のあることを感ずる、この夜も好い月だといふことを感ずる。しつかりと大地を踏んでゐなければならぬことを思ふ、行くべき道がどこまでも續いてゐることを思ふ。妻や子供と離れて獨りであることのさびしくもあるが、到る處に友人があることの嬉しくもある。この爲に私は絶えず旅に出てゆく。而して人に旅をすゝめるのである。

#### 2 作者

萩原井泉水 ヲギハラ セイセンスキ。

新派の俳人として知られてゐる。明治十七年六月十六日、東京市



芝區神明町に生れた。同四十一年東京帝國大學文科大學言語學科を卒業し、大學院に在つて三年間研究した。現今俳句壇で最も新しい傾向の一派を率ゐてゐる。

著作に「自然の扉」「生命の木」



「俳句提唱」「ゲーテ言行録」「奥の細道新釋」「新しき俳句を見よ」「句作捷徑」、句集に「芭蕉句選略解」、評論に「新俳句提唱」俳壇十年、「古人を説く」「昇る日待つ間」及び旅の紀行感想を書いた「山水巡禮」「チックタック」があり、その他、大正末期より現在にかけて文筆益々冴え、評論に隨筆に句作に多くの業績を残した。雑誌「厨雲」はその俳風の據つて明示される壇場である。

### 3 編纂の用意

季節に即した教材である。本巻では、「惜春」「五月の讚美」等相近接した季節を題材としたものを既に二つ讀んでゐるので、またもや「五月雨」といふ感がないでもないが、これら三課とも各、行文と風趣とを異にしてゐる味はふべき作品なので、重複の感を抱かない。極めて新鮮な、それこそ五月雨頃の季節の有する感觸をこの文から感じ得るのである。

### 4 要旨

螢の光るのは梅雨期の情趣の一つであるが、これも草むらの中の蛆から轉生したものである。一體この期はいろいろの蟲がうまれて、それ／＼ひそかにその幼さを養つ

てゐる。それを觀察するのは面白いことである。

或夜、五月雨の時間に銀座を散歩すると、早くも夏の装する男女が涼しく舗道を流して行く。その通りをわざと離れて、小暗い木陰に一群の人を寄せてゐるのは螢賣であつた。その螢を一つ買つて歸る途中、家並の暗くなるに連れて光は美しく輝き始める。近よる子供が「あゝほらうたるほうたる」と叫ぶそこにも、この時分にふさはしい情調がある。

或日は蛙の聲を賣る者を見て、蛙の聲を玩具にする都會の子供を興深く思つた。其角には、蝸牛を酒の肴に這はせるといふ句があるが、蝸牛も確かに五月雨の頃の氣分を代表する一景物である。

### 5 概説

#### 全篇の構造

五月雨の頃の自然界を觀察して録し、これに人事をも交へて敘したもので、各節の結びに俳句を一つづつ挿入してゐる。(節の切れ目毎に一行の空白がある)ので、頁と行とを記するに及ばぬ)

第一節 五月雨の頃に、螢・こほろぎ・蜻蛉・蓑蟲などが

生れたり、孵つたりして生を營む事實をいふ。

第二節 銀座の街の散歩から、螢を買つて歸るまでの話。

第三節 蛙の聲を賣ること、及び蝸牛に對する觀察。

### 6 取扱上の注意

□五月雨の頃の風景・情趣・氣分を教へる材料である。螢については、横井也有の「百蟲譜」に、五月の闇はたゞこのものの爲にあるのかと思はれるよしを記してゐる通り、夏の夜の景物として螢が賞美されるのは今更のことでもないが、この作者の觀察は流石にまた新味がある。「漆を塗りこめた闇に螺鈿を鏤めたやうな」といふ表現は、いかにもおもしろい。

□「蛆から美しい光への轉生」といふのも、暗示的である。「新しい世界を感知するものやう」「つゝましくその幼さを養つてゐる」などの表現にも、巧に含蓄がもたせてある。

□蓑蟲といふ蟲も、古來いろ／＼興味深く見られてゐるが、この作者には又獨得の見方が細かく試みられてゐる。蜘蛛と比べて「勤勉さはない」としてあるが、それもさう

見えるだけであつて、蓑蟲に言はせれば、案外に人間に知られない苦心があるのかもわからない。けれども、人間の常識の及ぶところから見ると、確かに、「ふらりと下つたまゝ」で暮して行くのであるから「運の強さよ」と感ぜざるを得ない。

□第二節も、螢が主題になつてゐるが、都會の街の、しかも銀座といふ最も賑かな處の螢賣の風景であるのが變つてゐる。「賣る者は人造金の指環を賣る者のやうに聲を啜らして述立てない」とは、一方に著しい皮肉を含んでゐることに注意させたい。「自分の好きな物を買つた子供のやうに」とは、生徒にも近い經驗の記憶があるであらう。

□蓑太の句の「わづらふ兒こゝろ」は、作者の場合は「わづらふ妻に」である。そして、その心持の美しさには、そんなに距離はないのである。しかし、この結末の扱ひ方には、一寸微妙な手加減が必要である。

□蛙は聞くもの、蝸牛は見るもの。兩者は元來さうしたものである。第三節はその着眼から見てよく描いてある。殊に蝸牛は子供の生活と親しい關係にあるものであるが、



そこがよく捉へてある。觸角の端の小さいまる球を、「發電器の陽極・陰極」に連想したのは奇抜である。「氣象學者」といふのも、その縁語と見られるが、新味であつて珍しい表現である。

【この蟲が一つ描いてあるだけで云々】といふ感想は、生徒には少しまだ受取りにくいかも知れぬ。ともかくも、第一節の螢と相匹敵して、蝸牛は五月雨頃の氣分を一入ならしめるものである故に、これに就いて生徒にも觀察の眼を肥やさしめたい。

7 設問

- 1 この文で、新しい言ひ方であると思ふ語句をあげよ。また、うま味のある言ひ方のところをも。
- 2 次の語を漢字に直して見よ。

ウルシ。リップ。ユビワ。トンボ。クモのアミ。カザリマド。ケンクワ。ヤリ。カタツムリ。

8 釋義

【五月雨】 サミダレ。陰曆五月の頃に降りつゞくながため

をいふ。

又、梅雨とも、うめのあめ、などともいふ。

古今集の夏に「さみだれに物思ひをれば時鳥、夜深く鳴きていづち行くらん。」

枕草子卷五に「さみだれはとがめなきものぞとて、さしよせて四人ばかりぞ乗りて行く」

【夕焼】 ユフヤケ。日の没する際に、西の空が赤く見えるのをいふ。

これは大氣中の小水滴・小氷片、または細塵等が日光を屈折したり反射したりするによつて起るものである。

一茶の句に「夕やけやから紅に露しぐれ」

【晴間】 ハレマ。雨雲がきれて、少しの間青空になること。

【漆を塗りこめた闇】 ウルシをヌリこめたヤミ。黒色の漆を一面に厚く塗りつぶしたやうな闇黒。

いかにも濃い闇を形容した語である。

【螺鈿】 ラデン。屋久貝・鸚鵡貝などの殻の眞珠光のある部分を採り、それを種々の形に切つて、漆器などの面に嵌め込んで飾りとしたものである。色は白に紫緑を帯び

て美麗である。

【鏤める】 チリバめる。ほりつけること。きざみこむこと。彫りこむこと。

【情趣】 ジャウシユ。おもむき。ふぜい。あぢはひ。

齊書に「飲酒七八斗、與外兄張融、情趣相得。」

王昌齡の詩に「所嗟異風俗、已自少情趣。」

【蛆からこの美しい光への轉生である】 螢の幼蟲は川畔等の叢の中に棲む蛆(ウジ)状の小蟲である。これが蛹となり、ついで成蟲の螢となる。そこで、蛆から美しい光を持つ螢へ生れかはるといつたのである。

尤も嚴密に言へば、螢は卵も幼蟲も多少の光を持つてゐるものであるから、成蟲のみが光るのではない。しかし何といつてもその光の愛賞されるのは成蟲の螢である。

【可憐】 カレン。愛すべきこと。あはれむべきこと。姿が優しく美しいこと。

李白の詩に「借問漢宮誰得似、可憐飛燕倚新粧。」

【こほろぎ】 蟋蟀。昆蟲類中、直翅類の一種である。全身は黒褐色で、腹部に二箇の尾状突起を具へてゐる。秋の

初に産卵し、秋の終に孵化する。人家に近く鳴く習性がある。例へば「きりり／＼す鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしき一人かもねむ」などの如く、古く「きりり／＼す」といはれてゐるのはこの「こほろぎ」である。

萬葉集卷八に「夕づく夜心もしぬに白露のおく此の庭に蟋蟀なくも」

萬葉集卷十に「秋風の寒く吹くなべわが宿の淺茅がもとに蟋蟀なくも」

【似てもつかず】 似もせず。似つきもせず。

【鶉色】 ウヅライロ。鶉の羽毛の色、即ち茶褐色。

【薄斑】 ウスマダラ。薄い色の斑點。

【デリケート】 英語 Delicate. 優美な、精緻な、雅致ある、微妙な、等の意味の形容詞。

【觸角】 ショクカク。動物學上の用語。甲殻類・昆蟲類等の頭部に存する角の如きもので、觸覺を司る。その形状・大小はそれ／＼異なる。

【孵つたばかり】 カへつたばかり。卵からたつた今生れ出たばかり。



【蜻蛉】 トンバウ。トンボ。昆蟲類中、擬脈翅類に属する。頭部には頗る大きな複眼と強い口器とを有し、腹部は長い。翅は前後共に同形同大である。幼蟲は河川・池沼等に住し、「たいこむし」「やご」などと呼ばれる。成蟲も幼蟲も共に益蟲として數へられてゐる。

【あらゆる若い生命が地上に出て云々】 以上例にあげたのは二三に過ぎないが、そのやうにすべての生れ出たばかりの新しい生命が地上にあらはれて、いよく自分たちが全盛を誇る時がまちかくやつてくることを感じてはゐるが、その時が来るまでは、つゝしみ深く自分たちの幼さを養つて、他日の活躍にそなへてゐる、といふ意。

【緊張】 キンチャウ。はりきりひきしまること。「弛緩」の反對語。

【蓑蟲】 ミノムシ。昆蟲類中の鱗翅類の一種。後翅は三箇の内縁膜を有し、口吻及び下唇鬚を持たない。雌は翅を有せず、多くは小形で黒色である。晝は空中に旋轉するものが多い。幼蟲は腹脚がなく、木片で巢を營んで棲息する。多くは樹木に有害である。

【生得】 シャウトク。(生れながら得る義。)うまれつき。天性。

平治物語の源氏勢汰の條に「この人は生得勢小さくおはしければ。」  
源平盛衰記卷一、清盛行三陀天の條に「たとひ何となけれども、生得のむくいとして、身一つ助くる分は有るぞかし。」

【閑人】 カンジン。ひまな人。世にそむいて安靜に過してゐる人。

【身を託す】 ミをタクす。身をまかす。身をゆだねる。

【篠を突くやうな雨】 「篠を束ねた如き状の雨」といふ義である。勢はげしく降る雨をいふ。

世話支那草に「篠をつく。雨といふこと、篠を束ねたる如くにふる雨なり。『武藏野のしのをたばねてふる雨に螢ならではなく蟲もなし』」

「篠」は「篠竹」の略。細くて叢がり生ずる竹である。

【蓑蟲の運の強さよ五月雨】 一茶の句である。この句は本文の前三行に述べてあることと同様なことを題材とした

ものである。

【一茶】 イッサ。小林氏。通稱は彌太郎、俳諧寺・蘇生坊等の號がある。信濃國水内郡柏原驛に生れた。幼時繼母に苦勞し、家を出て江戸に遊び、素丸の門に入つて菊明



と名のつた。二六庵竹阿の後を嗣いだが、後破門せられ、更に號を一茶と改め、巧に俚俗の語を活用して新機軸を出した。夏目成美等はそ

の親友である。三十二歳の時郷里に退隱し、俳諧三昧に入つた。文政十年(二四八八)十一月十九日病歿。年六十五。柏原驛の妙國等に葬つた。「おらが春」「一茶句帳」等が世にもはやされてゐる。

【銀座】 東京市京橋區の街衢。舊東海道の街道のうち、京橋から新橋に至る間を兩側に楡比した商家・店舗等で挟んで成つた街衢で、商業賑盛、群衆雜鬧、東京の流行、

繁華の一中心地である。

【中形の浴衣】 チュウガタのユカタ。中形に染めた浴衣。

「中形」とは染模様の名、大形・小形に對して、その形の稍、あらいものをいふ。

一代女に「黄枯茶に刻み、稻妻のちゆうがた、身せばに仕立て。」

【青みを帯びた新しい夏帽】 こゝにいふ夏帽は麥稈眞田で製した夏帽である。新しい麥稈帽は漂白して間がないので、麥稈の持つ固有の黄色・褐色が失せて白くなり、むしろ微かに青色を帯びてゐる。これが時を経て日光や風にあたると、次第にもとの色に還元して黄褐色に變じて来る。

【飾窓】 カザリマド。英語の Show-window にあたる。商品の見本等を陳列したり、又は廣告のために意匠を凝らした、店頭にある陳列窓。

【舗道】 ホダウ。舗装した道路。石・煉瓦・木煉瓦・コンクリート・アスファルト等をもつて表面を敷きつめた道路。  
【さや／＼と】 衣すれの音、草履・靴の音等、人の通行に



つれて發する音を形容したのである。「さや／＼」といふ語の感じは、新鮮な、爽涼な、淡泊な感じである。

【視線を惹く】 シセンをヒク。人の目を引きつける。人目に立つ。

【夜店】 ヨミセ。たゞ夜間だけ街路の片ほとりに設けられる店。簡単な屋臺を設けたり、又は路面に敷物一枚を敷いたりしてその上に商品を陳列する。

【文化生活】 ブンクワセイクワツ。新に進んだ文化を應用し、文化の程度の高い人に相應した生活といふ意味で、生活様式を改善し、生活様式の中に進歩した文化の數々を取り入れるといふやうなものである。この意味が多少轉じて、新しい様式、所謂ハイカラな分子の含まれてゐる生活を意味することもある。

【文化生活的の器具】 例へば、電氣を動力とし、火力とする諸家具、瓦斯の熱を利用する家具、その他簡単な科學を應用した器具類など。

【プラタン】 Platane. ブラタヌス・ブラタナス等とも呼ぶ。

我が國では「すゞかけの木」といふ。

篠懸木科の落葉喬木で、幹の高さは三四丈に達する。葉は大形で互生し、通常大いなる三裂片を有し、或は横に廣く、或は縦に長い。各裂片は更に缺刻と鋸齒とを有し、葉の縁は甚だ不整齊である。葉柄の基脚に稍、廣い不正形の托葉が一枚ある。春季に淡黄緑色の花を開き、後に徑一寸ばかりの粗糲な球果を結ぶ。その球果の枝になり下つてゐる様が鈴を懸けたさまに似てゐるところから「すゞかけ」の名が起つたのである。

【人造金】 ジンザウキン。模造の金。

【聲を囁らして云々】 夜店商人のうちには、通行人に向つて、又その店に足をとどめる客に向つて、商品の説明や廣告を大聲をあげて爲しながら賣つてゐるものがある。しかし螢賣はそんな事はしないで、たゞ黙つて暗い所へしやがんでゐるといふのである。

【小さい圓い紗の籠】 螢籠の一種で、小短圓筒形の木の框の兩端に薄い紗を張つて造る。

六八頁上欄のカットの向つて左のものがそれである。

「紗」(シヤ)は、織目が疎くて、軽く薄い生絹の織物で、帷又は夏羽織等に用ひる。

禮記の雜記に「夫人税衣揄狄、狄税素沙。」

その註に「狄税素沙、言皆以白沙殺爲裏。」

【寂しさやわづらふ兒に螢籠】 本文に述べてあるところは病妻のためにであるが、この句は病兒のために螢籠を買つて來るのである。病む兒の慰めにと思つて螢籠を持つて來るのに寂しさを感じるのは、それは實に有難い親心からである。

【蓼太】 レウタ。大島氏。名は陽喬、通稱は平八。信濃國蓼覺の里大島村の人。江戸に出て雪中庵史登の門に入り、遂に第三世の宗師となつた。雪門派の世々の宗師のうち、最も流行して世に知られた。天明七年(二四四七)九月七日歿年七十。(或は八十ともいふ)

【竹質性がちや／＼といふ音】 一體にこの作者の感性は鋭敏である。随つて、音についてもその發する本體を聞きわけてゐる。

同じ「がちや／＼」の音にも金屬性のもの、金屬と木質

と觸れ合ふ音、竹と竹とを打ち合はせる音等いろ／＼あつて、それがおの／＼微妙な點に相違を持つてゐるわけである。

【其角】 キカク。本姓は竹下氏。母方の姓を冒して椽本と

呼んだ。通稱は源助。



町醫者竹下東順の長男で、江戸に生れた。醫・儒・書・畫各、師匠に仕へ、更に鎌倉圓覺寺の大頭和尚について禪を

修した。俳諧は十七歳にして蕉門に入り、頭角をあらはした。其角の號は易の「晋其角」によつたものであるといふ。所謂江戸座の開祖で、洒落風の一體を起した。寶永四年(三三六七)二月三十日病歿、年四十七。

【かたつむり酒の肴に這はせけり】 俳諧古選の中に見えてゐる。

かたつむりの這ふ動作は極めて緩慢なものである。別に見所はないが、それでも閑のあるにまかせてゆつくりと



見てゐれば、その緩慢單純な動作にも面白味がある。そこでゆつくりと落着いてチビリチビリと酒を飲みながら眺めるのにはこれも一興だといふので、かたつむりを酒の肴に這せたといふのである。

【年長けた】 トシタけた。年長の。年かさの。年のいつた。

【蓄電器】 チクデンキ。蠟又は硝子板などの薄き不導體の板の両面に錫箔を貼り、電氣の感應を應用して多量の電氣を蓄積する装置をもつた器具。

【陽極・陰極】 ヤウキョク・インキョク。電池その他の電流を發する装置に於て、陽電氣の發生する部分、即ち電流の流れ出す部分を陽極といひ、陰電氣の發する部分、即ち電流の流れ返る處を陰極といふ。

【俳畫】 ハイグッ。俳諧師流の書く單純閑朴な墨繪。

【この蟲が一つ描いてあるだけで云々】 この蝸牛が一つ描いてあるだけで外には何が描いてなくても、雨の降下する線と、五月頃の雨季の重い空氣と、その雨や重い空氣の中にどこも知れず感ぜられる軽い或氣輕ささを感じさせるといふのである。

【よべの雨馬蘭に殖えぬ蝸牛】 昨夜雨が降つたが、今朝見ると庭の馬蘭に蝸牛が急に殖えてゐるといふので、蝸牛の雨を好む習性をよく詠み出してゐる。

【馬蘭(バラ)】は「葉蘭」とも書く。百合科、ばらん屬の多年生草本。葉は根生葉で、長柄を有し、葉身は長大、披針形をなしてゐる。四月頃、根莖に接して花莖を抜き、内面が紫色の花一箇をつける。

### 9 挿 圖

夏草にすだく螢の一情景で、本卷のために特に撮影した寫眞である。

#### 蝸牛の俳畫

ぬめるとも家な忘れそかたつぶり 月空居士

と俳句の贅がある。「ぬめる」とはぬらぬらとすべりながら動きまはることを言つたのである。又、歌や連歌などの平板纖弱なことを俳人が嘲つていふ語である。

俳人眞蹟全集から複寫した。

## 一四 雜 草

阿 部 次 郎

### 1 解 題

阿部次郎著「北郊雜記」中の一文を探つた。

「北郊雜記」は、阿部次郎の評論や隨筆を集めたものであつて、北郊雜記・思潮雜記・雜纂の三篇に別れ、各篇には更に種々の項目の文が類聚せられ、合計三十九章から成つてゐる。大正十一年五月、東京、改造社發行。

### 2 作 者

阿部次郎 アベジラウ。



明治十六年山形縣飽海郡上郷村に生れた。第一高等學校を経て東京帝國大學に入り、明治四十年哲學科を卒業した。倫理・哲學の専攻であるが、一方に夏目漱石に師事して文學の研究をなし、東京朝日新聞の文藝欄によつて評論を試みた。思想態度は宗教的・内觀的であつて、たしかに評論壇の一端

### 3 編纂の用意

である。大正十一年文部省留學生として獨逸に遊び、十二年歸朝し、その後東北帝國大學法文學部教授となつた。著書に、倫理學の根本問題・美學・人格主義・地獄征服・三太郎の日記・北郊雜記等がある。

前課との關係からいへば、五月雨頃の風物についての感想である點に聯絡があり、季節との關係からいへば、前課と同じく丁度只今の氣象に即した素材が用ひられてゐる。さうした點からも本課の位置の決定される理由はあるが、その他に、前課の所謂隨筆風の文に對して、本課のは同じく感想ながらも、一步ものの中核まで踏み込んで行つて哲理を感ずるといふ體の試論の文であるところ、對照の妙がある。かうした試論の文は、中學三年生位になると、そろ／＼切實に頭に入り易くなつてくる。この時に際して、優秀で堅實な試論によつて、一つには彼



等の論理的態度に指導を與へ、一つにはその求めつゝ探りつゝある宇宙人生の哲理の健全なものを提示してやることは最も必要なことであると思はれる。この理由からしても、本課の文の地歩が固められるわけである。

#### 4 要 旨

庭の芝生の間に雑草が蔓りだしたので、これを抜取る。この抜取る時に於て、感じたことや、珍しく発見したものに於いての感想を敘したものである。先づ芝生の上では机の前とは別様なリズムが生れる。即ち筋肉労働には頭の労働とは違つた性質があつて、或程度までこの労働と接することを怠ると、人間生活の全體に不幸が報いて來るといふ、そんなことを思ひながら雑草を抜捨て行きつゝ、いろ／＼なそれらの生の營みを發見する。そして又、愛憎の感に支配されて、その中の可憐なものは、抜捨てるに忍びず、芝と紛はしい、しかも丈高い一種の草だけを、賢者を憎む心を以て退治する。ところが、その草の蔓り方が速かで、これだけを抜くのが容易でなく、抜捨てたかと思ふと、すぐ又その後仕

事が與へられるといふのである。

#### 5 概 説

第一節（七〇頁—七二頁二行） 芝草の間に頭を出した雑草をむしり取つてゐる時に、土を相手にする筋肉労働には、他の者の味はひ得ない健全な喜と苦しみとのあることを知つたこと。

第二節（七二頁末行—七四頁四行） 雑草をむしりながら、子細にそれらの植物の生活状態に注意してみると、今まで氣のつかかなかつた様々のものが發見される。さうして、これらの雑草に對して好惡の感情までが湧いてくること。

第三節（七四頁五行—七五頁） 雑草の生長の速かなこと。それを根絶するのは容易な仕事でない。

#### 6 取扱上の注意

生徒の文を読む力も、又物の考へ方も次第に進んで來て、試論の文などもそろ／＼興味の對象となつてくる。本課の文の如き極めて平明な試論は、思想的論文を読む

手ほどきとして、蓋し適當なものであらう。

「思想家の隨筆だけあつて、一寸した物の見方や考へ方も、他の人とは異つたところがある。雑草をむしりながら、そこに筋肉労働のもたらす一種の快感からして、直に農業と文化との關係に想到し、哲學的の考察を進めるところ、或はまた、種々な雑草の一つ／＼に對して鋭い一瞥を與へ、そのもの特徴を見て取つて、それに向つて極めてはつきりした感じを喚び起し、終には好惡の感情さへも動かすところなど、普通人の一寸及ばぬところである。即ち或物を見た場合、たゞ見ただけに止まらないで、直に、それを基として、思索なり、批評なり、感想なりが、先へ／＼と進められて行くところに本文の特色がある。

「トルストイなどが考へた云々」（七一頁二行）トルストイが晩年に、一農夫として農業生活を營んだことを聯想させるがよい。

「身の程を忘れた云々」（七二頁五行）こゝは、身の程を忘れたのでなく、かく「考へる」ことは作者の「身の程に即

した」考といふべきであらう。

「一種の憎しみを以て」（七三頁二行）感情を動かさずになれないのである。かういふ點から見ると、こゝは、哲學者阿部次郎のものではなくて、文學者・詩人乃至は人としての阿部次郎のものである。

「その存在を其處にも此處にも云々」（七四頁七行）は、「憎まれもの世にはびこる」といひたいところで、これは人間界だけの現象ではなかつた。これに對して、「謙遜な自分の領分を占めてゐるもの」（七三頁末行）は、何とゆかしい存在であらう。

#### 7 設 問

- 1 この作者が、普通の草取労働者と違ふ點はどういふところに現れてゐるか。
- 2 その哲學者らしいところは、どこに見られるか。
- 3 又この作者が、感情を動かさずにゐられないといふところは、どこに見られるか。
- 4 その憎み、又は愛する所を見て、この作者の性格が如何に察せられるか。



8 釋 義

【芝草】 シバクサ。禾本科、結縷草(シバ)属の多年生草本。廣く我が國の山野に自生する。匍匐せる細長い根莖を有し、各節より根を下す。葉は細長、長さ二寸餘り、花は小穂をなして穗状花序に排列し、五月頃花莖の上に生ずる。庭園・堤防等に植ゑる。

【蔓る】 ハビコる。

【宵の口】 ヨヒのクチ。日が暮れて夜になりかゝつた頃。

【リズム】 Rhythm. 韻律。律動。

【トルストイ】 Tolstoy (1828—1910)

ロシアの小説家・思想家。ヤスナヤ・ポリヤナに生れた。一八五二年處女作「幼年時代」を著して文名を知られた。クリム戦争には砲兵大隊長として従軍した。戦が終つて一八五六年ベトログラードに上つた時は、セバストポルの英雄として、又文壇の明星として、中央文壇から空前の歓迎を受けた。一八六一年からヤスナヤ・ポリヤナに引込んで學校を設立し、専ら教育事業に従つた。一八八〇年前後から精神的危機に瀕して最後の慰安を宗教に求

め、遂に原始キリスト教の理想と無抵抗主義とを標榜するに至つた。この頃から一個の農夫として生涯を送り、専ら農民を相手の教訓物に筆を執るに至つた。晩年再び思想と實行との矛盾に苦しみ、この矛盾から脱しようとして、夜間家を出で、遠く理想の境地を求めて去る途中、肺炎を病んでアスタボヴォの寒驛に死んだ。作品の中で名高いのは「戦争と平和」「アンナ・カレニナ」「復活」「闇の力」生ける屍等である。

【或種類の報を云々】 この或種類の報といふのは、人にとつて決してよい性質のものではない。不健全な、不快な、不活潑な、否定的な、不幸なものであるにちがひない。

【贗物】 ニセモノ。芝草でない雜草であるから、芝草にとつては異端者である譯だ。

【どくだみ】 三白草(カタシログサ)科の多年生草本。莖の高さ一尺内外。葉は卵形、花は白色、我が國の山野に自生し、強い臭氣を有する。地下部は薬用となる。

【かやつり草】 莎草科の多年生草本。莖は高さ一二尺で三

稜形。葉は多く根生、細長。夏、莖頂に三葉を出し、その間に數枝の穂を生じ、黄褐色の小花を密生する。

【挺づ】 ヌキンづ。

9 挿 圖

トルストイ

トルストイの死んだ年に撮つた寫眞である。

昭和三年九月一日發行の國際寫眞情報から轉載した。



# 一五 葉書文學

小笠原長生

## 1 解題

小笠原長生著「春うらゝか」の中から「葉書文章」の一篇を節録した。

「春うらゝか」は、その序文に、

四季の中に春のあるのは、それによつて人間をのんびりさせ、苦惱の多い浮世の遺瀨なきを、その時節だけでも忘れさせてやらうとする天意ではあるまいか。本書の内容がこの精神に叶うてをるや否やは判らないが、著者自身では、書中に収めた快談のみならず、哀話は哀話なりに、人世の春とも謂ふべきその光明面に即して若しくは講話を執筆したつもりである。随つて何事にも陰惨の氣が漲つてゐる今の世相に對し、讀者に少しでも慰藉を與へ得るとしたなら、それこそ出版の甲斐があつたといふもので、著者の本懐この上もない。……

とある。文藝・宗教・追憶・實話・軍事の五部をたて、各部數篇宛を輯めてある。卷末附録として、明治三十五年英國皇帝戴冠式參列の渡英日録が収録してある。

昭和六年三月、東京、實業之日本社發行。

## 2 作者

小笠原長生 ヲガサハラ チャウセイ。



慶應三年十一月、肥前唐津に生れた。祖父は唐津藩主小笠原長國で、封邑六萬石を領した。長生はその嫡孫で、長行の長男である。明治六年、先代長國の家督を相續し、同十七年子爵を授けられた。夙に海軍兵學校に入り、明治二十年卒業して少尉補となり、爾後累進して海軍中將に陞つた。日清戦役には勳功により勳六等に敘し、功五級金鷄勳章を、日露戦役には勳三等に敘し、功四級金鷄勳章を賜つた。後海軍軍令部に出仕し、東宮御學問所幹事に任ぜられた。又、一面文學を好み、文章をよくし、金波樓主人と號して著書も少くない。

## 3 編纂の用意

葉書の文は實用文中恐らく最も多く書かれるものであらう。それ故どんな人にも關係のある、最も普遍的な文で



あるといはねばならぬ。その葉書の文にも、實用を果すといふ目的の外に、一寸工夫を加へ、意を用ひれば、如何やうにも趣味を増し、風雅を添へ、ひいては人生に潤と寛ぎとを與へるか知れない。さうしたことを本課の文によつて知ることが出来るので、本課の文は廣く一般大衆に對する教養の資料であり、最も普遍的なる趣味文話である。かういふ意味から、本課の文はよく味はふべきものである。

#### 4 要旨

葉書の文章の妙味あることを説き、作者の手許にあつた興味ある葉書の中から、日露役當時の八代海軍大佐、久留島一等主計、及び大正十二年大町桂月からのものをあげたのである。

葉書の文は日常實用の文のうちで、まづ最も短いものと言はれる。短いはいひながら、和歌や俳句に比すれば幾倍かの餘裕がある。さうすれば葉書の文には相當のものが成立ち得るのである。「葉書文學」の語は決して街氣に出た名稱ではなくなる。葉書の文は誰でもが書く、そ

こに葉書文學にはほんたうの大衆文學としての要素がある。葉書の文は即座に成る、そこに眞情の流露がある。それらの意味からして、動もすれば看過されるものでありながら、意を留めて吟味すれば、たしかに興味あるものである。これを取扱つた作者の態度と文趣とは捨て難いものがあつて、上乘の文話といふべきである。趣味と實益とを兼ね具へた教材である。

#### 5 概説

第一節（七五頁）序説。「葉書文學」といふ熟語があるか否かの吟味。ともかく、數十年來保存の葉書から、興味深い二三を拾ひ出さうといふ。

第二節（七六頁—七七頁一〇）淺間艦長八代大佐の葉書。先づその筆者の紹介から葉書の本文へ。その後短評を附する。

第三節（七七頁末行—七九頁八行）久留島一等主計（武彦）の葉書。その本文を先にし、筆者の紹介と本文の批評とを後にする。

第四節（七九頁九行—八一頁）大町桂月の葉書。先づ筆

者の紹介から葉書の本文へ。その後、更に本文の短評と筆者についての感想とが添へてある。

#### 6 取扱上の注意

この一篇の構造に就いては「概説」の初に特記する例に従はなかつたが、その各節の概説を見ても知られるやうに、本篇の組織そのものが、すでになか／＼に考へてあるやうに思はれ、變化のうちに秩序があり、單調な列擧に陥らず、しかも統一が保たれてゐる。作者の單に武弁のみの士でないことが、こゝにも亦窺はれて、先づゆかしさの限りである。

「つい一枚読み一枚読みする」といふ前後は、例の徒然草第二十九條の「靜に思へば、よろづ過ぎにし方の戀しさのみぞせむ方無き。云々」といふ一段も聯想されて、いかにも首肯される。

葉書の本文は固よりであるが、その筆者の紹介及び葉書文批評の言葉が、その本文と相俟つて、内容が實にゆたかであり、十分に葉書の本文の背景を描き、この人にして、この事情のもとにあつて、この文が生れるのかと思

はせてゐるので、ます／＼讀者の興を深めるのである。

かくて、こゝに採られた三人物に就いて、われらはいろいろの傳記的知識をも授けられ、いはゆる趣味と實益とは、かういふ文からこそ得られることを思はせられる。そして、われ／＼は、作者が桂月の文を評した言葉をそのままに、「やはりうまいなあ」と感心してしまふのである。

#### 7 設問

- 1 「熟語」といふものは定義的にはどう説いたらよいであらうか。
- 2 引用の葉書文の外に、この課から如何なることを學び得るか。
- 3 次の語句の意味は。  
朶雲。痛み入りたり。しをらしい。人間味。食指動く。山姥の申し子（殊に「申し子」の意味）。錦心繡腸。

#### 8 釋義

【熟語】 ジュクゴ。二つ以上の語が結合して一つの意義を



成してゐる語をいふ。

又、或意味を以て慣用せられて、その使用の場合の一定してゐる語をいふ。

【ものす】 ある動作をする意味で、廣く多くの事にわたつて用ひる。故にその「何をされる」のであるかは、その前後の關係から見定めねばならぬ。

「筆を取つてもものする」といへば「書く」ことであり、「母なる人のものしたまへる袴」といへば、「母の縫つた袴」である。

こゝにいふ「ものす」は、「書く」意味である。

【書狀】 ショジャウ。手紙。用紙に書いて、封筒に入れた手紙。書簡。

【存外】 ゾンググイ。思ひの外。思ひがけなく。案外。

【押賣】 オシウリ。買手が希望してもむないのに、賣手が無理にその物品を賣りつけること。

これから轉じて、相手の要不要を問はずして、自分の思ふところを無理に他人に押し及ぼすことをいふ。

【對露戦役の劈頭】 タイロセンエキのヘキトウ。

「劈頭」は事の一番はじめをいふ。

日露戦争の劈頭、宣戦の詔勅の下るに先つて、佐世保軍港を抜錨した我が聯合艦隊は、その一部を以て朝鮮半島に上陸する陸兵を護送して仁川に向つた。當時仁川にはコレীগ・ワリヤーツの二露艦があつた。我が陸兵を無事上陸させるためにはこの兩艦を撃滅せねばならぬ。ここに日露戦の開幕として仁川港外の海戦が行はれ、我が軍の勝利となつた。その時海戦に参加した我が軍艦淺間の艦長八代大佐は、仁川港に向つて艦を進めつゝ、月明の艦橋上に悠々尺八を吹奏して風流艦長の名を得た。

【一管】 イックワン。管はこゝでは笛の意である。尺八は内の空な管樂器であるから、それを數へるに「管」の語を用ひる。

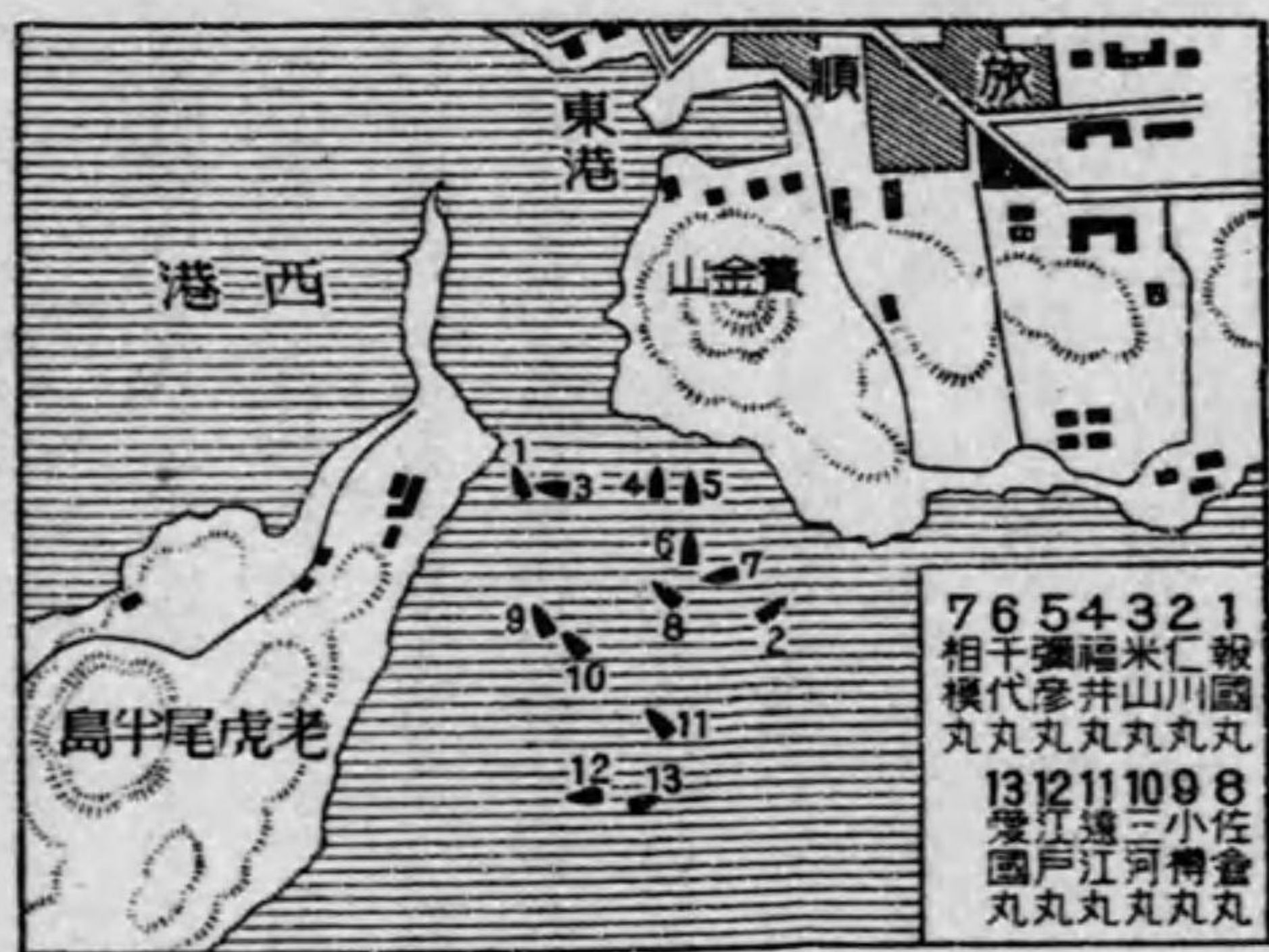
筆をいふ場合にも「管」の語を用ひる。その場合の「管」は筆の軸の意である。

【音に名高い】 「音」とは、世間の風評、評判の意。世間の評判の高い。有名な風評となつてゐる。

【旅順口の閉塞】 旅順は滿洲關東州の最南、遼東半島の尖

端にあつて、威海衛と共に渤海の咽喉をなしてゐる。日清戦役後、一旦我が版圖に歸したが、三國干渉の結果清國に還附した。後露國の軍港となつたのを、日露戦役に多大の犠牲を拂つて占領し、後我が租借地となつた。港は東西三海里、南北十四町、港口二町半。「旅順口」とは旅順の港口の意。

日露開戦以來、我が艦隊は已に兩回旅順港口の閉塞を試みた。



第一回は明治三十七年二月下旬、天津丸・仁川丸・報國丸・武揚丸・武州丸の五隻（乗組七十七名）を以てした。第二回は三月下旬、千代丸・福井丸・彌彦丸・米山丸の四隻（乗組六十五名）を以てした。いづれも有馬海軍中佐

（良橋）總指揮の下に、極めて勇敢壯烈に決行せられたが、不幸にして未だ完全にその効を奏せず、港口からは尙依然として敵艦の出入を見た。

この時にあたり、黒木大將の第一軍は將に鴨綠江を渡つて滿洲に攻め入らうとし、奥大將の第二軍も亦既に朝鮮大同江に集合、遼東沿岸に上陸決行の機を待つてゐた。而して第二軍の上陸豫定地點たる鹽太澳は、旅順口を距ること僅かに數十里に過ぎないから、動もすれば敵艦隊の襲撃を受ける虞がある。よつて、我が艦隊は前二回よりも更に大規模の計畫と準備とを以て、これが必成を期し、茲に第三回の閉塞は企てられたのである。

第三回は總指揮官林海軍中佐（三子雄）が新發田丸に搭乘し、將校下士卒二百四十餘名の決死隊員の分乗せる小倉丸・朝顔丸・三河丸・遠江丸・釜山丸・江戸丸・長門丸・小樽丸・佐倉丸・相模丸・愛國丸の十一隻を率ゐて、五月一日午後五時根據地を發した。砲艦赤城・鳥海はその左翼を掩護し、第九・第十・第十四・第十六の四箇艇隊はその右翼を警衛し、通報艦龍田は列外に在つて、通信傳令に



従つた。第一戦隊(東郷司令長官・梨羽司令官)・第三戦隊(出羽司令官)及び第二・第三・第四・第五の四驅隊これを送り、二日午後四時黄海で別れた。この夜十二時を期して港口に突入の豫定であつたが、暴風激浪の爲に行動を中止した。林總指揮官は發火信號を以てこれを命令したが、第十艇隊の如きは艇の動搖と絶間なき飛沫とに妨げられて、その信號を読むことができなかった。かくて三日の午前二時半頃より行動を開始し、三河丸先づ爆沈し、他の諸船も相次いで任務を遂行した。

回第三回旅順口閉塞隊編制概略

(總指揮官中佐林三子雄、島海艦坐乗)

- (番號)(船名)(排水量)(速力) (指揮官)
- 一番 新發田丸 四、一〇〇〇 一三 大尉 遠矢勇之助(初瀬分隊長)
- 二番 小倉丸 三、四〇〇 一三 少佐 福田 昌輝(春日分隊長)
- 三番 朝顔丸 三、五〇〇 一二 大尉 向 菊太郎(松島航海長)
- 四番 三河丸 二、三〇〇 一〇 同 鹿嶋 胤次(赤城航海長)
- 五番 遠江丸 二、三〇〇 一〇 少佐 本田 親民(富士分隊長)
- 六番 釜山丸 二、三〇〇 一二 大尉 大角 岑生(濟遠航海長)
- 七番 江戸丸 一、八〇〇 一二 同 高柳 直夫(秋津洲砲術長)
- 八番 長門丸 二、三〇〇 一三 少佐 田中 鏡郎(海門副長)
- 九番 小樽丸 三、〇〇〇 一二 大尉 野村 勉(筑紫分隊長)

- 十番 佐倉丸 三、七〇〇 一三 同 白石 霞江(淺間分隊長)
  - 十一番 相模丸 二、二〇〇 一三 同 湯淺竹次郎(嚴島砲術長)
  - 十二番 愛國丸 一、六〇〇 一三 同 犬塚 太郎(笠置分隊長)
- 【白石大尉】 シライシタイキ。名は霞江。岡山縣津山の人。明治二十七年少尉に任官した。三十三年北清團匪の亂あるや、海軍陸戰隊中隊長として太沽砲臺攻撃に勇名をあげた。日露戦役には、軍艦淺間分隊長として出征した。第三回旅順口閉塞の時、自ら請うて決死隊に加はり、佐倉丸指揮官として五月三日の閉塞事業に参加し、名譽の戦死を遂げた。同日を以て海軍少佐に進められ、勳四等功四級に叙せられた。

【一人も生還したものが無かつた】 第三回閉塞隊に加はつた八艘の閉塞船の中、白石大尉の佐倉丸はじめ小樽丸・朝顔丸・相模丸の四隻は乗員中一人の生還者も無かつた。

【悶々】 モン／＼。心の中にもだえる貌。

水滸傳に「回三到家中、悶々不レ已。」

【朶雲】 ダウン。人の手紙の敬稱。

唐書の韋陟傳に「唐韋陟常以五朶朶、爲書記、使侍妾主之。其體答受、意而已。皆有楷法、陟唯署名。」

自謂所書陟字、若五朶朶、時人慕之、號之郇公、五雲體。(陟は郇國公に封ぜられたので郇公といふ)

【痛み入る】 イタミイ。我が身に過ぎたことなので、心に深く痛み思ふこと。恐れ入ること。恐縮すること。

【布哇事件】 ハワイジケン。西曆千八百九十三年、即ち我が明治二十六年一月十七日、從來布哇群島に君臨してゐた女王リリオカラニは米國の武力干涉によつて遂に王位をすて、布哇は假共和政府の手に渡つた。當時軍艦浪速は我が居留民保護のためにホノル、へ派遣された。艦長は東郷海軍大佐、後の元帥侯爵東郷平八郎であつた。

【即興詩人】 ソクキョウシジン。デンマルクの文學者アンデルセン(ANDERSEN)の作で、千八百三十四年(我が天保五年)に出版せられたのを、森鷗外が翻譯して、明治三十年完成したもの。出版したのは明治三十五年である。

【圖門江】 トマンカウ。又、豆滿江とも書く。一名は高麗江。白頭山の東南麓に發し、東北流して日本海に注ぐ。流程約九十里。下流はシベリヤとの境界をなし、上流の大部分は滿洲國との境を劃してゐる。

【つきはぎの錦】 緑・赤・黄等の木々の入亂れてゐるのを、様々の柄の錦をつきはぎして一枚にまとめたのにたとへたのである。

【山姫も姥となつたかこの山はつききれもありはぎきれもあり】 この山の主であるところの山姫も、もう老女になつたのであらうか、今秋のたけなはな時に着てゐる山の着物は、つききれ、はぎきれがあつて、若い姫ならきまわりわくて着られないやうなものであるからの意。

【姥(ウバ)は、こゝでは年老いた女の意。因に、山に山姥が棲むなどといふ傳説は諸所にある。なほ後節の「山姥」参照。

【天長節】 テンチャウセツ。こゝは明治三十八年の天長節で、十一月三日である。天長節は、天皇の御降誕に相當する祝日。

明皇實錄に「開元十七年百官上表、請以八月十五日、爲千秋節。」天寶七年改爲天長節。

【しをらしい】 可憐な。かはゆらしい。賞すべき。

【月下哨戒】 ゲッカセウカイ。月光の下で、哨兵(見はり



の兵)として敵を警戒すること。

【淡彩】 タンサイ。淡い水彩繪具で彩り書くこと。

【大本營】 ダイホンエイ。大元帥の下に置く最高の統帥部。幕僚及び各機關の高等部を置き、參謀總長及び海軍軍令部長は各、その幕僚に長として帷幄の機務に奉仕し、作戰を參畫し、終局の目的を稽へ、陸海兩軍の策應・協同を圖るものである。

【計手】 ケイシ。陸軍の經理部に屬する職員。軍隊給養の事を掌る。一等計手は曹長相當の官である。

【覇を唱へる】 「覇」(ハ)は諸侯のはたがしら。諸大名の首領の義。

群を押へて、名聲がその上に出ることを「覇を唱へる」といふ。

【大立物】 オホダテモノ。當時の俳優中、技倆の最も優れたものをいふ言葉。轉じて、その社會で最も尊重せられる人をいふ。

【筆を投じて戎軒を事とす】 文事を棄てて武事に従ふをいふ。

「戎軒」(ジュウケン)は兵車。轉じて戰爭。

唐の魏徵の述懐の詩に「投筆事戎軒」

【萬丈の氣を吐く】 パンヂャウのキをハク。盛な氣勢をあげること。非常な意氣を示すこと。

【睥睨】 ヘイゲイ。ながし目に見ること。廣くあたりを見まはして勢を示すこと。

【述懐】 ジュクワイ。所懐を述べること。心に思ふ所を述べること。感想をのべること。

【滿腔の敬意】 マンカウのケイイ。全身に滿ち溢れる敬意。

【山姥】 ヤマウバ。謡曲の曲名。

都の遊君百魔山姥とて、山姥の曲舞の達人が、人を伴なひ、善光寺に詣でようとして、越中・越後の境川に來た時、忽ち空が暗くなつて、どうしようかと心配する。ここに一人の女性があらはれ、御宿を參らせようと導いて行く。さて遊君に山姥の舞を所望し、「その曲舞に名を得給ひし上は、歌舞の妙音を以て佛事をなし、誠の山姥をして、輪廻を免れしめ給へ、我こそは誠の山姥である。」といふ。遊君が驚き恐れつゝ、拍子を進めて謡はう



とすると、「暫く待ち給へ、夜に入つて誠の姿を顯し、我も舞はう。」とてかき消すやうに見えなくなつた。やゝあつて、日光も物凄しい山陰から、鬼女の姿で出で來り、

約の如く遊君に謡はせて山姥の曲舞を舞ひ、四季の山巡りする様を演ずる。さて、「都に歸つてこの有様を物語りともしたまへ、我が名の山姥

を名乗つて狂言綺語を演ぜらるゝも、やがて讀佛乗の因とならう。」などと語りつゝ名残を惜しんで去るといふ筋である。

この謡曲を翻案して多くの俗曲が出来てゐる。

【申し子】 マウシゴ。神佛に祈つて儲けた子供。

【食指動く】 ショクシウゴク。養應を受ける前兆にいふ。

又、物を欲しがることにもいふ。

左傳の宣公四年の條に「楚人龜ヲ鄭ノ靈公ニ獻ズ。公

子宋、子家ト將ニ見エントス。公子ノ食指動ク、以テ子家ニ示シテ曰ク、「他日我此ノ如クナレバ、必ず異味ヲ嘗メン。」ト。入ルニ及ンデ、宰夫將ニ龜ヲ解カントス。相視テ笑フ。公之ヲ問フ。子家以テ告グ。大夫ニ龜ヲ食ハシムルニ及ンデ、公子ヲ召シテ與ヘズ。公子怒ル。指ヲ鼎ニ染メ、之ヲ嘗メテ出ヅ。」とある。

【食指】は第二指である。「龜」は大龜。

【打込む】 ウチコむ。それに心を傾注すること。すつかり氣に入ること。ほれこむこと。

【御輿を据ゑる】 ミコシをスゑる。その場所へ落着くこと。坐りこんで動かぬこと。

【ほくそゑむ】 にこ〜とゑくぼを作つて悦び笑ふこと。

【錦心繡腸】 キンシンシウチャウ。詩文の才のうるはしいさまの形容。

【終焉】 シウエン。身のおちつき處。轉じて死をいふ。

【大町桂月】 オホマチケイゲツ。明治二年高知に生れた。



明治二十九年東京大學文科を卒業する頃から文名が次第に高くなつた。博文館員として縦横に文筆を振つた。大正十四年、十和田湖畔蕨温泉で病歿した。年五十七。

【大禮奉祝唱歌歌詞審査委員】 大正天皇の御即位の大禮當日、全國各學校で唱和せしむべき奉祝歌の歌詞を文部省に於て一般から懸賞募集した。その應募歌詞の審査に當る臨時委員。文部省から囑託せられた。

【杉浦重剛】 スギウラシゲヨシ。安政二年近江國膳所藩に生れた。同藩の貢進生として大學南校に學び、明治九年英國へ留學を命ぜられた。後、文部省參事官、東亞同文書院長、教育調査會々員等に歴任した。大正三年東宮御學問所御用係を被仰付、倫理を御進講申し上げた。大正十三年卒、年七十一。

【東宮御學問所】 トウグウゴガクモンジヨ。皇太子の御教育の事を掌る役所。總裁・副總裁・幹事・御用掛・評議員等の職員を置く。

【潤歩】 クッポ。大股に、何のはゞかるところもなく歩くこと。

【領かれる】 ウナヅかれる。首肯される。もつとまだと心に悟られる。

【猪狩史山】 キカリシザン。名は又藏。明治六年（二五三三）福島縣生れ。杉浦重剛の門弟。現に杉浦翁の後を承けて日本中學校長の職にある。

【濺ぐ】 ソゞぐ。

【杉浦重剛先生】 杉浦重剛七十歳の記念として、知友門弟がその傳記の編纂を企て、主として大町桂月・猪狩史山の兩人が執筆して、大正十三年、政教社から出版したものの。

### 9 挿

月下明戒（原文参照）

特に小笠原子爵家から拜借してこゝに載せた。

蕨温泉と大町桂月の墓

十和田湖の蕨温泉の遠景と、そこに建てられた大町桂月の墓との寫真である。

## 一六 末ひろがり

### 1 解題

狂言記の中から「末ひろがり」を採つた。

「狂言記」五卷。作者は未詳。

室町時代に行はれた狂言五十種を集めた書。現存のものは、江戸時代の初めに増減改竄したものであるといふ。このほか續狂言記・狂言拾遺・狂言集外各、五卷があつて、狂言記に續き、合はせて二百種を収めてある。

先年發行せられた狂言全集は、狂言記・續狂言記・狂言記拾遺の三種を合刊したものである。

### 2 編纂の用意

我が國の劇文學の系列中に一つの位置を占めてゐる狂言について、如何なるものであるかの大體の知識を授け、併せて滑稽趣味の教養に資せしめようと思ふ。即ち謡曲・能樂との關係、及びその文學上の地位等について概

略の知識を得しめ、劇文學としては戯曲との比較・聯絡を考慮せしめ、内容に於ては登場人物の言語動作から來る可笑味、脚色上の滑稽等を味はしめたい。

### 3 要旨

主人の大名から、京に上つて「末ひろがり」を買うて來いと命ぜられた無智の太郎冠者は、すりにままと騙されて、どうやら註文に合ふ傘を買うて歸つたので、大名に叱られる。そこで叱られた時の用意にと、すりに教へられた唄をうたひながら舞出す。はては大名も太郎冠者に連れて舞出すといふ喜劇である。「末ひろがり」を傘に附會して解くところが、この喜劇の醸されるもとである。實に傘にしても「末がひろがる」といふところは確かにあるので、めでたいといふ氣分が常に伴ひ、騙す、騙される、叱る、叱られるといふ場面のをかしさも、終



りに主従が舞出すところで、愛でたいといふ氣分に融けこんでしまふ。そこに、この狂言の特色が存する。

#### 4 概説

第一節（八二頁—八三頁四行） 大名が太郎冠者を呼び出し、明日は諸客を招待するが、その引出物に末廣を出さうと思ふから、京に上つて求めて来いと命ずる。

第二節（八三頁五行—八五頁一行） 京に上つた太郎冠者は、末廣買はうと呼び歩いてみると、折悪しく一人のすりにめぐりあつた。

第三節（八五頁二行—八九頁八行） すりは太郎冠者の無智を幸ひに、古傘を末廣といつはり、高値に賣りつけ、主人から叱られた時の辯疏まで授ける。

第四節（八九頁九行—九三頁） 太郎冠者は古傘を持ち歸つて大名に渡す。大名は果して機嫌がわるい。そこですりから授けられた辯疏のはやしをはやしたると、遂に大名も釣りこまれて歌拍子となる。

#### 5 取扱上の注意

扱つたものである。この種の狂言の多くは、太郎冠者が狡智に長じてゐて、暗愚な大名を散々に愚弄する仕組になつてゐるが、「末ひろがり」では、更に「すり」なる悪人が一人ゐて、さすがの太郎冠者も、前もつてすりから散々愚弄されるのである。後になつて大名をいひくめるが、これは悉くすりから授つた作戦で、冠者の創作ではない。故にこの狂言に於ては、冠者はロボットに過ぎないで、實はすりの悪計が主要素となつてゐる。そのすりの何人にも直に看破することの出来る計略のために、冠者がうまく、と謀られるその不合理さが一つの滑稽を醸し出してゐる。この場合、讀者又は看客がすりの奸計に對して憎惡の念を起し、あざむかれる冠者に同情を催したならば、そこに滑稽の感は成立たない。どこまでも情意の發動を抑へて、事件の不合理な成行きに理智的隨伴をなす時、滑稽は成立する。

また最後に於て、太郎冠者のごまかしに對して大名が立腹する。これはこの種の狂言の多くが踏む定石である。しかし、多くのものは立腹して、「やるまいぞ〜」、と

狂言の中心となるものは「滑稽」である。「滑稽」は如何にして成立つかといへば、事件の推移に伴なふ觀者の情意が、緊張の状態から急に弛緩する場合に生ずるものである。しかも緊張から弛緩への推移の速度が速い程（即ち短時間に弛緩する程）、またその弛緩の度の大きい程（緊張が零になつてしまふ場合が最も滑稽の度が強い）滑稽の度は高められるのである。このやうに情意が緊張から弛緩への経過をとる實際の場合を考へて見ると、多くは、事件が意想外の變化をする時、或は甚だしい不釣合を起す時、甚だしい不自然を生ずる時などである。しかしこれらの場合は、その事件の推移に對する情意はどこまでも理智的に終始することが必要である。この緊張弛緩に、快・不快等の情緒を伴なへば、滑稽は起らないで、却つて同情・悲哀等の念を生ずるものである。滑稽文學が、純粹の滑稽として終始せず、同情・悲哀等の念を起させたならば、それは失敗したものと謂はねばならぬ。

ところで、この立場から「末ひろがり」を見ると、これは狂言が屢々題材とする所の暗愚な大名と太郎冠者とをか「すさりをれ」で終るのであるが、これは一旦怒つた大名が辯疏のはやしに合はせて浮かれ、すつかりよい氣持になつてしまふところに特色がある。こゝに怒るべきが怒らなかつた不合理を生じて、むしろ快い笑を催させる。この際もその愚弄されて諾々たる大名に對する憐愍や同情が起つたら、滑稽は成立たない。

狂言記の言葉は大體室町時代の俗語によつたものであるといはれる。随つて現在の標準語とはだいぶ距離がある。しかし、現在も尙地方々々で行はれてゐる方言の中には、狂言記中に用ひられてゐる言葉がたくさんに見られる。これらは言語の變遷の上に興味のある問題を提供するものである。また、文法上からも、音便や感動詞等に注意すべきものもあつて、それらの練習の材料とすることも出来る。これらの諸點に注意して本課を取扱はりたいものである。

#### 6 設問

1 この狂言の全篇に流れてゐるのは特にどういふ氣分であるか。（「末ひろがり」といふ、めでたい氣分）



- 2 特に氣持よく讀まれる點は、どこか。
- 3 この言葉のうちから、今日普通に用ひなくなつた例を挙げよ。(念なう。頼うだる者。さわたつて。おりやる。なか／＼。ころじやれ。高直。下直。萬疋。定。等)

7 釋義

【罷り出でたるは】こゝに出てまゐつたのは。

【罷り出づ】は(一)貴い所より退出すること。(二)參上すること。こゝは(二)の意。

【隠れもない大名】名聲が噴々として誰一人知らぬものもない大名の意。かうして自ら一人よがりにならばつてゐる所が、やがてうすのろの大名たる所以である。狂言に出る大名の多くは、先づこの語を以てあらはれる。

【太郎冠者】タラウクツジヤ。冠者の中で最も先輩の地位にあるもの。その次々を次郎冠者・三郎冠者などいふに對する語。

【冠者】は「クワンジヤ」の略。クワンザとも、クワザともいふ。若き召使又は家來をいふ語。

源氏物語の桐壺の卷に「くわんざの御座ひきいれのおとゞの御座、御前にあり。」

源氏物語の少女の卷に「又なくもてかしづかれて、つくろはれ入りたまへるくわざの君の御さま。」

【念なう早かつた】案外に早かつた。

【念なう】は「念なく」の音便。思ひがけなく。意外に。案外に。

【いづれもを申し入れう】あのかたや、このかたを招待いたさう。

【申し入れる】は、案内すること。招待すること。

【何とあらうぞ】どうであらうか。どんなものであらう。

【内々は】私の内々の考へでは。次の「存する」にかゝる。

【御意なうても】殿様にそんなおぼしめしがなくても。

【御意】(ギョイ)は他人の心の敬稱。おんこゝろ。おぼしめし。貴意。

【申し上げう】殿様へおすゝめ申し上げよう。

【一段でござりませう】一段とよいこととござりませう。

【一段でござりませう】まことに結構でござ

りませう。

【引出物】ヒキデモノ。饗宴の時、主人から客へ贈るおくりもの。

源氏物語の幻の卷に「御ひきでも、しな／＼の祿どもなど、になうおぼしまうけて。」

【思ひつけた】思ひついた。心づいた。考へおこした。

狂言の抜段にも「いや思ひつけた事がござる。」

【下からは上が計られぬものぢや】身分の低い者からは高貴の人の趣味や嗜好は想像のつかぬものであるとの意。下郎たる冠者輩には余の嗜好は思ひあたるまいと尊大にかまへたとともに、馬鹿大名の眞面目がある。

【末ひろがり】扇子を祝つていふ語。開けばその末が廣くひろがるのを、末(將來)がひろがる(發展する)義にあてるのである。

【大儀ながら】御苦勞ながら。

「大儀」は他人の骨折を慰勞するにいふ語。大友興廢記の新城御取立の條に「御大儀ながら柴田と同道にて。」

【上方】カミガタ。京都及びその附近の總稱。

維新前、皇居が京都にあつたため起つた語。

【さても／＼】感歎のことば。さて／＼。

【某が頼うだる者】ソレガシがタノうだるモノ。私が主君と頼みにしてゐる者。

【立板に水を流すやうに】辯舌の滔々と達者なことに譬へる語。こゝはことばによどみなくすらくと命令する意にいふ。

【ゆひつけられまする】言ひつけられます。命ぜられます。

【ゆひつけ】は「言ひつけ」の訛。

【とかう申すうちに】とやかくといつてゐるうちに。

【とかう】は「とかく」の音便。かれこれ。なにやかや。いろいろに。

狂言の生捕鈴木等に「至極の道理につめられて、とかうの返事ものたまはず。」

【都さうにござりまする】都ださうでござります。

【失念の致した】わすれてしまつた。

【失念】は、ものわすれすること。遺忘。忘却。



遺教經に「若失念者、即失諸功德。」

狂言の三本柱に「誠に失念した事がある。」

【末廣屋】 スエヒロヤ。末廣を賣る店。「末廣」は「すゑひろがり」と同じで、扇子をいふ。

【欲しいものは呼ばはる體に見えてござる】 ほしいものは呼んで買ひ取るやうすに見える。行商人が呼賣をして買手を求めてゐるのを反對に誤解したところに、太郎冠者ののろまさが遺憾なく言ひあらはされてゐる。

【洛中】 ラクチュウ。みやこの中。京の市中。京中。

太平記卷一、武家繁昌の條に「洛中に兩人の一族をすゑて、……京都の警衛に備へらる。」

【どんどんと申す程に】 大聲でどなり呼んでゐるから。

【どんど】は、どなりたてる聲、呼びたてる聲の形容。

狂言の粟田口に「なう、そこな人、何をどんどとおしやるぞ。」

【さわたつて見ませうす】 ちよつて口をかけて見ませうよ。

【さわたる】とは、小あたりにあたつて見ること。ちよつ

と口を出すこと。

狂言の茶壺に「何にはよるまい、さわたつて仕合を致さうと存する。」

【見ませうす】は「見んとす」の口語。

【のうく】 人を呼びかけるにいふ語。もしく。

謡曲の三山に「のうくあれなる御僧。」

【わつば】 かれこれとやかましくいふさま。勝手のことをいふさま。

狂言の賣笠に「田舎者やら、わつばといふ。」

【おしやるぞ】 「おつしやるぞ」の約。おつしやいますか。

【亭主】 テイシユ。(一)その家の主人。(二)をつと。良人。こゝは勿論(一)の意。

隆祐集に「彼の大納言の許より亭主云々。」

【おりやる】 「ござる」の訛つたもの。この時代の通語。

【懇に問ふでおりやる】 ていねいにお尋ねする次第でござる。

【出来合】 デキアヒ。注文を待たないで、いつでも顧客の求めに應じ得るやうに前もつてこしらへてある商品。既

製の商品。

【なかくくござる】 随分ございます。(末廣の出来合が)。

「なかくく」は、こゝでは、すゑぶん。相應にすこぶる。かなり。ことのほか。

狂言の蛭子大黒殿に「しめを張りませう。なかくくようござる。」

【見せさつしやれ】 見せて下さい。

【それに待たつしやれ】 そこでお待ち下さい。

【これを持って賣りませう】 これを持っていつて賣りませう。

【なかくく】 謡曲・狂言などのことば。いかに。さやうさやう。さなり。いふまでもなく。勿論。

狂言の酢薑に「何といふぞ、その薬づとうに系圖があるといふか。なかくくある。」

【ごろんじやれ】 ごらんさい。

【ごろんじやれ】は「ごろんじあれ」の約。「ごろんじ」は

「ごらんじ」の轉。

【いかい末廣】 大きい末廣。

「いかい」は「いかし」の口語。

狂言、どこんさうに「聞き及うだよりいかい川ぢや。」

【頼うだ人】 わがたのみにしてゐる人、即ち主人。

【地紙】 チガミ。扇などに張るため、その形に裁ち切つた厚紙。又それを扇に張つたもの。

【師走狐】 シハスギツネ。師走(陰曆十二月)頃の狐。その啼く聲が、特にこんくくと聞えるといふ。

【こんくく】 固いものに當る音の形容。大藏流狂言の末廣がりには「好い紙を以て好い天氣に張つたによつて、かくの如く弾けばこんくと致す。」

【骨磨き】 ホネミガキ。こゝは末廣の骨をすつて、すべすべするやうにみがくこと。

【信濃木賊】 シナノトクサ。信濃國から産出した木賊。

「木賊」は木賊科の多年生草本。莖の高さ二尺許り。通常叢生し、管状にして明瞭なる節を有し、枝無く、表面に平行する縦溝がある。硅酸質を含んでゐるので堅い。莖の乾かしたものは、木材・竹材・角等を磨くに用ひる。

【かなめ元締めて】 末廣のかなめのところがしつかりとし



まつて、ゆるくないものを買つて来いとの意。

「かなめ」は「要」の字をあてる。扇の骨をつづるために小孔を貫いてはめこんだくさび。鯨鬚又は金属などでこしらへる。

古今著聞集卷八に「扇のかなめをならしてつかひければ。」

【この事でござらう】 このことでもござりませう。「ござらう」と言ひきらないで、「ござらう」とおぼめかしたところ、さすがの「すり」にも一點の良心があるとでも見られぬことはない。

【戯繪】 ザレエ。たわむれに描いた繪。おどけ繪。

【打擲めさるか】 私をおなぐりなさるのか。

打擲(チャウチャク)とは、打ちたくこと。なぐること。毆打。

法華經の譬喩論品頌に「爲諸童子之所打擲、受諸苦痛。」

太平記卷廿一、天下時勢粧の條に「持ちたる紅葉の枝を奪ひ取り、散々に打擲して。」

【戯れる】 ザれる。たはむれる。ふざける。

【高直】 カウチキ。ねだんの高いこと。たかね。高價。

【下直】 (ゲチキ) の對。

庭訓往來の十一月の條に、「渡唐之船依中絶、藥種高直之間。」

甲陽軍鑑卷九上に「下直のものを高直にも申すまじ。」

【萬疋】 一匹は、錢二十五文。

【ねぎりませう】 ねだんをひかせませう。價をまけさせませう。

【ぬいてやりませう】 ひいてやりませう。まけてやりませう。

【下直】 ゲチキ。ねだんのやすいこと。「高直」の對。

前の「高直」の條を見よ。

【ようお買やるまいぞ】 買ひ得ないであらうぞとの意。賣らないといふことを、先方を主としていつた語。

【よう】は副詞「え(得)の轉。「よく」の音便なる「よう」と混ぜぬやうに。

【申しく】 マウシく。人を呼びかけることば。もしも

し。

狂言の連歌毘沙門に「申しく、夜が明けた。」

【五百ぬいて進じよ】 五百疋だけまけてあげませう。

【代物】 ダイモツ。あたひのしろ。代金。

狂言の寶笠に「それなら求めませうが、代物は何程ぞ。」

【三條の布袋屋】 サンデウのホテイヤ。

京都三條通の布袋屋といふ宿。

【主持】 シュウモチ。仕ふべき主人のある身。主人に仕へる身分。

【機嫌】 キゲン。こゝは氣持・氣合・氣分などの意。

十訓抄卷中に「腹だちたるとき、こはく制すればいよいよ怒る。……然れば機嫌をはかりて和らかに諫むべし。」

【自然とも】 こゝは「萬一にも」といふほどの意。

保元物語の新院爲義を召し給ふ條に「自然のこと出で來るときも、冠者ばらを差遣はして。」

【おちやろさうば】 ござらうならば。ありませうならば。

「おちやろ」は「ござらう」に同じ。「さらば」は「候は

ば」の略。當時の用語。それゆゑ、書簡文の「おちやろさらば」は「御座候はば」と同じ意味になる。

【お目にかけうす】 「お目にかけん」といふ意の口語。

【殿様ござりまするか】 殿様いらつしやいますか。

「殿様」とは、貴人又は主君の敬稱。徳川時代では、臣下より大名を敬つていふことば。

【きつう】 「きつく」の音便。たいそう。

【合はせをろ】 合はせをらうぞといふべきを、短く切つたのである。「合はせて見よ。」の意。

【それこそ念をつかひましたれ】 地紙のことには特別に氣をつけました。特に吟味いたしました。

【や、覺えたか】 「こりや、覺悟はよいか。」といふほどの意。この時、傘の柄で大名を突くのである。

【おのれは知らぬが定(チャウ)か】 きさまは、末廣を何物とも知らないのはたしかか。きさまはほんたうに末廣を知らぬのか。

【これへ寄り居ろ】 近う寄つて、こゝへ来い。

【古傘を買うてうせ居り】 「古傘を買つて來やがつて」とい



ふほどの意。「うせる」は人の動作を罵つていふ語。  
【某が前へは叶ふまい】 おれの前へ来ることはならぬぞとの意。

【退り居ろ】 スサリヲろ。あちらへゆけ。さがれ。

【すする】は、引き退くこと。さがること。

狂言の富士松に「何でもないこと、すすり居れ。」

【ひよんなこと】 變なこと。妙なこと。つちつまのあはぬこと。をかしたること。

【皆までにはぬきませなんだ】 一から十までだますことはしませんでした。

【はやし】 囃子。能樂・狂言・長唄・芝居などで用ひる音樂の稱。能樂では、横笛・太鼓・大つゞみ・小つゞみを用ひ、長唄では三味線をも共に合奏する。

【いえい、かさをさすならば云々】 「すり」が教へたはやしのうちた。

【かすがやんま】 春日山。奈良市春日神社の背後にある山。春日山・芳山・花山の三峯に分れ、古來神域として禁獵・禁伐を嚴守されたので、老樹鬱蒼として茂り、奈良公園

の美しい背景をなしてゐる。

【かみのちかひ】 「紙の違」に「神の誓」をかけていふ。

末廣即ち扇と古傘とは用紙に相違がある。よつて紙の違といつたのであらう。

【神の誓】は神への誓願。前の「春日山」に因んで、春日神社への誓願と見るべきであらう。

「春日神社」は官幣大社。奈良市春日野に鎮座。祭神四座。第一殿は武甕槌(タケミカヅチ)命。第二殿は經津主(フツヌシ)命。第三殿は天兒屋根(アメノコヤネ)命、第四殿は比賣(ヒメ)命。よつて世に春日四所明神ともいふ。孝徳天皇の神護景雲年中、武甕槌命を常陸の鹿島



から、經津主命を下總の香取から、天兒屋根命・比賣命を河内の枚岡(ヒラヲカ)から相次いで遷座合祀したもの。平安奠都以後藤原氏の勢力の盛大に赴くと共に當社の威靈がいや増し、朝廷の崇敬が厚くなつて、一條天皇以來歷朝中宮の行啓があつた。社殿は謂はゆる春日造で、

百五間の廻廊をめぐらし、千箇の釣燈籠を飾り、社前には二千臺の石燈籠を立て列ね、八百餘の神鹿を放養してある。境内は老樹鬱蒼、今奈良公園の一部となしてゐる。

【傘をさそなら】 傘をささうならば。傘をさすなら。

【げにもさあり】 ほんたうにさうだ。

【げにもさうよの】 ほんたうにさうだなあ。

【いかにや〜】 「こりや、どうしたのぢや」といふほどの意。

【買物にぬかれて】 買物にだまされて。

【囃物】 ハヤシモノ。前の「はやし」に同じ。その條を見よ。

曾我物語卷三、兄弟を母の制するくだりに「囃物して遊び候はん。」

【前代の曲者】 ゼンダイのクセモノ。前代未聞の曲者の略。いまままでに聞いたこともないほどのわるもの。

「曲者」はたゞしからぬ人。わるもの。

【こげ入つて】 「ころげ入つて」の略。但し、「こげ」は「焦げ」に通つて、鰻の縁語となつてゐる。

【えいやつと】 どつさり。たくさん。

【頬張つて】 ホ、バつて。むさぼり食つて。

【頬張る】は、頬の中に食物などを含み満たすこと。むさぼり食ふこと。

【ようか酒】 意味が十分にはわからぬ。「よかる酒」の意か。若しさうであるとすれば、「よい酒」といふ意に取ることが出来る。九州地方では今もなほ「よからう」といふことを「よか」といひ、よい酒を「よか酒」といふ。これは多分「よかる酒」の略であらう。

【何かの事はいるまい】 お前の買物の失敗について何やかやと心配することはいるまい、

すつかり囃につりこまれて機嫌が直つたのである。

【おれにもかさをさせやれ】 おれにも傘をさしかけてくれ。

【ひやろ〜ほつばい云々】 笛の譜を文字にうつしたものの。

8 挿 圖

末ひろがり

狂言末ひろがりの場面。狂言記所載の挿圖を轉載した。



9 参考

狂言のついで

◇狂言とは何ぞ 能樂の幕の間を繋ぐために演ずる滑稽的の所作である。特に「間の狂言」とは、能樂の一幕の途中で、役者が衣裳がへする時に演ずるものをいふ。一般に狂言の名稱は、戲言に近い事を意味するものである。後世は轉じて單に芝居の事となり、今も歌舞伎狂言或は狂言外題と稱する。しかし「狂言」又は「能狂言」といふときは、要するに、能の眞面目なのに對して、變化あらしめるために、その間々にかしい事を仕組んで、人を笑はせる様にしたものを指すのである。

今、猿樂傳記の記する所を引くと、左のやうである。

狂言の起り詳かならず。猿樂の根元たる「とう／＼たらり」の舞（翁の事なり）祝言終りて、その供して行きたる者（千歳の事）その後より出で、目出度と言ふ事をいひ囃すに、その儀後世に、色の黒き尉三番叟とて取繕ひたる者にて、をかしき風俗を笑ふを歡びの至りとす。これを古人は「をかし」と呼びて、萬歳の袋持に等し。猿樂起りて能となり、最初の古代の翁、渡を舞ふを以て、そのをかしみを勤むる者、狂言師というて、能の内の答（所謂アシ

ラヒ）を任り、中入の時、間の延引の處を結ぶ（所謂アヒ）。是ばかりにしては見立なしと、今の狂言を仕始め、物好きにつき、玄法師狂言の詞を百六十番作りつゞせたりと云々。」

但し玄慧の作とは疑はしい。狂言の文句は、役者が發音し、演述し、問答し、會話するため書き傳へられたものであるので、文章じみた語氣は加はつてゐない。「故に太郎冠者あるかやい」は「あ御前に」といへば、大名主従の應答を著音器から引き出して聴くやうなものである。その内容は、世を諷し時を諷るの意もあるので、一種の諷刺文學でもある。

◇謡曲と比較 して見ると、狂言は悉く當時の俗語を用ひて毫も古語・成句等を用ひない。即ち謡曲の保守的なのに對して極めて進歩的である。

取材の點を見るも、狂言は當時の日常の小出來事である。謡曲が歴史上の英雄・豪傑の興亡等を材料とするのと趣を異にする。

◇狂言の分類 狂言は約二百番ある。作者・時代は共に一定しがたない。今これら大別すると、左のやうになる。

一、祝賀に關するもの。

二、神鬼・閻魔等に關するもの。（祝賀に近い）

三、片輪に關するもの。

四、僧侶に關するもの。（破戒無慙の者のみである）

五、山伏に關するもの。（似而非山伏である）

六、掣取。夫婦に關するもの。（禮儀作法を知らぬ者である）

七、遊興に關するもの。（連歌・茶の湯等、當時の遊興に關する失敗談）

八、盗人に關するもの。（無邪氣なもの）

九、大名に關するもの。（大名を笑種としたもの）

十、謡曲に擬したもの。（謡曲を滑稽化したもの）

◇狂言の流派 狂言は謡曲の如く講で傳へるものでなく、又能樂の如く一手一足を曲節に合はせるものでない。したがつて、記録以外に、實地は實地として自ら活きた處がなくはならぬ。これが即ち記録と實地との少差のある所以で、又流儀の分れた原因である。

流儀には鶯流・和泉流・大藏流の三流がある。

2 芳賀矢一の狂言についての解説と批評

狂言の作者及び製作の年等の不明なるはなほ謡曲の如し、全篇一律にして大抵同一模型の踏襲なること、一時の製作に非ずして時代を逐うて漸次に増加せしならんと想像し得べきこと、亦相同じ。而してその國民間に流布せる傳説を本とせるに於ても

亦相似たり。但し謡曲は英雄・高僧等の偉人傳説に基づけるもの多く、狂言は單純なる實話を資料とせるを相違の點とす。即ち謡曲はザラゲを根本とし、狂言はメルヘンを基礎とせる觀あり。狂言已に能樂の附庸たるを甘んずるや、謡曲に擬して滑稽を仕組みたるもの尠からず。通圓の如き、老武者の如き、若市の如き、その適例といはんか。通圓は宇治の茶坊主なれば、頼政に似せて作りたるなり。老武者も若市も修羅能に擬して作れるなり。一種のパロディなり。「このわたりの愚僧なり」と名告らせ、「貝をも持たぬ山伏の道に嘘を吹かうよ。」といふ如き、謡曲の摸倣に非ざるはなし、舞容も科白も謡曲に於ては尊嚴莊重の感を惹起すを主眼とし、狂言に於ては輕快飄逸を目的とす。この對照ありて能樂の全美をなすなり。これその相交代して一日の歡を悉さしむる所以なり。

謡曲に通ざる特性は説教なり、教訓なり。佛陀神明に關し、歌道故實に關し、その他一草一木の由來緣起をも敘べて、街學的に説明的なるは前に詳論したり。狂言はむしろこれを知らざるを以て滑稽とす。これを知らざるべからざる人にして知らざるを以て滑稽となせるなり。大名にして古歌朗詠の心得もなく、連歌茶道の嗜もなく、武道をも知らぬは甚だしく不似合の事として笑ふに足るなり。大名知らずして冠者却つてこれを知り、亭主知らずして女房却つてこれを知るといふ顛倒は即ち可笑の源なり。僧侶の佛法を知らざるが如きも同じ。萩大名・岡太夫・秀句大名・船ふな・あかゞり・鷄立の江・松ゆづり葉・連歌百姓・忠



度の類皆これなり。舞取に關するものは、すべて舞の儀式を知らざるを滑稽とし、その類多し。換言すれば、一方に於ては高貴なるものの無學を笑ひ一方に於ては却つて匹夫下腐のこれを知るを以て滑稽とし、物の争を決するや、一首の歌を以てすることあり。即ち裏面より當時の術學的氣風を認むべきなり。儀式を貴び、故實を重んじたる風は、舞取狂言の外、鱸鮑丁等これを證し、隨つて系圖立てのやかましきを示すものは酢漿・牛馬・鞆鼓砲録・音樂煉等いづれも系圖由来を説きて是非曲直を定むる標準とす。祕傳秘事を重んじたるは文相撲の如き、栗田口の如き、料理舞の如きを以てこれを知るべし。これらはすべて近古文學の通有性にして、狂言はこれらを以てすべて滑稽の資料となせり。煩瑣たる歌學、故實、一切の秘事秘傳は皆嘲笑の材料に取られたるなり。この見方よりすれば、狂言は正しく一種の諷刺文學の性質を帯びたりといふべし。滑稽と諷刺とはもとより甚だ相近きものなればなり。

無學・無風流・無藝・無智・健忘・臆病等は大名の特性としてあらはされ、横着・怠惰・狡猾・辯口等は冠者の常態として示さる。僧侶は破戒にして多慾・無學・偏狭なり。山伏も亦加持の効驗などあり得べくもあらず。夫は怠惰にして直に離縁狀をさし付くるを常とし、婦は嫉妬にして忽ち家に逃げ歸る我儘者ばかりなり。目代の壓制、ごまの灰の狡猾等、すべて當時の社會上のあらゆる人物、日常の小事件を挙げ來つて、小詭計を以て敵手を陥れんとして、却つて發見せられて成し遂げざるを以て終局とす。詭計にして成就せらるれば滑稽とならざればなり。實に普通日

當の人物のみならず、古來の傳説を利用して、七福神も地藏も閻魔も鬼も雷も、皆これを滑稽化して茶化し去れり。これを諸曲の古英雄・古美人を以て重に忠義・孝貞・節義等を敘し、佛者の緣起・効驗・奇蹟を挙げたるものに比較すれば、眞に好箇の對照にあらずや。(中略)

狂言の滑稽はあまり誇大にして事實に遠し。事實の誇大は滑稽としては最も容易き滑稽なり。蚊を撲つに大長刀を擔ぎ出さば、人誰かこれを笑はざらん。狂言の滑稽は率ねこの類なり。發達せるコメディ(喜劇)に於ては眞實なる平生の舉動行作の行はるゝ間に好笑の材料を發見し來らざるべからず。眞面目に戀愛し、眞面目に宗教に熱中する側に於て滑稽なる事件は生ぜざるべからず。狂言のは最初より滑稽にして、觀者ははじめより滑稽を以てこれを迎ふ。故に輕飄にして莊重ならず。諷刺も亦深酷を缺けりといふべし。(國文學史概論)

# 一七 夏

## 1 解題

貝原益軒翁の「樂訓」の中から夏の推移を敘する一章を採つた。「樂訓」は益軒十訓の一で、享樂に對する教訓文字とでもいふべきものである。益軒が寶永七年(二三七〇)八十一歳の時の作で、總論、節序・讀書・後編の四編から成つてゐる。文體は本文で見るとほり、平明な和漢混濁文である。益軒十訓とは、貝原益軒の作にかゝる左の教訓書の總稱である。

養生訓	家道訓
五常訓	大和俗訓
文訓	武訓
樂訓	初學訓
和俗童子訓	君子訓

## 2 作者

貝原益軒 カヒバラ エキケン。  
筑前黒田侯の儒臣。名は篤信、字け子誠。別號は損軒。明暦年間藩

# 貝原益軒



貝原益軒の肖像

命を以て京都に出て、松永尺五・木下順庵・山崎闇齋等に學び、博識を以て稱せられた。年十九にして醫術に志し、柔軒と改め、久兵衛と稱した。已にして朱學に歸し、世道人心の輔導に力め、著述を事とした。又物産學を修め、農藝の諸書を廣めた。好んで奇異名勝を跋渉し、その足跡は天下に遍かつた。老年に至るも尙嬰孺として壯者を凌ぎ、藩主三世に歴事すること凡そ四十年、禮遇優渥累に食邑を加へられた。元祿年間致仕して京都に住した。四方の名士の交を通ずる者が絶えなかつた。されど一日も述作の業を廢せず、身を持するに儉素と攝養とを以てした。その言行一として模範たらざるはない。正徳四年(二三七四)八月二十七日、病んで郷里に卒した。年八十五。明治四十四年六月、特旨を以て正四位を追贈せられた。著書數百種、そのおもなものは、前に述べた「十訓」の外左の諸書で、いづれも、今「益軒全集」の中に收められてゐる。



自娛集	慎思錄	日本釋名
扶桑紀勝	大疑錄	女大學
和州巡覽記	諸州巡覽記	本草綱目
大和本草	小學備考	近思錄備考

### 3 編纂の用意

時は最早五月雨も過ぎて、やゝ本格的の夏期に入る頃である。よつて季節に即したこの文を讀ましめて、夏の推移、並にそれに對する自然界の變遷を知らしめんことを期した。

文中には、この程度の生徒にはやゝ縁遠い語もあるが、しかし、徳川時代の名儒の筆に成る流暢な文でもあり、又上級學校への入學試験問題が往々この種の文から選ばれる傾向もあるから、かゝる一課をこゝに採録したことも、強ち無意味ではなからうと信ずる。

### 4 要旨

夏衣に更へた時分は、物毎に春とは異なる趣がめでたい。緑陰は閑人が花の下よりも好むところ。時鳥の初音は固より、折につけて、いつもその聲が稱へられる。卯の花

は月の名に負うて、この頃の美を専らにしてゐるが、一體卯月は遊行するによく、園の内を眺めるによい。やがて阜月になると、たれこめて日數ふるのがわびしい。

夏の深み行くに連れて、本草の心のまゝに生ひ繁るのが嬉しい。花橋の夜風、早苗とる田家、螢の眺もよろしい。また高嶺の青いのを見るのも心地がよい。水無月は、池の蓮、樹陰の清泉、夜半の水月、遣水の音など、水に縁あるものすべてよろしく、夕立と朝けの風とは殊に涼しくて心ゆくものである。

### 5 概説

第一節(九四頁—九六頁五行) 卯月の景趣を主として寫し、阜月にも及ぶ。

第二節(九六頁七行—九七頁末行) 深みゆく夏の風色・情趣を描く。

第三節(九八頁—九九頁一行) 水無月の頃の清涼味を記す。

### 6 取扱上の注意

文の形の上の古みからは、本居宣長の「残る御影」など

と比較しつゝ取扱はるべきであらう。引歌や故事などによつて相當にむづかしいところもあるので、内容・形式ともに精讀的に吟味せられねばならぬ。しかし大體作者の益軒は無理な書き方をしない人であるから、勉強して調べれば讀める筈だといふ自覺を以て取りかゝらせたい。

相馬御風の「惜春」、土岐善麿の「五月の讚美」、萩原井泉水の「さみだれの頃」、阿部次郎の「雜草」など、何れも自然から取材してゐる點が本文と通じてゐる。唯その觀察の角度・深さ、描寫の基調・手法が各、異なる。或は以上の諸課の何れかと適宜比較して、その間の異同、殊に興味の變遷などを考へさせるも面白からう。

五月雨の陰鬱でじめ／＼したところは、とかくこの作者は好まなかつたらしい。その好まぬところを、又人によつては五月雨の趣味として興深く見る例もあるが、それはともかくとして、その他の夏の景は、卯月・水無月その折々につけて、やはりそれ／＼の眞趣を捉へてゐて、觀察も細かく、描寫の筆も行届いてゐると思ふ。殊に本草の繁茂を喜んでゐるのは、「惜春」や、「五月の讚美」や、

「雜草」の作者のねらひどころと共通してゐるもので、その描寫の筆が古今を別たしめてゐるに過ぎない。

水無月の頃の涼味は、水と風とに取材し、簡潔の筆を以て敘し去り、敘し來るところ、最も捨てがたい。

### 7 設問

1 趣味の文章として、「惜春」、「五月の讚美」、「五月雨の頃」などに比較して、どんな點に特色を感じるか。

イ、形式の上から、即ち言語・文章の上からはどうか。

ロ、内容の上からはどうか。

ハ、或は物の見方・感じ方・捉へ方の浅い深いと言ふ點からはどうか。

2 かやうな傳統的趣味の文章に於ける形式上の一特色は何か。(引歌や故事が多いこと)

3 第二節の草木の繁茂を喜んでゐるところは、「五月の讚美」の課の何れの節と比較すべきであるか。

4 第三節の「水無月の頃」の條では、何が最もよく描かれてゐるか。

5 次の一節を口語に譯して見よ。



惜しめどもとまらぬ春すでに去りぬれば、よばぬにきたる夏衣のうら珍しく、今めかしう改れるころほひ、おほかたの空のけしき心地上げなるに、青葉の梢若やかに、物ごとに春に立ちかはりて、又世異なる有様なるもいとなむめでたき。

8 釋義

【惜しめども云々】新古今集、夏、素性法師の歌「惜しめどもとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな。」の中の一句を取つてかやうに書き出したのである。この歌の「あるものを」は、あるのに。「いはぬにきたる」は、こいといはぬのにやつてくること。「きたる」は「来る」に「着たる」をかけた語。「夏衣」は夏に着る衣。但しこの歌の上で旨とすべきは夏の一語で、衣は添へた語に過ぎない。「来る」に「着たる」をかけたから「夏」といふべき所を「夏衣」といつて、夏の来たといふ一首の上に夏衣を着たといふけしきを持たせたのである。一首の意は、「いつまでも立ち去らないでくれよばよ」と思つてゐるのに、さつさと立ち去つてとまらぬ春さへ

あるのに、来いともいはぬのにどしどしやつてくる夏よなあ。」はじめに「惜しめどもとまらぬ」といつて、次に「いはぬにきたる」といひ對へたことばづかひから、きたる夏衣とあやなして、夏が来たといふ一首の上に、夏衣を着たといふけしきを添へたなど、なか／＼氣のきいた歌といふべきである。

作者素性法師は平安時代の歌僧。三十六歌仙の一。俗姓は良岑、名は玄利(ハルトシ)。僧正通昭の子。清和天皇に仕へて左近衛將監になつた。後出家して雲林院に住し、権律師に任ぜられ、ついで石上(イソノカミ)の良因院に住した。

【よばぬにきたる夏衣のうら珍しく】「お出でなさいと呼びもせぬのに、やつて来た夏、その夏に着るきものがかにもめづらしく感ぜられて。」よばぬに云々は、前の歌の「いはぬに云々」を少しひかへただけで、意味はちがはぬ。「うら」は、前をうけて、夏衣の裏に、「うら珍し」の「うら」をいひかけたもの。「うら珍し」は、心にめづらしくおもふこと。

古今集の秋上に「わがせが衣の裾をふきかへしうら珍しき秋の初風」

【今めかしう改まれるころほひ】あたりのけしきが、ちやうど今の季節にあふやうにあらたまつた頃。

【今めかし】は今めくやうなさま。當世風なさま。今風なさま。

宇津保物語の樓上の巻の下に「身の上めでたく、今めかしくおはしますを見奉りたまひて。」

【ころほひ】は、頃。時。時節。伊勢物語に「時はみなづきのつごもり、いと暑きころほひに。」

【おほかたの空のけしき】おしなべての空のやうす。

【おほかた】は大方の字を宛てる。おしなべて。そうたい。一般。

【物ごとに春に立ちかはりて】何もかも春とはかはつて。

【物ごと】は物毎。それ／＼の事物。萬事。こと／＼。内務内侍日記に「立ちさわぐ水鳥のけしき、中島の松の木末、物ごとに面白きこと限りなし。」

【立ちかはる】は、かはること。變化すること。

萬葉集卷六に「立ちかはり古き都となりぬれば道のしほ草長く生ひにけり。」

【世異なる有様】世界がちがつたやうな有様。面目の全く一新せる有様を形容していふ。

【いとなむめでたき】たいそう結構である。「なむ」は物を指定する係の助詞。「めでたき」は第一類の形容詞「めでたし」の連體形。上の「なむ」の結。

【綠陰晝寂を生ず】リョクインチウセキをシャウす。青葉のかけにたゝすめば、晝でも、しんとするといふほどの意。出典は未詳。

【綠陰】は綠樹のかけ。青葉のかけ。白居易の詩に「眠松愛綠陰。」

【わびしからず】ものさびしくない。心細くない。後撰集の冬に「霰ふるみ山の里のわびしきは來てはやすく訪ふ人ぞなき」

【閑談にふける人】閑談にうつゝをぬかす人。「閑談」は、しづかに物語ること。又、ひまにまかせて四



方山の談をすること。

章莊の詩に「前年同醉武陵亭。絶倒閑談坐待明。」

【繁花】 ハンク。すきまなく密集して咲いてゐる花。

【折待ちえたる杜鵑の初音】 よい機会を待ち得て、今こそと、一聲高く名のつた杜鵑の初音。

【杜鵑】(ホト、ギス)は杜鵑科の鳥。翼長十六糎位。頭上より背部一面は灰黒色、胸及び腹部は白色で、これに多数の細い横黒條がある。翼は褐色、尾は黒色。嘴の基部は黄色、末端はやゝ黒味を帯び、脚は黄色である。晩春我が國に來り、初秋南方に去る。古來歌人・文人に愛せられ、又夜間鳴くので知られてゐる。

時鳥・杜宇・子規・不如歸・蜀魂なども書く。

【初音】(ハツネ)は、(一)新年にはじめて鳴く聲。(二)鳥獸や蟲類がその季節々々になつて、はじめて鳴く聲。ここは(二)の意。はつごゑ。

古今集、夏に「聞きたびにめづらしければほととぎすいつも初音のこゝちこそすれ」

【心地ぞすなる】 こゝろもちがするはい。「すなる」の「す」はさ行變格動詞「す」の終止形。これに詠歎の助動詞「なり」の連體形なる「なる」(上の「ぞ」の係に對する結)が

そはつてゐる。これを動詞・形容詞の連體形に添はる指定の「なり」の連體形なる「なる」と混同させぬやうに。

【もろこし人】 唐土の人。

【もろこし】は、古昔我が國で支那を呼んだ稱。

萬葉集卷五に「唐(モロコシ)の、遠きさかひ、につかはされ、……。」

【杜鵑の聲聞くことを悲しめども】

蜀王本紀に「鼈靈死。其屍逆江而流至蜀。王杜宇以爲相。宇自以德不及靈、傳位而去。其魄化爲鳥。因名此。亦曰杜鵑。即望帝也。」

華陽志に「望帝禪位於開明、升西山隱焉。時適二月、子規鳥鳴。故蜀人悲鳥鳴也。」

【夜もすがら】 暮方より曉まで。夜どほし。終夜。通夜。

よすがら。

履伸紀に「通夜(ヨモスガラ)火不滅。」

土佐日記に「よもすがら雨やます。」

【空もとどろに】 空もひびきわたる程に。大空も鳴動するほどに。

「とどろ」は、ひびきわたるさま。なりひびくさま。鳴動するさま。

萬葉集卷十八に「さぶる子がいつきし殿に鈴かけぬはゆまくだれり里もとどろに」

この「空もとどろに」は、頭註に見えてゐる紀貫之の歌の一句を取り用ひたもの。この歌は古今集、夏に「郭公の鳴くを聞いてよめる」と詞書して見えてゐる。

「空も」は、空さへも。「夜たど」は、夜どほし。

一首の意は「梅雨の空もとどろと鳴りひびくほどに、時鳥は何事をういと思つてか、あのやうに、夜どほし泣くのであらうか。」

【あなかまとは思はず】 あゝやかましいとは思はぬ。

「あな」は、感動詞。あゝ。「かま」は、「かまし」又は「かまかまし」の略。かまびすしいこと。やかましいこと。

枕草子卷一に「心得て笑ふを、あなかまかまと招きかくれど。」

【多からぬ處は】 杜鵑の鳴聲の多くきこえぬところは。

【今一聲だに聞かまほし】 もう一聲だけでもききたいもの

だ。

【今一聲】は頭註にある源公忠の歌の一句を取つたもの。

この歌は、拾遺集の夏に「北宮のもぎの屏風に、源公忠朝臣」として見えてゐる。

「行きやらで」は「行きもえやらで」の意。よう行かないで。

一首の意は「時鳥の聲をもう一度聞きたさに、行きもえやらず、山路で日をくらししたことよ。」

源公忠は歌人。大藏卿國紀の二男。宇多天皇の皇孫。延暦十一年昇殿を許された。後、辨官に進み、滋野井辨と稱した。

【鳴行く方も待ちなむ】 拾遺愚草上、詠三百首和歌(初學百首)の「夏十首」の内に「過ぎぬるを恨みなはてじほととぎす鳴きゆくかたに人も待つらむ」とあるのを文中に取り入れたのである。

一首の意は「自分が折角心ゆくまで鳴かうと思つてゐたのに、時鳥がこのあたりを通り過ぎてしまつたのを、全く恨みきつてはしまふまい。その鳴いて行く方面にも多分人がこがれて、その聲を待つてゐるであらう。それゆ



を。自分は、時鳥の聲を獨占しようとは思ふまい。」

【過行くも更に恨むべからず】 杜鵑が鳴き過ぎてしまつても、更にさんねんとはおもはぬ。

「恨むべからず」は「恨むべくもあらず」の約。よつて前のやうな意となる。「恨んではならぬ」といふ意味に解する生徒があるであらうから、注意していただきたい。

【卯の花】 うつぎの花。



【うつぎ】は虎耳草(ユキノシタ)科の落葉灌木。高さ二米許。老木は三米位となり、成長が遅い。幹は中空で、葉は表裏とも粗糲、枝端に白色の數花を總體につける。材は緻密硬堅で、木釘・器具等に用ひられ、又心材の色が美しいから、寄木細工の用材として珍重される。

【垣根の雪にまがへるも】 卯の花が、垣根につもつた雪とまぎれて區別しがたくなつてゐるのも。

「まがふ」は、まぎれて區別しがたいこと。萬葉集卷五に「梅の花散りまがひたる岡びにはうぐひす鳴くも春かたまけて。」

【ひとりこの月の名を負ひて】 四月の異稱を卯の花月、又卯月といふから、かやうにいひ出でたのである。

【美を専らにす】 美を専有する。美を自分がひとりじめにする。

【卯月】 ウヅキ。陰曆四月の稱。前の「ひとりこの月の名を負ひて」参照。

【清く和か】 氣候の清らかにしてのどかなこと。

爾雅に「四月朔、爲清和節。」

謝朓の詩に「麥候始清和。」

【餘寒】 立春後の寒さ。寒(カン)あけ後のさむさ。

【日いや永くして】 日がいよいよ長くなつて。

「いや」はいよいよ。もつとも。ます／＼。

萬葉集卷五に「人ごとに折りかさしつゝ遊べどもいやめづらしき梅の花かも」

【朝まだき】 「朝未し」の義。朝、夜のまだあけぬ時。早朝。

拾遺集の春に「朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」

【日々に涉りて】 毎日園内をあちこち歩きまはつて。

こゝは頭註にあるやうに、晉の陶淵明の歸去來辭の中の一節を取り來つたものである。本文左の通り。

園日涉以成趣、門雖設而常關。

【見所】 ミドコロ。見るべきところ。見るべきねうち。見る價值。

源氏物語の少女の卷に「いと若やかに、つきせぬ御有様の見どころ多かるに、」

【各、その趣を成せるは】 それ／＼そのおもしろみを發揮してゐるのは。

「趣」は、物事についての感興。雅致。趣味。

【生ける類】 イけるタゲヒ。いきもの。生類。

列子に「天地萬物、與我皆生類也。」

梁書の武帝紀に「勅大醫、不得以生類爲藥。」

【いぶかしみなくさばれぬ】 何の疑もなく親しまれる。無條件で親しみなされる。

「いぶかしみ」はうたがはしいこと。不審なこと。

萬葉集卷十二に「あひ見まくほしけくすれば君よりも我ぞまさりていぶかしみする」

「なづさふ」はなつくこと。なじむこと。馴れ添ふこと。親昵すること。

源氏物語の、桐壺の卷に「常にまゐらまほしう、なづさひ見奉らばやおほえ給ふ。」

【晴れやか】 晴れわたつたさま。はれ／＼しいさま。

基佐集に「闇の夜もはれやかなれや垣ほなる卯の花月の照るにまかせて」

【臯月】 サツキ。早月とも書く。陰曆五月。早苗月の略か。萬葉集卷十七に「わがせこが國へましなばほとゝぎす鳴かむ臯月はさぶしけむかも」

【さいつ頃に引きかへて】 先頃よりは全く反對で。

「さいつ頃」は「さきつ頃」の音便。さきごろ。

枕草子卷十に「さいつごろ賀茂にまうづとて。」

【引きかふ】は相反すること。うらはらになること。あべこべになること。



榮華物語の玉村菊の巻に「年毎の菖蒲の根にもひきかへてこはたぐひなの長きためしや」

【五月雨】 サミダレ。陰曆五月頃降る長雨。さつきあめ。梅雨。つゆ。

古今集の夏に「さみだれに物おもひをれば時鳥夜ぶかく鳴きていづちゆくらむ」

【なるかみ】 鳴神。かみなり。雷鳴。

萬葉集卷十九に「天雲をほろに踏みわたし鳴神も今日にまさりてこしかけめやも」

【おどろくしくて】 おどろくべきさままで。仰山で。

竹取物語に「あななひにおどろくしく二十人の人のぼりてはべれば、あれて、寄りまうでこすなり。」

【曇らはしく】 どんよりと曇つたやうなやうすで。

狭衣物語卷四、中に「まがきの霧のいとゞひまなく立ちわたりて、月影もなか／＼曇らはしくなりぬれば。」

【物のあやめも知らず】 物事の差別がよくわからぬこと。

【あやめ】は文目。條理。模様。區別。あいろ。

宇津保物語の樓上の巻の上に「見苦しう、まだあやめ

も見えざりしを。」

【たれこめて】 「垂籠めて」の義。簾又は帳帷(トバリ)などをおろし垂れて、家のうちにひつこもつて。

古今六帖卷六に「たれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり」

【わびし】 「詫し」の字をあてる。ものさびしいこと。心さびしいこと。

伊勢物語に「皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。」

後撰集の冬に「霞ふるみ山の里のわびしきは来てたはやすく訪ふ人ぞなき」

【やうく】 「やうやく」の音便。だんく。しだいに。

枕草子卷一に「春は、曙やうく白くなりゆく山際少しあかりて。」

【ひたすらに】 「只管に」の字をあてる。たゞそればかりなるにいふ語。ひとむきに。ひたぶるに。切に。一途に。一概に。

【夏木立】 ナツコダチ。夏の頃の生ひ茂つた木立。

「木立」は、生ひ立つた木。たちき。

玉葉集の夏に「月影のもるかと思えて夏木立しげれる庭にさける卵の花」

【をさく】 大方。大抵。あまり。まんざら。下に打消の語を添へる。

宇津保物語の俊蔭の巻に「そこにあつてもものたまへど、をさをさいらへもせず。」

【ありとしある草木ごとに】 あらゆる草木が、どれもこれも皆。

「ありとしある」は「ありとある」と「あ」との間に強辭なる「し」を挿入して語の意味をつよめたもの。

「生きとし生く」など、他にも用例がある。

【うちはへて】 きりもなく。際限もなく。押しなべて。

枕草子卷五に「雨のうちには降る頃。」

【眺】 ナガメ。見はらしのけしき。眺望。

謡曲の嵐山に「ながめたへなる景色かな。」

【八千草に】 ヤチクサに。いろ／＼さま／＼に。種々雑多に。

「八千草」は、(一)あまたの草。(二)あまたの種類(八千種)種々雑多。

こゝは(二)の意。

萬葉集卷廿に「春のはじめは、やちくさに、花咲きにほひ。……。」

【なづさひし】 馴れ親しんだ。前の「なづさはれぬ」参照。

【前栽】 センザイ。(一)庭前に植ゑこんだ草木。(主として草にいふ。)(二)草をうるこんだ庭園。

こゝは(二)の意。

伊勢物語に「人の前栽に菊うゑけるに。」

【所得顔に】 トコロエガホに。よいところに出くはしたやうなやうすで。得意さうに。

源氏物語の橋姫の巻に「軒のしのぶ、所得顔に青みわたれる。」

【心に任せて】 こゝろのまゝに。こゝろまかせに。おもふがまゝに。

【昔覺ゆる花橋の薫れる夜】 その花の香をかぐと昔の人などが思ひだされてなつかしくなるといはれる花橋がかん



ばしくかをつてゐる夜。こゝは頭註の歌によつて書きなしたのである。

頭註の歌は、古今集、夏に「よみ人しらず」として見えてゐる。「花たちばな」は橘を四五月の交、花咲く時につけていふとも、又、橘の一種で、勝れて花の美しいものをいふともいふ。橘は蜜柑・金柑・橙・柚・柑子の類をすべていふ。一首の意は、「五月を待つて咲く花橘の香をかぐと、今もわすれられぬ昔なじみの人の袖の香がするはい。」

【追風】 オヒカゼ。(一)追ひさまに、うしろより吹き来る風。(二)船を吹き送る風。おひて。(三)吹き入る風。四衣などの香をつたへ来る風。こゝは(三)の意。

伊勢集に「おひ風のわが宿にしも吹きこすばるながら空の花と見ましや」

【早苗取る頃】 苗代から早苗を取つて、これを田に植ゑる頃。田植時。

「早苗(サナヘ)は苗代から田にうつしうゑる頃の稲の苗古今集の秋上に「きのふこそ早稲とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く」

【田家】 むなかの家。むなか。田舎。魏志の夏侯尚傳に「汝田家子、今仕至二千石。物太過不祥。」

【遣水】 ヤリミヅ。庭などに水を導いてながしやるもの。庭園に造る流水。



宇津保物語の國讓の卷の中に「やり水に瀧おとし岩たてたるさま。」【音もせすだく】 音もしないで、群れ集まる。「すだく」は群がること。集ること。群集すること。

萬葉集卷十九に「大君は神にしませば水鳥のすだくみ沼を都となしつ」

頭註にある「音もせで」の歌は、後拾遺集の夏に「螢をよみ侍りける 源重之」として見えてゐる。「おもひにもゆる」の「ひ」には、火の意味をも持たせてあ

る。

「あはれ」は、あはれむべきこと。いたはしいこと。ふびん。愍然。

一首の意は「ひつそりと音一つたてないで、じつとおもひといふ火にもえこがれてゐる夏の螢こそは、秋の夕暮悲しさうに野原で鳴きたててゐるくさぐさの蟲よりも、かへつて一段とふびんにおもはれるはい。」

源重之は歌人。三十六歌仙の一。兼忠の甥、兼信の子。村上。冷泉・圓融・花山・一條の五帝に歴仕し、從五位上、相模權守に至つた。長保二年(一六六〇)陸奥に卒した。

【青みわたりたる高き峯】 一面に青々と茂てゐる高い峯。「青みわたる」は、一面に青くなること。偏に青むこと。

源氏物語の紅葉賀の卷に「おまへの前枝の何となく青みわたれる中に、とこ夏の花やかに咲きいでたるを。」

【雲の外】 はるかに高い天空。きはめてはるかな大空。雲外。雲表。

張衡の天象賦に「動則飛躍於雲外。」

【飽くまで】 いやになるまで。とどのつまりまで。はてのはてまで。

萬葉集卷十七に「都べに立つ日近づくあくまでにあひ見て行かなこふる日多けむ。」

宇津保物語の國讓上に「御手習あくまでせさせ給ふ。」

【白樂天】 ハクラクテン。名は居易。太原の人。支那唐代の大詩人。徳宗の貞元中の進士。左拾遺に任ぜられた。後、江州司馬に貶せられたが、又召還されて刑部尚書に至つた。晩年詩酒に放意して醉吟先生と號し、又香山にゐたので香山居士ともいつた、その詩は流麗にして平易、上下を通じて愛誦せられ、我が平安朝の文學にも多大の影響を及した。會昌四年(一五〇七)卒。年七十五。右僕射を贈られ、謚して文といつた。

【眼を放にして青山を見る】 マナコをホシイマ、にしてセイザンをミル。目を自由自在にはたらかせて、青々たる山を見る。

【青山】 は、樹木などの生ひしげつて青々たる山。青峯。青嶺。

李白の詩に「青山横北郭、白水遶東城。」

【水無月】 ミナヅキ。陰曆六月の略稱。



萬葉集卷三に「富士のねにふりおける雪はみなづきのもちにけぬればその夜降りけり」

【端居の風】 ハシキのカゼ。家のはし近く吹く風。

「端居」は、家のはし近く出てゐること。轉じて、家のえんはな。

地下歌合に「せき入るゝ庭のやり水袖はえてはしゝに夏をおくる宿かな」

【したしく】 こゝは、なつかしく、といふほどの意。

【圓座】 ワラフダ。藁・菅・藁などで渦のやうに圓く編んだ座褥(しとね)。ゑんざ。

伊勢物語に「瀧の上にわらふだの大ききしてさし出でたる石あり。」

【池の心ふかく】 池の中心のあたり、即ち中央部が深くなつてゐること。

【蓮葉(ハチスバ)の濁にしますして】 蓮の葉が、池のこり水に浸んで、よごれないで。

この句は、古今集の夏に「はちすの露を見てよめる、僧正遍昭」と詞書して見えてゐる。

「はちす葉」は、蓮の葉。

一首の意は「蓮は泥中に生ひたちながら、その泥水の濁にも染まぬほどの潔白な心を以て、何故に、あのやうに葉の露を玉に見せて、人を欺くのであらうか。」

「僧正遍昭」は、俗名良岑宗貞。平安朝初期の歌僧。六歌仙の一。桓武天皇の皇子安世の子。仁明天皇の朝、藏人頭・左近衛少將となつたが、天皇の崩後比叡山に登つて剃髪した。かくて圓仁、圓珍に天台學を受け、京都の雲林院に住んだ。後山科の花山に元慶寺を創めてその座主となり、僧正に任ぜられた。世に花山僧正・中院僧正・良少將といふ。寛平二年(一五五〇)寂。年七十五。(或はいふ七十六。)

【花ならで云々】 蓮の葉が、花でもないのに、夕風に吹かれてかんばしいにほひをあたり一面に放つてゐることすらも、他の草にちがつてゐる。

「だにも」は、輕きを擧げて、他の重きを言外に知らしめるに用ひる語。ですら。でも。こればかり。せめてこれなりとも。

源氏物語帝木の卷に「はかなき事だにかくこそ侍れ。」

【異草】(コトグサ)は、異なる草。他の草。謡曲の安達原に「異草もまじる茅筵。」

【殊に花の笑みの唇開けたるは】 「とりわけ蓮の花が美しく咲いてゐるのは」といふ意を、おもしろく言ひ出でたのである。

【處せきまで薫りみちて】 場所がせまくおもはれるほど薫りがみちわたつて。

「處せし」は「處狭し」で、場所がせまいこと。場所が狭く感ぜられるほどなること。

源氏物語の桐壺の卷に「どんじき、祿のからひつども、所せきまで。」

【涼を逐うて】 涼しいところを、それからそれとたづねていつて。

【樹陰にやすらひ】 樹木のかげに休息し。

「やすらふ」は、休むこと。息ふこと。休息すること。源氏物語の推本の卷に「こゝにやすらはんの御心も深ければ、うち休みたまひて。」

【木々の下風】 キマのシタカゼ。木々の下を吹く風。千載集の秋上に「秋のくるけしきの杜の下風にたちそふものはあはれなりけり」

【清き泉を掬び】 キヨキイツミをムスビ。清き泉の水を手ですくつて飲み。

【夜半の月】 ヨハのツキ。夜なかの空にかゞやく月。

源氏物語の雲隱の卷に「めびりあひて見しやそれともわかぬ間にくもがくれにして夜半の月かな」

【水に寫して見るは更なり】 水にうつして見るけしきのおもしろさは、今さら事あたらしくいふまでもない。

「更なり」は、いふまでもなし、勿論なりなどの意。

枕草子卷一に「夏は夜、月の頃は更なり、闇もなほ螢飛びちがひたる。」

【いみじう心ゆくばかりなり】 たいそう氣がすゝむほどである。

「いみじう」は、「いみじく」のウ音便。はなはだしく。たいそう。

伊勢物語に「かみさへいとみじう鳴り。」

「心ゆく」は、氣がすゝむこと。心がはずむこと。満足すること。

竹取物語に「かぐや姫の心ゆきはてて。」



【日頃経て】 幾日かたつて。

「日頃」は幾日かの日。多くの日。數日。

土佐日記に「手をひひて寒さも知らぬいづみにぞ波むとはなしに日頃経にける」

【夕立のしぐれわたりて】 夕立がしぐれのやうに降つたりやんだりして。

「しぐる」とは、秋冬の候、空が暗澹として、時々雨を降らすこと。

源氏物語の宿木の卷に「空のけしきあはれにうちしぐるゝにも。」

【名残】 ナゴリ。物事が過ぎ去つた後、なほそのさまの残ること。又、その氣。こゝは夕立の名残。

古今集の春下に「櫻花散りぬる風の名残には水なき空に浪ぞ立ちける」

【清少納言】 セイセウナゴン。清原元輔の女。平安朝時代の女流文學者。梨壺五人の一。一條天皇の皇后定子の方に仕へて殊寵を受けた。博學にして才氣縦横、歌文をよくし、紫式部と文名を争つた。枕草子はその名著である。

【夏は夜】 清少納言の著「枕草子」の開卷第一章に「夏は夜、月の頃は更なり。闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。」と見えてゐる。

【このねぬる朝けの風】 寝おきのたもとを吹く朝の風。さてこの語は頭註の歌の一句を取り入れたもの。

萬葉集卷八、秋雜歌に「安貴王歌一首」として見えてゐる。

「朝け」は「朝明」(アサアケ)の略。夜あけがた。

一首の意は「秋が立つてから、まだ幾日もたゝないので、寝起きのたもとを吹く朝風が、いかにもすゞしくてきもちがよい。」

通譯

惜しんで留めようとしても留まらぬ春がすでに逝つてしまふと、来いといつて呼びもしないのに、夏がやつて来る。そして身にまとふ着物がいかにも珍しく、今ふうにかはつて行くその頃は一體の空の様子が心地よげな上に、青葉の梢が若々しくて何もかも春とは面目を改め、殆ど別世界のやうであるのも、まことにめでたい限りである。青葉のかけは晝でもし

んとするが、しかし、さすがにもさびしくもない。そこに集つて世間話にうつゝをぬかしてゐる人々は、しげく咲いてゐる花の下などよりも却つてよいとして、これをめではやす。よい折を待ち得て今こそと一聲高く名のつた杜鵑の初聲が先づなつかしく感ぜられて、初春をわがものがほに囀つてゐた鶯の老い衰へた聲に代つたやうな心もちがする。支那の人々は杜鵑の聲を聞くことを悲しむけれども、我が國の人々はむしろこれを憐んで、和歌などにも多くよみ入れてゐる。だから、この杜鵑が夜どほし空もとよりに鳴きわたつても、だれ一人として、あゝやかましいとは思はない。その聲のあまり聞かれないところでは、せめて、もう一聲でもこれを聞いたがる。が、しかし、杜鵑の鳴き行く方の人々もやはりその聲を待つてゐるだらうと思ふから、たとひ鳴き過ぎていつても、一向残念とは思はぬ。その頃、卯の花が白く咲いて、垣根の雪にまがふけしきも、一人のながめである。この花こそは、この月(卯月―陰曆四月)の名を負ふて、その美をひとりじめにしてゐるといつてよい。およそ卯月のけしきは清くて、おだやかで空が晴れわたり、雨長も降らず、餘寒もつき、日がいよゝ／＼長くなつて、暇が多いから、戸外の遊にもつてこいである。朝早く起きて庭のぞきしても、風が暖か

で、何のなやみもないから、毎日のやうに出で庭いぢりがしなくなる。さて、かやうに庭いぢりなどしてゐると、庭は日に／＼見どころが多くなり、木も草も皆緑の色をあらはして、それ／＼めい／＼の本領を發揮してくる。これはつまりこれらの草木が天地の雨露のめぐみを享けるからのことである。これらの草木どもには、生類即ち他の動物や人間などのやうに、私といふものがない。それゆゑ、我々は何の心おきもなく、うちとけてこれに親しみなむことが出来る。卯月にかやうに空が晴れやがあるが、やがて臯月(陰曆の五月)になると、大空のけしきが、すっかり前の月とはかはつて、五月雨が久しく降りつき、折々はかみなりがすさまじく鳴りとどろく。たとひ雨の降らないときでも、とかく曇りがちで、はつきりと物の見わけさへもつかぬ。随つて庭のぞきをするひまが少く、しじゅう家にとちこもつて、多くの日数を過すのも、心ざびしいことである。

夏も次第に深くなつて来ると、しげらない木とはなく、榮えない草とはなく、日に／＼物をひきのぼすやうに見えて、いかにも心地がよい。わけても、緑の色のいちづに濃くなつて行く夏木立の美しさは、春の花にもをさ／＼劣りはしない。



春の花は野山の處々に咲いて、その數とても、さほど多くはない。これに反して、夏は、山に里に、ありとある草木が、どれもこれも緑の色をしてゐるから、そのながめが、すつかり春とはちがふ。つね日頃、いろ／＼さまざまに植ゑあつめて馴れ親しんでゐる前栽の草木どもが、雨にぬれて各々その梢をあらはし、得意さうに、思ふまゝ生ひしげつてゐるやうすを見るのも、嬉しいことである。その香をかぐと昔の人などが思ひ出されてなつかしくなるといはれてゐる花柄のかんばしく咲きにはつてゐる夜は、へやの中へ吹きこんで來る風さへも、昔の人のうつり香を傳へて來たやうなこゝろもちがしてたいそうなつかしい。やがて田植時になると、農家では雨を待つて田植をするが、その頃は、たいそういそがしくもあり、又にぎやかでもある。この頃遺水のほとりに飛ぶこととくいな螢が集つて、音ひとつたてないで、ちつとおもひに燃えてゐるのを見ると、秋の夕暮などに、さわがしく鳴きたてる蟲よりも、一段とかはいさうな氣がする。夏の山のめでたいけしき、わけても青みわたつた高い夏の峯が天空につづいて、高く雲居の外にそびえてゐるのを、あき足るほど見るのは、まことに快心のいたりである。これは、その昔唐の大詩人白樂天が、「自を放にして青山を見る。」と詠じて、青山

の夏景色を讚美したのと全く同じである。

夏が更におしうつて水無月(陰曆の七月)の頃になると、緑はなを吹く風が、なつかしくなつてくる。随つて、圓座なぞを敷いて夕すゞみするの、心地よいことである。池の中ほどの深みにある蓮の浮葉が、濁にしまないで美し姿を水面にあらはし、花でもないのに、夕風に匂ひわたつてゐるのは、これ亦心地よいものである。蓮はたゞこの一事だけでも他の草にすぐれてゐるのに、とりわけ、笑みの唇を開けて美しく咲いてゐるその花は、處がせまいかとおもはれるほど一面によいかをりを放つて、この廣い世界にたぐふべきものがないほど清らかである。涼しいところをそれからそれとたづねまはつて、樹陰に休んだり、木々の下風のなつかしいところで清い水を手にすくつて飲んだりして、夏を忘れたやうな氣もちになるのも、たいそうすが／＼しいものだ。照りわたる夜半の月が清い水にうつつてゐるのを見たけしきはいふまでもなく遺水のさら／＼と流れる音を聞くのも、たいそう氣のはれるものである。幾日も／＼天氣がつゞいて暑さが堪へ難いときに、夕立がしぐれわたつて、あとが急に涼しくなつたときなどでも、たいそう氣もちがよい。昔清少納言は、「夏は夜」と

いつて夏の夜を讚美したが、夕方などは、蚊といふ蟲が人をさして、自分どものやうな老體のものには殊更がまんが出来ないから、どうも賛成が出来ない。たゞ寝起きのたもとを吹く夏の朝風こそは、いかにもすが／＼しくて、心地のよいものである。

9 挿 圖

杜 鵑

杜鵑が一聲高く名をつて森の上を飛んでゐるさまである。

筆者葛飾北齋(カワシカホクサイ)は徳川時代の畫家。葛飾派の祖。江戸の人。姓は中島、又葛飾、川村。名は爲一。勝川春朗・錦袋舎・雷斗・畫狂人・己翁を始め多くの別號がある。初め勝川春章に學んだが、竊に狩野派の畫風を學んだために破門せられた。爾來和漢の諸流を究め、又西洋の油畫をも修め、花鳥・山水から稗史・小説の挿圖、錦繪、畫手本、狂歌摺物の畫、一覽圖・曲畫に至るまで、意の赴くところ筆がこれに随つた。就中風俗畫に妙を得、その名は夙に歐米にまで轟いてゐる。板刻の畫本に北齋漫畫・富嶽百景・葛飾新雛形・繪本東海道五十三次・畫本武藏鎧等がある。

嘉永二年(二五〇九)歿。年九十

蓮 川端玉章筆

白蓮の蓮池に咲きにはつてゐる景である。

筆者川端玉章(カワバタギョクシャウ)は明治時代の圓山派の畫家。幼名瀧之助、敬亭・璋翁等と號した。京都の人。中島來章・小田梅僊等に學び、維新の頃江戸に上つて天眞堂といふ畫塾を開いた。明治の初、洋畫熱が盛に起るや、玉章も亦これを學んだ。明治二十三年東京美術學校教授に任ぜられ、二十九年帝室技藝員に推された。四十二年川端畫學校を設けて後進を指導した。大正二年卒。年七十二。



# 一八 蜘蛛 蛛

豊島 與志雄

## 1 解題

豊島與志雄著「書かれざる作品」の中から「蜘蛛」と題する一篇を採つたものである。

「書かれざる作品」は、著者の評論及び隨筆を集めたものである。その跋に

本書に收められてゐる文章は、大正十四年から昭和八年までの間に折にふれて書かれたものである。そして昨年とか今月とかいふやうな言葉が散見されるし、時日が事柄と重要な關係を持つものもあるし、殊に感想の類は當時の文藝的社會的情勢によつて立論されたものが多いけれど、只今、その執筆年月を詳かにすることは難儀である。のみならず、如上の綜合的日附だけをしておいて、時事的關心以上のもので凡てを讀んで頂きたいといふのが、著者の希望である。

といつてゐる。本課の文も随つていつ書かれたものか明らかにし難いが、本課の文の如きこそ時事的關心を超越して決して差

## 2 作者

支ないものである。  
昭和八年九月、東京、白水社發行。

豊島與志雄 トヨシマ ヨシヲ。

明治二十三年、福岡縣朝倉郡禮田村に生れた。第一高等學校を経て東京帝國大學佛文科に學び、在學中久米正雄等と共に第三次「新思潮」を興し、大正三年二月處女作「彼等と湖水」を發表した。爾來創作に嚮譯に不歸の精進を續けて同人中最も早く世に出た。卒業後文筆生活を續ける傍ら教壇に佛文學を講じた。嘗て慶大講師・法政大學教授であつたが、現在は帝大講師である。

著作は主として大正年間に多くの小説を書いたが、「蘇生」「反抗」「人間繁榮」「生あらば」等の作の外「新選豊島與志雄集」がある。又翻譯にユーゴーの「レ・ミゼラブル」、ロマンローランの「ジャン・クリストフ」の二つがある。

## 3 編纂の用意

前課に於ては夏の風物のうちから楽しみとすべく愛すべきものを取扱つた。本課はこれを承けて、一年の中殊に



夏に於て最も多く見られ、夏の景物の一つとなつてゐる蜘蛛を題材としたものを讀ませることにした。同じく季節の風物を取扱ひながら、前課と本課との間には非常に大きな相違がある。前課が皮相的淡泊に觀察し敘述してゐるのに對し、本課のは深く見、深く考へ、一々皮相の底にまで眼をとほしてゐる。これは又同時に江戸人と近代人との傾向の差異を示してゐるものでもある。所謂「現代文」として、前課と比較しつゝ讀むところに一層大いなる効果を期待し得るであらう。

#### 4 要旨

「蜘蛛は面白い動物である。近代人的な過敏な神経と、偉人的な野性と、自然な神経さとを具へてゐる。」と、本文の要旨はこの冒頭の言葉に盡くされてゐる。これを先づ抽象的に論說的に述べた後に、蜘蛛のうちの最も傑出してゐる女郎蜘蛛を捕へ來り、これをわが庭の木に放してその實生活を描寫し、その裡に蜘蛛好きが蜘蛛を語るといふ面白さを讀者に與へてゐる。その蜘蛛の生活の觀察に大半の頁が費されてゐるが、それは前段の抽象的敘

述を論文的に立證するでなしに、寧ろ一つの小品となつてゐる。そこに作者は蜘蛛好きの自己の面目を描くとなく描いてゐる。そして前後通讀する者に、また、いろいろの啓示と暗示とを與へてゐる。

#### 5 概説

全篇の構造 蜘蛛の面白い動物である所以を三方面から敘説し、次に女郎蜘蛛を捕へ來つてこれを飼養し、その生活を觀察して楽しむといふ事實談を録し、更に、蜘蛛好きな自己に就いての附言を結論とした。

第一節（九九頁—一〇〇頁四行）緒言及び蜘蛛の近代人的な神経の所有者であることを説く。（二小節）

第二節（一〇〇頁五行—一〇一頁三行）蜘蛛が偉人的な野性を有すること。

第三節（一〇一頁四行—一〇二頁三行）同じく、その自然的な神秘さを具へてゐること。

第四節（一〇二頁三行—一〇三頁一行）蜘蛛のうちでの傑物を女郎蜘蛛とし、その棲息地を示し、東京舊市内にはゐないことを斷言する。（二小節）

第五節（一〇三頁二行—一〇四頁九行）玉川から數匹の大きな女郎蜘蛛を捕へ來り、之を庭の木に放して、翌朝美事なその巢を見て喜ぶ話。（三小節）

第六節（一〇四頁一〇行—一〇六頁四行）それから毎日女郎蜘蛛を見て楽しむ話。（二小節）

第七節（一〇六頁五行—一〇七頁二行）十日ほど過ぎた或日の出來事。蜘蛛と赤蜂との争闘。蜘蛛の勝利を祝する話。（三小節）

第八節（一〇七頁末行—一一〇頁六行）その又二三日後に蜘蛛がどうやら赤蜂にやられたことを見出してこれを勞はる。その後屢、起る赤蜂の害に蜘蛛が全部滅されてしまつたのを寂しがらる。（四小節）

第九節（一一〇七行—一一一行）結論。蜘蛛に對する自己の趣味について。

#### 6 取扱上の注意

「蜘蛛は人間に好まれることが多いか、嫌はれることが多いかと言へば、嫌はれる方が多いといふのが常識の答であると思ふ。珍しくも蜘蛛好きの作者は、その誰もが嫌

ひさうな蜘蛛について、これほどに立派な話を聞かせてくれた。一體、事物に對する「好き」「嫌ひ」とはどういふことか。この話によつて、先づさういふことも考へさせて見たい。

「好き」「嫌ひ」に理窟はないといふのは、自己の心の掘り下げ方、その對象の觀察が淺薄な時に謂はれることだ。實は大いに理窟もあり、根據もある。この作者が、先づ近代人とか、偉人とかの特色を初に抽象的に考へて、それを後に蜘蛛に結びつけて考へるやうになつたのか、或はその反對の順序でかういふ觀察を下されるやうになつたのか。その前後は何とも謂はれないが、少くとも、蜘蛛好きの性格が、この面白い話の動機となり根幹となつてゐることは間違ひなからう。固より性格から來ることでは如何とも仕方がない點もあるが、我等は物を「好く」などは、嫌ひなことは姑く措いて、堂々と人前でその理由を言ひ、その如何なる點を好くかを述べ得るやうにありたい。そしてその理由が立派でありたい。理由があつても言ふを恥ぢるやうなものならば、それは立派



な、好きになつてよい物ではあるまい。——この文を修養的に讀むと、以上のやうな風にも讀まれると思ふ。

【一般に表現の手法に新味があり、一句にも含蓄に富んだものが多いことは指摘するまでもあるまいが、試みに一二を言ふならば、「いら／＼しながら日向ぼつこしてゐる近代人」(九九頁末行)とか、「野性を有してゐなければ偉大な仕事は出来ない」(一〇〇頁五行)とかがそれである。

【「女郎蜘蛛は東京の舊市内には見當らない云々」といふのは、かなり大膽な斷言であると思ふ。しかし蜘蛛好きでもない者が、果してこの言に反對することが出来るであらうか。

【「私は嬉しさの餘り、妻や子供たちを呼んだ」(一〇四頁六行)この前後は、如何にも蜘蛛好きの作者の面目が見えるやうである。「美や神祕に對する子供の敏感さよ。」この一挿入句にも味はふべき含蓄がある。「だが田舎の子供たちは云々」(一〇四頁八行)これはその功利的な仕打ちに對する作者の皮肉であらう。

【「私はこのために、幾日か太陽と共に起きた」(一〇六頁

二行)、「私がかつとなつて、女中を呼んで」(一〇八頁六行)これらの語句は、ます／＼作者の蜘蛛好きを有効に語るものである。特に、後の「かつとなる」に至つては、蟲の喧嘩に人間が飛込んで行つたもので、その眞剣さに對しては、笑つていゝのか、わるいのか、わからないものがある。

【「何故の襲撃か譯が分らない」(一一〇頁三行)作者は眞面目に一種の義憤といふやうなものを感じてゐるのであらう。

【「蜘蛛を嫌ふ者は性格的に弱者であり、蜘蛛を好む者は性格的に強者である。」とは、恐入つた宣言である。蜘蛛嫌ひなものは、一考せざるを得ない。

### 7 設問

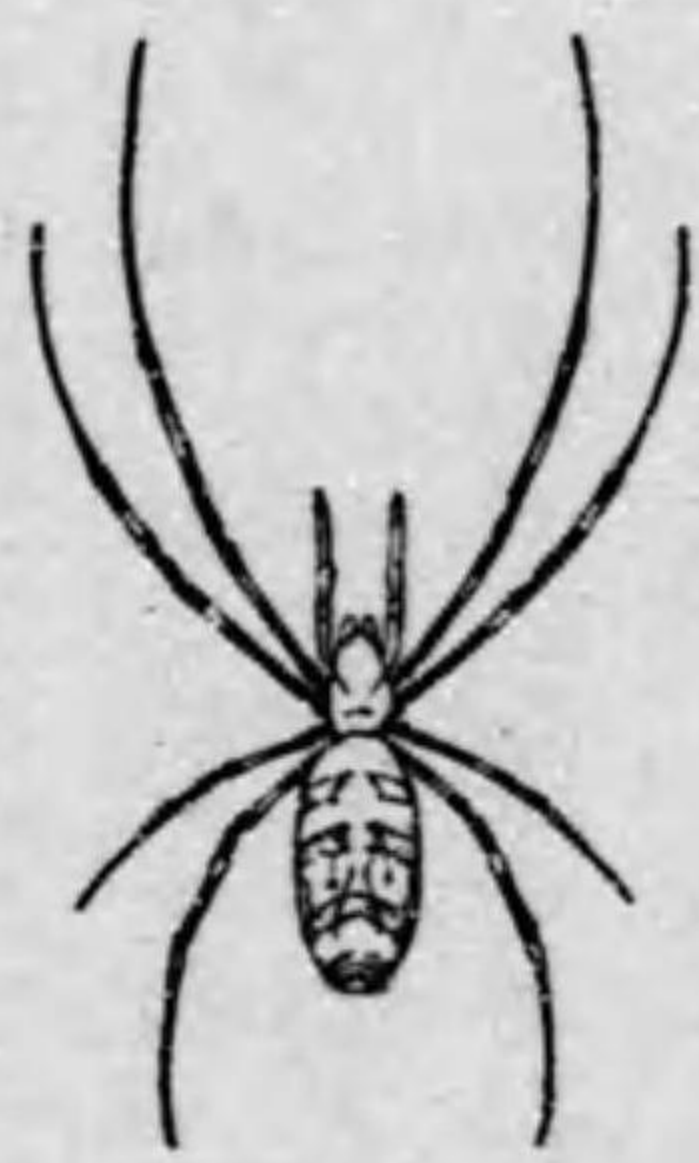
- 1 作者が説く「近代人」の特徴はどんなことか。
- 2 作者の蜘蛛好きの面目は、如何なる語句に表れてゐるか。
- 3 含蓄があり、いかにも道理であると思はれる語句をあげよ。

### 4 次の語の意義・用法を説明せよ。

持論。語弊。人爲的。本質的。神祕的。聯想作用。猶豫。

### 8 釋義

【蜘蛛】クモ。節足動物の蜘蛛類に屬する。體は頭胸部及び腹部の二部に分れ、頭胸部に四對の肢を具へ、單眼は二箇乃至八箇、上顎は鉤狀又は鋏狀で、その尖端に毒腺の開口するものがある。腹部には節が無く、末端に近く



四箇乃至六箇の紡績突起を具へ、それから分泌する液汁は空氣に觸れて絲に變ずる。呼吸は一對の肺囊によるが、種類によつては二對の肺囊と氣

管とを兼ね具へるものもある。絲は後脚にある櫛齒狀の爪にかけて巧に網を張り、昆蟲のかゝるのを待つて捕へ食ふ。また「はへとりぐも」は網を張らずに、跳りかゝつて巧みに蠅を捕へる。種類が甚だ多い。

【近代人的な過敏な神経】近代人の特色の一つは神経の過

敏なことである。近代人の神経の過敏になつた原因としては多くのものが數へられるであらうが、

一、經濟組織の複雑化からして生活難を生じ、生存競争の劇しくなつたこと。

二、五官に對する刺戟の種類と度数とが著しく増大されたこと。

三、精神生活上の諸問題が雑多となり、精神的刺戟の著大となつたこと。

等はこの最大なるものであらう。

【偉人的な野性】偉人には、修養によつて人爲的に築き上げられた部分や、理智的に才氣ばしつた點などもあるが、一方には何物にも制せられない、赤裸のままの人間性がある。それは人間の持つてゐる本質がそのままにあらはれてゐるもので、人工的虚飾や、扮装や、制約等を全然伴はない部分である。

【自然的な神祕】シセンテキなシンピ。自然がもつてゐるところの靈妙不可思議な祕密。

「神祕」とは、(一)神わざとして祕めておくこと。(二)靈



妙不可思議で知ることの出来ない秘密。(三)尋常の理論や認識の外に超越した事物の真相。

【本來の動物的なものから根こぎにされたやうな趣がある】本來の動物的な神経は、動物の生存上の自然の要求のためにその機能が適當に發達してゐるものであるから、どこまでも自然さがあるのが特色である。然るに近代人の神経は、極度に人文的人工的の要求によつて鋭くされたものであるから、「自然さ」といふものが極めて少い。それ故自然さを特色とする本來の動物的のものは根こぎにされた感とするのである。

「根こぎ」とは、植物を根付きのまま引抜くことで、物事を根柢から覆すことに轉用する。

【知覺】 チカク。英語の Perception. 心理學上の術語。人によつて多少定義を異にするが、普通には、直接の感覺器官の刺戟によつて現在生ずる外物の意識をいふので、即ち、客觀的意識内容をさすことになる。

知覺はかくの如く現在直接の感覺器官の刺戟によつて生ずるものであるが、同時に過去の經驗からの同化的補充

をまつてはじめて完全となり得るものである。

【運動的知覺】 こゝで作者の使つてゐる語には嚴密な語義の吟味を缺いてゐると思はれる。運動的知覺(果してかういふ言語があるか否か疑問だが)といふのは、知覺のうちで運動を伴ふものだから、觸覺の或ものにこれは見られると思ふ。しかし作者のいふ運動的知覺が鈍いといふのは、身體の運動といふことが緩慢である、なるべく身體を動かさないやうにしてゐる、などの意味であるらしい。

【感情的知覺】 この語も極めて曖昧な言ひ方で、作者は、感覺器官を通さずして、感情でもつてものを知るといふやうな意味に使つたのであるらしい。しかし無理な用法である。

【いら／＼しながら日向ぼつこをしてゐる】 この句にいたつて作者の言つた「身體的知覺」「感情的知覺」の意味がはつきりとわかつてくる。即ち身體の運動といふことはあまりしない、少くとも冷淡であるが、その心中の感情乃至感覺は極めて鋭敏になつてゐるといふのである。

【佛】 オモカゲ。この字は國字である。すがた。容貌。

【觸知】 ショクチ。觸覺による知覺といふ意味で用ひたものであらう。普通にはかうした術語は用ひない。

皮膚・粘膜等に分布してゐる末梢器官により、接觸・寒暖・部位・壓等を知覺することである。

【概】 ガイ。おもむき。

【ものぐささ】 無精さ。「ものぐさし」とは、氣が不精なこと。物事をたいぎがること。臆劫がること。

【病的な】 正常でなくて、何か異常があるために、或一部の機能が度を超えて増大されてゐるが如き場合にいふ。

【持論】 チロン。多年にわたつて持ちつゞけてゐる主張。

【精緻】 セイチ。「精」は密の義「緻」は微細の義で、こまかく綿密なこと。精密・精細などと同じである。

唐書の崔元翰傳に「其好學、老不倦、用思精緻、馳騁班固・蔡邕間。」

【語弊】 ゴヘイ。ことばのきず。ことばの不十分なところ。語の上で弊害となる點。

【人爲】 ジンキ。「天然」「自然」等に對する語である。人間

がこしらへること。人工によつてこしらへること。又それらのもの。

【後天】 コウテン。「先天」「本質」「本性」に對する語。人の生後に心身に受けた事柄をいふ。身體の狀況、社會の境遇等により、知識・經驗を得、又は習慣をなした事。

【本質】 ホンシツ。或事物が必ず具へてゐなくてはならぬ、缺くことの出来ない性質をいふ。

【所産】 ショサン。「所」は受動の意味をあらはす。「産せられたもの」の義。こしらへられたもの。産物。

【肉食的な野性】 他の動物を斃し、その肉を食して生存するといふことは自然の世界に於ける最も暴虐な、道德的修練を経ない行爲である。肉食を平氣でするといふことは、本能の發動にまかせて道德的教養の極めて浅い性質と見たのである。

【細い絲に懸つて空に浮んでゐても云々】 逆説的な言ひ方を交へて目先をかへてゐる。

蜘蛛は細い絲にぶらさがつて空中に浮んでゐるが、地を這ふ蟲の類よりもずつと大地的であり、野性的である。



「地や野に根據を持つのではないけれども。」と言葉のあやをなしてゐるのである。

「大地的である」とは、大地に見られる「自然の姿」を身に體してゐることを言つたので、次の野性的であるといふのと全く同義に用ひてある。

【自然力崇拜の宗教】 自然的宗教の一で、天然崇拜の宗教ともいふ。倫理的の意味を附與せずして日月・星辰・山川・草木・湖海・井泉・昆蟲・魚介・飛禽・走獸等の天然の又は天然現象を崇拜する宗教である。

【山間僻地】 サンカンヘキチ。山の中や、遠く都を離れた片田舎。

蘇東坡の赤壁賦に「惟江上之清風、與山間之明月。」張説の文に「遠居僻地、代爲三右族。」

【さなか】 真中。真唯中。

【妖怪屋敷】 エウクッイヤシキ。怪物の出てくる家。化物屋敷。

【廢墟敗屋】 ハイキョハイヲク。「廢墟」は家や城郭などの荒廢した址。荒れはてた址。

韓維の詩に「寒花亂廢墟。」

「敗屋」は、破れた家。あばらや。

白居易の詩に「敝衣羞布素、敗屋壓茅茨。」

【聯想】 レンサウ。この語は哲學・教育學・社會學・解剖學・美學・心理學等に於て、各、特殊の用法がある。又その意義も人によつて廣狹の差がある。

普通に心理學上に於て狹義と用ひられた場合は觀念聯合と同義である。即ち、前に經驗された複合的精神内容の一部が意識されると共に、他の内容がこれにつらなつて意識にあらはれる聯絡過程をいふ。

【女郎蜘蛛】 チョラウグモ。節足動物中、蜘蛛類の一種。

體は大きく、地色は黒く、それに黄色の斑がある。家の簷などに右に卷いた網を張り、薄暮に出てその中央に坐し、蟲類の來てかゝるのを待つてゐる。上顎に烈しい毒を持つてゐる。

【誇りか】 ほこつてゐるさま、自慢らしいさま、得意なさま、などにいふ語である。

宇津保物語の俊蔭の卷に「もみちを見れば、色ことに



(劇) 蜘蛛 土



ほこりかに。」

枕草子に「ほこりかに打ち笑ひ、たゞの勝ちよりはほこりかなり。」

【白晝】 ハクチウ。ひるなか。まひる。日中。

賈誼の文に「白晝大都之中、剽吏而奪之金。」

源平盛衰記、山王垂跡の條に、「神輿を塵灰に蹴立て、白晝に雜人共に交へ奉り、入れ奉らんことその恐れ侍るべし。」

【傲然】 ガウゼン。おごりたかぶるさまにいふ語。

【體軀】 タイク。からだ。身體。

【精悍】 セイカン。才力が鋭くて勇敢なこと。するどくたけだけしいこと。

史記の游俠傳に「解爲人短小精悍、不飲酒。」

【東京の舊市内】 昭和八年十月一日以前の東京市内の十五區。新に市域に編入された二十區を除く。

【茂み】 シゲみ。草や木の茂つたところ。

萬葉集卷八に「夏の野のしげみに咲ける姫百合の知らえぬ戀はくるしきものを」

【土蜘蛛】 ツチグモ。謡曲の土蜘蛛、又はこれから出た所作事の土蜘蛛をいふ。その梗概は、

源頼光が病床についてゐる所へ侍女胡蝶が藥を持つて見舞に來ると、その後から僧形のものがあらはれ、千筋の絲を出して頼光の五體をつゞめようとした。頼光が膝丸を抜いてこれを斬ると、形が消えてしまった。この時の聲をきいて、獨武者が駈けつけ、頼光から今の次第を聞き、血のあとを辿つて化生の者を退治することとなつた。やがて獨武者は從者を隨へて葛城山土蜘蛛の棲家に着いた。土蜘蛛は絲を投げかけて獨武者に對抗したが、遂に滅ぼされたといふ筋である。

【瀧夜叉姫】 タキヤシヤヒメ。傳説の中に、また演劇小説の中にあらはれる人物である。

「前太平記」の中には、平將門の娘で、尼となり、地藏を信仰したとあり、山東京傳の讀本「善知鳥安方忠義傳」には、將門の子良門の妹で、妖術を用ひて兄の復讐を企てたとあり、常磐津「忍夜戀曲者」には、平將門の遺子で、鳥原の傾城に身をやつし、古御所で大宮太郎光國を



誘惑して味方に引入れようとし、露顯して蝦蟇の妖術を用ひて鬪ふとしてある。

【だが田舎の子供たちは女郎蜘蛛の巢で蟬取の道具を拵へて遊ぶのである】この文には二つのことが言はれてゐると思はれる。

一、都會人が美と見、神祕と考へる、その蜘蛛が、田舎の子供には何等の特別のものにも見えない。即ち田舎の子供の神経が極めて太くて、作者の所謂野性を十分に持つてゐるといふこと。

一、都會人にとつては美だの神祕だのと言つて珍しく騒がれる蜘蛛の巢なんか、田舎にはさらにあつて、珍しいものでも何でもない。そこで惜しげもなくその巢でもつて蟬取の網を造る。そのやうに豊富な自然に恵まれてゐること。

【氣配】ケハヒ(ケワイ)。そのやうに見えるやうす。けぶり。そぶり。

宇津保物語の俊蔭の卷に「けはひなつかしう。」

枕草子卷五に「すりやうなどの來て、なめげに物い

ひ、さりとして我をばいかゞと思ひたるけはひにいひ出でたる、いとねたげなり。」

【蛾】ガ。動物學上の用語。昆蟲類中、鱗翅類の二大亞目の一で、蝶類と相對する。その觸角が桿棒状でないことと、靜止してゐる時兩翅を屋狀に置くことと、及び夜間に多く飛翔すること等が蝶類と區別せられる重要な點である。種類は甚だ多く、概ね害蟲である。

【カステーラ】スペインの Castella で製出したので此の名があるといふ。めりけん粉に雞卵と砂糖とを混ぜ、釜で蒸焼にした菓子である。

太閤記に「かすていら・ぼうる・かるめいる・あるへいたう」

【兜蟲】カブトムシ。昆蟲類中、鞘翅類、金龜科に屬する。

體は長さ二寸五六分、幅七八分。翅は黒くて光澤がある。雄には頭上に角があるが、雌にはない。普通「さいかち」「なら」等の樹に棲息する。さいかちむし・おにむし等の名がある。

【羽蟲】ハムシ。こゝにいふ羽蟲は動物學上にいふ羽蟲の



意味ではなくて、翅のある小さい蟲をたゞ漠然呼んだものである。

昆蟲類中、脈翅類の一種。體は扁平、長さは三厘餘、圓形、黄白色で、體面一般に毛が多く、翅はない。頭部は半月形で、口器がよく發達してゐる。通常五月頃發生し、雞の羽の間に寄生して軟毛を食し、血液を吸收する害蟲である。

【赤蜂】アカバチ。膜翅類の蟲。翅は赤黄色で、體軀は黒色に黄赤の斑がある。

【喘ぐ】アへぐ。せはしく呼吸すること。いきぎれのすること。いきづかひのあらひのこと。

萬葉集卷三に「あへぎつゝ我が漕ぎゆけば」

【迂濶】ウクツツ。「迂」はまはりどほい義。「濶」はとほざかる義。

まはりどほいこと。心の行きとどかぬこと。事情によくあつてゐないこと。うつかりしてゐること。

室町千疊敷に「うくわつに取り置く死骸でなし。」

史記の孟子傳に「以爲迂濶而濶於事情。」

漢書の王吉傳に「上以其言迂濶不甚寵異也。」

【絡める】カラめる。捕へ縛る。からめとる。

伊勢物語に「盜賊なりければ、國の守にからめられにけり。」

【瘁猛】ダウマウ。わるづよいこと。

【躑躅】ツ、ジ。「やまつゝ」の異名。石南科石南屬の灌木。高さ四五尺に達する。花は花梗を具へて數箇づつ集まり、五裂せる種々の色の合瓣花冠を有してゐる。

【かつとなる】俄に怒を發すること。

【箠】ザル。

【泥坊蜘蛛】ドロバウグモ。動物學上の名稱ではない。晝間はかくれてゐて、夜だけ網をはつてゐる汚色の蜘蛛につけた作者のよび名である。

【狙ひ寄る】ネラひヨる。目あてをつけてそつと近寄る。

【急所】キフシヨ。(一)身體の要所で、害すれば生命にもかかるほどのところ。(二)大切な場所。要所。(三)能舞臺を横に三分して、最も前方に近い部分。及び橋懸りを横に



三分して、最も舞臺に近い部分。即ち一の松のあたりの稱。

こゝは(一)の意。

【跋扈】パッコ。「跋」は踏みつける義。「扈」は魚を捕へる竹籠。大魚が籠の中に入らないで跳ね上る義である。

上を凌いで勝手な振舞をすること。のさばること。放恣なこと。

通鑑の後漢質帝紀に「帝目<sup>スラク</sup>梁冀<sup>リョウキ</sup>、是跋扈將軍也。」

【素樸】ソボク。かざりけのないこと。きちのまゝなること。

漢書の賈誼傳に「百姓素樸、獄訟衰息。」

張衡の東京賦に「遵<sup>ヒ</sup>節儉<sup>セツケン</sup>、尙<sup>ヒ</sup>素樸<sup>ソボク</sup>、思<sup>ヒ</sup>仲尼之克己<sup>チュウニノキツキ</sup>、履<sup>ヒ</sup>老氏之常足<sup>ラウシノトコナシ</sup>。」

【野人】ヤジン。(一)田野にある人。粗野なる人。ひなかも野人にて候なり。」

諺曲、草薙に「草を刈り、賣りて露の命をつぐ廣村の野人にて候なり。」

孟子の盡心章句上に「其所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>異<sup>ル</sup>深山之野人<sup>ノ</sup>者<sup>、</sup>幾<sup>ンド</sup>

希<sup>ナ</sup>。」

(二)無粹な人。やばな人。無骨もの。

一代女に「男も無性なる野人にはあらず、遣ひ過して揚屋の門を暗がりに通る男。」

こゝは(一)の意と見るべきであらう。

【性格】セイカク。普通の用語としては、個人の比較的變化し易い状態に對比して、その比較的固定的性質をば性格といふ。

現今の用法では、ラ・ブルイエールの經濟心理的使用と、カントの倫理形而上學的使用とが多くの場合混用されてゐる。性格を天賦・境遇・意志或は行爲の習慣の三要素の構成する處と見るのは前者である。三要素中の前者は人力の如何ともし難い自然必然の所與であつて、同種の行爲の繰返しによつて生ずる特定の習慣的傾向は品性構成中主要のものである。それと一々の特殊行爲との關係は、互に因となり果となる。即ち性格が現れて行爲となり、逆に行爲は性格を變容形成して行くと見られる。この考方の根柢には自由意志によつて新なるものを

創造し得る可能性を豫想してゐる。茲に性格形成の倫理形而上學的問題が起る。

性格の形成は一定の理想とそれを實現し得る自由の力とを前提する。或は理想が己れ自身を實現し行く自由の力を假定する。

尙この外に、自己の立てた原理・主義に忠實に服従し、徹底的にこれを支持して行く意志習慣を性格といひ、かかる人を性格の人、これに反する人を無性格の人ともいふ。  
(岩波哲學辭典による)

【偏奇】ヘンキ。一方にかたよつて、普通とは變つてゐること。

### 9 挿圖

蜘蛛 渡邊華山筆

渡邊華山筆の彩色花鳥圖の一つである。

筆者渡邊華山は徳川末期の文人・畫家で且志士である。

儒を佐藤一齋に、畫を谷文晁に學び、蘭學に長じ、三河の田

原侯に仕へて年寄格に進んだ。西洋の事情を究め、高野長英

等と交はり、攘夷に反對して幕府の忌諱にふれ、國許に幽閉

蜘蛛の巢

蜘蛛の巢に朝露の玉を貫いてゐる景を實寫したものである。

### 10 参考

1 豐島與志雄の作風

せられた。天保十二年(二五〇一)自殺。年四十九。明治二十四年十二月、正四位を追贈せられた。

「柔弱なる文章を以て、市井の日常事を題材として平敘しながら、その作品は常に異常なる神經の流れと一脈の幻想味とを漂はして、独自の藝術的境地を有してゐる。ことさらに深刻に走ることなく、むしろ明るい温雅な筆致の間にさへ、白日の妖氣とも稱すべきものを感じさせる點、全く比類なき特異である。彼は文壇に出でて以來時流に媚びることなく、終始自己を操守して大成し、所謂文士といふよりは文學者たるその風格が作品の上にも現れてゐる。代表作としては「蘇生」「野ざらし」理想の女「人間繁榮」を擧ぐべく、外に戯曲も十篇ほどある。」  
(日本文學大辭典)

2 原文の省略

一〇〇頁一〇行「本質的な力である」の次に左の數語があるのを省略した。



トルストイやバルザックやセークスピアの偉大さは、さういふ力に依つてゐるところが多い。トルストイが如何に無抵抗の宗教を説かうと、彼の力は畢竟肉食的な野蠻な力の上に立つてゐる。

# 一九 日蓮上人

高山樗牛

## 1 解題

日蓮上人に對する論議的評傳である。原文は樗牛全集第三卷の四九二—五頁に出てをり、「豪傑の半面」と題して明治三十五年七月、「中學世界」に載せられた文の一つである。

樗牛全集は高山樗牛の歿後、その弟齋藤信策氏及び親友姉崎正治氏が編纂したもので、その主なものは、美學・美術史・文藝評論・時代管見・瀧口入道・平相國・菅公傳・世界文明史・日蓮上人に關する諸篇などである。五冊より成り、明治三十八年博文館の發行に係る。

## 2 作者

高山樗牛 タカヤマ チョギウ。明治時代の文藝評論家。文學博士。名は林次郎、樗牛はその號である。明治二年山形縣鶴岡に生れた。第二高等學校を経て東京帝國大學文科大學哲學科に入り、二十九年卒業。第二高等學校教授となる。後辭職して博文館に入り、雜誌「太陽」に文藝批評の



筆を取り、文名が一時に高かつた。三十年文部省から歐洲留學を命ぜられたが、肺患の爲に果さず、湘南に病を養ひつゝ、克く筆を呵した。その思想の變遷を見るに、初め日本主義を唱道したが、後個人主義に傾き、遂に美的生活本能主義を説き、ニイチエを紹介し、爲に是非の論を一時に沸騰させた。晩年日蓮を研究し、特にその人格を敬慕した。同三十五年(二五六二)三十四歳で歿した。駿河國田子浦畔龍華寺に葬つた。墓に刻して曰く、「吾人は須く現代を超越せざるべからず」と。蓋し氏の理想を示すものである。

## 3 編纂の用意

本課は日蓮上人が豪邁にしてしかも恩愛に厚く、眞に高天淵地の大豪傑であつたことを、その熱心なる崇拜者であつた文豪樗牛が感激の涙を硯にたゞへて書き綴つた佳章である。上人の四條金吾に對する恩情、故山の雙親に對する至孝、さては波木井氏より贈られた乗馬に對する



慈愛、読み去り読み來つて、讀者を感涙に咽ばしめねば已まぬ。その日蓮宗なる一宗を開き、法燈赫々として永く後昆を照らす所以のもの決して偶然ではない。本課の如きは、その内容よりいふも、又その文章よりするも、國語教科書中に取り入れて青年を指導啓發するに絶好の教材である。本課をこゝに採録した所以は實に茲に存する。

#### 4 要旨

日蓮上人の人格、特にやさしい方面、即ちその愛の力の絶倫であつたことが主として述べられてゐる。凡そ偉大なる人格者は、總べての方面に於て強い力を有つてゐる。即ち一面に秋霜烈日の如き儼然たるところがあると同時に、他面には慈母にも勝る恩愛の情を有してゐるのが、蓋し眞の偉人の偉人たる所である。よろしくこの點に思を致させて、上人の人間味に徹した強烈さを看取せしむべきである。殊に作者高山樗牛は日蓮上人信仰の頂點に達して歿した人である。この文に、その上人に對する理解と熱情とが遺憾なく表されてゐるのも尤もである。本課では又こゝに留意せしめて、凡そ人物評論に

は、その對象への理解と同情とが必要であることを悟らせたものである。

#### 5 概説

第一節（一一一頁—一二二頁六行） あらゆる迫害に抵抗して、大願貫徹に精進する力の人日蓮は、同時に絶大な愛の人であつた。……この一節にはかういふ命題を提示したのである。

第二節（一二三頁七行—一三三頁八行） 第一節の命題を證する爲に、四條金吾に對する恩愛の情を擧げた。

第三節（一一五頁九行—一二四頁五行） おなじく、孝情の無比な例證を示した。

第四節（一二四頁六行—一二五頁三行） おなじく、慈愛の禽獸に及んだ事實。

即ち以上三節は第一節の命題に對する證明である。

第五節（一二五頁四行—） 結論——眞の豪傑は、力と愛との兩者が相俟つてその大人格を作るものである。

#### 6 取扱上の注意

□日蓮についての信仰的挿話は數々あるが、これは史傳のまゝの日蓮である。本課では、從來の宗門にあつたやうな教義上の争鬭觀念などから全く超越して、日蓮の眞の豪傑たる所以をよく考察せしめ、以て生徒の心性陶冶に資するやうに取扱ふことが肝要である。

□第一節の「如何なる迫害を被るとも云々」といふところは、原文では、假令法華の宗門を捨てなば日本國の位を譲らんと誘はるゝも、題目を已めて念佛申さずば父母の頭を刎ねんと脅かさるゝも、ひくともせじと覺悟し、その外の大難は風前の塵に等しと傲語し、鎌倉殿の迫害に遇ふや、「わづかの小島の主等が威さんに恐れては、閻魔王の責をば如何にすべき。」と宣言し、「法華經の爲にこの臭き……頭を」とつゞいてゐる。

□日蓮に對する樗牛の信仰に關しては、全集所收の、例の「況後録」（「参考」を参照）など讀んでかゝることが教授者の底力とならう。

□「法華經のために云々」（一一一頁）修辭的に見ても、いかにこの言の力づよいかが感ぜられる。

□「幾多の消息文」（一一二頁二行）「四條金吾御返事」といふのが、遺文録の中にいくつも出てゐる。

□「必ず殿と共に地獄に墮すべし」例の如く強い言ひ方である。これは「崇峻天皇御書」といふ遺文に出てゐる。

□「房州を煙波の間に望み」（一一四頁一行）後、此處に「思親閣」といふ御堂が建てられた。

#### 7 設問

1 この文は日蓮上人の如何なる點を主として論じようとしたのであるか。

2 この文の大體の組織を説明せよ。

3 次の文の意義は如何。  
能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。

4 日蓮上人には、前課にいはゆる「野性」があると評してよいだらうか。

5 「喝破」の如く、破の字を下につけた熟語の例をあげよ。（看破・道破・説破・讀破・踏破）



8 釋義

【日蓮上人】 ニチレンシヤウニン 日蓮宗の開祖。安房國東條郷（今の小湊）の漁夫貫名（ヌキナ）重忠の第三子。十二歳清澄山に登り、道善を師として天台・眞言を學んだ。長じて西遊し、南都・北嶺に諸碩學を訪うて佛教の奥旨を究めたが、法華經のみ末法の今時に弘道すべき妙法であつて、他は釋尊の眞意でないと感じ、この主義を以て世を救はうと決心した。建長五年故郷に歸省して清澄山に登り、東天に旭日を拜して、南無妙法蓮華經の題目を高唱した。これを一宗開創の起源とする。爾來「眞言亡國、律國賊、念佛無間、禪天魔。」と喝破して他宗を排撃し、當時の天災地變を以て官府が謗法の邪宗を信じて法華經を信じないためであると主張し、「守護國家論」、「立正安國論」を起草して時の執權北條時頼を諫曉した。時頼は大いに怒り、妖言を以て民衆を惑はすものとしてこれを伊豆に流した。然るに日蓮の所説に隨喜して、或はその弟子となり、或は外護の擁護となるものが少くなかつた。後赦されて歸つたが、諸宗を誹謗排撃す

ることはもとの通りであつたので、時頼は又大いに怒り、文永八年これを相州龍口（今の鎌倉郡片瀬町、龍口寺の邊）に斬らうとした。このときさまじくの奇瑞があつたので、時頼は恐れをなし死一等を減じて佐渡に流した。後「開目鈔」・「觀心本尊鈔」を作つて故國の信徒に寄せ、又一十界勸請の大曼荼羅を圖題して一宗の本尊とした。同十一年赦されて鎌倉に歸るや、再び幕府を諫曉したが、容れられなかつた。後去つて甲斐國身延山に入り、専ら門弟の養成及び教義の闡揚に力めた。弘安五年（一九四二）病を得、十月十三日武藏國池上に入寂した。年六十一。門弟日昭・日朗等を六老僧といひ、日法・日家等を十八中老僧といふ。又これらの門弟が師の著述及び書翰を輯録したものを録内・録外の御書といふ。

【鎌倉時代】 武家執政時代の第一期、即ち文治元年（一一八四）源頼朝が平氏を滅して幕府を鎌倉に建ててから、元弘三年（一九九三）北條氏の亡びるまで、凡そ百五十年にわたる時代の稱。

【豪傑】 ガウケツ。智勇などが衆人にすぐれてゐること。

又、その人。

孟子の盡心章句上に「若夫豪傑之士、雖無文王一猶興。」淮南子の泰族訓に「智過萬人者、謂之豪、千人者、謂之傑。」

【宇宙】 ウチウ。天地といふに同じ。

淮南子の齊俗訓に「往古來今、謂之宙、上下四方、謂之宇。」

答賓戲の註に「宇宙、天地也。」

後漢書の仲長統傳に「可下以陵香漢、出宇宙之外矣。」

【眞理】 まことの道理。まことの法則。正理。

方千の詩に「聞僧說眞理、煩惱自然輕。」

【法華經】 ホケキヤウ。妙法蓮華經の略。又、一乘妙典ともいふ。八卷、二十八品。支那姚秦の弘治八年（一〇六六）鳩摩羅什の譯。一經を分つて本門（前十四品）・迹門（後十四品）とし、本門中に於て如來壽量品を以てその大宗とする。釋尊出世の本懷は、四十九年の一代の說法中最後九箇年の說法たるこの妙法蓮華經に於て始めて顯說せられ、久遠實成の妙理は、本門の中心たる如來無量品

に於て始めて示された。釋迦一代の聖教中、廣大無邊の慈悲と幽玄微妙の哲理とを包含する點に於て、諸經中最上第一と稱せられ、古來最も尊崇される經典である。

【大義】 タイギ。重大なる義理。

易經の上經に「歸妹、天下之大義也。」

【滿天下】 天下全體。天の下残らず。全世界。

【衆生】 シュジャウ。世上のあらゆる生物。又、あらゆる人類。

智度論に「五衆和合、假名衆生。」

法華經に「爲一切衆生之父。」

平家物語卷六、慈心坊に「それ法華は……衆生成佛の直道なり。」

【迫害】 ハクガイ。迫りくるしめること。迫つて害を加へること。

【覺悟】 カクゴ。あきらめること。觀念。

狂言、拔段に「身ども覺悟致してござる。」

【法華經のためにこの臭き頭を云々】 高祖遺文録の「種々御振舞御書」の中に「各、思ひ切り給へ。此身を法華經



にかうるは、石に金をかへ、糞に米をかうるなり。佛滅後二千二百二十餘年が間、迦葉・阿難等、馬鳴・龍樹等、南岳・天台等、妙樂・傳教等だにもいまだひろめ給はぬ法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提にひろまらせ給ふべき瑞相に、日蓮さきがけ(魁)したり。」とある。

【喝破】 カツパ大聲を發して他人の言を説破すること。邪説を排し、眞理を説き示すこと。

「喝」は聲をはげしくして叱る意。「破」は助語。

廣韻に「喝、訶也。」

集韻に「喝、呼也。」

【權勢】 ケンセイ。權力や威勢。こゝはこれを有する人。

戰國策の趙に「臣願損功名去權勢以離衆。」

平治物語の官軍除目の條に「權勢に恐れて、心ならず交るにて候ひき。」

【威武】 キブ。いさましくたげきこと。又、そのもの。

孟子の滕文公章句下に「貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫。」

【高天潤地獨立獨歩の大豪傑】 高大なるこの天地間を、自由自在に、大手をふつてゐばつてあるくほどのえらい人物。

「獨立」は他の助をからず、又他の支配や束縛を受けないで自ら立つこと。

易經の上經に「君子以獨立而不懼。」

「獨歩」とは、(一)ひとりて歩むこと。(二)他に比類のないこと。卓絶すること。

後漢書の戴良傳に「獨步天下。誰與爲偶。」

【豪邁】 ガウマイ。氣質のたけくして人にすぐれてゐること。豪壯にして英邁なること。

宋史の李侗傳に「姿稟勁特、氣節豪邁。」

【膽氣】 タンキ。物事に動ぜぬ氣力。敢爲の意氣。きもだましひ。膽力。

晉書の周浚傳に「大軍卒至、奪其膽氣。」

杜甫の詩に「將軍膽氣雄。」

【溫柔】 ヲンジュウ。おだやかなこと。すなほなこと。溫順。

禮記の經解に「其爲人也、溫柔敦厚。」

【人情】 ニンジヤウ。人類の本能としてそなへてゐる情愛。なさけ。いつくしみ。

禮記の奔喪に「思慕之心、孝子之心也、人情之實也。」

【恩誼】 オンギ。恩愛の情誼。「恩義」に同じ。

晉書の鄒鑿傳に「素有感其恩義者。」

【禽獸】 キンジュウ。鳥やけもの。鳥獸。

禮記の曲禮の疏に「羽則曰禽、毛則曰獸。」

爾雅の釋鳥に「二足而羽、曰之禽、四足而手、曰之獸。」

史記の股本紀に「湯德至矣、及禽獸。」

【感涙に咽ばしむ】 カンルキにムセばしむ。感涙にのどをつまらせる。

「感涙」とは、深く心に感じて涙を流すこと。ありがたいと感じて出る涙。

徒然草に「嬉しき結縁をもしつるかなとて、感涙をのこばれけるとぞ。」

【信者】 シンジャ。その宗教を信仰する人。信心者。

梁書の高僧傳に「時信者。」

【四條金吾】 四條頼基。中務三郎左衛門尉と稱した。(衛門府の唐名を金吾といふ。) 江馬遠江守光時の重臣頼員の子。父の業を繼ぎて江馬家の宰となり、又兼ねて醫道に精通した。建長中池上氏等と共に禪を抛つて日蓮に歸依し、大いに外護に力めた。日蓮龍口の法難の時に殉死しようとし、又文永九年春北條時輔の亂に際し、主家の難に殉じようとしたことがある。入道して收言院日頼といつた。正安二年(一九六〇)寂、年七十三。(日蓮上人の教義に依る。高山氏の文に江島とあるは江馬の誤らしい。)

【江島遠江守】 エシマトホタフミノカミ。前の「四條金吾」参照。

【老臣】 ラウシン。(一)老功の臣。(二)家老、即ち大名・小名の重臣で、家務を總理するもの。こゝは(二)の意。

【武士】 ブシ。武を以て主君に仕へるもの。武藝を習ひ、一朝事ある時、戰陣に出て敵と戦ふことを任務とする人。ものゝふ。さむらひ。武者(ムシヤ)。

【妙法】 メウホフ。法華宗、即ち日蓮宗。同宗の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙

法蓮上人の教旨は妙



法蓮華經にあるから、かやうにいふ。

【歸依】 キエ。神佛の威徳に歸順し、依託すること。神佛を信仰してそれに依頼すること。

讚阿彌陀佛偈に「歡喜讚仰、心歸依、下至一念、得大利。」

謡曲の吉野靜に「歸依渴仰の御袖に。」

【門下に列り】 モンカにツラナリ。門人の仲間入りをし

て。  
【門下】は師の門に入つて教を受けるもの。門人。門弟子。

後漢書の承宮傳に「過徐盛廬聽經、遂請留門下。」

【不惜身命】 フジャクシンミヤウ。身命を惜しまないこと。死を厭はないこと。日蓮は常にこの語を唱へた。

法華經の譬喩品に「若大精進、常修慈念、不惜身命、乃可爲說。」

醒睡笑に「いかなる不惜身命の行者なれば、この佛閣には住める。」

【龍口】 タツノクチ。鎌倉時代の刑場の地。今神奈川縣鎌倉

倉郡片瀬町龍口寺のある地の邊。鎌倉時代には常にこの地で刑死・梟首を行ひ、その以後も屢々こゝを死刑執行の地としたらしい。建治元年（一九三五）元使の來た時も、この地で斬首を行つた。

【龍口の御難】 日蓮四大法難の一。文永八年（一九三一）淨土宗の行敏は日蓮の念佛無間の説を難詰して幕府に訴へた。日蓮は出府してこれを辯駁し、且平頼綱に謁して大いに諫喚した。日蓮はこれによつて罪を得、將に龍口で斬られようとした。をりから鞠のやうな光る物が江の島の方から飛んで来て空を照らし、太刀取の太刀が段々に折れた。かくて日蓮の命は不思議に取止められ、佐渡に謫せられた。これを龍口の法難といふ。

弘安年中に至つて、門下の六老僧は相謀つてこの地に一寺を創し、その遺跡を傳へた。寂光山龍口寺は即ちそれである。

【轡】 クツワ。「口輪」(クチワ)の轉。馬の口中にはましめる具。手綱をつけて馬を馭するに用ひる。

【慟哭】 ドウコク。大聲をあげてなげくこと。痛歎して號泣すること。

李白の詩に「歸來愴途窮、日暮還慟哭。」

【刑場】 ケイチヤウ。死刑を執行する場所。しおきば。

【殉死】 ジュンシ。主君の死んだあとを追うて自殺すること。おひばら。

王粲の詩に「自古無殉死、達人所共知。」

【節義】 セツギ。みさを守り義を立てること。みさを。

黃石子に「節義之士、不可以刑威脅。」

陶淵明の詩に「聞有田子春、節義爲士雄。」

【幾多】 イクタ。なにほど。どのくらゐ。いくばく。こゝは數の多いことで、「たくさん」といふ意に用ひられてゐる。

【消息文】 セウソクブン。又、セウソクゴブミ。用事をしるし、又は人の安否をたづね、若しくは自己の狀況を記して他人におくる文書。手紙の文。書簡文。

源氏物語の帚木の卷に「いと清げに、せうそこぶみにもかななといふものを書きませず、うべ／＼しくいひまはしはべるに。」

【至情】 シンジャウ。至りきはまる情。至極の情誼。まごころ至心。

揚雄の答劉歆書に「至情之所想遺也。」

【就中】 ナカンヅク。「中に就く」の撥音便。多くの中にとりわけて。特に。

保元物語の爲義最期の條に「今改めて死罪に行はるべきにあらず。就中故院御中陰なり。」

【殿】 トノ。高貴の人の住む宏壯な建物。轉じて高貴の人又は主君を呼ぶ敬稱。こゝは四條金吾をさしていふ。

【地獄に墮せられなば】 地獄におちこまれましたならば。「地獄」は三惡道又は五趣の一。梵語 Niraya (奈落迦)、又 Niraya (泥囉夜)、地獄はこの義譯。惡業の衆生が死後に墮つべき地下の牢獄。閻浮提の地下五百由旬(一由旬は三十支里に當るといふ)に無間地獄があり、その上に重々層をなして大焦熱・焦熱・大叫喚・叫喚・衆合・黑繩(コクジョウ)等活の七地獄がある。これをあはせて八熱地獄(八大地獄とも)いふ。各地獄の四面には各、一門があつて、門外に各、四小地獄が附屬してゐるから、一地獄には合はせて十六遊增地獄がある。八地獄を合して百三十六地獄となる。又八地獄の周圍には更に八寒地獄といふがある。これと八熱地獄とを合はせて八寒八熱地獄



といふ。十悪・五逆等の不善業を行じた者はこれに墮ち、獄卒に苦しめられるといふ。

【假令】 豫め假に事を設けて言ふときに用ひる語。よしんば。よしや。「縦令」「假使」なども書く。

【釋尊】 シャクソン。釋迦牟尼世尊の略。

【釋迦牟尼】は佛敎の始祖。釋迦牟尼佛・釋迦牟尼如來・釋迦牟尼世尊等と尊稱し、略して釋尊とも、世尊ともいふ。

釋迦(Sakya)は種族の名で、能仁と譯し、牟尼(Muni)は寂默又は遷人と譯する。即ち釋迦種族から出た聖人の意。西紀前五六五年(但し異説もある)四月八日中印度迦毘羅城主淨飯(ジャウボン)王の皇太子(悉達太子)として降誕した。幼時婆羅門の聖典を學び、武藝を修めたが、人生の生老病死の四苦を觀じて出家度生の念を起し、遂に二十九歳の或夜竊に城を遁れて出家した。

かくて苦行林の婆伽婆(バカバ)仙、王舍城外の阿藍迦羅摩(アランカラマ)仙及び優陀羅(ウッダラ)仙の許に至つて出塵の要道を求めたが、遂に宇宙の大眞理を求めらるには無師獨悟に若しくはないことを覺り、乃ち尼連禪

河(ニレンゼンカ)を渡り、優婁頻羅(ウルピンラ)村の樹木に入つて苦行すること六年、三十五年の二月八日の曉の明星を見て豁然として大悟し、「我と天地有情と同時成道」の確信を得て、三界の大導師となつた。これより愈々衆生濟度に向つて精進し、先づ鹿野苑(ロクヤラン)に橋陳如(ケウチンニョ)等の五比丘を度したのを始めとして、摩揭陀(マカダ)、迦毘羅(舎衛)・王舍等の都邑に於て說法教化に努め、最後に拘尸(クシナ)城の婆羅樹林の間に於て須跋陀羅(シユバダラ)を度し、八十歳の二月十五日に入滅した。釋尊一代四十五年の說法を古來判類して、華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃の五時敎とする。弟子の甚だ多い中に、舍利弗・目蓮等の十人が最も顯れてゐる。世にこれを十大弟子と稱する。

【十方の諸佛】 十方世界、即ち全世界にまします多くの佛。「十方」は四方と四隅と上下との稱。蘇軾の詩に「十方三界世尊面。」佛經に「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨。」

謡曲、羽衣に「二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに。」

【淨土】 ジャウド。佛菩薩の住する、五濁(ゴジョク)なく惡道なき清淨微妙の國土。淨刹・淨界・淨國などともいふ。穢土(エド)の對。

大乘では佛のある處には必ず淨土があるとして、十方無量無邊の淨土を説く。かく諸佛がそれ／＼淨土を構へ、これを莊嚴する所以は、自ら法樂を受用すると共に、衆生が障縁の多い穢土にあつて、道の成じ難きを感んで、これを淨妙の土に生ぜしめ、菩提を成じ易からしめんがためである。

十方に諸佛の淨土があるうち、後世西方往生の思想が隆盛となるにつれ、特に彌陀の西方極樂世界を指して淨土と呼ぶやうになつた。

【恩愛の濃かなること云々】 いつくしみの心のあつては、他にたとふべき何ものもない。「恩愛」は、いつくしみ。めぐみ。

後漢書の禮樂志に、「恩愛寢薄。」

【天下の威武を敵として云々】 日蓮が、時の執權として飛ぶ鳥もおとすほどの威武を振つてゐた北條時頼を敵とし

てこれに反抗し、一步もひけを取らなかつたことをたへていふ。

【退讓】 タイジャウ。へりくだること。ひかへめにすること。

史記の衛將軍傳に「大將軍爲人仁善退讓。以和柔自媚於上。」

【大丈夫】 男らしい男。丈夫は男子。「丈」は周尺の八尺。普通男兒の身長。「大」美稱。孟子の滕文公章句下、は富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫。」

【兒女の涕淚】 ジヂョのティルキ。女子供のやうになみだをながして泣くこと。やさしい愛情。涕淚は、なみだ。涕泗。

晉書の王裒傳に「涕淚著樹、樹爲之枯。」

【生涯】 シャウガイ。この世に生きてゐる間。一生の中。莊子の養生主に、「吾生也有涯、而知也無涯。」平家物語卷七、忠度都落の條に、「生涯の面目に一首な



りとも御恩を蒙らうと存じ候ひつるに。」

【本化門下の龜鑑】 ホンゲモンカのキカン。日蓮上人の弟子たちの手本。本化門下は日蓮上人の門下。

【本化】は本化菩薩。釋迦の本地なる久遠佛の弟子。

釋迦の本地は久遠元初の昔に成佛した本佛（眞理中心の本體又勢力）である。而してその成道如來の弟子を本化菩薩といひ、これに本法（久遠本時に於て佛陀の證し得た實相の眞理）を護持し、讀誦し、流通せしめるといふ。（垂迹）後の弟子は迹化（シヤクケ）といふ。

釋迦牟尼が法華經を説くに當り、無數の本化菩薩が地より湧出した。その首座を上行菩薩といふ。釋迦はこれに自分の滅後に於ける法華經の弘通を寄託した。而して日蓮は、この本化菩薩の垂迹であると自信してゐたらしい。

（法華經及び田中智學著日蓮上人の教義等參看）は

【龜鑑】模範。手本。かゞみ。

祖庭事苑に、「龜、所<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>決<sub>ニ</sub>猶豫<sub>一</sub>、鑑、所<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>辨<sub>ニ</sub>妍豔<sub>一</sub>」蘇軾の文に、「聚<sub>ニ</sub>古今之精英<sub>一</sub>、實治亂之龜鑑<sub>一</sub>。」

【日本六十六箇國島二つの内に云々】「高祖遺文錄」の「波

木井殿御書」の中に、

たとひいづくにて候とも、九箇年の間心安く法華經を讀誦し奉り候なれば、墓をば身延山に立てさせ給へ。未來際までも心は身延山に住むべく候。日蓮は六十六箇國島二つの内に五尺に足らざる身を一つ置く處なく候ひしが、波木井殿の御育にて、九箇年の間身延山にして心安く法華經をば讀誦し奉り候ひつる志をばいつの世にかは忘れ候べき。知らず此の人は無邊行菩薩の再誕にてやおはすらん。云々

【身延山】 ミノブサン。山梨縣南巨摩郡にある靈山。富士川の西側、御阪層中に聳え、七面山の東に接してゐる。その中腹に日蓮宗の總本山たる久遠寺がある。

はじめ日蓮は鎌倉にあつて法華經を弘通し、「立正安國論」を著して幕府を諫曉すること三度に及んだが、遂にその聽かれざるを見、文永十一年（一九三四）五月地を身延に相し、こゝに草庵を營んで隠棲した。日蓮の寂後、高足六老僧は檀越波木井實長と圖り、一堂を建てて



遺旨を奉じ、各々輪番を以て祖廟を守つたが、後日向を第二代の主と定めた。それから百餘年を経て、文明六年（二二三四）十一世日朝の時に至り、大いに地を擴げ、堂塔、樓閣を造營し、一山の規模が悉く完備した。後數度火災にかゝつた。今の祖堂は明治十四年の再興にかゝる。

山頂には奥の院がある。その思親閣は、日蓮が九ヶ年の間一日に一度は必ず攀登つて遙に故郷なる安房の峯巒を望み、考妣を追慕した遺跡である。

【嶮山】 嶮岨な山。けはしい山。

源平盛衰記卷十四、三井寺會議の條に、「女意峯の手は、物の具を着して嶮山を登りける上に、五月二十日餘りの事なれば。」

【故郷】 コキヤウ。自分の生れそだつた土地。ふるさと。

故山。郷里。郷關。

禮記の三年間に「則必反巡、過<sub>ニ</sub>其故郷<sub>一</sub>。」

史記の項羽紀に「富貴不<sub>レ</sub>歸<sub>ニ</sub>故郷<sub>一</sub>、如<sub>ニ</sub>衣<sub>レ</sub>繡夜行<sub>一</sub>。」

太平記卷一、玄慧文談に「遙に故郷の方を顧みれば。」

【房州】 バウシウ。安房國。關東地方東南隅の一國。

房總半島の南端の丘陵地。全國千葉縣に屬し、一國を通して、安房の一郡をなす。

【煙波】 水煙がたつて廣々と見える波。

江總の詩に「日向<sub>ニ</sub>煙波<sub>一</sub>長。」

崔顥の詩に「日暮<sub>ニ</sub>鄉關<sub>一</sub>何處是、煙波江上使<sub>ニ</sub>人愁<sub>一</sub>。」

【比較】 ヒカウ。俗にヒカクとよむが、これはよろしくない。

彼と此とをくらべること。

【美談】 ビダン。ほむべきものがたり。稱美すべき談話。

公羊傳の閔公二年に「魯人至<sub>レ</sub>今<sub>一</sub>以爲<sub>ニ</sub>美談<sub>一</sub>。」

【甲州】 カフシウ。甲斐國の別稱。東海道の一國。富士山







む。」

【たとしへなく】 他のたとふべきものがないほどに。他にくらべるものもないほど。

宇津保物語の樓上の巻の下に「いとたとしへなく。覚えたまはむをこそ人はうたてなむ見奉れ。」

【人に忍び世に戻る】 他人から如何に迫害を加へられようと、又非難されようと、一向ひるまず、世間から如何に冷遇されても、虐待を受けても、非議されても、毫もそれを意に介しないで、自己を保持すること。

【偉人】 キジン。すぐれて立派な人。偉大な性格をそなへてゐる人。

魏志の鍾繇傳に、「此三公者乃一代之偉人也。」

【遺れ】 ワスレ。字典に「遺忘也、棄也。」とある。

【情愛】 ジャウアイ。なさけ。いつくしみ。

李群玉の詩に「尙爲情愛縛、未盡金仙旨。」

【融會】 ユウクワイ。とけあつて一つになること。

隋煬帝、重興智者議啓に「智者融會、盡有階差。」

【全人格】 ゼンジンカク。人格の全部。

人格は Personality の譯語。人間に於て恆常的、自己意識的、自己決定(自律)的、目的意識的等の特性を具備する統一ある自由の主體。これは物件のやうに他の目的や手段たるべきものではなく、絶對的價値を有する目的そのものである。

【薔薇の織物】 薔薇の模様を織り成した織物。薔薇(バラ)は薔薇科の灌木。葉は羽状複葉で光澤がある。莖及び葉柄には刺(トゲ)を有する。在來の「かうしんばら」・「なにはばら」等の外に、美花・大輪又は芳香を有する歐米改良の園藝種が甚だ多く、純黄・純白・濃紅・淡紅・淡橙・橙黄・銅赤・クリーム等、花の色は種々ある。その楚清又は濃艶の色彩は芳香と共に廣く愛好せられ、露地又は鉢に植ゑ、或は温室に栽培して、四時切花として觀賞し、小輪の蔓薔薇は洋風の垣又は壁に攀(ハ)はせる。花期も二季咲・四季咲などがある。花はまた香水の原料となる。

【刺】 トゲ。植物學上の語。木苺・薔薇等の莖の表面に散在する刺狀の突起物。表皮細胞の變形したものと。とき。のぎ。

9 挿 圖

日蓮の開宗 横山大觀筆

日蓮が南都・北嶺等の諸碩學を訪うて佛教の秘奥を極めた後、後深草天皇の建長五年(一九一三)故郷なる安房の小湊に歸つて清澄山にのぼり、東天旭日を拜して南無妙法蓮華經の題目を高唱し、愈々法華宗の一派を開くところ。

(釋義「日蓮」參看)

筆者横山大觀、本名は秀麿。東京府人酒井拾彦の長男。明治元年八月水戸市に生れた、後横山氏を繼いだ。

東京中學校・英語學校を経て、明治二十六年東京美術學校日本畫科を卒業した。後橋本雅邦について研鑽し、伊勢神宮圖會の委託を受け、京都・奈良に於ける社寺寶物の寫生に従事すること二年に及んだ。同二十九年京都美術學校教授に轉じたが、在職一年にしてこれを辭し、岡倉覺三・下村觀山等と謀つて日本美術院を創立し、同院を主宰して今日に至つた。昭和五年伊太利ローマに於ける日本美術展覽會に招聘せられた。近年更に印度に航し、ついで歐米を巡遊した。實に日本畫壇の巨匠である。

續

法華經第七ニ云フ、若シ復人有リ、七寶ヲ以テ三千大千世界

ニ滿タシ、佛及ビ大菩薩・辟支佛・阿羅漢ニ供養スルモ、是人ノ得ル所ノ功德ハ此ノ法華經乃至一四句偈ヲ受持スル其ノ福ノ最モ多キニ如カズ。(日蓮花押)

田中智學者「日蓮聖人の教義」の卷頭にあるものから取つた。

同書の例言に、「正中山藏寶金珠抄中ヨリ、ソノ所引、藥王品ノ全文ヲ抄寫スル所。」とある。

藥王品第二十三は、法華經第七に屬し、この經の功德を賛歎したものである。

「法花經」は「法華經」に同じ。釋義中の「法華經」參看。

「七寶」(シツ・パウ)は金・銀・瑠璃・珊瑚・瑪瑙・眞珠・琥珀。

「三千大千世界」は、無數の世界。一の須彌山、一の日月、一の四天下、及び上は六欲梵世天に至るを一世界とし、それを千箇集めたものを小千世界といひ、小千世界の千倍を中千世界、中千世界の千倍を大千世界、その又三千倍の世界を三千大千世界といふ。

「佛」は佛陀(Buddha)の略。覺者又は智者と譯する。佛は釋迦牟尼の稱。釋義の「釋尊」參照。

「大菩薩」ダイボサツは菩薩の尊稱。菩薩は菩提薩埵(Bodhi-sattva)の略。大覺有情と譯す。佛に次ぐ位置、即ち勇猛心を以て菩提を求め、大慈悲を以て衆生を救ひ、已に妙覺の果



に近づいたもの。

「群支佛」(ビヤクシブツ)は梵語「緣覺」と譯す。飛花落葉に啓發せられて、宇宙人世を觀じ、悟を開くもの。

「阿羅漢」(アラカン)は梵語。供養をうくべきものといふ義。煩惱を脱し、生死を離れたもの。略して羅漢。

「供養」(クヤウ)は佛・法・僧の三寶又は父母・師長・亡者等に物を供へて供養すること。

「功德」(クドク)は現在又は未來を資益するよき作業。又これより來る善きむくい。

「乃至」(ナイシ)は、(一)上下をあげてその中間を略する語。(二)また。或は。且。こゝは(二)の意。

「一四句偈」(イチシクゲ)は四句偈の一聯。「四句偈」とは、經文中の四句より成れる韻文體のもの。略して單に「偈」ともいふ。「偈」は梵語伽陀(Gatha)の略。頌の義。四句を以て完備せる意義をあらはすを普通とする。頌頌。偈頌。四句。

「受持」(ジュヂ)はうけたもつこと。守ると。講曲、身延に「受持し讀誦せん云々」の語も見えてゐる。

持し讀誦せん云々」の語も見えてゐる。

10 参考

今左に釋牛の筆にかゝる況後錄の一節をこゝに採録しよう。

況後錄

而此經者

猶多怨疾

如來現在

況滅度後

(法華經法師品)

「伊東に死なず、龍の口に斬られず不思議に存へし命も、此處佐渡が島を今は最後の地と覺ゆるぞ。あら嬉しや、人々此程の喜をば笑へよかし。日蓮程の果報の者また世にあるべしや古より君のために死せしもの、親のために死せしもの、妻子財寶のために死せしものあれども、法華經のために臭き頭を刎ねられては、砂に黄金を代へ、糞に米を替ふるに同じ。命こそは霜露の日影を待つばかりの命ながら、化城の迷途に去りて、靈山の開顯眼前にあり。頸は鋸にて引きも切られよ、胸は稜鋒も貫かれもせよ、足には絆を打ちて雖もみにもせよ。此の息の根の通はんほどは、南無妙法蓮華經の聲をばよも絶たじ。

吾はこれ粟散の邊土、安房東條の栴陀羅が子、身賤しくして性劣れり。智解に於ては天台・傳教が千分の一にだも及ばじされど法華經の行者なるが故に、即ちこれ一天の眼目、四海の柱石なり。六難九易の教、三障四魔の説は素より熟く知れり。帷々末法不祥の世に生れたる身の、法王の宣旨黙し難く身命を抛つて救世の大願に志し、こゝに權實二教の軍を起し忍辱の鎧を着、妙教の劍を掲げ、一部八卷の肝心、妙法五字の旗をさしあげ、折伏の戰に従ふことこゝ二十餘年、あはれ

法華經の行者が爲すべき程の軍は、日蓮ほど仕達げたりと覺ゆるぞ。この經のためには、大覺世尊だに九横の大難に値ひたまひき。不輕菩薩は杖木瓦石を波りき。竺の道生は蘇山に流され、法道三藏は面に火印をあてられ、天台大師は南三北七の仇となり、傳教大師は六宗に憎まれたまひき。日蓮こそは居所を逐はるゝこと二十餘度、敵人の戕害に臨みしこと三たび、一度は頸の座に据ゑられ、二度は遠流の罪に行はれて今やこの北海の孤島に明日をも知らぬ命とはなりたるぞ。あ

あ嬉しや喜ばしや、古賢先聖だに讀み給はざりし妙法の極意をば、今ぞ日蓮こそは讀みたんなれ。勸持品二十行の偈は、日蓮だに、この國この世に生れ、別してこの島に流されずば世尊一代の大妄語となり果てなんぞ。如何に人々、一代聖經の付屬はまさしく日蓮が頭にかゝれりと覺えたり。これほどの譽れをば祝へよかし、これほどの慶びをば笑へよかし。日蓮最早この世に望むところなし。

されど願みれば心地よきわが越しかたかな。三類の強敵はわがための善智識ならずや。北條氏なくば法華折伏の本意をいかにすべき。末法付屬の未來記はまさしく日蓮が生涯に記されたり。刀杖瓦石もて身に流されたる日蓮が血潮は、やがて妙法勝利の願文に染められたり。昔者半偈のために體を投げ

身を燒きしものだにありしを、日蓮が身の幸をいかにとか見ん。中にも龍の口に頸の座こそ面白かりけれ。いでこゝ一期の思出に、日蓮が今生の不思議を書きのこさんず。」中略

日蓮悦んで曰く(中略)昔者樂法梵志は僅が半偈の悟を得んがために、その皮を剝いで紙となし、その骨を削りて筆となし、その肉と血とを絞りにて墨水となしき。雪山童子は身を魔王の口に投げて悔いざりき。法華經の御爲に捨つる身の幸こそ嬉しけれ。

如何に人々、勸持品二十行の偈をば、吾等常にいかに讀み奉りたる。三類の強敵は言ふに及ばず、もろくの比丘等の利養を貪り、名聞を求むる徒、國王大臣に向つて法華經の行者を誹謗し、毀傷すべしとは即ち今の吾等の身の上ならずや、數々見擯出の五字は日蓮が徒これを讀まずんば、何人かこれを讀むべき。身は佛識を現じてこの惡世に導師となりぬ。喜ばしや。

されば苟にも日蓮が弟子と名のらん人々は、一人も臆すべからず。鎌倉殿の弓矢のために駈らるゝ我等が忍辱の體かは、逃げもせされ、隠れもせされ。所領ある者は所領を與へよ、親ある者は親を棄てよ、妻子ある者は妻子を思ふなけれ。首

親ある者は親を棄てよ、妻子ある者は妻子を思ふなけれ。首

首

首

首

首



も勿ねられなん、手足も切られなん、是の臭き軀を離れて寂光の樂土に向はんととき、妙法五字の旗高くさしあげて、吾こそは日本第一の法華經の行者よと聲高々と名のらんはいかに。所詮はおの／＼思ひきりたまへ。この身を法華經に替ふるは石に珠を替へ、砂に黄金を替ふるなり。佛滅後二千二百二十餘年の間、迦葉・阿難等、馬鳴、龍樹等、南岳・天台・妙樂・傳教等だにも未だ弘め給はざりし法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に、一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮先がけしたり。若輩ども、二陣三陣つゞいて、迦葉・阿難にも勝れ、天台・傳教にも越えよかし。佛の御使と名のりながら臆せんは無下の人々なり。〔下略〕

八

「昔者、釋尊多寶塔中に坐して妙法を説き給ひしとき、五十小劫、佛の神力の故に半日の如くおもはれき。今の二十年、幾月短きにあらざれども、法華經を身讀せる日蓮が身に取って片時の如く思はるゝぞかし。末法弘通は塔中附屬の大願、法華折伏は聖經自爾の本義、日蓮身上行の使命を受けて、法華經の行者が爲すべき程の事、ほど爲し遂げきと覺ゆるぞ嬉しき。あはれ、鎌倉殿吾に於て何かあらん、六宗の緇素もとより墮獄の徒なり。われそれ獨り誓つて日本の眼目となるべ

きなり。北海波荒く、孤島雪深けれども、苟も化城の迷を離れて本土の開顯にだに與らば、吾等が居住して一佛乘を行ぜんところ、いつこか寂光の都ならざるべき。靈山の道は一步の外にあり、本有の淨土晝夜に往還すべし。何ぞ鎌倉と龍の口と佐渡とを問はんや。於我滅度後、應受持斯經、乃至速爲疾得、無上佛道と説かれたる聖經の文空しくば、諸佛の舌も切れなん、多寶の塔も壞れなん、寂光の上も地獄の巷と變じなん。詮ずるところは、天も捨てたまへ、諸難にも逢へ。身命を期とせん、善につけ惡につけ法華經を捨つるは地獄の業なるべし。大願を立てん、日本國の位を譲らん、法華經を棄てて觀經等に就いて後世を期せよ、父母の頸を刎ねん、念佛申さずば、などの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば用ひじとなり、その外の大難風の前の塵なるべし。われ日本の柱とならん、われ日本の眼目となん等と誓ひし願破るべからず。』

南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。」

（終）

なほ、楞牛は、文末に、

この篇は種々御振舞御書、開目鈔、如説修行鈔、佐渡御書、觀心本尊鈔、最蓮房御返事等に據りて述べたるもの。私意を加へたる處少し。上人追懷の事は假構に出づとい

へども、文中「』を施し』は、上人御書の原文をそのまま用ひたる處を示す。謹みて聖文を汚すの罪大なるを謝す。（楞牛）と附記してゐる、



## 二〇 故郷の花

### 1 解題

源平盛衰記の第三十二「落行く人々の歌」忠度淀より俊成に調する事」の條の抄録である。

題名「故郷の花」は本文の中なる「故郷の花といふ題に云々」中の一句を取つて名づけたものである。

「源平盛衰記」(ゲンペイセイスキ)について、左に簡単な解題を示さう。

1 作者 不明。果して一人の作者が全部を書きあげたか否かが先づ問題となる。葉室時長だとの説もあるが、確かな證據があるわけではない。

2 時代 随つて不明

3 平家物語との關係 その題材や記事の順序が殆ど同一で、ただ繁簡の差があるのみである。随つて兩者の先後關係が先づむづかしく、且興味ある問題となつてゐる。一説には、平家物語は保元物語や平治物語のやうに三卷であつたが、後流布本平家物語の十二卷となり、長門本平家物語の二十卷とな

り、更に盛衰記のやうに四十八卷まで成長發達したと考へられてゐる。なるほど三―一―四八は妙に工合のよい數字を示してゐるし、戦記文學は社會的・民衆的に成長發達してゆくものだといふ説に照らし合はせて見ると、首肯されぬことはない。しかし藤岡作太郎や野村八良は平家物語の方が盛衰記を抄約したものであると考へてゐる。思ふに記事の繁簡といふうちにも、簡単な記事でもちやんと獨立してをればともかく、平家物語は盛衰記を以て補はねばどうしてもその意味を捕捉することの出来ない、つまり抄約したといふ痕跡のありありと見えるものがあるのである、しかし、繁簡といふうちにも、盛衰記は記述物であつて、文飾があるが、平家物語には舞臺的のところがあるので、兩者は成立の動機がちがふのではあるまいかと思はせるふしもある。即ち語り物としての平家を豫想することが出来るのである。同時に盛衰記はその名の示すが如く源平の盛衰を主題としたものであるが、平家の方はその主題を局限したところに一層文學的要素が多いのではないかと考へられる。

### 4 註本



黒川眞道藏本  
御物本  
中御門宣衡本  
(参考本) 寫本  
松井簡治藏本  
古活字本  
片假名整版本 版本  
繪入版本  
帝國文庫本  
國民文庫本 活版本  
通俗日本全史本

## 2 編纂の用意

前課に於て學んだ傑僧日蓮上人は、豪邁不屈なる一面、人情にあつく、恩愛に濃かであつた。本課に於て學ぶべき武將忠度は、勇猛果敢なる一面、文事に關するゆかしいたしなみがあつた。この兩者の性格行動等には、一脈相通するもののあることは、たれしも直ちに看破するであらう。本課をこゝに置いたわけは、これらの偉人に關する史實を知らしむると同時に、その人となりを明らかならしめ、以て豪邁と情愛、剛と柔、文と武との兩面

の、人格練成上に缺くべからざる所以を十分に知らしむるにある。  
若しそれ文章に至つては、平明暢達、眞にこの種の文の範とするに足るものである。これを平家物語なる同様の記事に比較すれば、總體的には「平家」の方がすぐれてゐるやうでもあるが、用語に無理がなく、且行文が流麗にして些の滯滞もなき點は、本書の方に一日の長があるやうにも考へられる。加之「平家」の文は他に幾つも採用して、むしろ多きに過ぎる位である。これ特に「平家」のそれをさしおいて、この一篇をこゝに採つた所以である。  
9、参考欄參看。

## 3 要旨

薩摩守平忠度が都落の途中から引返して、家集一卷をその師俊成に託し、一首なりとも入撰の恩にあづかりたいと願つて別れて行く優しい物語である。  
一門没落の際に於て、なほ一首の詠の撰集に入れられることを願ひ、それを生涯の面目としようとする。豪勇の

武將でありながら、一面にはこの優しい心根から、わざわざ勾劇の中を都に引返して來た忠度は、たしかにあはれにも優なる藝苑の一名花と稱するに足りる。その忠度の心根を汲ませると共に、俊成との交渉、殊に訣別の場面の劇的の趣を寫し出し得た文章の巧緻と會話の妙趣とを味讀せしむべきである。

## 4 概説

第一節(一一六頁—一一七頁二行) 一門と共にあわたくしく都を落ちて淀の川尻まで下つた薩摩守忠度は、夜にまぎれて都に引返し、五條の三位俊成卿を訪れ、志の程を述べて自らの歌集一卷を託し、向後撰集のことのある時は、たとひ一首なりとも御惠によつて撰ばれたいと熱誠をこめて頼む。

第二節(一一七頁末行—一一九頁二行) 俊成は快く忠度の乞を納れた。忠度は今は思ひ残す所はないとて、古詩を吟じつゝ落ちて行く。俊成はこれを見送つて感慨に堪へず、涙を流す。

第三節(一九頁三行—) 後日譚、源平の争亂の鎮まつた

後、果して俊成は撰集の御沙汰を承つた。忠度の歌一首は讀人知らずとして千載集に加へられた。

## 5 取扱上の注意

□この物語をば、妄りに感傷に墮したものと評し去つてはならぬ。もつと深く考へて見ねばならぬところのあるのを思はせたい。それについても、一面に主人公忠度の剛勇を説話する必要があらうと思ふ。源平盛衰記では卷第三十七に、平家物語では卷九に、何れも「忠度の最期」の話が出てゐる。それによつても、忠度がいかに立派な武士であつたかが知られ、この物語のゆかしい趣が、一層深く味ははれるのである。

□この日頃日本國に鬼神と聞えさせ給ひたる薩摩の守殿をば、武藏國の住人岡部の六彌太忠澄が討ち奉つたるぞや。」と名乗つてゐるが、實は六彌太などに討たるべき忠度ではなかつたことは、前記のその條を披いて見れば、すぐ分るのである。

□「……形見に傳はり侍れかしと思ひ出でて云々」(一一七頁二行)そこには、歌に生きようとする、即ち、藝術の



不朽に自我を託して安んじようとする忠度の心が動いて  
ゐたと見られる。

【……水屑となさんこと遺恨に侍り。】(同頁七行)この愛  
惜は決して安價な未練と見てはならない。

【あはれなるにも涙、優なるにも涙云々】(一一九頁一行  
……)いはゆる唇語法で、俊成の心中の描寫が中々巧妙  
に行はれてゐる。

6 設問

1 次の語句の意義を解釋せよ。

イ、如法。いぶせき夜半。見參。歌仙の指南。勅撰。

ロ、藻鹽草かきおく末の言の葉、後の世までも朽ちぬ  
形見に傳はり侍れかし。

2 忠度の言動をば、前課の論説の何れの點にあてはめ  
て見るべきか。

7 釋義

【薩摩守忠度】 サツマノカミタマノリ。平忠盛の末子。清  
盛の弟。齊力業にすぐれ、兼ねて和歌をよくし、藤原俊

成を師とした。仕へて正四位下薩摩守に至つた。養和元  
年には甥平重衡と力を合はせて源行家を洲股川に破り、  
壽永二年には源氏の將足利義清が丹波から京都を犯さう  
とするのを拒いだ。翌三年一ノ谷の戦に西門を守つたが  
軍利あらず、水濱に走つて岡部忠澄と戦ひ、遂にその首を  
揚げた。忠澄は後その鎧を検して自書の歌集一卷を得、  
卷中の姓名によつて忠度たることを知つたといふ。  
歿年四十一。

京を去るに臨み、深夜にその師藤原俊成の許をおとづれ  
て歌稿を託した雅話は本文の通り。

【入道】 太政入道平清盛。清盛は薙髮して入道し、淨海と  
いつた。

【入道】とは、三位以上の人で佛門に入つたものを稱する  
語。

【清盛】は刑部卿平忠盛の長子。保元・平治の亂、源氏の勢  
力を打破し、功を以て參議に任ぜられ、累進して従一位、  
太政大臣に陞つた。次いで職を辭し、薙髮して淨海とい  
つた。よつて世に太政入道といふ。後その妻の妹が生み

まゐらせた高倉天皇を立て奉り、その女徳子を納れて中  
宮となし、皇室の外戚となつた。武臣にして皇室の外戚  
となつたのは、これが始めである。爾來清盛の子弟は悉  
く顯要に列し、皇室を凌ぎ、勢威朝廷を壓した。次いで

平氏を除かうとした藤原成親等を斬流に處し、子重盛の  
薨後、恐れ多くも後白河法皇を幽し奉り、又中宮徳子の  
生みまゐらせた安徳天皇を御位に即け奉つて、一時都を  
攝津の福原に遷した。その横暴専恣は遂に人の惡むとこ  
ろとなり、以仁王の令旨は諸國の源氏を奮起せしめ、平  
氏衰亡の端を開いた。養和元年(一八四一)熱病にかゝ  
つて薨じた。年六十四。

【舍弟】 シャテイ。家の弟。實の弟。

杜甫の詩に「遙憐<sup>レ</sup>舍弟存<sup>ニ</sup>」

源平盛衰記卷八、八牧夜討の條に「今夜則ち夜討を入  
るべし。舍弟等を相催し給へ。」

【淀の川尻】 ヨドのカハジリ。淀川の川口。

淀川は近畿地方に流れる河。源を琵琶湖に發して瀬田川とい  
ひ、笠置山脈を横斷して峽谷をなし、宇治川となつて京都盆地  
の南に出で、巨椋池(ヲグラノイケ)の北を迂回し、淀の南を

過ぎてから淀川といひ、南から木津川を、北から桂川を容れ、  
陸路を切つて大阪平地に出で、略一直線に南西に流れる。ヤ  
がて大阪市に入り、安治川・木津川等に分流して大阪灣に注  
ぐ。流程七十九軒。

【川尻】とは川水が海や湖などにそゞぎ入るところをい  
ふ。川口。古事記の中卷に「至<sup>ニ</sup>吉野川之川尻<sup>ニ</sup>」

【郎等】 ラウドウ。わかもの。家の子。家來。家人(ケニ  
シ)。從者。

郎從。郎黨。  
朝野群載卷廿二に「郎等之中、選<sup>ニ</sup>定清康勇士<sup>ト</sup>」

源氏物語の玉葛の卷に「はかしく身助とおもふ  
らうどうども、皆みて來にけり。」

【相具して】 アヒダして。めしつれて。ひきつれて。

【具す】は、ともなふ、つれだつ、などの意。

夫木抄卷、八に「澤水にほたるの影の數そふはわがた  
ましひやゆきてぐすらむ」

【如法夜半】 ニヨホフヤハン。全く夜半。眞の夜なか。

【如法】は、(一)法の如く。かたのとほり。(二)眞に。全く。  
こゝは(二)の意。



保元物語の内府異見の條に「十一日の如法夜更けて。」  
盛衰記卷二十、工藤介自害の條に「如法肥え太りたる  
男なり。」

【五條三位俊成卿】ゴデウノサンミシュンゼイノキヤウ。  
藤原俊成。正三位に敘せられ、その家が五條松原通室町  
の西にあつたので、五條三位といふ。卿は公卿即ち高位  
高官の人々の尊稱。

「藤原俊成」トシナリ、音讀してシュンゼイともいふは平安朝  
末期の歌人。和歌師範家の始祖。權中納言俊忠の子、定家の  
父。果進して正三位、皇太后宮大夫に至つた。後嗣襲して釋阿  
といつた。和歌を藤原基俊に學び、一代の歌人に推された。し  
かし俊成は源俊賴の歌を愛し、専らその格を取つたといふ。後  
白河院の勅を奉じて千載集を撰進した。元久元年（一八六四）  
薨。年九十一。

「古來風體抄」の外に「家集長秋詠藻」等の著作がある。

【門を敲く】モンをタ、ク。門をこつ／＼とたゞいて、刺  
を通じ、謁を求むるをいふ。

【いぶせき夜半】陰鬱な夜なか。

【いぶせし】は氣の晴れぬこと。うつたうしいこと。

萬葉集卷四に「ひさかたの雨の降る日をただひとり山

邊に居ればいぶせかりけり」

【青侍】セイシ。公家の家に仕へる身分のひくい侍。あを  
さむらひ。

浦島年代記卷一に「當番の近習・外様・青侍（セイシ）等  
に至るまで。」

宇治拾遺物語に「父母も主もなく、妻も子もなく、  
たゞ一人ある青侍（アヲザムラヒ）ありけり。」

【御見參に申し入れたき事ありて参りたり】御對面申した  
いことがあつて参りました。

【見參（ゲンザン）】は面會・對面等の敬語。略してゲン  
ともいふ。「見參に入る」とは、「お目見えをなす」「お目  
にかゝる」などの意。「申し」は敬語。

宇治拾遺物語卷三に「たゞ今見參すべし。そなたにし  
ばしおはせ。」

【大庭】オホニハ。禁中又は貴族の邸の前の廣い庭。

平治物語の待賢門の軍の條に「大庭には馬ども多くひ  
きたてたり。」

【世に恐れて】世間をはゞかつて。

【對面】タイム。「タイムン」の略。おもてをあはすこと。

相見ること。對顔。

唐書の房喬傳に「千里外猶對面語。」

宇津保物語の俊蔭の卷に「なかすみの君おはしければ、  
たいめして物語りし給ふ。」

【のたまひけるは】おつしやるやう。

【のたまひ】は「のりたまひ」の略。「言ふ」の敬語。

【御爲憚あれども】あなたの御爲に恐れ入りますが。

【所詮】ショセン。詮するところ。つまるところ。つま  
り。畢竟。

法苑義林章に「所詮説法者所詮義也。」

保元物語の白河殿義朝夜討の條に「所詮誰れ／＼も驅  
けさせ給へ。」

【一門】イチモン。同姓の一族。宗族。

古今著聞集卷十六に「召次の長になされたりけるに、  
一門のものども、悦びにつどひけるに。」

【榮華】エイガワ。世にときめきさかえること。富貴を極  
めること。

邊に居ればいぶせかりけり」

【青侍】セイシ。公家の家に仕へる身分のひくい侍。あを  
さむらひ。

浦島年代記卷一に「當番の近習・外様・青侍（セイシ）等  
に至るまで。」

宇治拾遺物語に「父母も主もなく、妻も子もなく、  
たゞ一人ある青侍（アヲザムラヒ）ありけり。」

【御見參に申し入れたき事ありて参りたり】御對面申した  
いことがあつて参りました。

【見參（ゲンザン）】は面會・對面等の敬語。略してゲン  
ともいふ。「見參に入る」とは、「お目見えをなす」「お目  
にかゝる」などの意。「申し」は敬語。

宇治拾遺物語卷三に「たゞ今見參すべし。そなたにし  
ばしおはせ。」

【大庭】オホニハ。禁中又は貴族の邸の前の廣い庭。

平治物語の待賢門の軍の條に「大庭には馬ども多くひ  
きたてたり。」

【世に恐れて】世間をはゞかつて。

爾雅の釋文に「木謂之華、草謂之榮。」

莊子の齊物篇に「道隱于小成、言隱于榮華。」

伊勢物語に「大きおとどの榮華のさかりにみまそかり  
て。」

【都に安堵せず】都におちついて住まふことが出来ない  
で。

【安堵（アンド）】は堵（カキ）のうちに安んじ居ること。

安心して住むこと。家業に安んじること。

史記の高祖紀に「吏民皆安堵如故。」

【勅撰の御沙汰】チヨクセンのオンサタ。勅撰和歌集を撰  
進せよとのおんおほせ。

【勅撰和歌集】とは、勅命によつて撰進せしめられる和歌  
集。「沙汰」は、

- (一) 是非を明らかにすること。
- 續一切經音義に「考聲云、沙汰濤洗也。案、沙汰即如  
沙中濤、洗其金、取中精妙也。」
- (二) 裁判すること。
- (三) 官府の指令・命令。



(四) 報道の流言。

こゝは(三)の意。

【縦ひ】 タトひ。豫め假に事を設けていふときに用ひる語。よしや。よしんば。縦令・假令・假使なども書く。古今集の序に「たとひ時移り事去り、たのしびかなしびゆきかふとも。」

【八重の鹽路の底】 ヤへのシホチのソコ。はるかに遠い海の底。

【八重の鹽路】 ははるかなる潮路。たいそう長い海路。やしほち。

後拾遺集の卷上に「はるくくと八重の鹽路におく網をたなびくものは霞なりけり」

【藻鹽草かきおく末の言の葉云々】 書きのこしておく拙い歌が、死んだ後も永久に形見としてつたはり残るやうにとおもひまして。

【八重の鹽路】「搔く」「葉」「朽つ」などは、共に藻鹽草の縁語。

【藻鹽草】は鹽を取るに用ひる海藻。搔き集めて製鹽の料

とするところから、歌などでは、多く「書き集む」にかけていふ。本文の場合も亦この例である。

狭衣物語卷三上に「もしほぐさかきあつめつうらみきこえたまふさま。」

【形見】(カタミ)は亡き人又は別れた人などを思ひ出すたねとなるべきもの。記念。

萬葉集卷十三に「わぎもこがたみに見むをいなみづま白波高みよそにかも見む」

【しのび上りて侍り】 そつと、人知れず、のぼつてまゐりました。

【年頃】 トシゴロ。つね日ごろ。年來。多年。

竹取物語に「使はるゝ人々も、としごろならひて、たちわかれなむことを……同じ心になげかしがりけり。」

【愚詠】 グエイ。おのれのよんだうたをへりくだつていふ語。つたない歌。まづい歌。こしをれ。

古今著聞集卷五に「この歌合は、愚詠をあつめたれども、秘藏のものなり。」

【水屑】 ミクヅ。水中の塵芥。水滓。

拾遺集、雜上に「みなそこに宿る月さへ浮べるをしづむや何のみくづなるらむ」

【遺恨】 キコン。恨みを遺(ノコ)すこと。残念。遺憾。

崔國輔の詩に「古人不達酒不足、遺恨清爽傳此曲。」大鏡卷下に「遺恨のわざをしたりけるかな。」

【砌下】 セイカ。大庇の下。雨だれおちのところ。切石ある階下の前。きさはしのもと。のきした。こゝは「お手もと」といふほどの意。

【進(マキ)らせ置き候】 さしあげておきます。

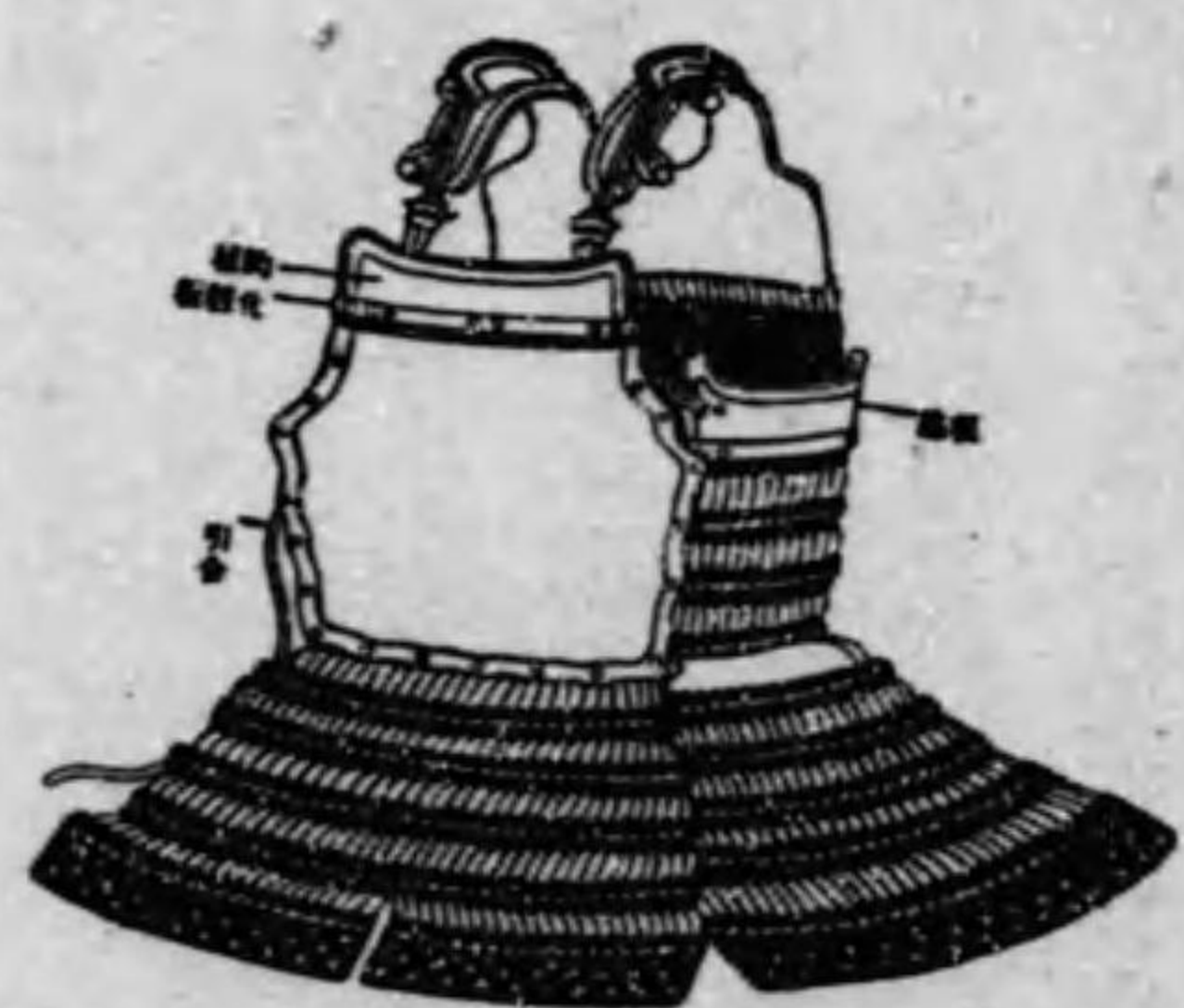
【巻物】 マキモノ。横に長く表装して軸に巻いたもの。巻軸。横巻。

源氏物語の梅枝の巻に「さうし、まきもの皆書かせ奉り。」

【鎧の引合はせ】 鎧の弦走(ツルシ)の腹に當る部分の右脇で、胴の後との合はせめの處。

回中古以來、高紐のことを引合はせといつた。鎧着用の場合は、多くは先づ右の脇に脇立(ワイドテ)といふ具をあて、その上に鎧を着て、前後を合はせる。それゆゑ、引合はせは、丁度脇立の上に来るやうに出来てゐる。

この合はせめを結ぶに用ひる紐を引合はせの緒といふ。



【感涙】 カルルキ。深く

心に感じて涙を流すこと。ありがたなみだ。うれしなみだ。

太平記卷五、宣房卿二君奉公の條に「資

明卿感涙をおさへか

ねて、しばしはものをものたまはず。」

【御詠一卷】 御歌の巻物のひとまき。

御詠は他人の詠草をうやまつていふことば。おんうた。

【畢んぬ】 ヲハんぬ。「ヲハリぬ」の撥音便。

「預り置き候ひ畢んぬ」は「おあづかり申しました。」といふ意。

【これぞ永代秀逸の御形見】 これぞエイタイシウイツのオンカタミ。この御巻物は、すぐれた歌人であらせられた御身の御記念として遠く、將來まで残る貴重品の品でござるとの意。



「秀逸」は、ひいですぐれてゐること。又、そのもの。晋書の陸機傳に「天才秀逸。」

源平盛衰記卷十八、仙洞管絃の條に「凡て面々重寶の樂器を調へて、當時秀逸の人々も心を澄まして奏しければ、聽衆袂をひるがへし、天人雲に入り。」

【未來歌仙の指南たらんか】將來この世に生れ出るすぐれた歌よみの人々の手引となるでございませう。

「歌仙」(カセン)はすぐれた歌よみ。歌聖。

古事談卷六に「四條中納言參三六條宮、被論申云、是之歌仙也。」

「指南」は「指南車」の略。「指南車」は支那の周公がはじめて作つたといふ車。車上に人形があつて、車がいかなる方向に廻轉しても、その人形の手は常に南を指すやうにしかけたものであつた。

これからして、指し示すこと、指導すること、教授すること等を指南するといふに至つた。

張衡の東都賦に「予習非而遂迷也。幸見指南於吾子。」

源平盛衰記、謀叛人召し捕らるる條に「我が菩提の指南なるべし。」



【勿劇の中】ソウゲキのナカ。とりそいだ場合。

「勿劇」は「忽劇」とも、「念劇」とも書く。皆同じ。

平治物語、頼朝義兵を擧ぐる條に「われも尋ねたくおもひつれども、公私の勿劇に思ひ忘れ。」

【御音信】ゴインシン。又、ゴオンシン。おんおとづれ。おんたより。

音信は、おとづれをすること。たより。通信。

沈約の詩に「若欲寄音信、漢水向東流。」

【恐悦】キョウエツ。かしこまりよろこぶこと。他人によるこびをいふ敬語。

喫茶往來に「如此蒙仰之條、恐悦無極。」

【たとひ浮世を萬里の波に隔つとも】たとひ御身と私と、

遠く波路を隔ててこの浮世に住んでゐても。

俊成は都にのこり、忠度は今しも遠く西海に赴かうとしてゐるから、かやうにいつたのである。

【前途程遠云々】本朝文粹(ホンテウモンズキ)卷九に、

「夏夜於鴻臚館餞北客。後江相公」と題したもので、和漢朗詠集の雜部にも入れてある。

さて後江相公の餞した北客については、日本紀略に、「延喜八年六月十一日庚戌某日、勃海使裴濯來朝。某日掌客使、諸諸文士、於鴻臚館餞北客歸郷」とある。

「鴻臚館」(コウロクワン)は七條朱雀にあつて、外客の饗應送迎等の事を掌つた館舎。

職原抄の卷上に「玄蕃寮、唐名鴻臚寺」とある。

「程」は、路程。みちのり。

「雁山」は雁門山ともいふ。支那山西省大原府附近にあつて、長安から胡地に越える衝に當る。

「纓」は冠の後に垂れるもの、一説に冠の紐。

一首の大意は、「君の行先は程遠くて、再會がいつと期し難いから、惜別の涙がはら／＼と流れて、とどめきれな

い。」といふのである。

一首の語々は悉く相對してゐる。雁山は鴻臚と對せしめるために用ひたものである。随つて、たとひ難路を経て遠方に向かふ意をたとへていつたまでだから、強ひて地名に拘泥するに及ばぬ。

後江相公は大江朝綱(アサツナ)の敬稱。朝綱は玉淵の子。音人の孫。王朝時代に於ける知名の儒者。村上天皇の勅を奉じて新國史及び坤元録を撰した。天徳の初卒した。年七十二。その詩文集を後江相集といふ。

【あはれ世にありしには】「あゝ平家が世に時めいてゐた時には。」といふほどの意。

【この人どもに】忠度等をさしていふ。

【追従】ツキシヨウ。こびへつらふこと。おもねること。

枕草子卷十二に「まつはれ、つゐし、とりもちてまどふ。」

【かはるならひ】榮枯盛衰は、うきよの常であることをいふ。

「ならひ」は世の常。きまり。あたりまへ。

新勅撰集、雜三に、「なげくなよこれは浮世のならひぞ



となくさめおきしことぞ悲しき。」

【あはれなるにも涙優なるにも涙】 忠度の心事をきのどくにおもふにつけても涙をもよほし、その心根の優にやさしいことを感ずるにつけても亦涙をもよほすとの意。

【しのぶの袖】 忍摺(シノブズリ)の衣の袖。

【忍摺】とは忍草の葉で布帛にすりつけたもの。

【忍の衣】は、又堪へ難くて涙にぬれる譬にいふこともある。

夫木抄卷卅二に「知られじなしのぶの衣こきすりの人めばかりにみだれわぶとは」

【千載集】 センザイシフ。廿卷。勅撰和歌集の第七。藤原俊成が後白河院の院宣によつて文治三年九月廿日撰進したもの。但し明月記には、「同年四月奏覽」と記してある。歌數一、二八五首。その假名序に「後拾遺集に撰びのこされたる歌、上正暦のころほひより下文治の今に至るまでのやまと歌を撰び奉るべきおほせごとなむありける。云々。」と見えてゐる。

【この道】 やまと歌の道。和歌の道。歌道。

【さゝ波や志賀の都は云々】 「さゝなみや」は志賀の枕詞。

【志賀の都】は天智天皇御造營の滋賀の宮。今の滋賀縣(近江國)滋賀郡南滋賀・錦織二村の間にあつたといふ。天智天皇は即位の六年三月こゝに都したまうたが、わづかに五年にして、天皇の崩後廢された。「昔ながら」は「昔のまゝ」の意を地名の長等にかけたのである。「長等」は志賀の都の西にある山の名。櫻の名所。三井寺はその山腹にある。

一首の意は、「天智天皇が造り營ませられた志賀の都は荒れはてて見るかげもなくなつたけれど、長等の山の山さくらは、今もやはり昔のまゝに咲きほこつてゐる。さてもさても感慨に堪へぬことかな。」

【名字】 ミヤウジ。(一)かばね(姓)。(二)うち(氏)。

こゝは(二)の意。

保元物語、主上三條殿行幸の條に「武士の名字は註すに及ばず。」

【朝敵】 テウテキ。朝廷に敵對する賊。天子に叛き奉る賊。反賊。逆賊。

太平記卷十六、日本朝敵の條に「朝敵となつて叡慮を惱まし。」

【亡魂】 バウコン。なき人のたましひ。亡靈。なきたま。後漢書の段熲傳に「洗雪百年之通負、以慰忠將之亡魂。」

源平盛衰記卷廿六、伊豫國飛脚の條に「西寂を生捕り……磔にして父通清が亡魂に祭りたり。」

8 参 考

左に平家物語から「忠度都落の事」の一章を掲げて、彼此参照の資に供しよう。

薩摩守忠度はいづくよりか歸られたりけん、侍五騎、童一人、わが身共に混甲七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許におはして見給へば、門戸を閉ちて開かず。忠度と名のり給へば、落人歸り來れりとて、その内騒ぎ給へり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、自ら高らかに申されけるは、「これは、三位殿に申すべき事あつて、忠度が参りて候ふ。假令門は開けられずとも、この際まで立寄り給へ。申すべき事の候ふ。」と申されたりければ、俊成卿「その人ならば苦しかるまじ、開けて入

れ申せ。」とて、門をあけて對面ありけり。事の體何となうものあはれなり。

薩摩守申されけるは、「先年申し承つてより後は、ゆめ／＼疎略を存せずとは申しながら、この二三箇年は、京都の騒、國の亂出で來、剩へ當家の身の上に罷り成りて候へば、常に参り寄ることも候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日はや盡きはて候ふ。それにつき候ひては、撰集の御沙汰あるべき由承つて候ひし程に、生涯の面目に、御恩を蒙らんと存じ候ひつるに、かゝる世の亂出で來て、その沙汰なく候ふ條、たゞ一身の歎と存じ候ふ。この後世靜まつて撰集の御沙汰候はば、これに候ふ巻物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しく存じ候はば、遠き御守とこそなまらまらせ候はんずれ。」とて、日比詠みおかれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを、百餘首書きあつめられたりける巻物を、今はとて打ち立たれける時、それを取つて持たれたりけるを、鎧の引合はせより取出でて、俊成師に奉らる。

三位これを開きて見給ひて、「かゝる忘れがたみどもを賜はり候ふ上は、ゆめ／＼疎略を存すまじく候ふ。さても只今の御渡こそ情も深う、哀れも殊に勝れて、感涙抑へ難う候へ。」



と言へば、薩摩守、屍を野山に曝さば曝せ、浮名を西海の波に流さば流せ、今は憂世に思ひおくことなし。さらば、暇申して。とて、馬に打ちのり、甲の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後を遙に見送つて立たれたれば、忠度の聲とおぼしくて、「前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳す。」と高らかに口ずさみ給へば、俊成卿もいと哀に覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。

その後世静まりて千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、いひおきし言葉、今更思ひ出でてあはれなりけり、件の巻物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、その身勅勤の人なれば、名字をもあらはされず、故郷花といふ題にて詠まれける歌一首ぞ、よみ人しらずと入れられける。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを

むかしながらの山ざくらかな

その身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずといひながら、うらめしかりしことどもなり。

## 二二 武將の連歌

### 1 解題

「十訓抄」及び「古今著聞集」の中から武將の連歌に関する小話各一篇を採り來つて、これを一課としたのである。

「十訓抄」(ジッキンセウ)は三卷。今昔物語に倣うて種々の古話を集め、これを十訓の下に分類したものの。十訓は、

- 第一 可レ定ニ心據振舞ニ事
- 第二 可レ離ニ橋慢ニ事
- 第三 不レ可レ悔ニ人倫ニ事
- 第四 可レ誠ニ人上多言等ニ事
- 第五 可レ撰ニ朋友ニ事
- 第六 可レ存ニ忠信廉直旨ニ事
- 第七 可レ專ニ思慮ニ事
- 第八 可レ堪ニ忍于諸事ニ事
- 第九 可レ停ニ懇望ニ事
- 第十 可レ庶ニ幾才能藝業ニ事

である。各章の初めに抽象的總論を掲げ、次に具體的に今古の例話をあげてある。

自序中に、「試に十段の編を分ちて十訓抄と名づく。則ち三卷の文として、三餘の窓に置くとなり。」とある。

著者 については諸説があつて、まだ一定しない。

一、橋成季説 古今著聞集の文體が十訓抄の文體と類似してゐる上に、或記事に至つては全く共通してゐるものさへあるところからの推定説である。

二、菅原爲長説 紀正徹の清巖茶話に、「拾訓抄は爲長卿の作かと覺ゆる也」としてゐるからである。これは相當有力な説ではあるが、爲長が建長四年(十訓抄の出來た年)より七年も前に世を去つてゐるので、疑問が存する。

三、六波羅二藏左衛門入道説 これは妙覺寺本の奥書に、「或人云、六波羅二藏左衛門入道作云々」とあるによる。しかし、その人の傳記は今日全く不明である。

卷數 二册・三册・五・十・十二册の各册本があるが、三卷本であつたことは前に記した序文に照らしても確かである。

年代 序文に「建長四年(一九二二)の冬、神無月の半ばの頃、草庵を東山の麓にしめて、蓮の臺を西土の露に望み、云々。」とあるから、同年の作なることがわかる。



寫本には

- 一 妙覺寺本
- 二 大學國語調査所所蔵の古寫本
- 三 故芳賀矢一博士所蔵望雲子十訓抄
- 四 和學講談所の片假名本
- 五 前田家古寫本
- 六 榊原家藏本
- 七 村田了阿の一枝堂抄録第十中の十訓抄抄録一冊
- 八 屋代本(弘賢の校考にかゝるもの)
- 九 狩谷本(望之が家蔵の書を以て校合したもの)

版本には

- 一 故事類苑編纂部所蔵の古版本
- 二 元祿版
- 三 享保六年辛丑攝陽書堂磯野所蔵版本
- 四 明治二十六年十二月金澤の高橋富兄が前田家の藏本によつて校訂した十訓抄校本二卷
- 五 明治二十七年六月鈴木弘恭が校正した十訓抄上下二卷
- 六 井澤長秀校訂本

註釋本には

- 一 石橋尙賢の十訓抄詳解等がある。

「古今著聞集」(ココンチョモンジフ)二十卷。

橋成季が建長六年(一九一四)の編。主として日本靈異記・今昔物語・古事談・十訓抄・物語・日記等を參照して奇聞異事を輯めたもの。序文には著者の嗜好と閱歴とに即し、管絃・歌舞と畫圖とを旨として記述するやうにいつてあるが、事實は神祇・釋教・忠臣・公事から魚蟲・禽獸に至るまで三十部類にも及んでゐる。

この著を通じて、當時の國民の内面生活、即ち一般の思想や趣味や傾向を見るために、前述諸項目の多少につきてその順位をあげると、

- 宗 教 釋教・神
- 藝 能 和歌・管絃歌舞・文學・畫圖・蹴鞠・能書・術道
- 武 藝 相撲・強力・馬藝・弓箭
- 社 交 哀傷・祝言
- 自 然 魚蟲・禽獸・草木
- 個人的生活 飲食
- 道 徳 公には公事・政道・忠臣  
私には孝行・恩愛
- 滑 稽 惡徳には偷盜・宿執・博奕・鬭爭  
興言・利口

探撫が博きにわたり。話材が系統的に編まれ、文致が達意で、和漢混淆體なるなど、色々の長所もあるが、創意の乏しいこ

とと、たゞ材料を廣く集めただけで、著者の主觀の節にかけたあとの少いことは、その缺點であらう。

## 2 作 者

橋成季 タチバナ ナリスエ。

古今著聞集の自序に、「散木士橋南袁」とある。「南袁」は「なりすえ」の首尾の二音を萬葉假字で書いたものである。藤原明衡を「安蘭」とし、中山忠親を「達幸」とする類である。

その傳記は詳細には分らぬが、藤原定家の明月記の寛喜二年四月二十四日、賀茂祭使共交名の條に、「右衛門尉成季、近習無雙、故光季養子、基成・清成等一腹弟也。」とある。特に琵琶と繪畫とを好んだことは、著聞集の自序によつても知られる。

## 3 編纂の用意

本課と前課とは、武將の文事に關するたしなみを敘した點に於て共通してゐる。たゞその對象に和歌と連歌との相違があるのみである。武將の文事、何といふ奥ゆかしいたしなみであらう。よろしく前課と關聯して懇切にこれを教示し、花もあり實もある日本古武士の風格を想望せしむべきである。

十訓抄と著聞集とは共に鎌倉時代初期のものである。鎌

倉時代のものといへば、讀本教材としては多く軍記物が採られるのであるが、本課では特にそれらと趣を異にした教材を以上二書中から選んだのである。これ畢竟、これらの書中に盛られた文の一瞥も、一應は生徒に味ははせておく必要があると信じたからである。

## 4 要旨及び概説

「弓張月」は源頼政が高倉院の御時に鶴を射たといふ十訓抄にある話。「衣のたて」は源義家が衣川の館に據る安倍貞任等を攻落す時の逸話で、古今著聞集から取られてゐる。兩者の中心興味は必ずしも一樣ではないにしても、何れも連歌を挿入したところに一貫した古武士の文雅趣味を傳へてゐる。兩者の原典がまた何れも説話文學として扱はれてゐるものである故に、本課の話も史實としてよりは、寧ろかくの如き説話になるほどに、我が國の武將には文事の嗜みもあつたことを思はしむべきであるのは言ふまでもない。

## 5 取扱上の注意



□前項にも一言したところであるが、歴史と傳説とを混淆して、鶉の話など承認できないなどと考へる生徒があるかも知れないので、それらの點について豫め取扱上注意しておく必要があらう。傳説は傳説として、それを喜び傳へて來た國民の精神が貴いのである。その傳説の裡に、後世の教養あるわれらが、熟讀玩味すべき眞實が含まれてゐることを自覺せしめねばならない。例へば、

□「われすでに弓箭の冥加盡きにけり。」と思ふのは、やはり武士道の精神から出たもので、佐々木高綱の宇治川先陣や、那須與一の話などの裡に汲取られる武士道の精神と共通してゐるのである。

□義家が、我が一句に付句した貞任の風流に感心して、はげた矢をはづして歸るといふのも、その事實の有無の吟味などしてゐるべきではない。文雅趣味を教養の一つとして貴んだ鎌倉武士の氣風は、すでにかういふところに窺はれることを考へしむべきである。

□この種の話は、今の生徒にはやうやく忘れられて行くやうである。そして、もし外國輸入のグロテスクな話にの

み興味が向いて行つてしまふやうになつたらば、それこそ寒心すべきである。ともあれ、かういふ話には教授者自身が深い理會を以て臨まなくては、生徒はついて來ないと思ふ。

□「祿をかけられ」(二二頁五行)の如き時代語を解しそこねたり、「くつばみをやすらへ」(二二頁一〇行)の「やすらへ」の如き語を同形異義の語と間違へるものがよく生徒にはある故に、それらの解釋にも注意したい。

### 6 設問

- 1 次の語の讀み方と意味とを問ふ。  
宣旨。冥加。朝臣。白妙。經。菩薩。
- 2 次の動詞の活用形を問ふ。  
召す。こたふ。まかる。ほころぶ。やすらふ。
- 3 次の語句を解釋せよ。  
イ、われすでに弓箭の冥加盡きにけり。  
ロ、祿をかく。  
ハ、きたなくも後をば見するものかな。  
ニ、はげたる箭をさしはづす。

### 7 釋義

【武將】 ブシヤウ。武道に長じた將軍。

保元物語の新院爲義を召させらるゝ條に「武將の身として、夢見・物忌など、あまりにおめたり。」

【連歌】 レンガ。和歌の體。古くは一首の歌の上又は下の一句を一人が詠めば、他の一句を他の人が讀むものをいふた。(本課の連歌の如きはその例である。)日本武尊が「にひばり筑波を過ぎて幾夜かねつる。」と詠ぜられたのに對して、火燒の翁が「かゝなべて夜にはこゝのよ、日には十日を。」と答へたのを連歌の起源としてゐるが、これはむしろ歌の問答で、萬葉集卷八、大作家持と尼との唱和(佐保川の水をせき入れて植ゑし田を一家持、刈るわさ稻はひとりなるべし。一尼)を物に見えた始とする。

中古以後は十七字の長句と十四字の短句とを交互に連ねて一卷の文章となすものをいひ、少きは二十韻・五十韻から、多きは千句・一萬句に及ぶ。これを連鎖歌といふ。もと遊戯から始めて一種の文藝となり、鎌倉・室町時代最も隆盛を極め、諸種の法式を生ずるに至つた。

### 弓張月

【弓張月】 ユミハリヅキ。弦月。上弦又は下弦の月の稱。丁度弓を張つた形に似てゐるから起つた名。こゝは題名。本文中なる「弓張月のいるにまかせて」に因んで選んだのである。

【高倉院】 タカクラノキン。第八十代の天皇。御諱は憲仁。後白河天皇の第七皇子。御母は建春門院平滋子。應保元年九月御降誕。仁安元年十月立皇太子。同三年三月御即位。治承四年二月安徳天皇に御讓位。同五年(一八四一)六波羅の池殿で崩御。壽二十一。



【鶉】 ヌエ。ヌエドリ、又はヌエドリともいふ。梟の類で、大きさは鳩位である。晝はかくれ、夜出でて鳴く。世に怪鳥として、その鳴くのを凶兆とする。

但し平家物語には「近衛院御在位の御時……頼政きつと見あげたれば、雲の中に怪しき姿あり。よつびいてひやうと放つ。手



答してはたと當る。…頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の姿にて、鳴く聲は鶴にぞ似たりける。」とある。安齋隨筆に、「頼政が鶴を射しことは十調抄の説を以て正説とすべし。これ闇夜に小鳥を射たるを賞せられしなり。」とある。

【頼政】 ヨリマサ。源頼光の玄孫。仲政の子。最も射をよくし、和歌に巧であつた。保元の亂には後白河天皇の御味方に参じ、平治の亂には平清盛に與して禁裏を衛つた。高倉天皇の御時、一矢よく宮殿の上なる鶴を射とめたことは本文に見えてゐるとほりである。平清盛の奏請によつて従三位に敘せられ、剃髮して源三位入道と稱した。後清盛の兇暴を惡み、治承四年（一一八四〇）以仁王を奉じて平氏討伐の兵を擧げたが、事敗れて宇治の平等院に自刃した。時に年七十七。

【さりなむ】 「しかありなむ」の約。それはよからう。それは名策であらう。

【畏まりて】 カシコまりて。おそれ入り奉つて。恐懼して。竹取物語に「竹取の家に、かしこまりて請じ入れて。」【宣旨】 センジ。勅旨を宣へる傳へること。又、天皇の口勅を宣へ傳へた公文書。内侍が勅旨を承つて藏人に傳へ、藏人がこれを上卿に告げ、上卿が外記に命じてこの旨を記さしめて宣下するのが常である。

【いふばかりなし】 その闇さの、言語に絶して甚だしいことをいふ。

【弓箭の冥加】 ユミヤのミヤウガ。弓箭に對する神佛の冥加。弓矢とる身となつた甲斐。

【冥加】は佛語、冥々のうちに神佛の加護する利益（リヤク。）目に見えぬ神佛の助力。冥助。

源平盛衰記、那須與一扇を射る條に「歸命頂禮八幡大菩薩…弓箭の冥加あるべくば、扇を座席に定めて給へ。」

【八幡大菩薩】 ハチマンダイボサツ。八幡神に奉つた稱號。八幡神は譽田別尊即ち應神天皇の御神號。大抵比賣（ヒメ）神並に息長帯姫（オキナガタラシヒメ）神の二柱をも合はせ祭り、八幡宮と稱する。古來軍神として普く全國に奉祀してゐる。中にも豊前の宇佐八幡宮、山城の石清水八幡宮、鎌倉の鶴岡八幡宮、東京深川の富岡八幡宮などは、殊に名高い。

八幡大菩薩の號は、光仁天皇の天應元年、「護國靈驗威力神通大菩薩」の號をこの神に奉つたに始まるといふ。

【念じ奉りて】 お祈り申して。

【念ず】は、心の中に祈ること。祈願すること。

源氏物語の夕顔の卷に「清水の觀音を念じ奉りても、すべなく思ひ惑ふ。」

【聲を尋ねて】 鶴の鳴き聲をたづね求めて。

【こたふるやうに覺えければ】 何だか手ごたへがあつたやうにおもはれたから。

【天氣】 テンキ。天皇の御氣色。天皇の御意旨。天機。

平治物語、光頼卿参内の條に「それは天氣にて候ひしかばとて、赤面せられたり。」

【人々の感歎いふばかりなし】 多くの人々が、何ともいひやうがないほど感歎した。

【感歎】とは、感心して、ほめはやすこと。

唐書の薛萬均傳に「擧座感歎。」

【後徳大寺の左大臣】 藤原實定。閑院公季五世の孫。公能の子。累進して正二位左大臣に至つた。後雜髪して如圖

と號した。建久二年（一一八一）薨。年五十三。

平家物語卷二の「嚴島詣」、卷五の「月見の事」など、いづれも彼に關するおもしろい記事である。

彼の和歌は主として千載集に收められてゐるが、かの「ほととぎすなきつるかたをながむればたゞ有明の月ぞのこれる。」の詠は小倉百人一首にも採られてゐる。

【中納言】 チウナゴン。太政官の重職。大納言に次ぐ令外の官で、正・權の別がある。大納言と共に大政に參與し、可否を獻替し、宣旨を敷奏することを掌る。なかのものまうすつかさ。

【祿をかけられけるに】 祿を頼政の肩にかづけ與へられたところが。

【祿（ロク）は褒美（カツゲモノ）として當座に賜はる布帛の類をいふ。

【かくなむ】 この下に「よまれける」などの語を添へて見よ。

【杜鵑名をも雲居に云々】 頼政が鶴を射とめて、その武名を高く宮中にあげたのを、杜鵑が一聲高く雲居の外に名



乗つたことにかけていつたのである。

【杜鵑】(ホト、ギス)は攀禽類の一種。頭上より背部一面は灰黒色をなし、胸及び腹部は白色で、これに黒い横筋がある。翼は黒褐色。尾羽は黒色。嘴は根部が黄色、末端が草黒色。脚は黄色。晩春我が國に來り、初秋南方に去る。卵は他の鳥の巢に産みおとす。

古來歌人・文人に愛せられ、又夜間鳴くので知られてゐる。時鳥・杜宇・蜀魂・田鵑・不如歸・郭公など、いろ／＼の書方がある。

【雲居】は、(一)雲の在る處。そら又は雲。(二)遠く又は高く  
てはるかにはなれてゐること。又、そのところ。(三)宮  
中・禁中。(四)禁裏のあるところ。都。

こゝは(一)と(三)とを兼ねてゐる。

【とりあへず】「取るものも取り敢へず」の義。猶豫なく。すぐに。早速に。

源氏物語の須磨の卷に「高しほといふものになむとりあへず人そこなはるゝとは聞けど。」

【弓張月のいるにまかせて】「弓張月が今しも西の空に入

つたのをよい機会として、弓を張つて、ふつと射放つて。」といふほどの意。

【弓張月】の「弓張」は、弓を張ることを弓張月(弦月)にかけたもの。「いる」は弓張月の入るに弓を射るをかけたもの。

【いみじかりけり】「たいそうみごとな下の句の出來ばえであつた。」といふほどの意。

【いみじ】は、はなはだしい、すぐれてゐる。いちじるしい、などの意で、善惡に通じていふ。

伊勢物語に「かみさへいといみじう鳴り。」

【養由】ヤウイウ。養由基の略。楚の大夫。弓の名手として知られてゐる。

藝文類聚に「射ヲ善クスル者。楊葉ヲ去ルコト百歩ニシテ之ヲ射、百發百中ス。」

淮南子に「楚王ニ白猿アリ。由基ノ始メテ弓ヲ調スルヲ見ルヤ、木ヲ擁シテ號ブ。」

左傳に「潘厓ノ黨與養由基、躡甲シテ之ヲ射ル。七札ヲ徹ス。」

王充の論衡に「楚ノ雄渠子出デテ寢石ヲ見、以テ伏虎ト爲シ、將ニ去ラントシテ之ヲ射ル。矢其ノ衛ヲ没ス。或ハ曰ク、養由基寢石ヲ見テ以テ兎ト爲シ、之ヲ射ル。矢羽ヲ飲ム。」

養由が雲外に雁を得たといふことの記事は、まだものに見當らぬ。

衣のたて

【衣のたて】本文中の歌の一句を取つて、題名としたのである。

「衣のたて」は戰陣に用ひる桶と、衣川にあつた館(城)の狭小なもの、衣地のたて(縦糸)とを通はしたもので、本文に取つては誠に意味の深いことばである。

【伊豫守】イヨノカミ。伊豫の國守。

「伊豫」は南海道の一國。修して豫州といふ。四國の北西部に位し、讚岐・阿波・土佐に接し、北西二面は海に瀕してゐる。愛媛縣の管下。

「守」は一國の長官。國守。くにのかみ。

【源頼義】ミナモトノヨリヨシ。鎮守府將軍頼信の子。沈

毅にして武略があつた。父に従つて平忠常を平げ、先づ軍功を立てた。後相模守となるや、大いに關東將士の心を獲た。後冷泉天皇の朝、陸奥守兼鎮守府將軍に拜せられて安倍頼時及びその子貞任を討ち、前後八年を経てこれを平げ、功を以て正四位下伊豫守に任ぜられた。承保二年(一七三五)薨。

大正四年、正三位を追贈せられた。

【朝臣】アソン。上古の姓(カバネ)の一。アソ・アソンなどともいふ。天武天皇の十三年十二月に定められた八種の姓の第二。源・平・藤原・橘・菅原・大江・在原等の諸氏は皆朝臣である。

【貞任】サダタフ。安倍貞任。陸奥國に於ける蝦夷の酋長頼時の子。天喜四年父頼時と共に陸奥を押領して朝命に従はなかつた。頼時はやがて鎮守府將軍源頼義にほろばされたが、貞任はなほ頑強に頼義に抗し、大いにこれを惱ました。後頼義は出羽の俘囚長清原武則の來援を乞ひ、衣川・鳥海(トリノミ)の二柵を抜き、厨川の柵を陥れて、遂にこれを誅滅した。



【宗任】 ムネタフ。頼時の次子。貞任の弟。鳥海三郎と稱した。康平年中兄貞任と共に源頼義と戦ひ、軍敗れて降り、京都に伴なはれたが、やがて伊豫に放たれた。後僧となつて筑紫に住した。謂はゆる松浦黨はその後であると傳へられてゐる。

【陸奥】 ミチノク。本邦東北部の舊國名。道の奥(ミチノオク)の約で、東海・東山二道の奥の義。はじめ「みちのくのくに」と稱したが、後重複の音が簡略されて、「みちのくに」となり、更に轉訛して「むつ」となつた。

【十二年の春秋】 白河天皇の承保三年から堀河天皇の寛治元年(一七四七)まで、合はせて十二年。その間に前九年役と後三年役とがあつた。

「春秋」シエンジウ。は春と秋、轉じて歲月。

◎前九年役 平安朝の末葉に、源頼義が陸奥の豪族安倍頼時及び貞任を討滅して奥羽を平定した戦役。安倍頼時は父祖以來陸奥の俘囚長となり、陸奥六郡を領して勢強く、國守もこれを制し得なかつた。よつて朝廷では頼義を陸奥守兼鎮守府將軍に任じ、往いて頼時を討たしめた。頼時は一時降つたが、その子貞任の事に關して再び叛し、衣川の柵(キ)に據つた。既にして頼時は敗れて誅に伏したが、貞任は代つて衆を領し、屢官軍を惱まし

た。そこで頼義は出羽俘囚の囚長清原武則を諭して來授せしめ、兵を併せて賊を討ち、衣川・鳥海の二柵を抜いて貞任を厨川の柵に攻め、火を放つてこれを陥れた。貞任は誅に伏し、弟宗任等を出でて降り、餘黨が悉く平定した。時に白河天皇の康平五年(一七二二)九月であつた。

◎後三年役 前九年の役後、清原武則の孫眞衡はその一族と闘つて奥羽が再び亂れた。陸奥守源義家は眞衡を授けて武衡・家衡を金澤の柵に圍み、苦戦の後、弟新羅三郎義光の來授を得て遂にこれを平定した。時に堀河天皇の寛治元年(一七四七)であつた。これを後三年役といふ。

【鎮守府】 チンジュフ。王朝時代の官廳。陸奥國に置かれ、陸奥・出羽兩國の蝦夷を鎮撫することを掌つた。長官を將軍といひ、定員一名、その下に副將軍・權副將軍・軍監(初め將監)・軍曹(初め將曹)・弩師・醫師・府掌・陰陽師各一人があつた。

續日本紀の養老六年(一三二二)閏四月の條に、蝦夷鎮壓のために鎮所を陸奥に置いた事が見えてゐる。後にこれを鎮守府と改めた。貞觀以後この制が漸く衰へ、武家時代に入つて遂に廢絶した。

【秋田の城】 古、羽後國南秋田郡寺内村高清水岡にあつた

城。天平五年(一三八九)出羽の柵をこゝに移し、軍士

を置いて蝦夷に備へたのに始まる。後地震や兵火に逢つたが、元慶二年(一五三八)藤原保則が出羽守となつて、壘柵や樓壘を舊に復した。後遂に荒廢してしまつた。

【はだれ】 はだら。まだら。斑。

萬葉集卷八に「あわ雪がはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の花ぞも」

【つくさのをのこども】 兵士たち。

「をのこ」は「男の子」の義。をとこ。を。だんし。なんし。

萬葉集卷廿に「鳥が鳴く、あづまをのこは、出でむかひ、かへりみせずて、……。」

【鎧】 ヨロヒ。昔、戦時に用ひた服。大鎧(オホヨロヒ)・胴丸(ドウマル)・腹巻(ハラマキ)・具足(グソク)等の總稱。多くは札(サネ)と稱する革又は鐵の小片を、革紐又は絲で綴ちて作る。ものぐ。

【白妙】 シロタへ。白いこと。又、白い色。

萬葉集卷十七に「冬夏と、わくこともなく、白妙に、

雪は降りおきて、……。」

【衣川の館】 コロモガハのタテ。白河天皇の永承の頃、阿倍頼時が衣川の河畔に築いた城塞。

「衣川」は岩手縣の南部にある小河。北上川の一支流。

「館」は城の狭小なもの。たち。

甲陽軍鑑に「信玄公御一代のうち、甲州四郡のうちには城郭を構へず、堀一重の御たてに御座候。」

【楯】 タテ。武器の一種。身を蔽うて敵の矢玉を防ぐに用ひるもの。多くは楯の厚板二枚を繼いで造り、長さ四尺、幅二三尺。表には二つ引に家紋などを描き、裏にはつつかひ棒があつて、地に立てるのを普通とする。その一種に歩楯(テダテ)とて、狭く長く造り、手に執つて進撃するものがある。

【兜】 カブト。古、戦争の時かぶつて頭部を覆うたもの。頂を覆ふ部を鉢といひ、その下に垂れて頸を覆ふ部を鍔(シコロ)といふ。冑・鞆なども書く。

【筏】 イカダ。木材・竹材等を繋ぎ合はせ、舟のやうにして水に浮ばせ、乗行又は運送の用に供するもの。それに乗



つて棹さすものを筏師・筏乗といふ。簡易なる水上の交通機關として、多く溪流などに用ひられる。桴・桴などとも書く。

【八幡太郎義家】 源頼義の長子。小字源太。石清水八幡宮で元服したので、八幡太郎といつた。人となり勇武絶倫、最も騎射をよくした。前九年の役、父に従つて功を樹て、從五位下出羽守となつた。後三年の役奮戦して奥羽を平定した。役後私財を投じて將士に酬い、大いに東國武士の心を集めた。それより東國の守・介を経て伊豫守に至つた。天仁元年（一七六八）薨。年六十八。  
大正四年十一月、正三位を追贈せられた。

【攻めふせて】 攻めて降伏させて。

【きたなくも】 卑怯にも。みぐるしくも。

【衣のたてはほころびにけり】 衣川の館の陥つたのを、衣の縦糸のきれほころびたことにかけて、おもしろくよみなしたのである。

【くつばみをやすらへ】 馬のたづなをゆるめること。

【くつばみ】は口食（クチバミ）の義。

(一)馬の口中に食（ハ）ましめる具。手綱をつけて馬を馭するに用ひる。轡（クツワ）。(二)轡につけて馬の頭上より頸にからみつける革又は絲の紐。(三)手綱。轡にむすびつけて馬を御する料の綱。

こゝは(三)の意。

「やすらへ」は休ませること。ゆるめること。

【錠】 シコロ。後衣（シリコロモ）の略稱。又、鍛ともかく。兜の鉢の左右及び後に垂れて頭をおほふもの。多くは撓革（イタメカハ）又は鐵板の反り曲つたものを絲又は革で綴ちあはせて作る。その板数は四五枚を普通とするけれども、廣い一枚の板で作つたもの、狭い八九枚の板で作つたものなどもある。



【年をへし絲のみだれのくるしさに】 多くの年月悪戦苦闘を重ねて拒ぎ守つてゐた衣川の館が遂に陥つたことを、

多くの年月苦勞して絲を綜（へ）つゝ織り成した衣の縦糸がほつれみだれたことにかけていつたのである。

【年をへし】の「へし」は、「經し」と「綜し」との二義をもつてゐる。

【はげたる矢】 弓にひつかけた矢。弓につがうた矢。

【はぐ】はひつかけること。つけること、はめること。

萬葉集卷二に「梓弓絃緒（ツラヲ）とりはげ引く人は後の心を知る人ぞ引く」

【さばかりの戦】 それほどはげしい戦。

【さばかり】は、「しかばかり」の約。それほど。そんなに。さほど。

竹取物語に「竹取の翁さばかり語らひつるが、さすがに覺えてねぶりをり。」

【やさしかりけることかな】 おもひやりの深いことであるは。

【やさし】は、(一)はづかしいこと。(二)しとやかなこと、みやびやかなこと。(三)なさけぶかいこと、思ひやりのふかいこと。(四)おとなしやかなこと。すなほなこと。(五)し

をらしいこと。殊勝。神妙。(六)たやすいこと。容易なこと。

こゝは(三)の意。

狂言の八句連歌に「やさしの殿の心やな。……借りものをゆるさるゝ、たぐひなの殿の心やな。」

### 8 挿圖

龜運治 源頼政が鶴退治の圖で、東京淺草觀音堂の所蔵にかゝるもの。高崗谷の筆に成る。向つて左なるはいふまでもなく源頼政、刀をつかんで鶴を刺してゐるのは郎等猪早太である。高崗谷は嘗てこの畫を描いて觀音堂の楯間にかゝげ、潛かに群集の中に紛れ入つてこの畫の世評を聞いてゐた。すると一人の男が「平家物語には郎等猪早太がこの鶴を九刀まで刺したとあるに、この畫では早太の刀が高く鶴の頭上に閃いてゐる。どうも平家の本文に合はぬやうだ。」といつた。高崗谷はこれを聞いて、自分が平家を見ないで漫然筆を執つたことを慙ち、遂にその部分を削り改めたといふ。

本課の文には「晝だにちひさき鳥なれば」とあつて、鶴を怪鳥としてある。然るにこゝに掲げた畫は平家物語によつて描いたもので、正しく怪獸である、この點に關して生徒の中に



は質問を發するものがあらう。さる場合には、九「参考」の中に掲げてある平家の原文に照らして、頭は猿、胴は狸、尾は蛇、手足は虎に似てゐるといふ怪獸の正體を適當に説明されたい。

頼政の服の二重の狩衣であること、その左の手に執つてゐるのは滋藤の弓であること、右の手に持つてゐるのは山鳥の尾ではいだ針矢の一筋であること、はじめその手に持つてゐた二筋の針矢の中の一筋は鶴を射とめるために用ひたこと等も、一々平家の文に照らして説明せられたい。

筆者高嵩谷（カウスウコク）は徳川末期の畫家。名は一雄、嵩谷はその號。又屠龍翁とも號した。英一蝶の門人左嵩之に就いて學び、出藍の譽が高く、最も山水に長じてゐた。その作にかゝる鶴の圖を淺草觀音堂の欄間に掲げたことは前に述べた通りである。當時堤等琳といふ畫人が、韓信の股下を出る圖を描き、これを同所に掲げて嵩谷の畫額とその優劣を競ひ、獨り自ら誇つてゐた。しかし、世人は嵩谷を揚げて、等琳を擯したといふ。文化元年（二四六四）八月二十三日歿。年七十五。樂只齋畫譜・屠龍百富士圖等の作がある。

9

参考

なほ参考の爲、平家物語の中に見えてゐる頼政鶴退治の一章を次に掲げよう。

鶴の事

そもこの源三位頼政は、攝津の守頼光に五代、三河の守頼綱が孫、兵庫の頭仲政が子なりけり。保元の合戦の時も、御方にて先をかけたたりしかども、させる賞にも預らず、また平治の逆亂にも、既に親類を棄てて参じたりしかども、恩賞これ疎かなりき。大内守護にて年久しうありしかども、昇殿をば許されず、年たけ齡かたぶきて後、述懐の和歌一首詠みてこそ、昇殿をばしたりけれ。

人知れぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな  
これに依つて昇殿を許され、正下の四位にてしばらくありしが、なほ三位を心にかけてつゝ、

昇るべきたよりなき身は木の下にしひを拾ひて世をわたるかな

さてこそ三位はしたりけれ。やがて出家して源三位入道頼政とて、今年は七十五にぞなられける。この人一期の高名とおぼしき事は多き中にも、ことには仁平のころほひ、近衛の院御在位の御時、夜な／＼おびえさせ給ふ事ありけり。有驗の高僧貴僧に仰せて、大法祕法を修せられけれどもその験なし。

御惱は丑の刻ばかりの事なるに、東三條の森の方より黒雲一叢立ち來つて御殿の上に蔽へば、必ずおびえさせ給ひけり。これによつて公卿會談ありけり。

去んぬる寛治のころほひ、堀河の院御在位の御時主上しかの如くおびえたまぎらせ給ひけり。その時の將軍義家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御惱の刻限に及んで鳴弦すること三度の後、高聲にて前の陸奥の國守源の義家と名乗りたりければ、聞く人身の毛よだつて、御惱必ず怠らせ給ひけり。然ればすなはち先例にまかせて、武士に仰せて警固あるべしとて、源平兩家の兵の中を選ませられけるに、この頼政ぞ選び出されたりける。その時は未だ兵庫の頭にて候はれけるが、申されけるは、「昔より朝臣に武士を置かるゝ事は逆反の者を退け、違勅のともがらを亡さんが爲なり。目に見えぬ變化のもの仕れと仰せ下さるゝこと、未だ承り及ばず。」と申しながら、勅宣なれば召に應じて参内す。

頼政頼みきつたる郎等、遠江の國の住人猪の早太に母衣の風切はいだりける矢負はせて、たゞ一人ぞ具したりける。わが身は二重の狩衣に山鳥の尾を以てはいだりける針矢二筋、滋藤の弓に取りそへて、南殿の大床に伺候す。頼政矢二つ手挟みけることは、雅頼の卿、その時は未だ左少辨にておはしけ

るが、變化の者仕らんずる仁は頼政に候ふらんと選み申されたる間、一の矢にて變化の者射損する程ならば、この矢には雅頼の辨のしや頭の骨を射んとなり。

案の如く、日頃人の申すに違はず、御惱の刻限に及んで東三條の森の方より黒雲一叢立ち來つて、御殿の上にたなびいたり。頼政さつと見上げたれば、雲の中にあやしき者の姿あり。射損する程ならば世にあるべしとも覺えず。さりながら矢取つてつかひ、南無八幡大菩薩と心の中に祈念して、よつびいて、ひやうと放つ。手答へしてはたとあたる。得たりやおうと、矢叫をこそしてんげれ。猪の早太つと寄り、落つる所を取つておさへ、柄も拳もとほれ／＼と續けさまに九刀ぞ刺したりける。その時上下、てんでに火をとほして、これを御覽じ見給ふに、頭は猪、胴は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにして、鳴く聲鶴にぞ似たりける。おそろしなどもおろかなり。

主上御感のあまりに獅子王と申す御劍を下さる。宇治の左大臣殿これを賜りついで、頼政にたばんとて、御前の階を半ばばかり下りさせ給ふ折しも、頃は卯月十日あまりの事なれば雲井に郭公二聲三聲おとつて通りければ、  
ほとゝぎす名をも雲居にあぐるかな



と仰せられかけたりければ、頼政右の膝をつき、左の袖をひらげて、月を少しそば目に見かけつゝ、

弓張月の射るにまかせて

と仕り、御剣を賜りてまかり出づ。この頼政の卿は武藝にも限らず、歌道にもまたすぐれたりとぞ、時の人感じあはれける。さてかの變化のものをば、うつぼ船に入れて流されけるとぞ聞えし。

また應保のころほひ、二條の院御在位の御時、鶴といふ化鳥禁中に鳴いて、しばし宸襟を惱まし奉ることありけり。然れば先例にまかせて、頼政をぞ召されける。頃は五月二十日あまり、まだ宵のことなるに、鶴たゞ一聲おとづれて、二聲とも鳴かざりけり。目ざすとも知らぬ闇夜ではあり、姿形も見えざりければ、矢つぼをいづくとも定め難し。頼政が謀に、先づ大鎗取つてつがひ、鶴の聲したりける内裏の上へぞ射上げた。鶴鎗の音に驚いて、虚空にしばしぞひらめいたる。次に小鎗取つてつがひ、ひいふつと射切つて、鶴とならべて前にぞ落したる。禁中さゞめき渡つて、頼政に御衣をかづけさせおはします。今度は大炊の御門の右大臣公能公の賜はりついで、頼政にかづけさせ給ふとて、「昔の養由は雲の外に雁を射き。今の頼政は雨の中の鶴を射たり。」とぞ感ぜられける。

五月やみ名をあらはせるこよひかな  
と仰せられかけたりければ、頼政、

たそがれ時も過ぎぬと思ふに

と仕り、御衣を肩にかけてまかり出づ。云々。

(平家物語 卷四)

## 二二 古代希臘人の體育

### 1 解題

永井潛著「人及び人の力」の中から「スポーツの精神と體育の勃興」の章の前半を採つたものである。原文では、「スポーツと希臘の勝利」キネゲイロスとオイクレス「スポーツと美」スポーツと眞」の小題が附してある。

「人及び人の力」は、その序文に、

「天地間の偉大なるものは限りなくあるが、その中の、最も偉大なるものは、人である。」これはソフォオクレスの言であります。「汝自身を知れ。」これはソクラテスの教であります。人間が知らざるべからざる幾多の知識の中の最初であり、而して又最後であるのは、この「人及び人の力」でなくて何であります。學術・宗教・藝術・教育・政治、凡ては人を中心として立ち、人の力を中心として生れ出づることを何人も否定することは出来ないのであります。

全龍を映し出だす野心は固より私如き者の到底夢想だにし得ない所であります。唯僅かに生物學醫學の見地から、私の有てる、細い短い小宇宙觀・人生觀の管を通じて窺つたこの一小著によ

永井 潜

つて、せめてその片鱗でも照らし出すことが出来たならば、それは私にとつて望外の歡であります。云々。

と記してあるのによつて、その内容を窺知し得る。

昭和二年十月、京都、人文書院發行。

### 2 作者

永井 潜 ナガキ ヒツム。

明治九年廣島縣に生れた。同三十五年、東京帝國大學醫科を卒業。同三十六年歐洲に留學して生理學を研究し、同三十九年に歸朝、東京帝國大學助教となり、大正四年に教授に進み、現に醫學部長の職に在る。明治四十四年醫學博士の學位を受けた。又文學・美術に造詣深く、靜山又は獨樂書樓主人と號す。著書に、生命論・哲學と醫學・生物學と哲學との境・人生論等がある。

### 3 編纂の用意

本課の文を讀ましめる所以は、古代希臘に於ける體育が最も理想に近く完全の域に近づいてゐたことと、近時我が國に於ける體育の盛行は誠に喜ぶべきことながら、その實施に於て、その精



神に於て必ずしも最善といふを得ず、更に體育精神の一層なる向上を必要とする現狀である點に於て、こゝに模範的體育を實踐したる古代希臘人を回顧するの必要を感じしめたからである。本課の如きは内容をよく味ははしめて、自らの體育精神を、又體育の事實を反省せしめ、體育について正しい理解を持つ助けとせしめたい。

#### 4 要旨

吾等は理想の體育を行つた國民として、古代希臘人を儀表と仰がなければならぬ。彼等は彼の立派な文化を成就するまでに幾多の困難と戦はねばならなかつた。しかもその戦に勝ち得た力は、實にスポーツによつて養ひ來つたのである。當時の希臘青年の意氣、國民の元氣が如何に充實し、如何に旺盛であつたかは、その波斯との戦争に現れた幾多の挿話がこれを證明してゐる。兩腕と首とを別々に斬られて悲壯な最期を遂げたキネゲイロスや、マラソン競走の故事を作つたオイクレスの話の如きはその例である。又、希臘人は眞善美を追求し、これを啓發せんが爲に體育に力めた。殊にその美が自分等人間の身

體にあるを看取して、その美を完成せんとしたことは、更に一方に眞理を求めると共に、彼等の二つの願望であつた。この願望が舉國競技を喜ぶ風尚となつて現はれたのである。

#### 5 概説

原文に設けた段落によると、本課の各小節は次のやうな題目の下に、三箇の節に纏められてゐる。

- 第一節 「スポーツと希臘の勝利」(二三頁—二五頁九行) 希臘の偉大な國民的發展はスポーツの賜であるとして、對波斯戦争に現れたスポーツの眞價を考へた。
- 第二節 「キネゲイロスとオイクレス」(二五頁一〇行—二九頁一行) 對波斯戦争に於ける二勇士キネゲイロスとオイクレスの物語を例證として、スポーツによつて磨かれた希臘青年の美しい精神を述べた。
- 第三節 「スポーツと美」「スポーツと眞」(二九頁二行—三一頁) 希臘人は最も完備したる美は人間の身體にあることを發見し、その美を完成せんとして體育を行つたのである。又希臘人は眞を愛した。そのために又

競技が行はれたのである。(但し「スポーツと眞」については、本課の部分には十分に説きつくされてはゐない。原文ではこの次にそれが主として述べてある。

#### 6 取扱上の注意

■冒頭の一文章は「吾等の儀表として仰がなければならぬ」ときめつけたやうな言ひ方であるので、少しわれ等の自尊心が壓迫に似たものを感じる。しかし段々讀んで行くうちに、なるほど偉大な國民であると頭が下つて來るのを覺える。「選ばれた人間のチャンピオン」といふ作者の言葉に、偏狭な自尊心を捨てて、吾等は心から一も二もなく賛成する氣になる。

■キネゲイロスの右の手、左の手、最後に大きな口で舷にしがみついた首が斬られる——これは日本人も一寸かなはぬと思ふ。けれど、爆彈三勇士や荒木大尉のことなど想ふと、何、日本人が負けるものかと思ふ。たゞ、この課の話は、さう競争的のみ導いて讀ませてはなるまい。やはり國際的精神から他の點を十分に賞讀し、これを攝取する態度で讀ませるのでなければうそである。

■「マラソンの平野」「マラソンの奇捷」、さう言葉が如何にも懐かしく生徒には聞えるであらう。そして、オイクレスがアテネの城門に着くや否や「我が軍勝てり」と叫んでそのまゝ斃れてしまふ場面を想見しては、今日の我がマラソン選手が「日の丸」の國旗に導かれて倒れては起ち、起ちては倒れして、遂に決勝線に入つたといふ例の長谷川青年の話(卷一「スポーツマン」などをも想起して、それこそ覺えず「感極つて涕下る」であらう。

■「史を緝いて此に至る毎に云々」(一二八頁)といふ一節は、作者も特に感激にはすんで筆をやつてゐる。この一節の首尾は最もよく翫味させて欲しい。

#### 7 設問

1 古代希臘人の模範とすべき諸點を挙げよ。



- 2 この文で、希臘と波斯との戦争が、どういふ風に觀察されてゐるか。(二二五頁五行―九行)
- 3 マラソン競走の故事を語れ。
- 4 希臘人が體育を重んじた根本の理由は何であつたか。
- 5 次の語句を書取つて、その意義を答へよ。  
イ、根柢。風尚。儀表。文化。挿話。肉薄。孤忠。規範。  
ロ、世界に覇を唱へる。  
ハ、背水の陣を布く。

8 釋義

【希臘】ギリシヤ。Greece. Graecia. 東南ヨーロッパにあつた古の王國。住民は、アリア人、ドリリア人、イオニア人等があつた。ギリシヤの神話、オリンピックの競技は、ギリシヤの文化に多大の影響を與へた。

【儀表】ギヘウ。人の手本となること。模範。  
史記の、太史公自序に「人主天下之儀表也。」

【文化】ブンク。文學・藝術・教化等の精神的發達を重

く見る時文化といひ、物質的方面——政治・經濟・交通等——を重く見る時文明といふ。

【手段】シユダン。方法。てだて。

【業績】ゲフセキ。事業。仕事。

【歴史を繙く】レキシをヒモトク。歴史の書を開いて讀むこと。

「繙く」とは、卷物になつてゐる書物を閉ぢむすんである紐を解くといふ義から、書物を開いて讀むことにいふ。

【文明の種子を培ふべく】ブンメイのシユシをツチカふべく。將來の文明をもたらすその基礎をこしらへるために。「培ふ」とは、植物を生育させること。

「べく」は「何々するために」の意。

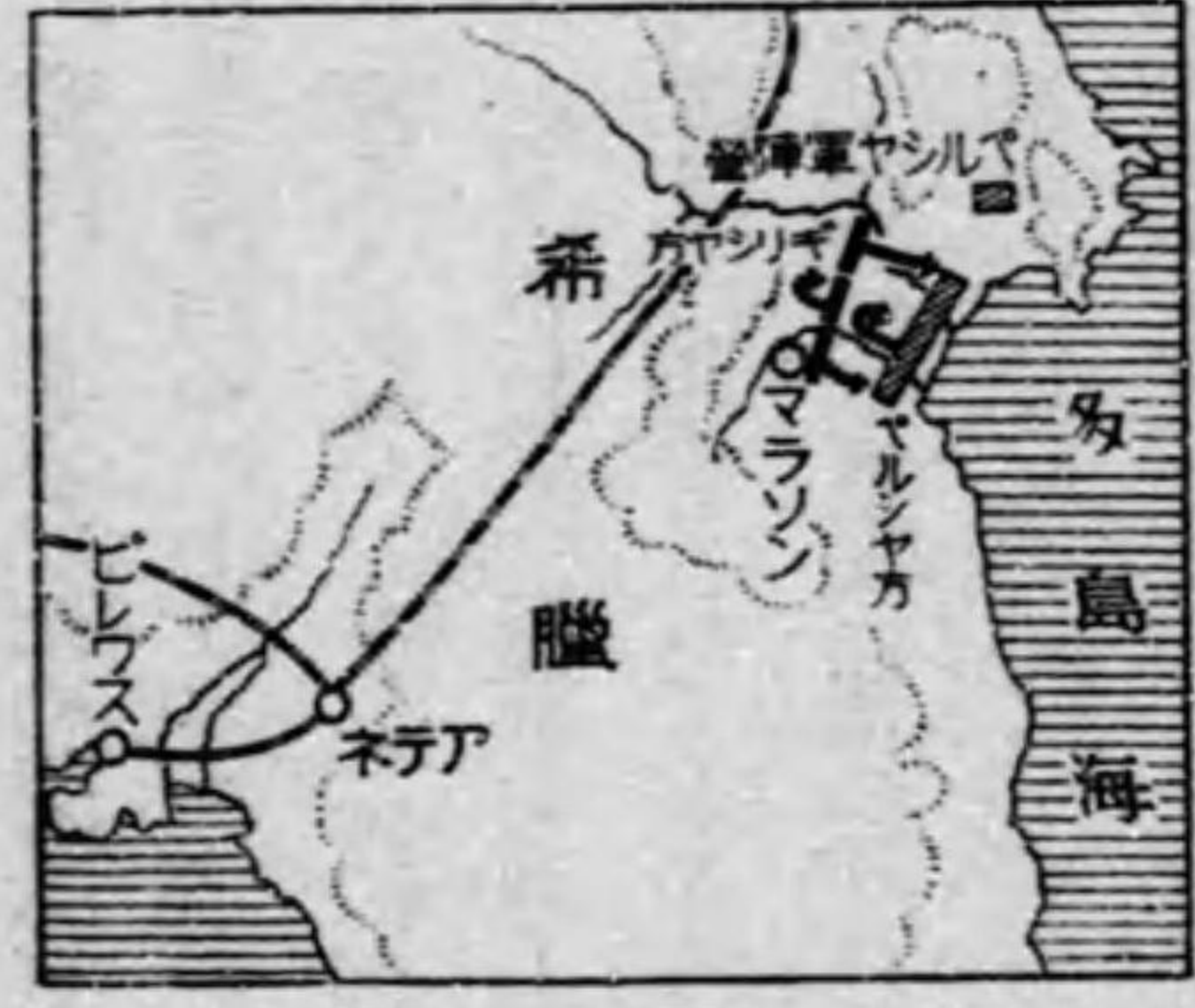
【經營】ケイエイ。物をいとなみつくること。又は、工夫を凝らして物事を成しあげること。

【目のあたり】マのあたり。(一)目の前に。目前に。(二)直接に親しく。

【波斯】ペルシヤ。Persia. アジヤ洲の西部、イラン高原にあつた古代の王國。ダリウス王の波斯一統及びマケド

ニア、トラキヤ地方の征服で、ギリシヤとペルシヤとは屢々戰を交へた。

- 【壓迫】アツバク。おさへせまること。抑壓ヨクアツと同じ。
- 【搏たうとする】ウたうとする。
- 【擁護】ヨウゴ。かばひ守ること。
- 【精華】セイクワ。すぐれてうるはしく花やかなこと。
- 【貪婪】ドンラン。極めて慾のふかいこと。
- 【旺盛】ワウセイ。極めてさかんなこと。
- 【挿話】サフワ。話の本筋の中に挿む一つの獨立した小話。本筋の一部ではないが、本筋に關係があつたり、



又本筋を補助するものである。英語のエピソード (episode) に當る。

【追懷】ツキクワイ。あとより思ひおこすこと。追憶。

【マラソン】ペルシヤ王ダリウスは十二萬の陸兵を發してアテネに向はしめ、キラデス・

エレトリヤ市を陥れて、アテネの北方にあるマラソンの平野に上陸した。マラソンは半月形をした平野で、背後にバルネス、パテリクル山脈を負ひ、前は海に面してゐる。アテネは急を聞いてフィヂピデス (Phidippides) をしてスパルタに至つて援兵を乞はしめた。この時百五十哩の距離を實に三十六時間に疾走したのである。然しスパルタの援兵は來なかつた。そこでアテネは獨りこの大軍に當つたのである。即ちミルチアデス (Miltades) が一萬の兵を以て、波斯の十二萬の大軍を潰滅した。かくてアテネの名は全ギリシヤに轟くに至つた。

- 【楯】タテ。戰陣にて身を蔽ひ敵の矢丸を防ぐに用ひる具。鐵にて作り、又樟・榎などの厚板にても作る。
- 【肉薄】ニクハク。つめよせること。身をもつて敵にあたりせまること。「肉迫」とかくは誤。
- 【せんすべ】すべき方法。施すべき術。
- 「せん」は動詞「爲」の未然形へ、未來の助動詞「ん」が添うた語である。
- 【必死を期して】ヒッシをキして。必ず死ぬといふことを



覺悟して。決死の覺悟をもつて。

【背水の陣】 ハイスキのチン。漢書の韓信傳にある「使萬人先行出、背水陣」といふ故事から出た。河海などを背後に控へて陣を布くこと。退けば水に溺るゝより外なく、味方をして進んで決死の覺悟をなさしめる策。

【奇捷】 キセフ。思ひがけない勝利。不思議なほどの勝利。

【滿載】 マンサイ。一ぱいつみこむこと。

【猿臂】 エンビ。猿の如き長いひぢ。

史記の李將軍傳に「廣爲人長猿臂、其善射亦天性也。」

【舷】 ゲン。ふなばた。ふなべり。

【悲壯】 ヒサウ。悲哀の中にも壯烈の氣のあること。あはれにいさまじいこと。

漢書の禰衡傳に「聲節悲壯、聽者莫不慷慨。」

【首と胴とが所を異にした】 首を斬り落されること。

【韋駄天】 キダテン。佛語。武裝して劍を持ち、鬼が佛牙を奪つて逃げたのを、追つて取りもどしたといふ神。疾



く走る神。

【弘安の神風】 弘安四年元寇のあった時、忽ち起つて敵の兵船を沈めたといふ風。

【藏王堂】 ザワウダウ。太平記卷

七、吉野城軍事に、護良親王が藏王堂の大庭で最後の御酒宴を張り、後、村上義光が王に代つて討死する様を述べ、「義光は二の木戸の高櫓に上り、遙に見送り奉りて宮の御後影の幽にへだたらせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓のさまの板を切落して、身をあらはにして、大音聲をあげて名乗りけるは、天照大神の御子孫……汝等が武運忽ちに盡きて、腹をきらんする時の手本にせよと云儘に、……清げなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のそば腹まで、一文字に掻切つて、腸つかんで櫓の板になげつけ、太刀を口にくはへて、うつ伏に成てぞ伏たりける。」とある。

【屯難】 チュンナン。なやみくるしむこと。

易の屯卦の疏に「屯是屯難」。

【涕下る】 ナミダクダる。

【レオニダス王】 アテネ・スパルタは同盟してペルシャに對抗した。スパルタ王レオニダスは三百のスパルタ兵と六千の同盟軍とを率ゐてテルモピレー (Thermopylae) を守つてゐた。所がエフィアルテス (Ephialtes) がペルシャ軍に内應したため、レオニダスは包圍せられ、三百のスパルタ兵と共に奮戦して斃れた。

【發露】 ハツロ。あらはれ。

【盤石】 バンジャク。大きい石。こゝは、極めて堅固なものと、しつかりして動かさることの形容。

【防禦】 バウギョ。防ぎ守ること。

【城壁】 ジャウヘキ。都市又は宮殿等を守護するために、その周圍に築きめぐらした土石等の防禦壁。

【金城鐵壁】 キンジャウテツペキ。極めて堅固な城壁。又極めて堅固な物事をいふ。

【本然の性】 ホンネンのセイ。もつて生れた性質。本質。

【憧憬】 ドウケイ。ショウケイ。あこがれること。

【啓發】 ケイハツ。知識などをひらきすましめること。

開發。

論語の述而篇に「子曰、不憤不啓、不悱不發。」

【規範】 キハン。法則とすべき模範。てほん。

【極致】 キョクチ。その趣きをきはめつくしたること。窮極の所。

【圓滿具足】 エンマンダツク。すべてのものが完全に具つて、十分に足りるといふこと。

【全知全能】 ゼンチゼンノウ。完全無缺な知能。何事にも通曉して且つ何事をも能く行ふことの出来る神の知能。

【象るもの】 カタドるもの。

【怪異珍奇】 クワイチンキ。神の表現としては、宗教、社會状態、土地等の如何によつて複雑な變化を生じてゐる。我が國で言へば、天然神として、山岳・樹木・岩石・動物等に神靈のあるものとしてこれを祀り、稻荷に附屬する狐が直に神としてまつられ、蛇や龍が祀られる。又生殖器崇拜から来る淫祠もある。

【擬へ難い】 ナゾラヘガタイ。

【迷り】 ホドバシリ。



【根柢】 コンテイ。基礎。根據。

老子に、「深<sup>ソフ</sup>根固<sup>コク</sup>柢<sup>テイ</sup>」。

9 挿 圖

圓盤投 ミロー作

昔から有名なる希臘彫刻の一代代表作である。作者ミローは希臘彫刻の黄金時代を開いた一人で、生々とした人體の活動を寫し、彫刻に一新生面を開いた大家である。

テルモビレーの戦

教育畫報第二卷第一號所載の寫眞に據つた。テルモビレーの戦に於けるレオニダスの奮戦の壯烈なる場面である。

オリンピアの廢址

ギリシヤのエリスアルフェウス川の右岸にある。右方に見えるのがクロノス山である。一八七四年乃至八一年ドイツ人が六メートルまでこれを發掘した。圓柱の立つてゐるのはゼウス神殿の址である。

10 参 考

1 原文の省略

一二九頁二行「抑々人間の人間たる本然の性は」の節の前に左

の一節があるのを省略した。

希臘に於ては教育が非常に尊ばれた。その希臘の教育は何であつたかといふと、一は體操、一は音樂であつたのである。體育によつて身體を鍊り、而して音樂によつて、心を向上せしめるといふことであるが、就中、希臘人は、體育に最も重きを置いてゐたのである。しかも、全く宏遠なる理想を追うて體育を行つたのである。

一三〇頁五行「信じてゐたからである」と「かくの如くして」との間に次の一節がある。

或は又、希臘では、體育を施すに當つても、常に裸體で行はれた。全くの裸體となり、皮膚に油を塗つて、體操をしたのである。それは即ち一方からは皮膚を鍛鍊するといふ理由もあつたのであらうが、併しその主なる理由は、裸體といふことが如何にも人間美の全幅を十分に發揮するといふ上に適當であるからであつたのである。今日體操のことを「ギムナスチック」、或は中學校のことをギムナジウムといふのはこれ即ち希臘語の「ゲムノス」(裸體)といふことから來てゐるのである。これで見ても、希臘人の眼が人體美に對して如何に敏感であつたか、又如何によくその美を尊重したかが十分に窺はれるのである。

2 補 記

本評に採録した部分に次いで左の一節がある。これは本課の終末に述べてゐることを一層明瞭にするものであるから、ここに補記する。

競技には、權勢もなく、門閥もなく、情實もなく、財力もない、全く一貫の身體と身體がぶつつかつて、眞剣に、誠實に、無邪氣に、火花を散らして戦ふのである。さうして眞に強い者が勝ち、眞に弱い者が負けるのである。これくらゐ如實に、端的に、徹底的に、眞を發露するものは外にない。随つて競技が眞理を愛する者、誠の道に従ふ者に取つて無上の喜であることは、申すまでもない。かくて眞を冀ふ希臘人をしてスポーツの國民たらしめたのである。また希臘の文化には、デモクラテック、スピリットが、何處までもその基調を成してゐる。この意味に於て、最もデモクラテックな精神を啓發する者として競技が喜ばれたのである。思ふに、競技には年齢の相違もなく、身分の高下もなく、職業の差別もなく、見る者も、見られる者も、悉く皆、同一の時、同一の場所、同一の嗜好の下に打寄つて、我も人も、平等一如、悉く皆清い、美しい趣味のために融けあつてしまふのである。その意味に於て、希臘人は甚だ競技を好んだのである。そし

て又、これを好愛すると共に、善を求むる人間の本性に對して、競技は一道の力強い光明を與へるものといはなければならぬ。何となれば、競技を行ふに際して、人間本然の徳性、即ち善の性質が逆り出づべき多くの機會が惠まれるからである。

雪を凌ぎ霜に耐へて、凜として、咲出づる梅花にも、優にやさしい香があるやうに、血湧き、肉躍り、龍羣虎嘯、火花を散らして闘ひつゝある間にも、自ら競技道徳の發露がある、その間に滾々たる友愛の情が湧き、懐かしい謙讓の徳が流れ出る。

滿場圍として聲なく、固唾を呑み息を凝らして控へてゐる幾千の應援者幾萬の觀客の前に凜々しく立並ぶ選手を見ては、戦はざるに早く既に涙ぐましい氣分が湧く。應援者が選手の心を汲み、選手が應援者の心に感激する時、勝つも涙、負けるとも涙、この清い温かい涙の中に、一切の世間的・功利的の利害得喪を超越した、純眞無垢の情緒が流露する。そしてこの清い温かい涙の中に、純眞無垢の情緒の中に、我も人も思ふさま浸ることが出来るのである。かゝる清い享樂、純な氣分は、今の時、競技を措いて他に何物を以て代へることが出来るであらうか。文化が進むと共に、生存競争が愈々烈しく



なり、うき世の中が益々せち辛くなつて来る今の時に於て、暫時なりとも、かういふ離離たる世の塵から脱れ出て、この綺麗な、無垢な境地に心を遊ばすことが、どれだけ、善を冀ふ人間の本性に、大いなる慰安と光明とを與へるであらうか。善を希求する希臘人が、いたく競技を喜んだのは當然のことであつたのである。

競技によつては、なほ幾多の徳性が涵養されるのである。個人と個人と對立して技を争ふ時、眞に電光石火、寸分の隙も許されないのである。かくの如くして勇氣・果斷・克己・忍耐・敏捷・自信・努力等、人間が人間として世に處し事に當る上に最も大切な幾多の徳性の養成せらるべき機會が、競技によつて恵まれるのである。更に又團體競技を行ふに當つては、協心・節度・責任・義務・服従といふやうな、人間が社會生活をなし、相互扶助を行ふ上に於て缺くべからざる幾多の麗しい徳性が培はれるのである。かくの如くして、競技によつてフェロー、フィーリングを高潮すべき機會が與へられる。そしてこのことが、一國家として、一民族として、その隆昌進運を來す上に、どれだけ大切であるかは、今更言ふを俟たないのである。

### 二三 ゲーテを憶ふ

#### 1 解題

本課は、柳澤健の「異國趣味」の「シチリア遊記」中なる「パレルモ」の一節である。「異國趣味」の中には「北支・滿洲・朝鮮・北歐素描。西班牙遊記。シチリア遊記。墨西哥風景。(附)アカブルニ遊記」がある。なほ「シチリア遊記」には「海上。パレルモ。セジュスタの希臘殿堂。パレルモからジェルジュンチへ。ジェルジュンチの黄昏。古都シラクサ。タオルミナの僧院。タオルミナからメッシナ海峡へ」といふ章がある。その「序」には、

「僕が初めて日本の土地を離れたのは大正九年の春だつた。それから一昨年の秋墨西哥から日本に戻つて來て久しぶりの内地生活を愉しむやうになつた今日にいたるまで、殆どこゝ、二十三年といふものは異邦の旅から旅への連続でしかなかつた。印度洋を四度も越した。太平洋も二度ほど越した。眞夏の太陽が見られるスカンディナヴィア半島の北に行つた僕は、熱帯に近い

### 柳澤健

墨西哥高原のサボテン林のなかで火のやうな月も見た。巴里のジャンゼリゼエと紐育のプロード・ウエーの華やかなネオン・サインに親しんだ僕は、人の子一人通らない熱河の夜更けの町で寒まじりの蒙古風に吹かれもした。

今日日本の疊のうへに坐つてこの十餘年に互つた旅の覺書をひろげてみると、流石に深い溜息が我知れず洩れる。まつたく、こんななまでに異郷の旅に長い日を送らうとは、僕自身も豫期しないところだつた――。

こゝに輯めた文章は、この長い旅のなから適宜にいくつかを拾ひ出したものである。支那と滿洲國と朝鮮と、――この亞細亞の一角の旅を冒頭として、北歐スカンディナヴィアの旅に南歐イベリア半島とシチリア島の旅を加へた歐羅巴の一角の印象記をその次に置き、最後に亞米利加大陸の一角である墨西哥の旅の素描を加へた。いづれも地球上の大道といふよりはその傍道サイド・ストリートの土地であるとも言へる。此等の國々の旅の物語で本書を埋めたところに、本書の特色があると言へば言へる。旅のは



んとの面白味は決して人通りの激しい本道にはなくて、むしろ人から忘れられやすい傍道に添うて見出されるのだと言ふ人があれば、本書の著者には一番會心の言葉である……

僕はこゝ暫らくは日本の生活を續けることになるだらうが、いづれまた異邦の旅に出ねばならぬに違ひない。然しこの書のかなかに書きとめたいくつかの土地を再び踏む日があるかどうか。この意味で、この旅の覺書は僕にとつて忘れがたい憶ひ出になるものとして愛しむ氣持のふかくないこともない。いづれにもせよ、行方定めぬ旅鳥が今しばらく大木の枝にとまつて飛び來し方を振り返つてゐるのがこの書の姿だと言へよう。云々。」とある。

昭和九年、東京、日本評論社版。

## 2 作者



柳瀧 實 ヤナギサハ タケシ。  
明治二十二年十一月會津若松に生れた。會津中學・第一高等學校を経て、大正四年東京帝國大學法科大學を卒業。逓信省に入り、横濱郵便局外國課長に任ぜられ、又去つて大阪朝日新聞論

説委員に轉じ、歐洲に遊び、歸朝後外務省亞細亞局に入った。大正十三年在佛大使館書記官に任ぜられ、瑞典に轉じ、更にメキシコに轉じたが、昭和八年歸朝、外務省詰となつた。大正四年富田碎花・西條八十・山宮光・江夏歌之助等と「詩人」を刊行し、同年雑誌「詩王」を起した。

著作には「果樹園」(大正三年刊)を處女詩集とし、合著「海の港」(大正七年)、論集「現代の詩及び詩人」(大正九年刊)、譯詩集「現代佛蘭西詩集」上巻(大正十一年刊)、「柳澤健詩集」(大正十一年)の外、紀行「南歐遊記」、「歡喜と微笑の旅」、評傳「ジャン・ジヨレス」、雜集「巴里を語る」などがある。彼は三木露風に合流して「未來」同人として發足し、屢々北原白秋一派と對峙した。彼が雑誌「黒猫」で、白秋抹殺の一文を掲げたのに對し、白秋門下の萩原朔太郎が、雑誌「文章世界」で「三木露風一派の詩を放逐せよ」を應酬した如きが、その例である。大正四年彼が「文章世界」に掲げた「最近の詩壇を論ず」は、當時理解と公正とを示した詩壇評として、好評を博したものであつた。彼は詩家としても、以上に詩魂ある鑑賞家・思想家・散文家としての明日を暗示してゐる。

## 3 編纂の用意

前課に於て古代ギリシヤ人の思想・文化の一端にふれた。それに關聯して南歐の自然が持つ力、南歐の自然が人に與へる影響を興味深く取扱つた本課において、前課を側

面より補つて完結せしめることを心がけつゝ、地勢と人文・思想といふものの交渉を考へしめ、更に大詩人ゲーテの一斑を興味をもつて讀みとらせたいと思ふ。

## 4 要旨

シ、リー島の或町の或家で、窓際に立つてガリバルデイの庭園を眺めてゐる作者は、ゲーテのパレルモ紀行の一節を通して、ゲーテのことを憶ひ出す。ゲーテが持つ世界は、單に詩の世界に止らず、植物學にも礦物學にも解剖學にも及び、實に驚くべく廣大であつた。それが北歐ワイマールの書齋の中では靜かにをさまつてゐるが、南歐のこの町の公園に於ては俄かに動的になつて、ゲーテ自身「己の心の不統一を、分裂を、放漫を嘆き訴ふる」ほどに、又「我々はどうかうも數多い欲望を起すやうに刺戟されるであらう。」と告白するほどに、變化するのであつた。その南と北とに於て、大詩人の心境が變化し、特に南歐の自然に對して活動し映發するその偉大なところを憶ひ、更に進んで北と南との情景そのものの特色を言ふ。

## 5 概説

第一節(一三一頁—一三二頁四行) 序説。シ、リー島のガリバルデイの庭園を眺めながら、ゲーテのことを頭に浮べるに至る。  
第二節(一三二頁五行—一三三頁) ゲーテがシ、リー島の或公園に遊んで、當時營んでゐた劇詩の構成をよそに、自然科學に對する愛から、その草木の珍しさに心を奪はれてしまふ事實を敘す。  
第三節(一三四頁—一三四頁一行) ワイマールの舊居、書齋訪問の思出。ゲーテの持つてゐた世界の廣さ、その頭腦の大きさに驚く。  
第四節(一三五頁二行—一三六頁一行) ワイマールに於けるゲーテと、南歐の國に於けるゲーテと、兩者を比較して説く。  
第五節(一三七頁二行—一三八頁—二行) 更に北歐と南歐との情景そのものを比較して、ゲーテならずとも心の變移を感じない者はないと言つて、南と北との特色を描く。



第六節(一三八頁—三行) 結論。作者は再び我に歸つて、身邊の景を敘す。

6 取扱上の注意

□作者と共にゲーテの大を憶ふことが出来、そして、作者が最後に比較して描いてゐる「北の持つ横顔と南の持つ横顔との相違」が理解されたならば、本課講讀の内容的  
目的は果されたといつてよからう。

□「部分的に語句を拾ふと、彼は衷心から現代に生れた人間の心の統一を、分裂を、散漫を嘆息する」(一三三頁—〇行—)といふのが、如何なる意義であるかが一寸考へさせられる。これと殆ど同じ語句は一度繰返されてゐる(一三五頁三行—)。この兩者を比較して、考へるとよくわかつて来る。前の「統一」とあるのは、後には「不統一」となつてゐるので、「統一を嘆息する」といふのは「統一に當つて、よく統一が出来ないことを嘆息する」意味であつたことを知る。かくて、こゝでは本文を以て本文を解釋するといふ解釋上の一つの方法に就いて、生徒の注意を喚起したいと思ふ。

□「我々はどうしてかうも数多い欲望を起すやうに刺戟されるであらう！」とは、右の嘆息の聲と共に、即ちゲーテの持つ世界の廣大なことを語つてゐるものである。「我我」と複数に言つてあつても、又前には「現代に生れた人間」と言つてあつても、必ずしも誰かがゲーテと同じやうにさうではあるまい。南と北との相違が人心を變移させるとは言つても、やはり、ゲーテには特別に變移の甚だしいものがあつたと見られるところに、彼の偉大が窺はれる。

□「居は心を移す」とか、それは東洋的の古い言ひ方であるが、人心が土地・氣候によつて支配されることは、古今東西に例證が少くあるまい。さういふことを思はせるのも本課の一仕事である。この問題は大きくも小さくも考へられる。日常の書齋に於ける机の位置についても、夏休暇に、海にゆくか山に行くかについても、修養上からこの問題は考へる必要がある。

7 設問

1 作者はゲーテのどういふ點に最も感心してゐるか。

2 作者が最も興に乗つて書いたと思はれるところはどこであるか。

3 次の句はどんな意味であるか。  
彼は衷心から現代に生れた人間の心の統一を、分裂を、散漫を嘆息するのであつた。

4 次の語を應用して短文を作れ。  
冥想。環境。

8 釋義

【雜粟】 ヒナゲシ。麗春花。錦被花。虞美人草。美人草。粟粟科に屬する一年生又は二年生の草。高さ一尺に達する。莖・葉共に毛がある。葉は羽狀に深裂して、互生する。花は單瓣又は重瓣。白・紅など種々あつて、美しい。原産地は歐洲。觀賞用とし、又果實から阿片を製すること、通常の粟粟と同じである。さいぼたん。

【餘閃】 ヨセン。沈みかけてからうじて残つてゐる太陽のひらめき。まさに西山に沈まうとする太陽の餘光。閃とは、ひらめく。ちらつく。ひらめかす。ぴか／＼する。動く貌。身を側めて避けること。

【山影】 ヤマカゲ。サンエイ。山の、水面などに映つてゐる姿。こゝでは山そのものをさす。それは恰も「月影」が、(一月の光に照らされて映つた物かけ。月桂。月影(ゲツ)の外に、(二月の形。月の姿。(三月のひかり。月あかり。月光。即ち月そのものをさす類である。始めの行の「西の山さして落ちて行つた。」といふ文の次に、原文には、

「あの山影はかのノルマン・シチリアン藝術の最も美しい典型とされてゐるサンタ・マリア・ラ・ヌオヴァの本寺のあるモンレアレの町が横たはつてゐるカプト山ではないであらうか。」  
といふ一節がある。

「その山影の頂は蝶々のやうに細かくふるへてゐる。」とは、まだ落ちきらぬまつかた夕日の光がきら／＼と目を射るので、山の頂が蝶がひら／＼と飛び舞うてゐるやうに細かくふるへて見えることを言ふのである。

【夾竹桃】 ケフチクタク。夾竹桃科に屬する常緑灌木。原産地は東印度。高さ一丈内外に達し、葉は全縁・革質の



披針形で、三葉づつ輪生する。花は白色又は淡紅色で、夏季開く。觀賞用として我が國暖地に栽培せられるが、有毒である。けふちくさう。

【黄金色の薄明】 コガネイロのハクメイ。「薄明」とは、日出前又は日没後の若干の間、日光が、大氣の層から反射及び屈折して、地面に達するために、全く暗くなりきらずに、幾らか明るくなつてゐる現象をいふ。その繼續時間は、大氣層の高さ・密度及び太陽の黄道面と觀測地の地平面とがなす角度に關係する。故に赤道地方に於いては短く、高緯度の地方に至るにつれて長い。

【爽やか】 サワやか。(一)清々としてこゝろよいこと。すがすがしいこと。

源氏物語の柏木の巻に「御心地は、さわやかになりたまひにたりや。」

(二)あざやかなこと。さつぱり。さわらか。爽快。

源氏十二段長生島臺に「御陣立さわやかにこそ見えにけれ。」

(三)はつきり。明快。分明。鮮明。

狭衣物語に「人もあらばいかにと、いみじうおぼしめさるれど、さわやかに物もえのたまはせねば」こゝでは(一)の意。

【強烈】 キヤウレツ。猛烈。つよくはげしいこと。猛烈。

【香氣】 カウキ。かをり。にほひ。香(カ)。

【ガリバルデイ】 Garibaldi. 一八〇七年イタリアに生れた。政治家として軍人として波瀾に富む一生を送つた。一世の奇傑で、熱烈勇敢、恬淡無私の愛國者として國民愛慕の的であつた。その名を冠した公園がある。

【黄昏】 タソガレ。(一)たぞかれどき(黄昏時)の略。

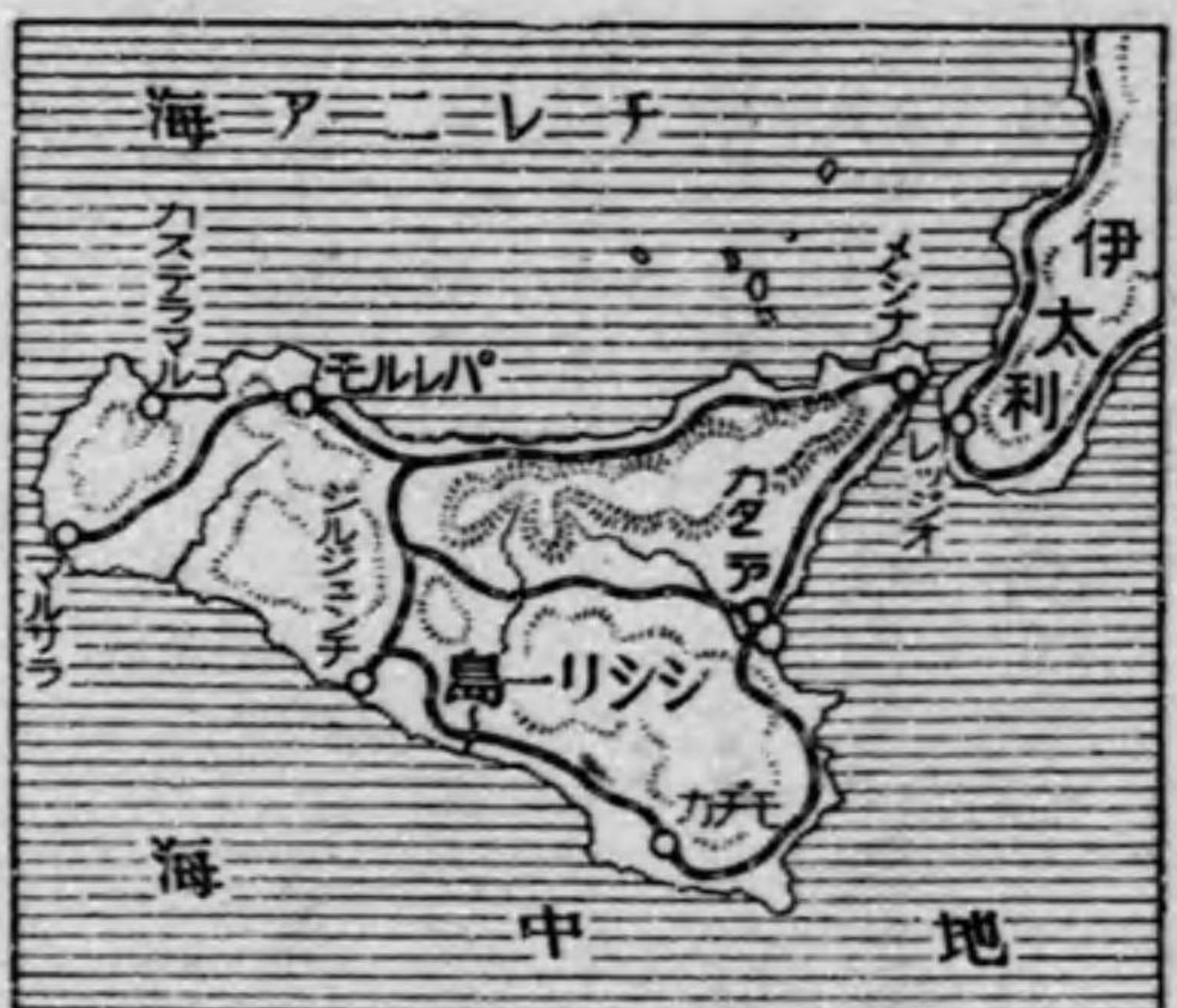
源氏物語夕顔の巻に「よりにこそそれかとも見めたそがれにほのく見つる花の夕顔」

「たそがれどき」とは、「人の姿の誰ぞ彼はと確めがたき時」の義である。日の暮れそめて薄暗いとき。ゆふぐれ。すゞめいろどき。くわうこん。かはたれどき(夜明けのうすあかりの時)に對していふ。

【一際美しく浮び出した】 一段と美しく浮び出て來た。

「一際(ヒトキハ)は、ひとかさ。ひとしほ。一層。

【パレルモ紀行】 ゲーテのパレルモ地方を遊歴した折の旅行記である。



パレルモ (Palermo) は、イタリア國シ、リー島の首邑。同島の北岸、パレルモ灣に臨み、市街は山を背にして半圓狀を呈し、綠陰深い棕櫚、丈餘もあるサボテン・龍舌蘭、拭きとつたやうな蒼空、轆や車輪に原始的な色彩で歴史的人物などを描き野菜などを載せた小車、特

有な大きな肩掛を著けた婦人、これら風物の何れもが半島部イタリアと大いに趣を異にしてゐる。この町は古代にはパノルム Panormus と呼ばれ、フェニキヤ人の創建にかゝり、次いでカルタゴの手に移り、ローマに征服されたのが西紀前三五四年であつた。その後サラセン人に永く占據され、一〇七二年にはノルマン人に占領された。

一二八二年にはフランスに反抗して大虐殺が行はれたことがあり、一八六〇年ガリバルデイによつて征服され、半島部に從屬するに至つた。かく古くからシ、リー第一の都會であり、波瀾重疊の歴史を有するため、歴史的遺物が極めて豊富である。ゾーモの大寺、エレミティの修道院、舊王宮内のカッペラテイーナ(禮拜堂)、郊外モンレアレの丘上のゾーモヤデーザ宮殿等はその主なるものである。これ等の建築物は半島部イタリアのそれと異なり、東洋的色彩が加はつてゐること著しく、殊に現代離れのした空想的・怪奇的なモザイク畫は特色あるものである。郊外は石塊磊々たる不毛の地區も少なく、市の工業は頗る不振で、小規模の造船所・鐵工場等を見るのみだが、葡萄酒・火酒・オレンジ・レモン・硫黄・革皮・オリヅ油等の輸出はかなり多く、漁業も相當盛んである。人口四五六、一三二(一九三〇)。

【杖を曳いた】 ツエをひいた。「杖を曳く」とは、杖を手にして行くこと。散歩に行くこと。

禮記の檀弓に「負手曳杖、消搖于門。」



蘇軾の文に「曳杖不知巖谷深、穿雲覺衣裳重。」

【自分のほしいままな空想はこれであつたことに考へようとしてゐる】 自分は、ほしいままに空想をめぐらして、ゲーテがよく散歩した公園が、自分が今見てゐるこの小さな庭園だつたと考へようとしてゐる。即ち、この小さな庭園が、ゲーテのよく散策に來た公園だと空想するのである。

【劇詩】 ゲキシ。演劇でうたふ韻文。 Drama.

西洋文學に於ける詩の三大部門の一。全篇個々の人物の白から成り、これを舞臺上に現はして、性格と事件との發展を示すものであつて、個々の人物の白は各、一個の抒情詩をなし、全篇を通じて客觀的に事件を發展させる。随つて劇詩は恰も主觀的に作者の感想を抒べる抒情詩と客觀的に事件を敘述する敘事詩とを打つて一丸とした様なもので、これ客觀兼主觀の文學と言はれる所以である。劇詩が抒情詩及び敘事詩と異なる所は、作中の人物が各、抒情詩人となつて自己の感想を抒べるが、作者はその背後に隠れて現はれないのを常とし、又各人物の

白は相合して事件を發展させるが、それは敘事詩の様に外部から事件の經過を敘述せずして、性格の發展を逐うて内部から自然に發現させる所にある。但し古來の劇詩の中には、純敘事詩的分子若しくは純抒情詩的分子を混入するものも少くない。

劇詩には古來三一致と稱する法則がある。即ち一つの劇はなるべく同一の場所に起り、一日の中に終始するものであつて、且すべての出來事は唯、一つの筋の發展によつて統一せられざるべからずとする法則である。が、近世劇では必ずしもこの法則に拘泥しない。シクスピアの劇には現に場所及び時間の一致を無視して、傳統の形式を破つた例が多い。

劇詩は通常、序・葛藤・解決の三段に分れる。更に葛藤が解決される間を細分して、昂進・最高潮・轉向及び解決とし、これに序を加へてドラマ殊に悲劇は五幕からなるのを古來の通則としてゐる。各、の幕は更に若干の場に分れるのである。劇詩を大別して通常、悲劇・喜劇・和劇（悲喜劇）及び樂

劇とする。

【構想】 コウサウ。(一)作り構へた思想。表現しようとする思想を組み立てること。(二)想像に同じ。こゝは(一)の意。

【平靜】 ヘイセイ。たひらかにして、しづかなこと。穩かで、おちついてゐること。

晉書の范甯傳に「道尚虚簡、政貴平靜。」

【漫步】 マンボ。何處といふ目的もなくあるくこと。そゞろあるき。

【構成】 コウセイ。かまへつくること。組み立てること。こしらへること。構造。

【自然科学】 シゼンクツガク。(精神科學の對)自然の現象を對象として研究するもの。天文學・物理學の類。

【形態】 ケイタイ。かたち。すがた。なりふり。やうす。そぶり。

歴代名畫記に「盡其形態、背眼・脚爪・毛彩、俱妙。」

形態學とは生物學上の一分科で、生物體の外形及び内部の構造、並に發生の状態を研究する學科。外形の考究を専らとするものを器官學、内部の構造を主とするものを解剖學、發生を主とするものを發生學といふ。

【性質】 セイシツ。(一)本來の性状。固有の氣質。うまれつき。天性。資性。

唐書の柳公綽傳に「公綽幼孝友、性質嚴重、起居皆有禮法。」

(二)事物の本來固有する所のもので、これによつて他事物と種類を區別され得るもの。こゝでは(二)の意。

【子細】 シサイ。「仔細」とも書く。(一)こまかなこと。くはしいこと。綿密。

朝野群載二十に「任先例、子細言上如件。」

(二)委細の事情。ことがら。いはれ。保元物語、新院御謀叛思召立の條に「武士二人召し捕つて、子細を問はる。」

(三)かれこれと言ひ立てる程の事情。差支へることがら。平治物語、源氏勢汰の條に「平氏の一類を減さんこと、何の仔細かあるべき。」

こゝでは、(一)の意。

「しさいなし」とは、(一)變つた事情がない、差支へない。

(二)むづかしいことはない、面倒はない、といふこと。



「しさいにおよばず」「しさいにやおよぶ」とは、かれこれと事情を申し立てるまでもない、といふこと。

【衷心】 チュウシン。まごころ。本心。衷情。衷懐。

【現代に生れた人間の心の不統一を、分裂を、散漫を嘆息するのであつた】「現代に生れた人間の心」は、ゲーテ自身も含めて一般の人の心を言ふ意にとつてもよいが、こゝではゲーテ自身自身の心のみを指したと強くかつた方がよい様に思はれる。勿論、その中には一般の人の心も含まつてはゐるが。

心の不統一を、分裂を、散漫を嘆息した、その理由は、次の文に説明してある、即ち、一三四頁の始めの行から、一三八頁の二行目まで。要點を言へば、

「輝く岩と樹木と草とを見、またまばゆき大理石の彫像と殿堂とを見た」からである。ワイマー（北）では「思想だ、内だ」からであり、シ、リー（南）では「實行だ、外だ」からである。

【分裂】は、(一)わかれさけること。わかちさくこと。(二)動物學上の用語。一箇體が二箇體に分かれること。原生動物の蕃殖の際にこれを見る。あみばりの類。

【散漫】(サンマン)は、(一)ちらばること。ひろがること。

(二)思想などが漠然として、とりとめのないに言ふ語。

【植物學】 ショクブツガク。自然科学の一分科。

植物界に關する總べての事項・現象を研究する科學。通常、植物形態學・植物生理學・植物分類學・植物記載學・植物生態學・植物分類學・化石植物學等の數科に分たれる。

【鑛物學】 ケツウブツガク。自然科学の一分科。

鑛物の形態・性質及びその産出の状態・成因・變化等を考究するもの。

【解剖學】 カイボウガク。醫學の一部分。解剖についての學問。

【解剖】とは、(一)病原等を探究するために、動物(又は人間)の身體全部又は一局部を解剖して、骨・筋・臟・腑などの状態を調べること。ふわけ(腑分)。

(二)事物の條理を細密に分解すること。用例は「文法上の解剖」等。

【興味】 キョウミ。おもしろみ。おもむき。趣味。をかしみ。興。

【ワイマー】 Weimar ドイツ、チューリンゲン州の首府。

元サクソニヤ・ワイマー・アイゼナッハ大侯の居所であつた所で、イルム河の左岸に位し、極めて古風の落著きのある町である。



ゲーテの書齋

王城・博物館・劇場等見るべきものが多いが、殊にこゝの名高いのはドイツ文學に於いてである。有名なゲーテは一七七五年から一八三二年まで、シルレルは一七九九年から一八

〇五年までこゝに留まり住んだ。その他ヘルデル、ヴィランド等の住んだのもここである。ゲーテとシルレルと

の家は今も公開されてある。ゲーテの家は市の南方ゲーテ廣場にある。ゲーテ國立博物館と稱して十九世紀末公開せられ、宏壯な建物の中に多く貴重な遺物が保存してゐる。シルレルの家はシルレル街にあつてゲーテの家ほど立派なものではない。この二人の大詩人の銅像は劇場の前に建てられてゐる。この地にはなほ美術學校・音樂學校・工業學校その他の教育機關がよく備はり、工業としては鐵工業・帽子・製粉等を擧げ得る。人口四五、九五七人(一九二五年)。

【蒐め】 アツめ。多くのものを、一つ處に寄せ合はすこと。まとむ。つどふ。よす。あはす。

【おほどか】 大やう。大らか。おほのか。おほまか。のどやか。

宇津保物語、樓上の巻、上に「しづかに、ちこの御ありさまともなく、おほどかなり」

枕草子卷一に「君見知らずがほにて、おほどかにてゐ給へり。」

【大理石】 ダイリセキ。成分は炭酸カルシウムであつて、



通常純白であるが、不純物のために縞をなすものもある。裝飾及び建築用の材料とする。

【彫像】 テウザウ。像を彫刻すること。又彫刻した像。ここでは後者。

【殿堂】 デンダウ。(一)高壯な建物。殿宇。堂宇。晋書の荀苾傳に「應對殿堂、奉酬顧問。」

(二)神佛を奉祀した建物。

【蠱惑】 コワク。たぶらかし惑はすこと。まどはすこと。

左傳の莊公廿八年に「欲蠱文夫人。」

その杜註に「子元文王弟。蠱惑以淫事。」

【我勝ちに伸び、弾け、突き進むやうになつて来た】 慾望が他の慾望を押しつけて、自分勝手に、伸びたり、弾けたり、突いたり、進んだりするやうになつて来た。即ち「彼の慾望は同時にあらゆるものに向つて——石に、樹に、草に、建物に、彫像に、思想に向つて——燃えつけ」その慾望はそれ自身で、自己の存在を主張し、それ自身成長したり、成長の極弾けたり、突いたり、進んだりするやうになつた。

【光と色との波が亂舞してゐるやうな植物が聳立してゐて、忽ち彼の眼と心とを捉へてしまふのであつた】 植物は南歐の太陽の光をうけて、きら／＼と輝き、色とりどりの葉や花をつけ、さまざまの形をして、すつくと立つてゐる、ゲーテはすぐにそれに眼をひかれ、心をうばはれてしまふのであつた。

【亂舞】(ランブ)は、(一)古昔、五節・豊明節會などに、殿上人などが、びんたたらなどいふ歌を唄つて舞ふこと。

公事根源卷下に「帳台おはします程、亂舞あり、びんたたらなど唄ふ。大歌・小歌などいふ事あり、寅の日は殿上の淵醉あり、朗詠・今様など歌ひて、三獻はてて亂舞あり。」

(二)亂れて舞ふこと。

十訓抄、卷上に「京より上日の輩下りて、遊宴・亂舞の程なり。」

(三)能樂の演戲の間に行ふ舞。ふつぶ。

陰徳太平記、四十七に「鼓舞の堪能ども多ければ、亂舞可相催。」

こゝでは、(二)の意。

【聳立】(シ。ウリツ)は高くそびえ立つこと。しよりりふ。

【環境】 クッシンキウ。周囲の境界。四境。

【變移】 ヘンイ。うつりかはること。移變。變遷。

【靜寂】 セイジヤク。ジウジヤク。靜かできびしいさま。

【冥想】 メイサウ。目を閉じて或事物を考へ思ふこと。現

前の境界を離れて想像をはせること。冥想。

【溫柔】 ヲンジウ。おだやかでやはらかなこと。溫順。

禮記の經解に「其爲人也、溫柔敦厚。」

【私語】 シゴ。さ／＼やくこと。ひそ／＼ばなし。

後漢書の光武記に「難交私語。」

【微笑】 ビセウ。につこりとわらふこと。ほ／＼むこと。

【思想だ、内だ】 「實行だ、外だ」の對。「靜寂・冥想・溫柔・薄明・私語・微笑」などをひつくるめて、「思想だ内だ」と言つたのである。即ち「あらゆる分裂をそのままに寛く受容れて、おほどかなる微笑のなかにそれをつゝみ」得ることをいふのである。

【喧轟】 ケンダウ。やかましくとどろく。

歐陽修の詩に「雷軸遂喧轟。」

【白晝】 ハクチウ。ひるなか。まひる。日中。白日。

源平盛衰記卷四に「神輿を塵灰に蹴立てて、白晝に雜人どもに交へ奉り入れ奉らん事、その恐れ侍るべし。」

【哄笑】 コウセウ。哄然と大笑すること。聲を立てて笑ふこと。たかわらひ。

孔平仲の詩に「遊人哄笑觀俳優。」

【實行だ、外だ】 「喧轟・活動・熱烈・白晝・高聲・哄笑」をひつくるめていつた語。前の「思想だ、内だ」の對。「靜かに整へられてゐた數々の慾望が、きら／＼する南歐の太陽のために我勝ちに伸び、弾け、突き、進むやうになつて来た」ことを指してゐる。

【横顔】 ヨコガホ。横から見た顔。横むきの顔。顔の側面。

天網島卷上に「障子に映る二人の横がほ。」

【アルパニヤ】 Albania. ヨーロッパの王國。バルカン半島の西部に位して、アドリヤ海に臨み、面積四五、三七二方軒、人口八三三、六一八(一九二七)。國內には山が



多い。これらはチナルアルプス山脈の連続である。河は



大なるものはなく、急流が深い谷を刻んでアドリヤ海に注いでゐる。農耕は殆ど行はれないで、牧畜が主要な産業である。羊・牛・馬等が多く、土産物が輸出される。住民の過半数は文化が進まず、使

用語によつて二つの群に分れ、北にゲグス人、南にトスク人が住む。主要都市は首府チラナ、ヅラツオ、スタタリ、コリツザ、エルバサン、アルギロカスツ、アプロナ等である。今までバルカン半島で幾多の變遷を経て來たが一九二五年王國たることを宣言した。

【被布】 ヒフ。羽織に似て、襟肩に圓みある小襟を付け、又、上下の前身頃に堅襟を付け、上衣の上に着て、左右の堅襟を合はせ、紐で留めるやうに製したものだ。もと僧

隠者などの用ひたものであるが、今は老人・女兒なども、多く着用する。

9 挿圖

シ、リーの風景

風光の明媚なシ、リー島の海岸では殊に色々の景致を添へる小島が遠近に見えて趣が深い。これも美しい港の沖に夢の如くかゝつてゐる翠濃やかな小高い島であつて夏も冬も遊ぶ人が多い。(世界地理風俗大系)

ワイマールに於けるゲーテの書屋

ドイツのザクセンなるワイマールにあるゲーテの舊居。ワイマールは十八世紀末より十九世紀にかけて、ゲーテ・シルレル・ヘルデル等の名士がアウグスト大公の保護の下に住したので、ドイツ文學の中心地となり、「ドイツのアテネ」と稱せられた。ゲーテの舊邸は今一つの展覽會場として保存せられ、當時の文士の記念物及び美術家の繪畫・彫刻等を蒐集してある。

書齋のゲーテ

ハイネマン著「ゲーテ」所載のものを複製した。有名な「書齋のゲーテ」の肖像である。

アルパニヤの風景

アドリヤ海に臨んだアルパニヤ海岸線のほとん中央に位するドウラツの小港の主要街の景である。

10 参考

一 原文省略の箇所

パレルモ

大理石のやうに緻密で眞白い熱さのなかを太陽の鏡が綠色した頭蓋を露はし、空の小羊の祕びやかな群のやうに烈しい暑さが樹木に噛み入つてゐる。

パレルモはこれ白く燦めける砂原、その上に物の香りが重く靜かなる天蓋となつて被さる……

扉にも彩玻璃もない露臺の上に、黄いろな椰子に似た日除けが

新らしい扇の姿で懸る。

海洋はまた薔薇色の岩の間に

その平らで熱い金属の大きな荷物を落しつゞける。人々が壊してゐる壁が、鶴嘴と一緒にたつて慄へてゐ、馬車がゆつたりした馬の歩みに連れて動いてゐる。と見ると、その座席のうへに擱げた日傘の下で

黒人の御者が軟らかなシトロロンを噛つてゐる……

この風物詩はあのマチウ・ド・ノアイユ伯爵夫人のパレルモを歌つた詩のなかの一つだ。

自分は海に近いオテル・ド・フランスの三階の部屋から眼前に擴がつてゐるガリバルデイ公園の樹木を俯瞰しながら、この詩に歌はれてゐる情景を眼のまへのこととして想ひ遣つた。日射は稍、薄れたけれども、熱い匂ひはまだあらゆるものの上にあつた。

ノアイユ夫人の所謂「白く燦めける砂原」を自分は熱と埃を浴びながら一日歩きつゞけた。マルトラナーの寺院も見た。クワットロ・カンチーの水の噴いてゐる彫刻も見た。賑やかなヴィトリヨ・エマヌエレの通りも見た。本寺の奇異な美しさも見た。カペルラ・ブラチナも見た。サン・ジョヴァニ・エヴァンジェリスタも見た。さては美術館も見たし、大きな伊太利コリント風の劇場も見た。雑多な感覚と幻想と太陽の熱とで自分の身心はかたりに疲れ切つて、宿のオテル・ド・フランスに戻るか否や、部屋の窓からはいつて來る稍、涼しい風と爽やかな緑とを楽しみながら、ボーイの運んでくれたシトロナードの眼に沁みるやうなピカントな液體を一息に咽喉につき込んだ。



そしてはじめてほつとした。

見て来たいろ／＼のものを今想ひ出して見る、とやはり奇異な混淆といふことになる。まつたくゲーテの言つた通りにそれは阿弗利加と亞細亞への道になつてゐるばかりではなく、又雅典への羅馬へのコンスタンチノープルへの、更にはまた巴里への道にもなつてゐるのであつた。それはあらゆる場所の、またあらゆる時代の十字路をばなしてゐるのであつた。ドリック風の殿堂に隣つてアラブの不思議な色と形をもつたパシリカが聳えてゐる。かと思ふと、ビザンチン式の華麗な建物に並んで、ノルマン式の堅硬な感じに充ちた建物が建てられてゐた。否一つの建物の中に於ても、一坪のなかにビザンチンとドリックとノルマンとが群居してゐるのさへ見ることがのできるのであつた。然しながらかうした古い時代の建物の周囲に働いてゐる人々を眺めると、その服装なりその髪形なりうへに、我々が物の本などを讀んで豫想したやうな特異な姿はこれを見出すことが容易ではなかつた。やはりそこにあるのは現代の「歐羅巴」であつた。曾て數ヶ月以前西班牙のアンゲルシアの各地に遊んだ折に親しく見たその地の風俗のことを、今このバレルモの町の風俗の上にも思ひ較べて見ると、西班牙の方が現代の「歐羅巴」にかう近くはなかつたやうである。然しこの現代的な風俗にもかゝはらず

に、その眼や鼻や唇や髪の毛の旅人に與へる感じは極めて錯綜してゐた。怪しい熱情的な「モハメット風の眼尖」が感じられるばかりではなく、ドリックの圓柱のやうに端麗で清純な希臘風の横顔も感じられるし、霧の深いノルマンの謎を持つた若い瞳のいろも感じることができた。

いま自分は一つの大きな生きた博物館にゐる！ 自分は幾度かうした思ひを胸に湧かしながら古い建物を見上げては立ち降りまた行人の後姿を眺めては立ち停つたことであらうか。

：何時しか陽は西の山さして落ちて行つた。云々。

2 **ゲーテの臨終前後**（杉山榮、東京朝日昭和七年三月二十二日）

ゲーテは「ファウスト」の完成で重荷のおりた思ひをしたらしく、八月末には久しぶりに孫たちを連れて大公領イルメナウ市を訪れ、キッセルハアンの山莊で數日間を過した。

一七八三年の九月二日、ゲーテはこの山莊の板壁に鉛筆で、「すべての山の頂きに憩ひあり。」といふ有名な「さすらひ人の夜の歌」を書きつけたことがある。當時彼は三十四歳の壯齡で「憩ひ」の心境を味得してゐたかどうか疑はれるが、死期の近づいた今、思ひ出の多いこの山莊を訪れて、しみじみ「憩ひ」の心持を味はつたことと思はれる。

それはともかく、ゲーテにとつてはこれが最後の旅行であつた。

翌三二年の三月半ばには軽い感冒に罹つたが、やがてそれが窒息性カタルに變じ、十六日には床についた。

然し、氣丈なゲーテは、病みながらなほ寢室と書齋との間を時折り行き來し、廿二日の朝の如きも、下僕のフリードリッヒに扶けられて、書齋に出て來た。然し、足もとの不確かな彼は幾度もよろめいたらしい。下僕は驚いて彼を寢臺の傍の安樂イスに腰かけさせた。するとゲーテは、安樂イスの左の隅にくづをれかゝつたまゝで、うとくと暫く假睡むかに見えた。然し、この假睡みは永遠の眠りに續いてゐた。餘りの静けさに、周囲の人々が氣づいた時には、彼はすでにこの世の人ではなかつたのである。この時、書齋の小立机の上の置時計は十一時三十分を指してゐた。三月二十二日午前のことである。

彼は息を引取る前に、下僕に向つて「窓を開けてくれ。もつと光がほしい。」といつたといはれる。この言葉が彼の意味深い最後の言葉として、一般に神祕化されてゐる。なるほど、この當時、視力も衰へてゐたし、彼が朝のすがすがしい太陽を求めて、かう言つたのは事實だらう。然し、これが彼の最後の言葉であつたかどうかについては、色々の異説がある上に、この言葉が一般に信ぜられるやうな深い哲學的な意味で言はれたものでないことは明らかだ。

3 **ゲーテの晩年**（山岸光宣、東京朝日昭和七年三月二十五日—二十八日）

ゲーテは（一九三二年三月二十二日）八十三歳の高齡を以て死去したので、生來非常な健康な人であつたやうに思はれるが、事實は決してさうではなかつた。青年學生としてライプチヒ大學に遊學中にも、既に嗜血して一時重態に陥り、學業を廢して歸郷したことがあつた。然しその後隨分奇抜な方法までも講じて、兎に角人並の健康を保ち、古今未曾有ともいふべきほど多種多様の創作を出したばかりでなく、科學者としても、また政治家としても、その業績の見るべきものが少くなかつた。

併し一八三〇年の春イタリ旅行の途にのぼつた一子アウグストがローマに客死したといふ報知は、當時八十一歳の老人に非常な大なるショックを與へた。それにも係らず、彼は年來の精神修養の結果として、諦念によつてよく精神的危機を征服した。諦念といふことは極めて消極的な態度のやうに聞えるが、ロゴスを行と解釋したほどのゲーテにとつては、すこぶる積極的なものであつた。中年期以後の作品はもちろんのこと、特に「ファウスト」はもつとも雄辯にこれを物語つてゐる。

しかしゲーテはファウストの死に直面して、今更ながら長生きするものの悲哀を痛切に體驗した。彼は「長生きするといふこ



とは、愛する人々に先立たれるといふことに外ならない。」と嘆息して無然たるものがあつた。若き妹コルネリアの死、無二の親友シルレルの死、知遇を辱らしたワイマーの君主カルルアウグスト太公の死、愛慕してやまなかつた慈母の死、彼の精神發達上にシエークスピアに劣らぬほど大なる影響を與へたシ、  
 タイン夫人の死、これ等の死は、それ／＼彼にとつて打撃であつたに相違ないが、一子アウグストの死ほど深刻な印象をのこしたものはなかつた。

實に人間は生きてゐる間は憐むものだといふ言葉を、この時ほど痛感したことはなかつたのである。ゲーテが息子の訃報に接したのは十一月十日で、それより十五日目の二十五日の夜、彼は再び咯血した。その翌晩には更に大咯血を繰返した。忠實な秘書エッケルマンは、ゲーテが約六ポンドの血を失つたと報道して居り、また主治醫フーゲル博士は、「破れた血管から口を通して、窒息せんばかりの勢で流れ出した血は、かなり大きな深い洗面器の半ばに達した。」と報告してゐる。かくの如く多量の血を失つたので、八十一歳の老人は、一時可成りの重態に陥つたが、醫師の周到な處置と、ゲーテ自身の意志の力によつて、二週間の後、ほとんど奇蹟的に全快した。然し彼は死期の近づいたことを自覺したので、未完成のままに残された作品の

完成を急いだ。これまで青年時代の愛人リリーを顧慮して差控へてゐた自叙傳「詩と眞實」の第四巻を書きあげ、また自身編纂の最後の全集として一八二七年以來着手してゐた四十巻の著作集を完結した。

その外一八三一年一月には遺言狀を認めて、彼の詩やオペラを作曲したツェルテルとの間に取りかはした書簡集の收入を、亡夫の未婚の娘たちに與へるやうにし、三月にはエッケルマンに死後遺稿の出版を依託し、七月には遂に「ファウスト」第二部をも書きあげて、畢生の大作を完成した。

「ファウスト」を完成したゲーテは、「今後の生命をまうけ物と思つて」これを心行くがまゝに費し得ることを楽しんだが、なほ一刻をも空費することなく、主として藝術と自然科学の研究とに従事した。またこの頃ゲーテの名聲が益々あがつたので、彼を訪問するものも可なり多かつた。

亡き息子の未亡人オットーリエは家政に無頓着な女性であつたが、併し三人の子供と共に、心からの奉仕を惜しまなかつたので、孤獨の老人を慰めるに十分なものがあつた。ゲーテはまた感謝の念を以て、自ら家政處理の任にあつたので、孜孜として倦むことなき彼の有様は、見るものをして涙ぐませたといはれてゐる。

一八三一年八月廿八日は、ゲーテの八十二回の誕生日であつた。彼の死は既に七ヶ月の後に迫つて來てゐた。彼は誕生日のお祭り騒ぎを避けて、これに先だち二人の孫を伴つて、テューリングの森に包まれたイルメナウに赴いた。この地は彼にとつては、青年時代の思ひ出深いものがあつたので、この誕生日を最後のものと信じた彼は、これに對して永遠の別れを告げんと欲したのである。

幼きアウグストを伴つたことはもちろんのこと、思ひ出は限りなく彼の胸中に蘇つて來た。彼は更にギッケルハーンの峯にのぼり、草叢を押し分け、若き頃月明き夏の夜を過ごした山小屋を見出した。その木壁の上に  
 山々の巔に  
 休みあり。  
 木々のこずゑに  
 そよ風の  
 動きも見えず。  
 鳥は林に聲をひそめぬ。  
 待てしばし、やがて  
 なんぢも休まん。

一七八三年九月七日

ゲーテ

と書き記した鉛筆の跡が、まだ薄く残つてゐた。

彼は物靜かに、待て、しばし、やがてなんぢも休まん」と繰返して感慨無量なるものがあつた。慰むるが如きこの言葉は、曾ては彼に新しき活動の朝を約束して、靜かなる眠りを與へんとするものであつたが、今では最早再び目ざむることなき、より深き永遠の夜を告げるものとなつた。然し彼はこれに對して反抗しようとはしなかつた。彼の任務は既に完全に成就されたのである。彼はなほ少時窓からタンネの林を見つめてゐたが、やがて振り返つて、「さあ、行かう」と、同伴者を促して、山を下つた。

その年も暮れたが、テューリングの空には、なほ陰鬱な雨勝ちな冬の日がかゝつてゐた。一月の半ば頃にはザーレ川の氷も解けたが、まだ霜を降らすやうな日もあつた。しかし三月半ば頃には、生温かい風が吹いて、春の近いことを告げ知らすものやうであつた。十三日と十四日には天氣がよくなかつたにも拘らず、ゲーテは日中散歩を試みた。太陽を熱愛した彼は、待ち切れなくなつて、太陽を探しに出かけたのである。然し新しき春の太陽は、遂に彼に恵まれなかつた。ゲーテの最後の數日とその死については、矛盾するやうな種々の報告が傳へられてゐる。彼の死因となつた病氣は、流行性感冒であつたらしい



が、如何なる機会にこれにかゝつたかは明らかでない。兎に角、十五日から不快をおぼえて、悪寒と熱とに交、襲はれ、咳のため安眠を妨げられ、胸部に疼痛さへも感じた。然し主治醫の憂慮したにも拘らず、一時は快方に向ひ、病床をはなれて、本や畫帖を誦すまでになつた。

然るに十九日の夜から容態が急變して、翌朝主治醫の來診した時には、苦悶の聲を立てて、顔色蒼白となり、すこぶる憂慮すべき症状を呈した。その後一時やゝ小康を得たが、二十一日の夜から全く危険状態に陥つた。二十二日には却つて苦痛を訴へることなく、やゝ落着いたやうにも見えたが、意識が朦朧となり、談話も困難で、かつ不明となり、うはごとさへも口走つた。随つて彼の臨終の言葉については、種々の揣摩憶測が行はれてゐる。或はオッティリーエに向つて、「お前の手を貸してくれ」といつたとか、或は従僕に向つて、「一番目のよろひ戸をあけてくれ。もつと光のはいるやうに」といつたともいはれる。

彼が全く昏睡状態に陥つたのは、それから間もないことである。特にこの「もつと光を」といふ言葉を、種々な象徴的な意味に解釋せんとするものもあるが、たゞもつと部屋の内なるやうにしてくれといふ意味に外ならないやうで、太陽を熱愛したゲーテにとつては、最後の要求として適當したものである。そ

の後間もなく、安樂椅子にもたれて、やゝ左の方に身を傾けながら、側に居合はせた親友や従僕等も氣のつかぬ程穩かに、彼の靈は永遠にこの世を去つて、愛する人々の待つ彼等の世界に赴いた。その時計は十一時半を示してゐた。

ゲーテの死を聞いて、ワイマーとその附近の人々は、皆哀悼してやまないものがあつた。今生の目をこめに偉人の死顔を見んことを希ふものが多かつたので、遺骸は棺に収めたまゝ、その家の階下に安置して、公衆の告別を許した。遺骸は古フロレンス風の白アトラスの衣をつけ、頭に月桂冠をいたゞき、銀模様の黒ビロードを以て、胸部に至るまでの下半身をおほはれてゐた。玄關には青地に六角の銀星を現したゲーテの紋章がかげられ、黒幕を張りめぐらした入口の上には、

死のいたましき影は、

賢者には恐怖とならず、信者には終局とならず。

そは、前者を生命に引戻して活動を教へ

後者を力づけて、來世の祝福と希望とを與ふ。

されば死は兩者にとつて生となる。

といふ「ヘルマンとドロテーア」の詩句が、銀文字で書かれてあつた。

## 二四 雄 辯

土田 杏村

### 1 解 題

土田杏村著「草煙心境」に收められた「反省と思索」と題する隨筆の中から「雄辯道」の一章を採つたものである。

「草煙心境」は著者が種々の新聞雑誌に發表した隨筆・短評等を集めたものである。

著者は

これは悉く私の生活の一面である。生活の全部を象徴し得る一面である。

といひ、又

題して草煙心境といふ。或人はこれを中世紀的思想の表現だと評するであらう。私の書齋は今日まで先づ草煙こまやかなる田圃にあつた。今はそこも都市の一隅として包容せられかけてはゐるけれども、私はやはり書齋だけは静かな場所に置きたい憧憬を持つてゐる。街頭への熱情が熾盛となればなるほど、私は十分なる休息の得られる、謙虚な草煙の小室を望む。またそれではなければ、私の健康も堪へることが出来ない。

といつてゐる。かうした草煙にあつて

甚だしく健康を害し、訪客をさへ全く避けてゐた時代の靜かな生活記録を中心としたものである。

と語つてゐる。

東京、第一書房發行。

### 2 作 者

土田杏村 ッチダ キヤウソン。

本名は茂(ツトム)。明治二十四年、新潟縣佐渡郡に生れた。新潟縣師範學校を経て、大正四年東京高等師範學校博物科を卒業、大正七年京都帝國大學を卒業、爾來、教育改造、社會改良に對する研究と努力とを續けた。主なる著作は、文學論・現代哲學概論・日本支那思想研究・國文學の哲學的研究・戀愛論等である。昭和九年歿。年四十四

### 3 編纂の用意

北歐の我が書齋に於ては調整された心境にあつたが、南歐の客舎に於ては心の統制が失はれて、あらゆるものに向つて欲望が激しく起り、突進し、渦巻いた詩人ゲーテ



の心境の變化、——環境に支配される心境の變化——を興味深く前課に於て讀んだのである。この環境が與へる心への影響、語を換へて言へば、環境の中から何物かの意味を感得すること、これは睿智のすぐれた人々の持つ心の機能であつて、それらの人に與へられた喜ぶべき天恵である。本課の、秋の林に入つてそこにまことの雄辯を聞き、眞の雄辯のあるべきやうを考へて見るといふのも、またかうしたすぐれた睿智の持主の幸ひであり、又それに共感し得ることは同様に高い睿智を持つ人の喜である。さうした意味に於て、前課と本課との聯絡に緊密なものがあり、随つて本課の内容の理解が一層有効に行はれることとなる。

#### 4 要 旨

秋の午後、紅葉の散る林に入つて、眞の雄辯とは如何なるものであるべきかを冥想し、結局、この林の自然の如く、靜かにして精しく、平易にして堅實に、明朗にして強く、淡々として支配なく、説破なく、無言にして魂を淨化せしめるものこそ、否この大自然こそ眞の雄辯の極

致であることを述べてゐる。

#### 5 概 説

第一節（一三八頁——一三九頁七行） 秋の午後、紅葉の林の静けさの中に立つて、そこにある木や小鳥に向つて語る心持を想像して、眞の演説はかゝる境地を持たねばならないと考へる。

第二節（一三九頁八行——一四〇頁三行） 作者の演説練習の経験よりして、林の中で落日を眺めつゝ練習したことが強く印象に残つてゐることを述べた。

第三節（一四〇頁四行——一四三頁七行） 以上の心境から考へて、眞の演説は如何にあるべきかを説いてゐる。この節は更に三分することが出来る。

（一）演説は詳かにして精しく、聴者の心に浸み透るものでなければならぬ。又平易にして理路の通つたものでなければならぬ。先づ自らが自らの鑑賞者として、聴者の心へ如何に入るべきかを考へねばならぬことを論じてゐる。（一四一頁八行まで）

（二）演説は健全であり、散文の如き質實さと詩の如き明

朗さを持つたねばならぬことを述べ、一箇の藝術品としての心置きが必要なことを述べてゐる。（一四二頁九行まで）

（三）演説は強みと同時に「放ち」を持つべきを論じ、此處に又聴者としての立場に身を置く必要を説いてゐる。（一四三頁七行まで）

この三小段の終りには、演説の諸本質を述べて、必ず聴者の立場に立つことの必要を力説してゐる。

第四節（一四三頁八行——一四四頁一〇行） 演者の心の持ち方を説いて、沈毅・平安を大衆と共に語る心持を持つべきことを述べた。

第五節（一四四頁一一行——一四五頁九行） 種々なる演説の種類を述べ、眞の雄辯が如何なるものであるかを説いてゐる。

第六節（一四五頁一〇行——一四六頁） 全篇の括りとして、雄辯の眞の想を綜結して説き、結局眞の雄辯は無言にして聴者の心にびつたりと入つた、説破もなく雄辯もない所に生れることを論じ、その代表としての秋の自

然物の無言にして雄辯なこと、その樹々、小鳥、落日の姿、水聲に眞の大演説を見出し得ることを述べた。

#### 6 取扱上の注意

□作者土田杏村が、哲學者として、思想家として、又社會學者、教育評論家として現代に活躍してゐた事實はよく人の知る所であるが、氏が辯論の雄であることは、直接その講演を聞いた人の外にはあまり知られてゐないやうである。氏は學生時代より辯論を好み、その修練を積んで來たので、講壇に立つての論述には水際立つて鮮やかなものがあつた。その雄辯を行ふの體驗から論述したこの雄辯論には傾聴すべき所が多い。その雄辯の本質を探り、結局それは表現された藝術作品であると論じてゐる點、活眼者の雄辯論として尊重すべきものである。

□中學時代、雄辯への憧れは少青年の心をどよめかすものである。併しこの期の少青年は、或は單に大聲叱呼するが如き、或は流暢水を流すが如き、或は徒らなる悲歌慷慨を事とするが如き、或は空しき聴衆の喝采を博するが如き辯舌を以て雄辯なりと考へる向きが多い。これらの



人に向つて、本課は最良なる指針であると思ふ。

□取扱にあつては、内容を讀みとらせて、「人に語る」との眞意義を了得せしめ、自らが言論發表の参考に資せしめるやうに導かれたいものである。

### 7 設問

- 1 この文が教へてゐる演説上の心得を數へて見よ。
- 2 辯論會などで、すぐに應用さるべき最も剴切なことがらは何々か。
- 3 この文を一場の演説として讀むとき、何と批評したらよいらうか。
- 4 次の語について説明せよ。  
曼荼羅。群集心理。鑑賞者。迎合的。

### 8 釋義

【林の木の葉に大空が高い】 林の木の葉の上に大空がはるかに高く感ぜられるといふ意味で、林の木の葉の上にとこまでも澄みきつた大空があるのをいつたのである。「木の葉に」の「に」は、「に對して」に於て「の」に「に」である。

【日の光が眠つてゐる】 秋の陽光が、沁み入るやうに、じつと射してゐるのをいつたのである。

「眠る」の語に秋陽の特色たる、靜寂な、深みのある、じつと照らしてゐるさまをあらはさうとしたのである。

【世界に韻がある、悦がある】 この宇宙間に、快い感じを持つた微かなおもむきがあり、悦の感じがある。

「韻」は、こゝでは快感を伴ふ、積極的な、何とはなしのおもむきを意味してゐると取るべきであらう。

【曼荼羅圖】 マンダラ。曼陀羅圖とも書く、梵語(Mandala) (一)淨土實相の圖。(二)種々雑多の色。



佛教大辭典によれば「新舊の譯種々ある中、舊譯は多く壇又は道場と譯し、新譯は多く輪圓具足又は聚集と譯す。この中、體に就かば壇又は道場と譯するを正意とし、義に就かば輪圓具足又は聚集と譯するを本義とすべし。即ち方圓の土壇を築きて諸尊をこゝに安置し、以て祭祀するもの、是れ曼陀羅の本體にして、この壇中には諸尊諸徳を聚集し具足して一大法門を成すこと、轂輻輳の三具足して圓滿の車輪を成する如き、是れ曼陀羅の義なり。而して常に曼荼羅と稱するはこれを圖畫せし者をいふ。」とある。尙曼荼羅は、その描かれた内容によつて種々の種類と名前とがある。

【聖フランシスコ】 (Francesco, Francis) 基督教中世の聖者で、フランチェスコ派の開祖。イタリアのアッシジに生



れた。本名は(Giovanni Bernardone)といふ。呉服商をしてゐた父がフランス旅行中に生れたゆゑ、これをフランチェスコと呼ん

だ。少くして豪奢な生活を送つたが、或時重病に罹つて後、人生の空虚を感じてこゝに宗教心を起し、種々の煩悶を経て次第に新生活に入つた。一日アッシジの近郊聖ダミアノ禮拜堂に於てキリストに接する經驗を得、一切の所有を捨ててこの拜堂を修復した。父及び郷黨より狂人視せられ、退隱煩悶の裡に二三年を過した。偶、聖書の話に感じ、一二〇九年説教を始め、これに隨ふ同志も漸く數を増した。彼はキリストが弟子を派遣した如く、二人づつを選び、何物をも携へずして道を傳へしめ、そして清貧・貞潔・服従の誓約をなさしめた。一二一〇年その徒を伴つてローマに上り、法皇インノセント三世に謁して教團設立の許可を請うた。法皇は口頭を以てその許可を與へた。その後十年の間に勢力頓に加はり、各國に使徒を遣はして傳道せしめ、彼も亦自ら東方に赴いた。後彼は激務を辭して退隱し、アッシジに歿した。一二二八年聖者の號を授けられた。彼は愛情が深厚で、慈愛の心深く、その愛は自然界にまで及び、禽獸に至るまで彼の説教を傾聴したといふ。彼



は又詩才に富み、平易の語を以て天地萬象を歌つた。最も有名なのは「太陽の歌」である。彼が「聖痕」を受けたのは一二二四年の事である。この年九月十四日彼はアルヴェノ山に於て熱心にキリストの十字架を瞑想した時、幻を觀、その身體に十字架の釘の痕と同じきものを印せられたといふ。これは信じ難い傳説の如く思はれるが、彼に接近した人はみなそれは事實であると證明した。(西紀一一八二—一二二四)

【すべては融けあつてゐる、輝いてゐる、韻を呼びかはず】  
語る人も聞く人も、すべてのものが、自他、彼我の差もなく融けあつて同じ氣持になり、共に積極的なあかるさを持ち、又何ともいはれぬ快いおもむきをお互の心に感じ合ふとの意。

【北海の怒濤を前にして云々】 作者は新潟師範及び高等師範在學中、辯論部員として活躍した。これはその當時の練習と思はれる。随つて北海とは越後・佐渡あたり、即ち北陸道の沿海を指したものである。

【泰西】 タイセイ。西洋に同じ。「泰」は「はなはだ」即ち

極の義。「泰東」に對する語。

【印象】 インシヤウ。英語の Impression にあたる。普通には、人が現在直接に物に觸れて得たところの感情が、深く心に銘して、活き／＼としてゐる心の有様をいふ。心理學上では、他物の刺戟を受けて感覺を生ずるに當り、感覺機官・神經組織等に起る生理的作用をいふ。

【遺つて】 ノコつて。

【せらぎ】 浅い瀬などに、水の流れるさゝやかな音をいひ、又、さうした流れをいふ。

【演説によつて戦ふといふ氣持】 聴衆を相手にして、自分の主張をもつてぶつかり、いやでも應でも自分の主張を受け容れさせる氣持、即ち相手を征服して自分の主張に従はしめようといふ氣持。

【群集心理】 グンシフシリ。多人數の集合した場合に相生ずる特殊な精神状態をいふ。群衆心理の特徴の主なるものは、判断力の遲鈍、推理力の減退、想像力の昂進、輕信性を見ると共に、感受性・興奮性・動搖性等の昂進から、意志薄弱並に犠牲的態度に至り易く、一般に各個

人を單純化し、極端な偏異に向はしめ、その一時的・集團

的な場合には、巧妙な指導、多數人の附和、活動の熱烈、期待の合致、共通的利害、各個人の空腹や疲勞、酒精、氣温等によつて、上述の特徴が更に顯著となる。その他夜間、燈火の消滅、火災、流血、爆音、劍戟の光、破壊、混亂、爭論等の外的偶爲的條件は群衆の活動を激越化せしめるもので、各個人の單純化を一層甚だしからしめ、衝動性・雷同性・破壊性・残忍性及び責任感の減退等を著しからしめる。

群衆はその中心活動たる指導者によつて動くを一般とし、それに絶對的權威と挑爲的煽動とを以て臨むことを喜ばず、その性質としては民衆の精神の洞察力・熱狂性・自信力・威嚴・徳望等を有し、實行家にして修辭家たることを必要とする。

【戦ふ心は粗である】 戦ふ時は相手を破るといふことが全目的である。このためには、これについては遺憾なく心が配られるが、その他の方面は疎かとなる。殊に建設的・融和的な心や、圓滿や平和を欲するについての心構へな

どは動かない、随つて心は粗となる。

【人を縛り合はせる】 心から共鳴して人の説に服するのでなくて、戦により、力によつて無理に相手を屈服せしめ、いや應なしにその主張を押し付ける。かやうな状態をさして、人と人とを縛り合はせるといふ。

【心から心へ浸透る】 説く人の心が聴く人の心へ流れ込む。そこには心の共感・共鳴があり、同感と賛成とがある。

【所詮】 ショセン。つゞまるところ。結局。おしつめて考へると。

【眞摯】 シンシ。極めて眞實なこと。まじめなこと。

【表現・作品】 作者が心の中に感得した美・眞・善を自らの心の中に収めておけない感激に盛り上げられて、それを形體・色彩・音調・言語・文字の媒によつてあらはしたものが、表現せられたものであり、作品である。普通にいふ藝術作品は、いづれも表現・作品である。

【理路を盡くす】 道理の筋道を、省くことなく、略することなく、十分完全に明らかにすること。

【自らを悦ばせる論理】 論ずる人自らが、自分でもなる程



その通り尤もなことだと満足して愉快を感じる程の正しい理窟の筋道。

こゝではゆる論理とは、通俗の用法に従つて、思考・推理・判断・断定等による思想上の考へ方の上に行はれるところの正しい道理、正しい理窟の筋道といふ程の意味である。

【自らを表現の中に浸透らせて云々】自分の表現した物はたゞいゝ加減なものでなく、自分自身がその表現の中にとけこんでゐなくてはならぬ。即ちその表現が、眞の自分の心からの主張、心からの感激で出来上つてゐなくてはならぬ。さうして、その表現に自分の眞實がこもつてゐると同時に、その表現を鑑賞する人の立場に自身を立てさせて、それを理解する上に邪魔になるやうな事柄はないかと検してみ、若しあるならば、それを悉く除去するといふことに努力せねばならぬ。即ち鑑賞する人に理解出来さうもないと思はれるものは決して自分の表現の上に用ひないやうにせねばならぬ。

【鑑賞者】 カンシヤウシヤ。みてほめる人、みてたのしむ

人。

【障礙】 シヤウガイ。邪魔をするもの。さまたげ。

【散文の強み】 文章の中で韻文と散文とは各、性質を異にする。韻文の方は印象的で、論理に飛躍があるため、極めて輕妙で、暗示的で、天才的な感を與へる。散文の方は敘述的で、論理を辿るが故に、重厚で、説明的で、努力的で、着實性を感じしめる。

こゝではこの兩者の特色を借りて、譬喩的に用ひたのである。

【反撥】 ハンパツ。はねかへすこと。うけつけぬこと。

【招牌】 セウハイ。看板。

【質實は自然であり、粗剛は訓練せられない反撥である】特別なたくらみや裝飾のない質實は、自然のままの姿である。粗剛は一見質實に似てはゐるけれども、質實とは異つて、未だ訓練されてゐない、何物へでもやたらに一應はつきあたつてみるといふ態度のもので、質實よりも一段劣つたものである。

【米松の安建築のやうな明るさ、街頭の招牌に描く圖案の

やうな明るさ】これらのものは何等深みのない、奥行きのない明るさである。たゞ表面に見えたそれだけの明るさで、床しさだとか、おもむきだとかいふものはない。

【詩の明るさは直に韻である、陰である】詩の明るさといふものは、明るさそのもののうちに何ともいへぬ趣が含まれて居り、またその明るさを浮き立たせるところの陰の部分をもつてゐるものである。

【力點】 リキテン。最も力をこめた點、主力をそゝいだ點。

【諄々】 ジュンジュン。反復してねんごろに誨へること。

【納得】 ナットク。のみ込むこと。得心すること。

【固く執つて動かぬもの】いかなることがあつても、自分のひとたび主張したところを固くもちつゞけて、變更し、廢棄するやうなことはないもの。

【高調】 カウテウ。強くとなへること。熱心となへること。

【弛緩】 シクワン。緊張の反對で、はりのゆるむこと。だれること。

【快く放つ】 コ、ロヨクハナツ。あつさりときれいに打切

ること。

【敵を愛さなければならぬ】自分の主張に共鳴同感せぬ人を度外視せず、この人に向つても他の人に對すると同様のまことの心を持つて語りかけねばならぬことをいつたので、前述の「すべての人に語つて」を更に言ひ深めたものである。

【沈毅】 チンキ。沈着で剛毅なこと。おちついて物に動ぜぬこと。

魏志に「明帝秀出、口吃少言、而沈毅好断。」

【迎合】 ゲイガフ。他人の意志を迎へてそれに合ふやうにすること。御機嫌をとること。

【客観的】 キヤククワンテンキ。客観とは、自分以外の他物又は意識の目的物、即ち、主たるものの對象で、自己又は意識に觀察せられる一切の外物の稱。

客観的とは、客體を土臺として事物を客観し、認識・觀察・思考等をなすこと。

【所詮演説は、客観的であり、理論的であると同時に、彼自身身の表現でなければならぬ。彼自身のものでなければな



らぬ。彼自身でなければならぬ。聴者との別を忘れさせるものでなくてはならぬ」一四一頁で述べた「演説は所詮一つの表現であるから云々」のことを繰返し、更に敷衍したものである。

【それは小鳥の囀である、聲なく落ちる木の葉の光である。せらぎの水、その音の静かに絶える處は却つて雄辯だ】作者はこれらのものをまことの雄辯であると感じた。それはこれらのものは宇宙の中にこもれる大自然の表現である、即ちその内容は充實しきつた眞實である。そして自然であるだけにその表現には些かの無理もない理路が極めて整然としてゐる。そして表現と内實とは全く同一物の両面で、表現即ち内實、内實即ち表現である。又すべてに對して語り、同感を強ひることもない。沈毅と平安そのものである。又謂はゆる雄辯に見る技巧もない。かうした點でまことの雄辯であるといふのである。

【説破】セツパ。相手の説を打破ること。

【雄渾】ユウコン。言論又は文章のを、しくして品よく、且よどみのない様をいふ語。「渾」は、豊に流れる、みな

ぎるなどの義。

9 挿 圖

聖フランシスコ小鳥に説教す

筆者チオットオはイタリヤ繪畫の先驅者で、アツシジの聖フランチェスコ寺に多くの壁畫を遺してゐる。これはその一つで、聖フランシスコが鳩たちに説教してゐると、鳩たちは悉く首をあげて聴き入つてゐる圖である。聖者の背後にゐるのは、聖者と因縁の最も深かつたキヤメラ女である。

秋の林 川合玉堂筆

深秋と題して第十四回の帝展に出品された名畫である。この畫について作者は「曾て上州四萬温泉の奥で晩秋の景物に心惹かれ、寫生しておいたのですが、二三年腹案のまゝに過し、今度繪にして見ました。薄曇りのお茶時、焚火して憩うては茅刈る人々です。」と記してゐる。

筆者川合玉堂、本名は芳三郎。明治六年(二五三三)岐阜縣生。夙に大成義會に學び、後橋本雅邦の門に入つて狩野派の畫風を修め、特に山水花鳥に長じてゐる。文展第一回以來の審査員で、日本畫壇の元老である。現に東京美術學校教授、帝室技藝員である。

二五 秋 霧

北 畠 親 房

1 解 題

「神皇正統紀」の後醍醐天皇の條の抄録である。延元三年、鎮守府大將軍北畠顯家卿が義良親王を奉じて陸奥より上り、畿内の各處に轉戦する次第から、後村上天皇の踐祚し給ふまでのことが記されてある。即ち顯家卿の戦死、義良親王の再び京へ赴かれようとして、途中海上で暴風にあはれ、伊勢から吉野に入らせ給ふ事、後醍醐天皇の崩御などが、主なる史實的内容である。題名は、本文中なる「八月の十日餘りにや、秋霧に冒されさせ給ひて、云々」の中の一句を取つたのである。

「神皇正統記」ジンワウシヤウトウキ 六卷。

北畠親房が常陸の關城に於て兵馬倥傯の間に起草し、尙帝王學の御一端にもとて、遙々吉野の新天子後村上天皇に献上したもので、

第一卷 天地開闢から地神五代まで 第二卷 神武一允恭  
第三卷 安康一桓武 第四卷 平城一後冷泉

第五卷 後三條一後宇多 第六卷 伏見一後村上  
より成る。

一篇の主旨は、皇位繼承の次第の大切なこと、吉野朝の正統にましますこと、人臣の本分は云々たるべきこと等を明らかにするにある。就中その中心思想をなすものは吉野朝正統論にあると見られる。陣中何等の史料なく、唯簡単な皇代記が一部あつただけだといふして、かくまで代々の史實を列挙した親房の強記は勿論、終始一貫自己の主張を強調した論旨の明徹と、雄勁な筆致及び高邁な識見とは、共に國文國史上特筆すべきもので、後代の士氣を鼓舞したこと一通りではない。

本書中最も信憑すべきものは、常陸國水戸六地藏本を、今の經濟雜誌社本で更に佐々木弘綱翁の自筆本と對校した校訂群書類従本であらうといふ。

右六地藏本の奥書は、恐らく親房自身の言をそのまま書いたものと思はれるから、左に附記しよう。

此記者、去延元四年秋、爲レ示ニ或童蒙ニ所レ馳老筆ニ也。旅宿



之間、不<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>一卷之文書、總尋<sub>二</sub>得最略皇代記、任彼編目<sub>一</sub>粗勤<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>了。其後不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>再見<sub>一</sub>、已及<sub>二</sub>五稔<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>門有。展轉書寫輩云々、驚而披見之處、錯亂多端、興國四年癸未秋七月、聊加<sub>二</sub>修治<sub>一</sub>。以此可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>本。以前披覽之人、莫<sub>レ</sub>嘲笑<sub>一</sub>耳。

註釋書には

川喜多眞彦の標柱神皇正統記 六卷

がある。これは諸儒の評論を頭書したもので、慶應二年の出版にかゝる。その後、明治・大正に入つて左の諸書が出た。

三木五百枝共編 訂正 神皇正統記  
佐伯有義 標註

今泉定介 神皇正統記講義

今泉定介共編 訂正 神皇正統記  
島山 健 標註

最近刊行された「新釋日本文學叢書」の中には、第十巻に收められてゐる。

### 2 作者

北畠親房 キタバタケ チカフサ。

吉野朝の忠臣。伏見天皇から後村上天皇に至る六朝に歴仕し、最も後醍醐天皇に信任せられた。その子鎮守府將軍顯家及顯信を輔けて東北を經營し、又常陸の小田城・關城に在つて能く大敵に抗し、孤軍奮闘、朝威の恢復を圖つた。正平九年(二〇一四)大和

の賀名生に薨じた。年六十三。明治の始、その子顯家を併せて攝津國東成郡住吉村に祀るものを



安倍野神社と號し、明治十八年顯家・顯信・守親をあはせて岩代國大石村に祀るものを靈山神社と號し、共に別格官幣社に列せられた。明治四十一年九月正一位を追贈せられた。左に大日本百科辭典から引用して、稍<sub>レ</sub>詳細な傳記を示さう。

「村上天皇の皇子具平親王の後、權大納言師重の子なり。正應五年に生れ、從五位下より累進して、延慶三年正三位に敘せられ、參議に任じ、同四年十二月權中納言に轉じ、檢非違使別當、左兵衛督を兼ね、正和四年從二位に、同五年正二位に進む。後醍醐天皇即位の後、その徳望を以て深く信任せられ、吉田定房・萬里小路宣房と共に三房と稱せらる。元享三年權大納言となり、淳和・獎學兩院の別當を兼ね、同四年後醍醐天皇第二皇子世良親王の傳となる。然るに元徳二年世良親王薨す、親房慟哭の餘り、髮を削り、官を罷めて宗玄と號す。時に天皇北條氏に快からず、竊に幕府を倒して王政を恢復せんと志あり。親房亦この議に與りしなるべきも、史闕けて詳ならず。尋いで元弘の變となり、天皇笠置に行幸あり。それより隱岐に遷らせ給ひしかど、諸國の官軍起りて、元弘三年車駕再び京都に還御す。親房また出仕し、從一位に敘せら

れ、大臣に准ぜらる。子顯家陸奥守に任ぜられ、義良親王を奉じて出でて陸奥、出羽を鎮す。これ蓋し親房の策略にして、東方を經營しその根據を固めんとの計畫に外ならず。足利尊氏の叛するや、新田義貞これを撃ちて利あらず、西走す。尊氏追撃して、京に上り、天皇比叡山に幸す。親房・顯家共に義良親王を奉じて尊氏の軍に抗す。爾來義貞・正成等と共に畫策す。天皇が吉野に行幸し給ひ、南北兩朝の分立を見るに至りたるは、親房等の竊に計畫せしところにして、その根據地を伊勢・紀伊の間に据え、吉野朝廷を擁護し、以て足利氏に對抗せしものなり。爾來親房伊勢に在りて、京都恢復の計畫を廻らし、顯家の陸奥に在るを促して上京せしむ。顯家、足利氏の軍と戦ひ、遂に石津に戦歿す。親房憂愁の間になほ遠大の策を畫し、伊勢大湊を中心として、力を水軍に致し、伊勢・紀伊の船主をして、北軍を牽制せしめたり。やがて義貞も戦死し、南軍愈々振はざるにより、自ら出でて東國の將士を糾合し、大いに北軍を惱ましんとし、懷良親王を九州に、宗良親王を東海道に、義良親王を東國に奉じ、自ら義良親王に従ひ、子顯信と共にこれに赴かんとし、途上颶風に遭ひ、船四散し、義良親王は伊勢に着せられ、やがて立ちて皇太子となり、親房の船は常陸に着したり。常陸の南軍小田治久・關宗祐・下妻政泰等これを迎へ、小田原に移る。その後小田氏叛き、關・下妻兩氏に依りて關・大寶の二城に入る。高師冬來り攻む。親房東奥に赴かんとすも、師冬重圍を以て通じ難し。時に結城宗廣の子親朝、奥州白河城に在り。親房書を以て近國の賊を平げ早く應援せんことを依

頼し、種々の手段を盡くしてこれを招きたるも、親朝これに應ぜず。親房その間にありて、苦心慘澹、或は親王の下向を請ひて人心を服せんとするも能はず。かくて親朝は終に足利氏に歎を通じたり。興國四年十一月兩城遂に陥り、關・下妻等戦死し、親房遁れて海路吉野に還る。これより親房吉野に在りて、後村上天皇を輔け、或は九州に懷良親王に通じ、或は楠木正行を立たしめ、或は瀬戸内海を航海を用ひて水軍を編成し、種々の計畫を策したるが如し。正平五年足利直義、師直と不和となり、吉野に歸順を乞ふ。親房假に和すべきを主張し、爾來専ら兩軍の操縦につとめ、七年天皇男山に幸し、足利義詮を撃ちて走らしめ、親房及び子顯能をして、まづ京都に入りて諸事を決せしむ。九年四月十七日賀名生に薨す。年六十三。親房和漢の學に精しく又佛典に通ず。小田在城中職原抄を著はして、官職の由来を説き、關在城中神皇正統記を著はし、以て皇統の正閏を明らかにし、神器の歸するところを辨じ、以て勤王の軍を鼓舞せり。その史眼の卓抜なる、その文章の謹嚴にして評論の公平なる、後世の史家これによつて論ずる者甚だ多し。その他古今集註等の著あり。元元集・東家祕傳の如き書、亦親房の著と稱するも、據る所を知らず。吉野朝が六十年の久しきを保ち、克く足利氏に抗するを得しは、實に親房の功にして、一世の盡忠苦心は他に比類を見ず。

### 3 編纂の用意



吉野朝の老臣北畠親房が、兵馬倥傯の際、常陸の關城に在つて、渾身の熱血を絞りつゝ、綴り成した神皇正統記は、洵に我が日本精神の精華であり、結晶である。わけでも、本課は、わが子顯家が和泉の石津で討死したと、陸奥の皇子（義良親王）が東國へ御下向の途すがら颯風にお逢ひなされて海上に間關させ給うた顛末、後醍醐天皇が遂に吉野の秋霧に犯され給うて崩御あらせられた次第等を敘し奉つたもので、言々皆血、句々皆涙、これを読んで泣かないものは斷じて日本國民ではない。本課をこゝに採つたのは、生徒をこの靈筆に觸れさせて、愈、忠愛の至情を涵養せしめ、兼ねて近古に於ける史論の典型とも稱すべき神皇正統記の文の熱烈にして眞摯、雄健にして莊重、眞にこの人にして始めてこの文ある所以を十分に了得せしめんが爲に外ならぬ。

#### 4 要 旨

南風毎に競はず、建武の中興も忽ち破れ、後醍醐天皇には遂に吉野の皇居に於て崩御あらせられた。本課はその御痛はしき悲境に對して無限の血涙を抑へつゝ、その因

となり果となつた前後の史實を敘し、且、神皇正統の邪なるまじきことわりを極めて力づくよく説いてゐる。作者の大義名分に關する信念と、その當時の朝廷に對する忠節の苦衷とは、流麗にして遒勁なる文字によつてまことに紙面に溢れてゐる。單に史的事實を授けるに止らず、その作者の精神・意圖の存するところを熟讀玩味せしむべきである。なほ、神皇正統記の文學史上に於ける價值についても、適當の指導を與ふべきである。

#### 5 概 説

第一節（一四六頁—一四七頁七行） 顯家が義良親王を奉じて再度上つて來たこと、それから、各處に轉戦し、遂に和泉の國で戰死したことを主として記した。  
第二節（一四七頁八行—一四九頁一〇行） 顯家が義良親王を奉じて再び京へ赴くことになつたこと、いよく出發したが、海上が荒れた爲に御船が伊勢の海に着かせ給うたこと、及びその事についての感想、京都の改元、皇都の吉野なるべきことわりなどを敘した。  
第三節（一四九頁一一行—一五一頁） 後醍醐天皇崩御の悲

しみとその御生前に後村上天皇に位を嗣がしめ給うた次第とを敘し、且、この書をもつた作者の素意を述べてゐる。

#### 6 取扱上の注意

□本課が歴史の教授に墮してしまつてはならぬことはいふまでもない。又、辭句について、いはゆる講讀を試みる必要が十分あるにしても、講讀のみに終つてはならぬことも、亦説くまでもない。本課では、特にその辭句文章の中に送り流れてゐる作者の精神といふものを把握せしめるまでにせねばならぬ。

□曾て、新渡戸稻造博士が、國文で書かれた歴史で、最も文章の雄健なものといふ注文をされたところが、史學者の某博士（三上參次博士と記憶するが）は、この神皇正統記を推薦されたとか聞いてゐる。この話はともかく、本課だけ讀み味はつても、正統記の文章の、いかに雄健にして、一種の底力といふやうなものを持つてゐるかは感ぜられる。そして、その底力の何であるか。何によつて然るかを思ふ時、即ち、われ等は、北畠親房卿の識見・

人物に想倒しないわけに行かないのである。さういふ點まで説話して、本課の内容と、形式と、それから、それらを成しあげた人間とを結びつけて考へさせたいものである。

□「大日本島根は固よりの皇都なり云々」（一四九頁九行）この言葉は、千古に動くことのない一大鐵案である。

□「ぬるがうちなる夢の世云々」（同頁末行）本文が抒情にもすぐれてゐる好例である。

□「功もなく徳もなき云々」（一五一頁六行）作者が、いはゆる尸祿の輩を太く悪んでゐることは、本書の他の部分にもしば／＼見られる。

#### 7 設 問

- 1 作者が最も力をこめて書いてゐる事は、どんな語句によつて示されてゐるか。
- 2 作者が最も詠嘆的な氣分で書いてゐるところはどこか。
- 3 作者の精神を一貫するものは何であらうか。
- 4 次の語句の意義を問ふ。



イ、末の世。内侍所。ぬるがうちなる夢の世。儲の君。

ロ、苔の下にも埋れぬものとは、たゞ徒に名をのみぞ留めてし。

8 釋義

【又の年戊寅】 後醍醐天皇の延元三年（一九九八）つちのえとらの年。

「又の年」は次の年。翌年。

【鎮守府大將軍】 鎮守府の將官。本卷二二、「武將の連歌」の條なる「鎮守府」参照。

鎮守府の長官は、もと將軍で、大將軍はなかつたが、顯家がこの職を拜するときは、その權勢を重からしめるため、特に大將軍とし、その下に評定衆・引付衆・諸奉行等の職を置くこととなつた。

【顯家卿】 アキイヘキヤウ。北畠顯家。親房の長子。元應・嘉暦の間累進して侍從・左近衛少將に進み、元弘元年參議に任じ、左近衛中將に進んだ。時に年十四。三年陸奥守に任ぜられ、皇子義良親王を奉じて父と共に出でて奥羽を鎮撫し、建武二年鎮守府大將軍を兼ねた。この年足

利尊氏が叛いた。よつて義良親王を奉じて西上し、延元元年尊氏を京都に攻めて西走せしめ、再び親王を奉じて任地に歸つた。翌二年尊氏が東上し、後醍醐天皇が吉野に蒙塵したまふや、勅を奉じて再び西上し、鎌倉・美濃等で賊を破つたが、奈良に戦つて破れ、攝津の阿部野で高師直と戦つてまた利を失ひ、遂に和泉の石津で討死した。時に延元三年（一九九八）五月、年二十一。天皇痛悼し給ひ、從一位右大臣を贈らせられた。

【親王】 ミコ。義良親王。後醍醐天皇の第八皇子。御母は准后藤原康子。御幼少の御頃から東北の地を鎮め給ひ、戦亂の間に吉野の行宮で御位に即かせられた。時に延元四年（一九九九）、御年十二。天皇の御代は足利尊氏離叛の後をうけて、御宇三十年、征戰に殆ど虚しき日はなかつた。正平二十三年（二〇二八）崩御。壽四十一。

【かさねて打上る】 顯家は建武二年任地陸奥より西上し、延元元年一旦歸任、延元三年更に西上した。前項「顯家卿」参照。

【海道】 カイダウ。東海道の略。古の行政區劃。本州の中

央部にあつて主に太平洋に面する十五國、即ち伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・甲斐・相模・武藏・安房・上總・下總・常陸をいふ。今三重・愛知・靜岡・山梨・神奈川・東京・埼玉・千葉・茨城の九府縣に管轄されてゐる。

【あまたゝび】 數多度。たびく。しばく。

古今集の羈旅に「夜を寒みおく初霜をほらひつゝ草の枕にあまたゝび寝ぬ」

【和泉の國にての戰】 和泉國石津に於ける合戰。

石津（イシヅ）は大坂府泉北郡石村・濱寺町に跨る地。鳳（オホトリ）村の北方で、東は百舌野（モズノ）に、海濱は堺浦につづく。

延元三年北畠顯家は高師直と堺浦に戦ひ、更にこの地に轉戦して討死した。

太平記に、攝津國安倍野を顯家戰死としてあるのは誤謬である。

【時や到らざりけむ】 忠孝の道を全うして天業を恢弘すべき時節が到來しなかつたのであらうか。

【忠孝の道こゝにて極りぬ】 戦死したことを婉曲にいひな

したのである。即ち、もはや忠孝の道をつくすことの出來ない境涯になつたといふのである。

【苔の下にも云々】 屍は苔の下に埋もれたが、たゞ忠孝の道にたふれたといふ名のみは、埋もれもしないで、いたづらにこの世に留めたといふ意。

白氏文集卷二十に「遺文三十軸。軸々金玉聲。龍門原上土。埋骨不埋名。」

古今集卷十、雜下に

小式部内侍うせて後、上東門院より年ごろ給はりけるきぬを、なきあとにも遣はしたりけるに、小式部内侍と書きつけられたるを見てよめる、和泉式部

「もろともに苔の下には朽ちずして埋もれぬ名を見るぞ悲しき」

本文は、これらの詩歌をおもひあはせて書いたものであらう。

【男山】 ヲトコヤマ。京都府綴喜（ツヅキ）郡八幡町の中央にそびえてゐる山。一に雄徳山ともいふ。金剛山脈の北端。高さは一四三米に過ぎないが、淀川を隔てて天王



山に對し、隘路を扼してゐるので、古來軍事上重要な地點とされた。その鳩峯に官幣大社石清水八幡宮がある。

【朝敵】 テウテキ。朝廷にあだなすもの。天子に叛く賊。太平記の日本朝敵の條に「朝敵となつて叡慮を惱まし。」

【忍びて】 シノびて。ひそかに。そつと。

【社壇】 シヤダン。神を祀る壇場。神を祀る社の殿舎。

唐書の禮樂志に「郊社令、立壇於社壇。」

平治物語の頼朝遠流の條に「行路の祈りをも申さんとて、社壇にぞ留まりたまひける。」

【北國】 ホクコク。北陸道の諸國の稱。但しこゝでは特に越前國をさす。當時新田義貞は越前の金ヶ崎城にあり、子義顯を越後に、弟脇屋義助を仙山（越前）に遣はして諸國の兵を招かした。

【義貞】 ヨシサダ。新田義貞。建武中興の元勳。源義家十世の孫。朝氏の長子。元弘の亂、北條氏の部下にあつて千早攻圍の事に従つたが、やがて密勅を奉じ、歸つて兵を上野に擧げ、北條氏の軍を分倍河原に破り、進んで鎌倉を

陥れ、北條氏を滅した。時に元弘三年五月であつた。功を以て從四位上、左兵衛督に任ぜられ、上野・越後・播磨を賜はつた。建武二年足利尊氏が鎌倉に據つて叛を謀つたので、これを討つたが、不幸にして敗戦した。翌元弘元年尊氏が大舉入京したので、楠木正成と謀つてこれを西に走らせた。尊氏が再び勢をもちかへして東上するや、楠木正成と共にこれを兵庫に拒いで利あらず。尋いで皇太子恆良親王並に皇子尊良親王を奉じて越前に赴き、金ヶ崎城に據つて北國を經略した。延元三年（一九九八）閏七月二日足利高經と藤島に戦ひ、流矢に中つて薨じた。時に年三十八。明治の初、朝廷命じて祠を藤島に建て、藤島神社と號し、別格官幣社に列せられた。後祠を福井城外に移した。明治九年十二月、正三位を追贈せられ、同十六年八月、更に正一位を追贈せられた。

【上りあへず】 賊勢にはまされて、京入りをえせぬこと。

【させる事なくして云々】 さしたる戦功をも立てないで、死んでしまつたといふたよりがあつたので、何ともいひやうがないほど歎かはしかつた。

【さてしも止むべきならずとて】 そのまゝにうちやつておくわけにはいかぬといつて。

【陸奥の皇子】 ムツノミコ。義良親王。前の「親王」參看。

【左少將】 サセウシヤウ。左近衛少將の略。左近衛府の職員。

「左近衛府」は右近衛府と共に禁裡の警備、行幸の守衛を管掌し、且朝會に際しては、兵仗を率ゐて、威儀を整へることを掌る。長官を大將といひ、この下に中少將・將監・將曹・府生・番長（ツガヒノヲサ）・駕輿丁（カヨチヤウ）・使部等がある。

【顯信朝臣】 アキノブアソミ。北畠親房の次男顯家の弟。

春日少將と稱した。延元元年足利尊氏は伴つて和を請ひ、後醍醐天皇を叡山より迎へて花山院に幽し奉つた。

顯信は時に伊勢の國司であつたが、父と共に奏して天皇を吉野に逃れしめ奉つた。延元三年兄顯家の死後鎮守府將軍となり、父と共に義良親王を奉じて奥州に下らうとしたが、會、伊勢海で大風に逢ひ、兵船が四散した。親王は吉野に歸り給ひ、尋いで御位に即かせられた。これを後村上天皇と申し奉る。次いで顯信は興國元年（二〇〇〇）常陸に下り、關東・奥羽等の各地に敵軍を惱まし

たが、正平二年遂に敗れて出羽に赴いた。同六年尊氏兄弟の隙あるに乗じてまた奥州に出たが、再び敗れて出羽に逃れた。爾來同地で足利勢に當つてゐたが、やがて吉野に還つた。正平中九州に下つて征西將軍懷良親王を輔け、少貳頼尙と筑前に戦つて討死した。

【陸奥介】 ムツノスケ。陸奥守を助けて陸奥地方の政務を掌るもの。

【節度】 セツド。こゝでは、さしづ指揮・下知などの意。

南史の宗憲傳に「乘驛詣都、而受節度。」

【儲の君】 マウケのキミ。皇太子。儲君。儲貳。

朝野群載卷一に「延曆寺奉賀儲君始立啓。」

成語考に「君之儲、國之貳、皆稱太子。」

宇津保物語に「その國のみかど、后、まうけのきみ。」

【道のほども忝かるべし云々】 「途中で立太子の御披露あるのは餘りに恐れ多いから、陸奥國に御着の上で、公式にその旨を御發表あらせられよ。」との御意。

【異母の御兄】 御腹ちがひの御兄。

尊良親王・護良親王・宗良親王など。



「尊良親王」は後醍醐天皇の第二皇子。新田義貞を従へ給うて北國を經略せられ、越前の金ヶ崎城におはしましたが、延元二年（一九九七）城が陥り、新田義顯と共に自刃して薨せられた。

「護良親王」は後醍醐天皇の第一皇子。天皇をおたすけになつて建武中興の偉業を御完成遊ばされたが、足利尊氏兄弟の忌むところとなり、翌建武二年（一九九五）鎌倉の土窟で直義の臣淵邊義博に害せられたまうた。

「宗良親王」は後醍醐天皇の第八皇子。流離艱難、一生を討賊につとめ給うたが、終に利なく、文中三年（二〇三四）吉野に薨じ給うた。

親王は南朝第一の歌人におはし、撰集に新葉集、家集に李花集がある。

【東宮】 トウダウ。皇太子のまします宮殿。轉じて皇太子を申す。ひづきのみや。ひつぎのみこ。

伊勢物語に、「東宮の女御の御方の花の賀に。」

【恆良親王】 ツネナガシンワウ。後醍醐天皇の第六皇子。

御母は新待賢門院藤原康子。建武中興の際、立つて皇太子とならせられた。足利尊氏の叛するや、新田義貞に奉ぜられて越前の金ヶ崎城に入らせられ、鋭意恢復を圖らせ給うたが、事成らず、城が遂に陥つて、賊に捕へられ

給ひ、延元三年（一九九八）成良親王と共に害に逢はせられた。御年十五。

【成良親王】 ナリナガシンワウ。後醍醐天皇の第七皇子。

恆良親王と御同腹の御弟。元弘三年上野太守となり、足利直義に輔けられて出でて鎌倉に鎮し、建武元年護良親王の後をうけて征夷大將軍に拜せられた。二年中先代

（ナカセングイ）の亂に、直義に奉ぜられて西に走り、延元元年光嚴天皇の皇太子に立たせられた。やがて後醍醐天皇の吉野に潛幸させ給ふに及び、廢せられて京都に幽せられ給ひ、同三年（一九九八）四月遂に足利氏の進め奉つた鳩毒を仰いで薨せられた。

【天命】 テンメイ。自然にその身にめぐつて來る運命。天運。命運。

【事の由を啓して】 ことの子細を申しあげて。

「啓す」は、貴人に對して申し上げること。言上すること。

枕草子卷一に「よきに奏し給へ、啓し給へ。」

【艤ひ】 ヨソホひ。船出の用意。ふなでのしたく。

【纜】 トモヅナ。艦（トモ）にある綱。船をつなぎとめる

綱。

「纜を解く」とは、船をつないである綱をほどいて、船出すること。出帆すること。

【上總】 カヅサ。東海道の一國。房總半島の東部に位し、

北は下總、南は安房に接し、東は太平洋、西は東京灣に面してゐる。千葉縣の所管。

【空の氣色】 ソラのケシキ。空のやうす。空模様。

「氣色」は、けはひ。やうす。ありさま。

竹取物語に「皇子はわれにあらぬ氣色にて、肝消えぬべき心地して居給へり。」

【おどろくしく】 仰山なり、驚くべきさまなり、などの意。

竹取物語に「あななひに、おどろくしく、二十人の人のぼりて侍れば、あれて、寄りまうでこすなり。」

【伊豆の崎】 伊豆の石廊（ヘイラウ）崎。伊豆半島の最南端の岬。石室崎とも書き、伊豆崎ともいふ。岩崖が直に海に臨み、燈臺（不動紅色、光達晴夜十海里）の設がある。附近には露岩や暗礁が多く、加ふるに天候が不規則で、

航海の難所とされてゐる。又海軍の望樓や石室神社がある。

【いとく】 「いとく」の約。いよく。ますく。ひとしほ。

古今集の雜下に「年を経て住みこし里を出でていなばいとく深草野とやなりなむ」

【伊勢の海】 我が國太平洋面の一灣。伊勢灣ともいふ。志摩國答志島を西角とし、三河國伊良湖岬を東角とし、その間に灣入せる一大灣で、南北約六十軒。

往時和歌などに伊勢海といつたのは、二見ヶ浦一帯をさしたものでらしい。

【常陸の國】 ヒタチのクニ。關東地方の北東隅にある國。

北は磐城、西は下野、南は下總に接し、東は太平洋に面する。茨城縣の所管。

【内の海】 霞浦のことだといふ。この時親房卿も同所に漂着せられたのであるが、己の勤勞をあらはさず、わざと他人のこのみの様にかゝれたのであらう。

「霞浦」は茨城縣の南部にある湖水。周圍百五十軒。我が國第二



の大湖。湖水は南東隅の牛堀から北利根川となつて流出し、利根川に注いでゐる。湖岸には土浦・高濱等の港市があつて、汽船が往來し、阿見には、海軍の飛行場がある。

【末の世】 スエのヨ。政治・風俗などのおとろへすたれた時代。澆季の世。末世。末代。

源平盛衰記卷三十九、重衡法然房に請ふ條に「末世。末世の重罪の輩も、唱へば必ず來迎に預るべし。」

【珍らかなる例】 たいそうめづらしい例。

【珍（メヅ）らかな】 は、めづらしいさまにいふ語。

伊勢物語に「京の人はめづらかにや覺えけむ。」

【例】（タメシ）は、嘗てためした事例。前例。先例。れい。源氏物語の帚木の卷に「これこそこのたまひつるはかなきためしなめれ。」

【例なき鄙の御住居】 前例のない片田舎の御すまひ。東北御鎮撫の爲に陸奥におはしますことを申す。

【鄙】（ヒナ）は、都の外の地。あな。邊鄙。

【皇大神】 スメオホミカミ。天照大神（アマテラスオホミカミ）。高天原の主神。皇室の御祖先で、我が國で最も崇敬せられたまふ御神。伊勢の皇大神宮に奉祀せられてあ

る。御名は大日靈貴（オホヒルメムチ）尊。伊非諾・伊非冊二神の第一の御子で、女神におはします。靈徳が自ら具はり、光彩陸離として六合を照らし給うたので、二神は大いに喜び給ひ、命じて高天原を治めしめ給うた。天照大神の御名は、天にましまして照り輝きたまふ神の義である。皇祖神であらせられる大御神は、一面には太陽神として崇拜せられ給ひ、その神話の中に、幾分か太陽神としての自然神話を含んでゐる。

【御目の前】 後醍醐天皇の御眼前。

【いとゞ思ひ合はせられて云々】 義良親王御一行の船の中、二隻の船が大あらしで東西に吹きわけられ、一隻が常陸の内の海に、残る一隻即ち親王の御船が伊勢の國に漂ひつかせられたのは、天照大神の深き御神慮によるのであらうといふことが、思ひあはせられて、一入尊くおもつた。

【いとゞ】 は、下の「尊くも侍るかな」を限定する副詞。

【常陸はもとより志す方なれば云々】 常陸は元來官軍に御味方申す志のある地方であつたから、それら同志の輩が

協同團結して、義兵が強くなつたといふのである。

【義兵】 は、正義の爲に起す兵。

【こはく】 は、強く、かたく、などの意。

【舊都】 キウト。吉野の新都に對して、平安京即ち北朝方をいふ。時に、舊都には光明院がおはしました。

【改元】 カイゲン。年號を改めること。中説に「改元立號非古也。」

保元物語の法皇崩御の條に「あくる四月二十七日、改元ありて、保元とぞ申しける。」

【曆應】 リヤクオウ。紀元一九九八年、即ち延元三年にあたる。

【唐土（モロコシ）には云々】 支那には、兩朝が並立し、年號も二つあることはいくらもあつた。けれど。

【四年にもなりぬるにや】 後醍醐天皇が吉野の吉水院に遷御遊ばしてから四年になることをいふ。

【大日本島根は云々】 大日本國內でさへあれば、固より、どこでも皇都となし得る。今三種の神器が吉野にある上は、こゝ即ち吉野が皇都である。たとひ光明院が京都を

以て皇都と號せられても、それはいかぬといふ意。

【皇都】 クウト。天子のおはしますみやこ。みやこ。

【内侍所】 ナイシドコロ。こゝは八咫鏡。本來は禁中の温明殿の別名で、神鏡を安置した所。女官内侍が齋き祀るにより、かく申し奉ることになつた。又賢所ともいふ。

「八咫鏡」は三種の神器の一。天照大神を天石屋（アメノイハヤ）から迎へ奉らうとした時、石凝姥（イシヨリドメ）命の作つた銅鑄の日像鏡。天孫瓊々杵尊（ニギノミコト）はこれを大神から拜授して降臨し給ひ、爾來代々相傳へ給うたが、崇神天皇の御代に至つて、倭（ヤマト）の笠縫邑に遷し奉つた。降つて垂仁天皇の朝、伊勢渡會（ワタラヒ）の皇大神宮に鎮まりました。今宮中の内侍所に奉安されてゐる神鏡は、崇神天皇が摸造あそばされたものである。

【神璽】 シンジ。八坂瓊曲玉（ヤサカニノマガタマ）

三種の神器の一。神代の昔、天照大神を天石屋から迎へ奉らうとした時、玉祖（タマノオヤ）命の作つたもの。天孫はこれを奉じて降臨し給ひ、爾來代々の天皇相承け相傳へ給うた。崇神天皇の朝、神鏡と神劍とは別に奉安したが、この神璽のみは宮中に止めさせられた。今もなほ宮中に奉安されてゐる。



【秋霧に冒されさせ給ひて云々】 天皇の崩御を、それと明言せず、おぼめかした筆つきを味ははせたい。何となく奥ゆかしくはあるまいか。

【ぬるが内なる夢の世】 寝てゐるうちに夢を見たやうな、  
『はかない世の中といふ意。』

頭註にある壬生忠岑の歌を本にとつたのである。

歌の意は、「ねてゐる間に見るものばかりが夢ではない、無常迅速のはかない現世も、やはり現實とは思はれぬ、全くの夢だ。」

「壬生忠岑」(ミブタマミネ)は平安朝の歌人。三十六歌仙の一人。安綱の子。忠見の父。攝津権大目(サクワン)となつた。一代の歌人として知られ、その詠にかゝる「あかつきのつれなく見えしわかれより曉ばかりうきものはなし。」の歌は、古今集中の歴巻と稱せられてゐる。紀貫之・凡河内躬恆等と共に勅を奉じて古今集を撰進した。家集を忠岑集といふ。康保二年(一六二五)卒。九十八。

【今にはじめぬ習】 今にはじまつたといふわけではなく、昔からの世のならひであるとの意。

【乾きあへねば】 乾きおほせぬから。乾いてしまはないから。

【筆の跡さへ滞りぬ】 筆のあとさへしづりがちで、一向にはかどらぬ。

【仲尼】 孔子の字。名は丘。その先は宋人、父は叔梁紇、母は顔氏、魯の昌平郷に生れた。少くして禮容を習ひ、周に適き、老子に禮を問うた。魯の定公の時大司寇となつて國政を執つたが、後辭して諸國を歴遊し、志を得ずして歸つた。哀公は召して政を問うたが、これを用ひることはできなかつた。乃ち詩書を編次し、禮樂を整理し、春秋を作り、易を研究した。弟子三千人、中、六藝に通ずる者七十二人。哀公の十六年(周の敬王四十一年)卒した。年七十四。(七十二歳説、七十三歳説もある。)

【筆を獲麟に絶つ】 これは固より春秋に出てゐる語であるが、鎌倉室町時代では「獲麟」といふ語を終焉の意に用ひた。こゝもその意に見たがよからう。

吾妻鏡、元仁元年六月の條に、  
十三日前奥州(義時)病痾已及獲麟之間、……今日(十三日)寅尅令落飾給、已尅遂以御卒去。」  
とある如きは、その最も明らかな例である。

類聚名物考の凶事部に「西に獵して麟を獲たるは孔子

の薨去の時にあたれば、やがて常にも卒去を獲麟といへるなり。

下學集卷下に「呼一切事終、云獲麟、亦呼二人之臨終、云獲麟。左傳、仲尼絕筆於獲麟一句。」

明月記に、「寛喜二年三月廿一日云々、祭主能隆、依病獲麟、獻辭書云々。」

同上「正治二年正月廿八日、兼時妻依所勞獲麟、行山里云々。」

塵添盤囊鈔の第十六に「人ノ臨終ヲ獲麟トイフハ何事ゾ、獲トハ得トテ、ウル也。麟は麒麟也、牡ヲ麒トイヒ、牝ヲ麟トイフ。云々。魯ノ哀公獲麟ノ時、孔子薨ジ給フ事ヲイヒ習ハセルナリ。」

獲麟を以て孔子の歿時とするのは誤であるけれど、さる誤解から用ひたものらしい。

【神皇正統の邪(ヨコシマ)なるまじきことわり】 天つ日つぎの正しい御血すぢは、御祖先以來子々孫々直系を以て相承けさせられ、決して傍系にうつるべきものではない

といふことのわけ。

【素意の末をあらはさまほしくて】 平素心に思つてゐる所の一端をもあらはしたいとおもつて。

【かねて時をも悟らしめたまひけるにや】 崩御あそばす時刻をも御自身で御豫感あそばしたのであらうか。

【左大臣】 サダイジン。關白左大臣藤原經忠。

「左大臣」は太政官の長官。一上(イチノカミ)ともいひ、又左府ともいふ。太政大臣の次位。右大臣の上位にあつて太政官の政務を總裁した。定員は一人。位は正二位相當官。孝德天皇の大化元年阿部倉梯麿をこれに任じたのを嚆矢とする。後には攝政家、大臣家の専有となつた。明治十八年廢官。

「藤原經忠」は家平の子。家を近衛といふ。道平に代つて關白となり、左大臣に至つた。世に堀河殿といふ。正平七年(二つ一)薨去。

【第】 テイ。やしき。やかた。邸宅。

【おましましき】 「おはしましき」と同意。「おまします」は神皇正統記の慣用語である。

【仲哀天皇】 チウアイテンワウ。第十四代の天皇。御名